

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集

矢加部町屋敷遺跡 I

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

2007

福岡県教育委員会

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集

や か べ まち や し き
矢加部町屋敷遺跡 I

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

序

ここに報告する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査された遺跡です。

今回の調査では、江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いの町屋跡と、その遺構・遺物を明らかになり江戸時代前期から明治時代に至る廃棄土坑や溝が発見されるなど、町矢加部集落の歴史を知る上での貴重な資料を得ることができました。

発掘調査・報告書作成に当たっては、国土交通省福岡工事事務所・柳川市教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及に寄与できれば幸いです。

平成19年3月31日

福岡県教育委員会教育長

森山 良一

例言

1. 本書は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査を実施した、柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡2・3次調査の報告書である。
2. 発掘調査・報告書作成は、国土交通省福岡工事事務所の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、調査・報告書作成に関して国土交通省福岡工事事務所、柳川市教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 金属器は、九州歴史資料館において、同館学芸第二課加藤和歳の指導の下で整理を行った。
4. 掲載した図は、遺構を秦が、遺物を秦・平田春美・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・若松三枝子・棚町陽子・中村洋子・栗林明美・中川真理子・荒川妙・橋之口雅子・西亜彩子が作成したものを秦・豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
5. 掲載した写真は、遺構を秦が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋の指導の下、文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は3次調査を九州航空株式会社に委託した。
6. 使用した方位は主として座標北である。
7. 陶磁器の実測図のスクリーントーンは、釉の掛かり方のわかりにくいものや、掛け分けしているものについて濃淡で表現したものであって、すべての遺物についてトーンと釉薬を統一していない。また、全面同一釉のものはトーンを貼っていない。
8. 筑後の焼き物全般については九州大学西健一郎氏に、蒲池焼・土師質瓦については柳川市教育委員会堤伴治氏、久留米市教育委員会白木守氏、東野亭焼については久留米市教育委員会大石昇氏・水原道範氏、二川焼についてはみやま市教育委員会猿渡真弓氏に教授を受けた。
9. 陶磁器の分類名は新宿区厚生部遺跡調査会1992『細工町遺跡』を参考として、別称・通称を併記した。
10. 文簡については福岡県立九州歴史資料館学芸第一課酒井芳司主任技師の教授を受けた。
11. 本書は、秦が執筆・編集した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の内容	6
1. 2次調査	6
2. 3次調査	72
IV. 小結	111

図版目次

図版 1	1. 2次調査区全景（北東から）	2. 1号土坑（西から）
	3. 1号土坑土層断面（西から）	4. 2号土坑（南から）
	5. 2号土坑木皮出土状態（北から）	6. 2号土坑土層断面（南西から）
	7. 3号土坑（東から）	
図版 2	1. 4号土坑（東から）	2. 4号土坑土層断面（南西から）
	3. 5号土坑（西から）	4. 6号土坑（北西から）
	5. 6号土坑土層断面（北西から）	6. 7号土坑（北東から）
	7. 7号土坑土層断面（北西から）	8. 9号土坑（南東から）
	9. 1号大土坑（南西から）	
図版 3	1. 2・3号大土坑（南西から）	2. 3号大土坑（南西から）
	3. 3号大土坑漆碗出土状態（北から）	4. 1号溝状遺構土層断面（北西から）
図版 4	1. 2号溝状遺構（西から）	2. 2号溝状遺構テラス状遺構（北から）
	3. 2号溝状遺構土層断面（北西から）	4. 5号溝状遺構土層断面（南西から）
図版 5	2次調査出土土器・陶磁器 1	
図版 6	2次調査出土土器・陶磁器 2	
図版 7	2次調査出土土器・陶磁器 3	
図版 8	2次調査出土土器・陶磁器 4	
図版 9	2次調査出土土製品・瓦	
図版 10	2次調査出土木・金属・貝・石製品	
図版 11	1. 3次調査区全景（上空から）	2. 1号土坑（西から）
	3. 2号土坑（北から）	4. 3号土坑（北西から）
	5. 3号土坑土層断面（北西から）	
図版 12	1. 4号土坑（南東から）	2. 6号土坑（北から）
	3. 4号土坑土層断面（南東から）	4. 7号土坑（北から）
	5. 7号土坑土層断面（北西から）	
図版 13	1. 2・3号溝状遺構（東から）	2. 2号溝状遺構大甕出土状態（北から）
	3. 2号溝状遺構土層断面（西から）	4. 3号溝状遺構土層断面（西から）

図版14	3次調査出土土器・陶磁器 1
図版15	3次調査出土土器・陶磁器 2
図版16	3次調査出土土器・陶磁器 3
図版17	3次調査出土金属・皮・ガラス・石・木製品

写 真

写真 1	柳川市旧十二丁松藤キヨ氏宅 漏斗谷の樋吐出口	116
写真 2	同上 漏斗谷の樋を下から見る	116

挿図目次

第 1 図	矢加部町屋敷遺跡 1～3次調査範囲図(1/4,000)	1
第 2 図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第 3 図	矢加部町屋敷遺跡 2・3次調査区遺構全体図(1/200)	5
第 4 図	2次調査 1～7号土坑実測図(1/60)	7
第 5 図	2次調査 8・9号土坑実測図(1/60)	9
第 6 図	2次調査 1号大土坑実測図(1/80)	9
第 7 図	2次調査 2・3号大土坑実測図(1/50・1/80)	10
第 8 図	2次調査 2号溝テラス状遺構、4・5号溝状遺構土層断面実測図(1/60)	11
第 9 図	2次調査 1～4・6・7・9号土坑出土土器・陶磁器実測図(19・22・23は1/4、他は1/3)	13
第10図	2次調査 1・2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・18～20・22・23・26～28は1/4、他は1/3)	15
第11図	2次調査 3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3)	17
第12図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 1(1/3)	19
第13図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 2(1/3)	20
第14図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 3(10は1/4、他は1/3)	22
第15図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 4(1/3)	23
第16図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 5(1・6～8・10・14は1/4、他は1/3)	25
第17図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 6(4～6・9・14～17・24は1/4、他は1/3)	26
第18図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 7(10は1/3、他は1/4)	28
第19図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 8(25は1/3、他は1/4)	29
第20図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 9(1/4)	31
第21図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図10(3は1/3、他は1/4)	33
第22図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図11(14・15・17・18は1/4、他は1/3)	35
第23図	2次調査 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図12(2・3・10～14・16・18・22・24・25・32は1/4、他は1/3)	37
第24図	2次調査 2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 1(9・22～28・31・38・39・41・43・44は1/4、他は1/3)	41
第25図	2次調査 2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 2(1/3)	44
第26図	2次調査 2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図 3(2は1/3、他は1/4)	45

第27図	2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(32・33は1/4、他は1/3)	47
第28図	2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(6・7・11~14は1/4、他は1/3) ...	49
第29図	2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(1/4)	50
第30図	2次調査5・6号溝状遺構、ピット、調査区壁土層出土土器・陶磁器実測図(5~10・18~20は1/4、他は1/3) ...	52
第31図	2次調査客土出土磁器実測図(5は1/4、他は1/3)	53
第32図	2次調査出土瓦実測図1(1/4)	54
第33図	2次調査出土瓦実測図2(1/4)	56
第34図	2次調査出土瓦実測図3(1/4)	57
第35図	2次調査出土瓦実測図4(1/4)	58
第36図	2次調査出土不明土製品実測図1(1/3)	59
第37図	2次調査出土不明土製品実測図2(1/3)	61
第38図	2次調査出土不明土製品実測図3(1/3)	62
第39図	2次調査出土不明土製品・サナ状土製品実測図(1/3)	63
第40図	2次調査出土炉壁状土製品・鞆羽口・湯口実測図(1/3)	64
第41図	2次調査出土土製品・ガラス製品実測図(1・3・9・13・26は1/4、37~39は1/2、他は1/3) ...	65
第42図	2次調査出土木製品実測図1(1~5・9は1/3、他は1/4)	67
第43図	2次調査出土木製品実測図2(3は1/3、他は1/4)	68
第44図	2次調査出土木・金属・貝製品実測図(1~4は1/4、5は1/1、6~10・22は1/3、11~21は1/2) ...	69
第45図	2次調査出土石製品実測図(10・11は1/4、他は1/3)	70
第46図	3次調査1・2号土坑実測図(1/60)	72
第47図	3次調査3・4・6・7号土坑実測図(1/60)	74
第48図	3次調査2~4号溝状遺構、調査区東壁土層断面実測図(1/60)	75
第49図	3次調査1・3・4・7号土坑出土土器・陶磁器実測図1(11・14・19・20は1/4、他は1/3) 77	77
第50図	3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(9・11・12は1/4、他は1/3) ...	79
第51図	3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図2(9~17は1/3、他は1/4) ...	81
第52図	3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図3(10は1/3、他は1/4)	82
第53図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(1/3)	84
第54図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図2(1/3)	86
第55図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図3(1/3)	88
第56図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図4(8・10・11・13・16・17は1/4、他は1/3) ...	90
第57図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図5(11・13~15は1/3、他は1/4) ...	92
第58図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図6(1/4)	93
第59図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図7(4~9は1/3、他は1/4) ...	94
第60図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図8(9・15・16は1/4、他は1/3) ...	95
第61図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図9(1/3)	96
第62図	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図10(1/3)	97
第63図	3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(12~18は1/4、他は1/3)	98
第64図	3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(5は1/8、7~10は1/3、他は1/4) ...	100

第65図	3次調査2号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/8)	101
第66図	3次調査整地層・調査区外クレーク・排土中・客土中出土土器・陶磁器実測図(10~13は1/4、他は1/3)	102
第67図	3次調査出土瓦実測図1(1/4)	104
第68図	3次調査出土瓦実測図2(1/4)	105
第69図	3次調査出土瓦実測図3(1/4)	107
第70図	3次調査出土瓦実測図4(1/4)	108
第71図	3次調査出土土製品実測図(5・6は1/4、他は1/3)	109
第72図	3次調査出土金属・皮・ガラス製品実測図(4は1/2、6は1/4、他は1/3)	110
第73図	3次調査出土木製品実測図1(1~6は1/3、他は1/4)	112
第74図	3次調査出土木製品実測図2(1/4)	113
第75図	3次調査出土木製品実測図3(1/4)	114
第76図	土師質瓦実測図(1/6)	115

表目次

表1	2次調査土坑出土土器・陶磁器観察表	14
表2	2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器観察表	16
表3	2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器観察表	18
表4	2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(1)~(10)	21・24・27・30・32・34・36・38~40
表5	2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(1)・(2)	42・43
表6	2次調査5号溝状遺構出土遺物観察表(1)・(2)	46・48
表7	2次調査5・6号溝状遺構、ピット・調査区壁面出土遺物観察表	51
表8	2次調査客土出土土器観察表	53
表9	2次調査出土瓦観察表(1)・(2)	55・58
表10	2次調査出土不明土製品観察表(1)・(2)	60・64
表11	2次調査出土土・ガラス製品観察表	66
表12	2次調査出土ガラス・木・金属・石製品観察表	72
表13	3次調査土坑・1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表	78
表14	3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表	80
表15	3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(1)~(5)	83・85・87・89・91
表16	3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表	99
表17	3次調査整地層・客土中・区外クレーク・排土中出土土器・陶磁器観察表	103
表18	3次調査出土瓦観察表	106
表19	3次調査出土土製品観察表	108
表20	3次調査出土金属・皮・石・ガラス・木製品観察表	111

I. はじめに

1. 調査の経緯

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴い発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市、大川市を經由して佐賀県鹿島市に至る概略延長55kmの国道208号のバイパス路線であり、地域高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のため早期建設が望まれている。

平成6（1994）年12月16日に計画路線として指定され、平成12年（2000）年10月28日に建設工事が起工された。このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされ、平成20年4月の供用が目標とされている。

路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0km区間であり、平成10（1998）年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間指定された。

平成12（2000）年11月16日付で、国土交通省九州地方建設局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が柳川市矢加部地区について平成15（2003）年10月6～8日に試掘調査を実施した。その結果、江戸時代の溝や土坑などが確認され、本調査が必要と判断された。

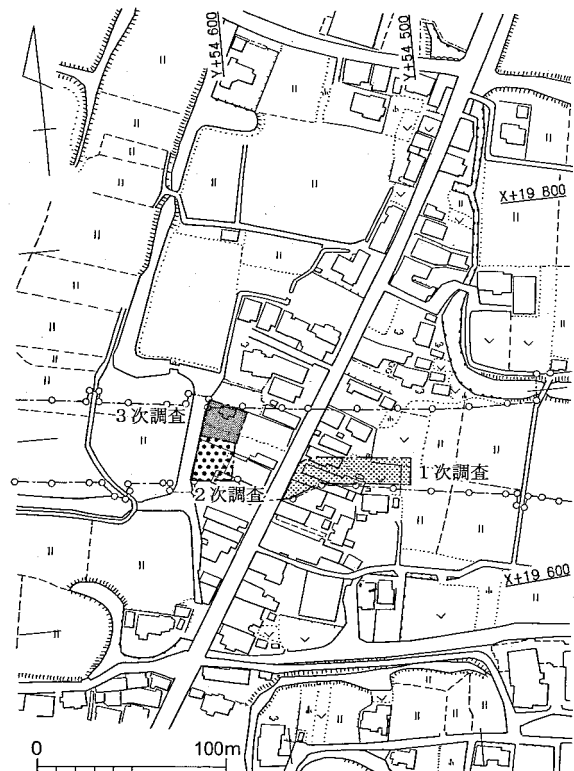
まず県道東側の用地取得が終了した範囲について、平成16（2004）年6月15日～10月4日に矢加部町屋敷遺跡1次調査として本調査を実施した。調査終了後、水田の水落ち時期に県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じ、急遽、大字矢加部6164-3・5番地について平成16（2004）年6月15日～10月4日に2次調査を実施した。

平成17年度は、2次調査と同様のクリークの高架工事を行う必要があるため、平成16（2004）年6月15日～10月4日に同6337-6番地に対して3次調査を実施した。

調査成果については、1次調査の大量に遺物を包含する大型の溝状遺構の半分が未調査区にかかっていたことから、1次調査区の報告は未調査区の調査後に行うこととし、平成18年度は2・3次調査区について報告書作成業務を行うことで協議が整った。

2. 調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成15～17年度の関係者は次のとおりである。



第1図 矢加部町屋敷遺跡1～3次調査範囲図(1/4,000)

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
所 長	増田 博行	増田 博行(～H17.8.1) 小口 浩(H17.8.2～)	小口 浩
副 所 長	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木 秀明	春田 義信 佐々木 秀明
建設監督官	松尾 淳一郎	松尾 淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 鶴林 保彦
調査第二課長	小椎尾 優	鈴木 昭人	鈴木 昭人
調査課長			鈴木 厚廣(H17.4～H18.9)
調査係長	長友 浩信	松木 厚廣	川原 一哲(H18.10～)
専門員	相島 伸行	相島 伸行	伊東 良二
国土交通技官	柳瀬 純矢	柳瀬 純矢	谷川 勝
工務課長	田中 秀之進	堀 康雄	堀 康雄

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
総 括			
教 育 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教 育 次 長	清水 圭輔	清水 圭輔	清水 圭輔
総 務 部 長	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛
文化財保護課長	井上 裕弘	久芳 昭文	磯村 幸男(兼副理事)
同 副 課 長		川述 昭人	佐々木隆彦
同 参 事	川述 昭人(兼課長技術補佐) 木下 修(兼課長技術補佐)	木下 修(兼課長技術補佐)	安川 正郷(兼課長補佐) 小池 史哲(兼課長技術補佐)
同 課 長 補 佐	安川 正郷	安川 正郷	
同 参 事 補 佐	中間 研志(兼調査第二係長)	飛野 博文(兼調査第二係長)	飛野 博文(兼調査第二係長)
庶 務			
文化財保護課管理係長	稲尾 茂	稲尾 茂	井手 優二
同 事 務 主 査	宮崎 志行	石橋 伸二	野中 顯
同 主 任 主 事	石橋 伸二 末竹 元	末竹 元 湖上 大輔	湖上 大輔
調査・報告書作成			
主 査			秦 憲二
主 任 技 師	秦 憲二	秦 憲二	
整 理 担 当			
主 任 技 師	坂元 雄紀	大庭 孝夫(調査第二係) 岡寺 未幾(調査第一係)	大庭 孝夫(調査第二係)

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された近在の方々には猛暑の中御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬ御理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができたことを、深く感謝いたします。

Ⅱ. 位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付けで柳川市・三橋町・大和町と合併し、現柳川市となった。柳川市域は矢部川の支流である沖端川・塩塚川によって形成された有明粘土を基盤とする沖積地であり、標高10m以下の低平な平地である。

本遺跡の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、遺跡の所在する町矢加部は県道35号線沿いに位置している。

歴史的環境

柳川市域に集落が進出したのは弥生時代に入ってからで、大川市下林西田遺跡^(注1)で前期の遺構が確認されている。柳川市では前期段階の遺跡は見つかっていないが、弥生中期の遺跡は旧河川間の微高地に確認されている。三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群は市北部の拠点的な集落と見られ、西蒲池の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石が発見されている。三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の一つといわれている。西蒲池地区のクリークに掛かる橋のたもとにも巨石を見ることができ、有明海沿岸道路の路線内に入る範囲では遺構を確認できなかった。市北西部では磯鳥フケ遺跡^(注3)、江鶴遺跡^(注4)が挙げられる。弥生後期には蒲船津江頭遺跡^(注5)、一本松遺跡^(注6)、正行西の頭遺跡^(注7)、松の木塚遺跡^(注8)、日渡遺跡^(注9)など遺跡が増加する。

弥生後期の蒲船津江頭遺跡では整地により居住域を広げており、有明粘土を基盤とする本地域での居住地の拡大方法を伺える。また、掘立柱建物跡には礎板が見られ、柱の沈み込みを防いでおり低湿地での工夫をみることができる。

古墳時代後期になるとさらにヘータカサン遺跡^(注10)や地藏堂遺跡^(注11)などの集落遺跡が見られる。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加が原因であろう。

奈良時代のものは未確認だが、平安時代から中世にかけて、低平地を利用した条里地割りが大規模に敷設されており、柳川市西蒲池古溝・将監坊・古塚遺跡^(注12)、大川市坂井長永遺跡^(注13)では条里地割に伴う溝が検出された。東蒲池榎町遺跡^(注14)では10世紀の遺構が多く見られており、こうした耕地の開発に伴って集落が拡大したことを窺わせている。

中世では中世前期の東蒲池大内曲がり遺跡^(注15)と中世後期の矢加部南屋敷遺跡^(注16)が確認されており、後者からは中国製陶磁器が多く見られることから、柳川市北部を支配していた有力豪族の蒲池氏に関係する集落であった可能性がある。

戦国時代末期に蒲池氏は滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易となり、田中吉政が筑後国主となり、慶長6（1601）年に入国した。

田中吉政は慶長本土居の建設、掘割の掘削や街道整備など多くの土木事業を行った。慶長本土居は現在道路として使用されており、掘割は「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が藩主となった。本遺跡の所在する矢加部地区などが藩境となった。矢加部地区の県道上には関所が置かれたといわれている。

註

1. 福岡県教育委員会1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集
2. 鏡山猛1956『九州考古学論攷』吉川弘文館
3. 柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集
4. 筑後市1997『筑後考古』第9巻
5. 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
- 6～11. 前掲註4
12. 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
13. 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
14. 福岡県教育委員会 2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
15. 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中
16. 福岡県教育委員会で発掘調査後、整理中

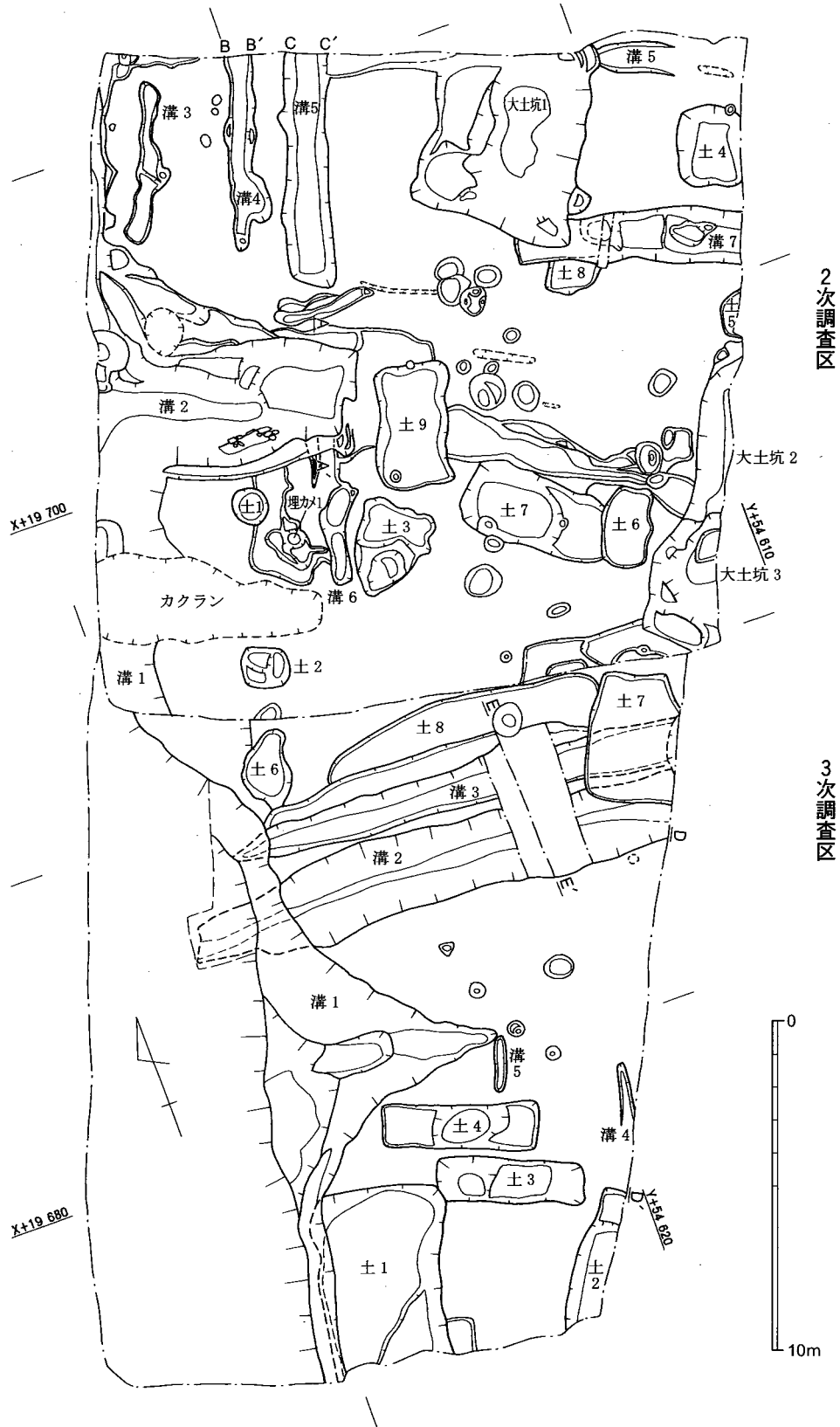
参考文献

- 福岡県教育委員会 1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
 福岡県教育委員会 1979『福岡県遺跡等分布地図』(大川市・筑後市・三潞郡編)
 柳川市 2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編
 柳川市 2002『柳川地名調査報告書』柳川市史歴史資料集成第5集



- | | | | | |
|--------------|-------------|------------|-------------|---------------|
| 1 矢加部町屋敷遺跡 | 14 蒲池城跡 | 27 徳益八ツ枝遺跡 | 40 地藏堂遺跡 | 53 田脇昭代地区条里遺跡 |
| 2 矢加部五反田遺跡 | 15 蒲池焼窯跡 | 28 今古賀城跡 | 41 ヘーカカサン遺跡 | 54 条里跡 |
| 3 矢加部南屋敷遺跡 | 16 三鳥神社貝塚 | 29 逆井出遺跡 | 42 日渡遺跡 | 55 慶長堤防 |
| 4 玉垂命神社遺跡 | 17 蒲池遺跡群 | 30 浮島天神遺跡 | 43 一本松遺跡 | 56 柳川城郭 |
| 5 阿弥陀屋舗遺跡 | 18 西蒲池下里遺跡 | 31 内新開遺跡 | 44 赤太郎遺跡 | 57 新町遺跡 |
| 6 磯鳥フケ遺跡 | 19 扇ノ内遺跡 | 32 西馬場遺跡 | 45 松の木三十六遺跡 | 58 細工町遺跡 |
| 7 東小路遺跡 | 20 西蒲池古溝遺跡 | 33 江崎城跡 | 46 サヤモト遺跡 | 59 坂本町遺跡 |
| 8 南矢ヶ部遺跡Ⅰ | 21 西蒲池将監坊遺跡 | 34 垂見古墳 | 47 中村遺跡 | 60 柳川城跡 |
| 9 南矢ヶ部遺跡Ⅱ | 22 西蒲池古塚遺跡 | 35 垂見遺跡 | 48 大敷条里遺跡 | 61 国指定名勝松濤園 |
| 10 東蒲池榎町遺跡 | 23 坂井長永遺跡 | 36 垂水城跡 | 49 天満宮遺跡 | 62 県指定建造物戸島邸 |
| 11 東蒲池大内曲り遺跡 | 24 蒲船津江頭遺跡 | 37 大坪遺跡 | 50 江鶴遺跡 | 63 国指定名勝戸島氏庭園 |
| 12 東蒲池蓮池遺跡 | 25 蒲船津水町遺跡 | 38 白鳥城跡 | 51 上久末城跡 | 64 久留米・柳川住還 |
| 13 東蒲池門前遺跡 | 26 蒲船津西ノ内遺跡 | 39 東中道遺跡 | 52 場口遺跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)



第3図 矢加部町屋敷遺跡2・3次調査区遺構全体図(1/200)

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要

矢加部町屋敷遺跡は、県道53号久留米柳川線に沿いに南北に細長く展開しており、有明海沿岸道路はその北部を横断して建設されるため、調査対象範囲は県道の東西に分かれた。

用地取得状況と工事工程に応じて、調査対象範囲内を複数年度に渡り分割して調査を実施することになり、今回報告する2・3次調査区は県道西側部分の西端にあたる。

2次調査区は柳川市大字矢加部669-1・700-1・701-2・713-23番地の一部と701-1番地の440m²、3次調査区は696-1・697-1・698-1・669-1番地の一部と713-21・22番地の400m²で実施した。

2次調査は平成17(2005)年10月26日に重機による表土剥ぎを開始し、11月2日から作業員を投入した。12月2日に高所作業車で全体写真を撮影し、12月7日に埋め戻しを完了し撤収した。

3次調査は平成18(2006)年3月17日～4月24日に実施した。有明海沿岸道路出張所と地元関係者との協議が終了しなかったため、調査着手が遅れ3月17日に重機による表土剥ぎを開始し、その日の午後から作業員を投入した。開始日の遅れのため年度内に調査を完了できなかったため31日に一時中断し、撤収した。年度が改まって4月5日に機材を搬入して再開し、20日に空中写真を撮影し、24日に重機による埋め戻しを完了した。

2. 2次調査

矢加部町屋敷遺跡2次調査では、土坑9基、大土坑3基、溝状遺構7条などを検出した。基盤層は中央部から西半分が緩やかに下がっている。

1) 遺構

a) 土坑・大土坑

1号土坑(図版1-2・3、第4図)

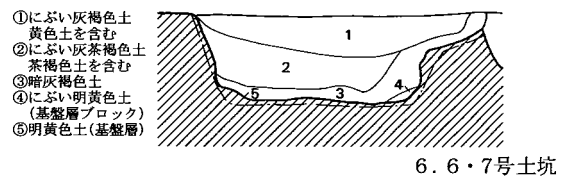
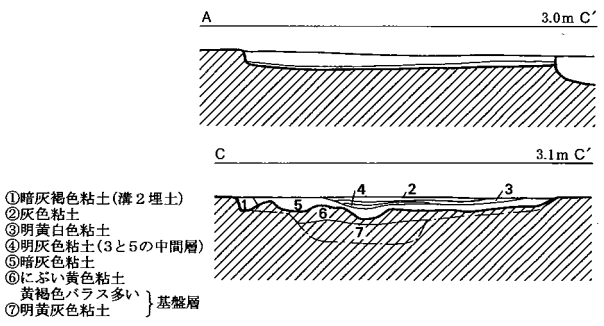
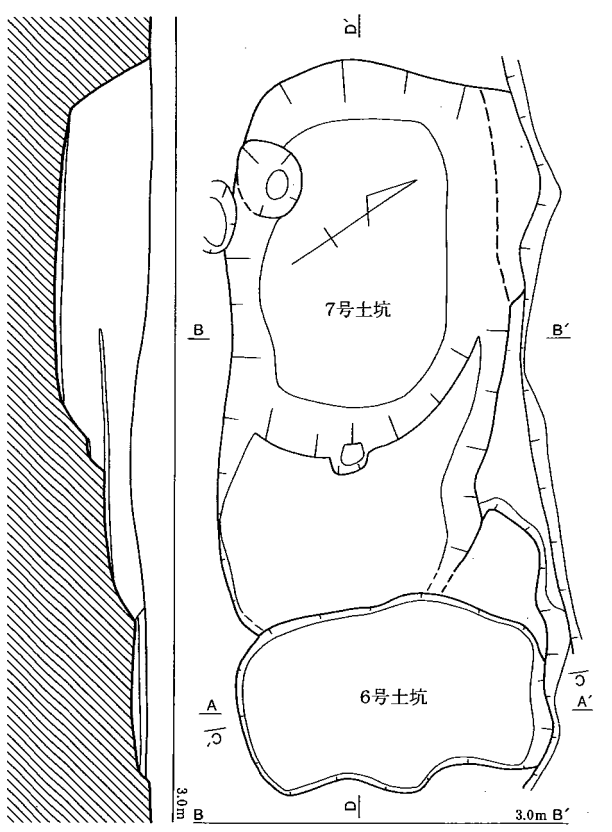
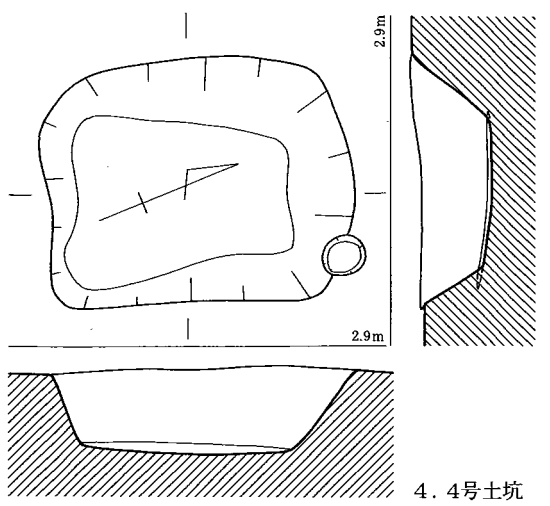
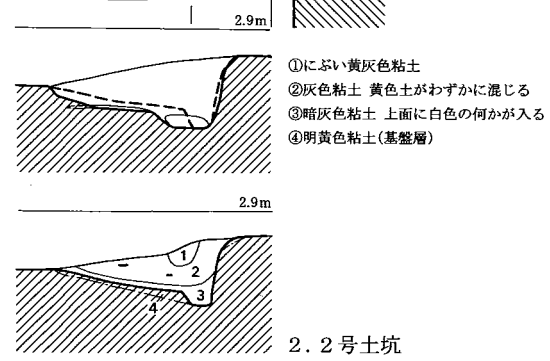
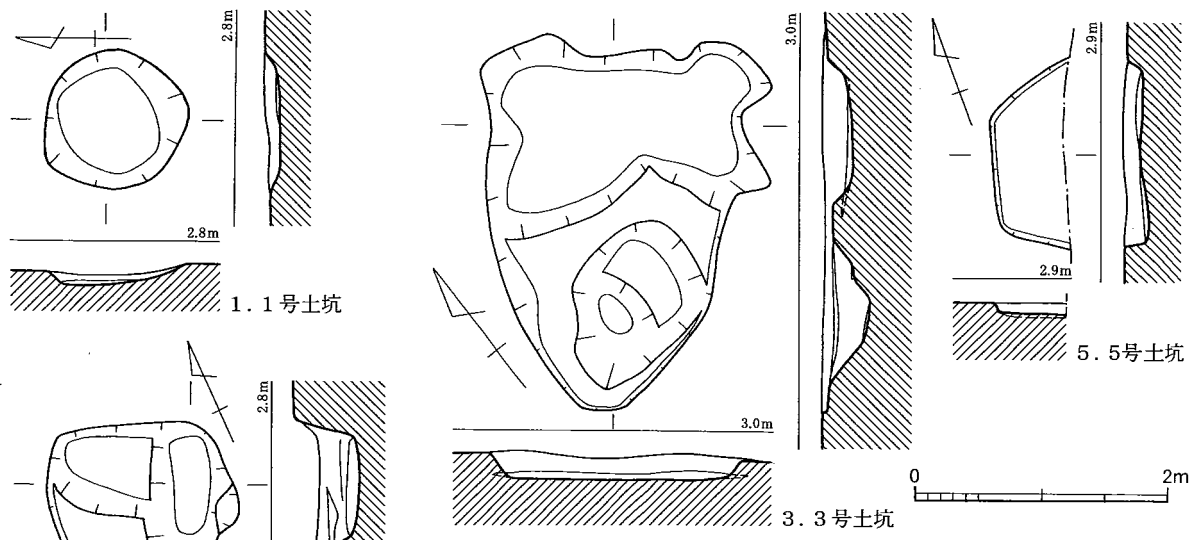
調査区南西側に位置する径約110cmの平面円形の土坑である。上面を大きく削平されており、深さが最深部で12cm程度で、埋土は炭化物を多く含む暗黒灰色の単層であった。

出土遺物はわずかで小片が多く、年代は特定できない。

2号土坑(図版1-4～6、第4図)

調査区南西端に位置する平面略方形の土坑で、3層上面に白く変色した木皮が敷かれたように広がっていた。木皮上には板材などないので礎板ではない。長軸143cm、短軸112cmで、深さは最深部で53cm程度。主軸方向はN-65°30'-W。

出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。



第4図 2次調査1~7号土坑実測図(1/60)

3号土坑 (図版1-7、第4図)

調査区中央南側に位置する平面不整形の土坑である。長軸が185cm、短軸152cmで、深い部分が2箇所あり、最深部で36cm程である。主軸方向はN-37° 10' -Wをとる。埋土はパサパサした黄褐色土で堆積層でないことから、抜根穴であろう。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

4号土坑 (図版2-1・2、第4図)

調査区北東に位置する平面方形の土坑である。長軸が約160cm、短軸は130cm。主軸方向はN-37° 10' -Eをとる。攪乱で上面を削平されているが65cm程残っていた。埋土は木皮・木片・籾殻などが粘土と互層に堆積しており、土器・陶磁器片がほとんどなかったことから、堆肥穴であったのかかもしれない。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

5号土坑 (図版2-3、第4図)

調査区中央東端に位置する平面台形の土坑で、調査区外にかかっている。検出された範囲では長軸が102cm、短軸38cmある。削平されており最深部で15cm程しか残っていない。出土遺物はわずかのため年代は不明。

6号土坑 (図版2-4・5、第4図)

調査区中央に位置し、7号土坑を切るやや不整形な平面隅円方形の土坑である。長軸が162cm、短軸105cm。削平されており深さは27cm程しか残っていない。床面には凹凸があり、埋土は薄く堆積していることから抜根穴の可能性はある。主軸方向はN-56° 10' -Eをとる。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は19世紀中葉。

7号土坑 (図版2-6・7、第4図)

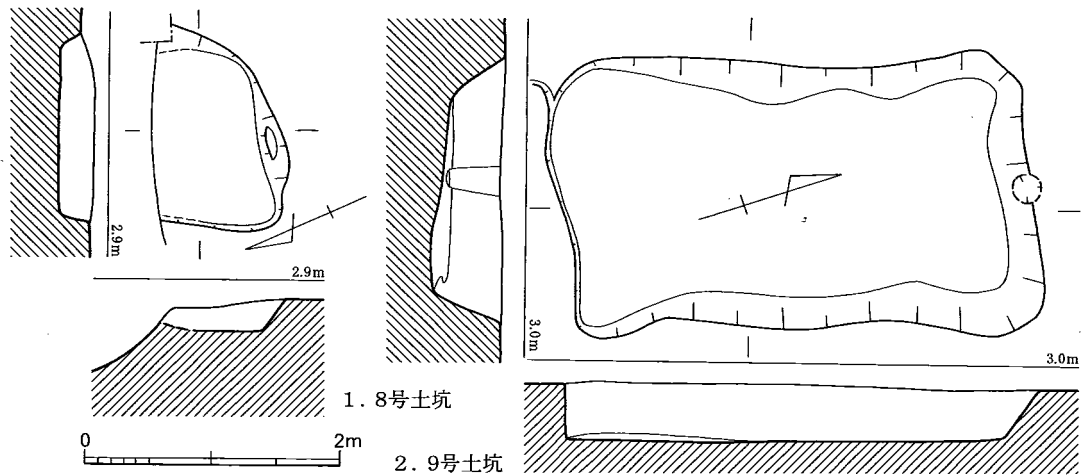
調査区中央に位置する長方形の土坑である。2号溝状遺構・6号土坑に切られており、残存部で長軸が290cm、短軸は160cmであろう。主軸方向はN-56° 50' -Wをとる。北に向かって下がっており、最深部で70cmある。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不確定だが6号土坑に切られ1号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

8号土坑 (図版1-1、第5図)

調査区中央北側に位置し、7号溝状遺構に切られる平面方形の小型の土坑である。残存長で、長軸が104cm、短軸は70cm。削平されており最深部で26cm程しか残っていない。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不明。

9号土坑 (図版2-8、第5図)

調査区中央に位置し、2号溝状遺構を切る平面長方形の土坑である。長辺250cm、短辺152cmで、深さは50cmほど残っており、床面はほぼ平坦。主軸方向はN-18° 20' -Eをとる。遺物もほとんど残っていなかったが、18世紀中葉か。



第5図 2次調査8・9号土坑実測図(1/60)

1号大土坑 (図版2-9、第6図)

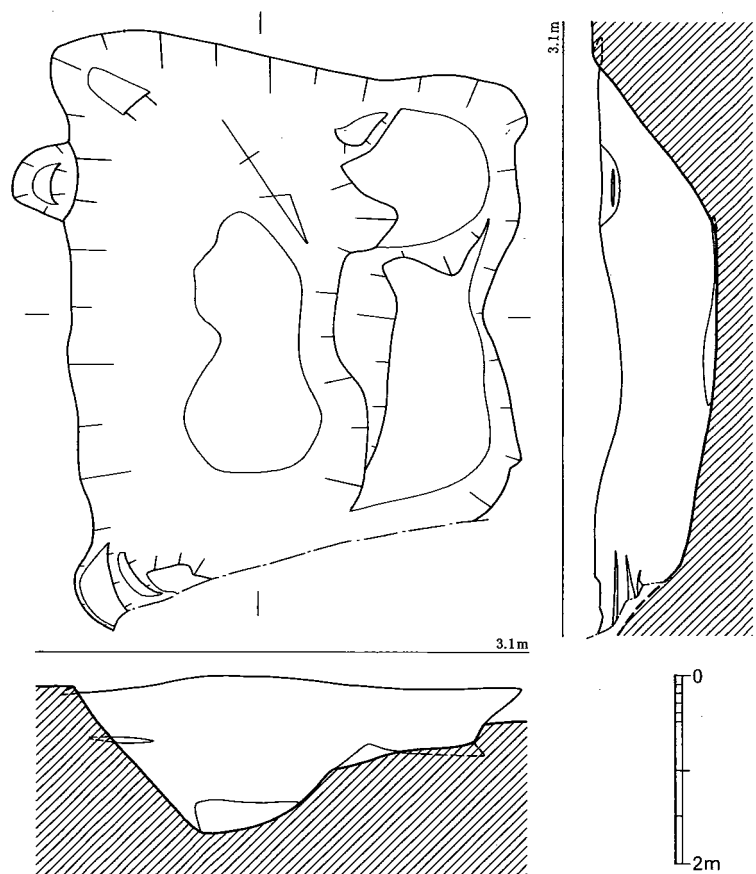
調査区北端に位置し、7号溝状遺構を切る平面方形の土坑である。主軸方向はN-57°-Eをとり、西隅と南隅は突出しており階段状のテラスを有する。深く掘削するための足場であろう。壁は緩やかに傾斜しており、深さは120cmに達する。土器・陶磁器はパンケース2箱に及ぶことから廃棄土坑であろう。18世紀中葉の遺物が多く出土しており、この時期に属する。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土であり、大正10年銘1銭銅貨は検出段階に上面にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

2号大土坑 (図版3-1、第7図)

調査区東南に位置し、遺構の西端部のみが検出された。3次調査でその続きが検出されており、規模・形態ともに1号大土坑に近いものであった。平面隅円方形の西辺にあたりで、深さは105cmほどあったが、最深部ではない。上面からは確認できなかったが、土層から南部を3号大土坑に切られているのは間違いない。

土層から掘り直しがあることがわかる。最初の掘り込みの南端部に丸太木が入っている。4次調査でこの木の続きを検出したが、土坑南壁に沿って置かれていたが、杭で押さえられてはいなかった。

埋土は炭層が薄く重なっており、



第6図 2次調査1号大土坑実測図(1/80)

何度も廃棄されたことがわかる。中位に稲の籾殻が20cmほどの厚さの単純層を成すほど大量に捨てられており、層の中央部は土壌化していないほどであった。

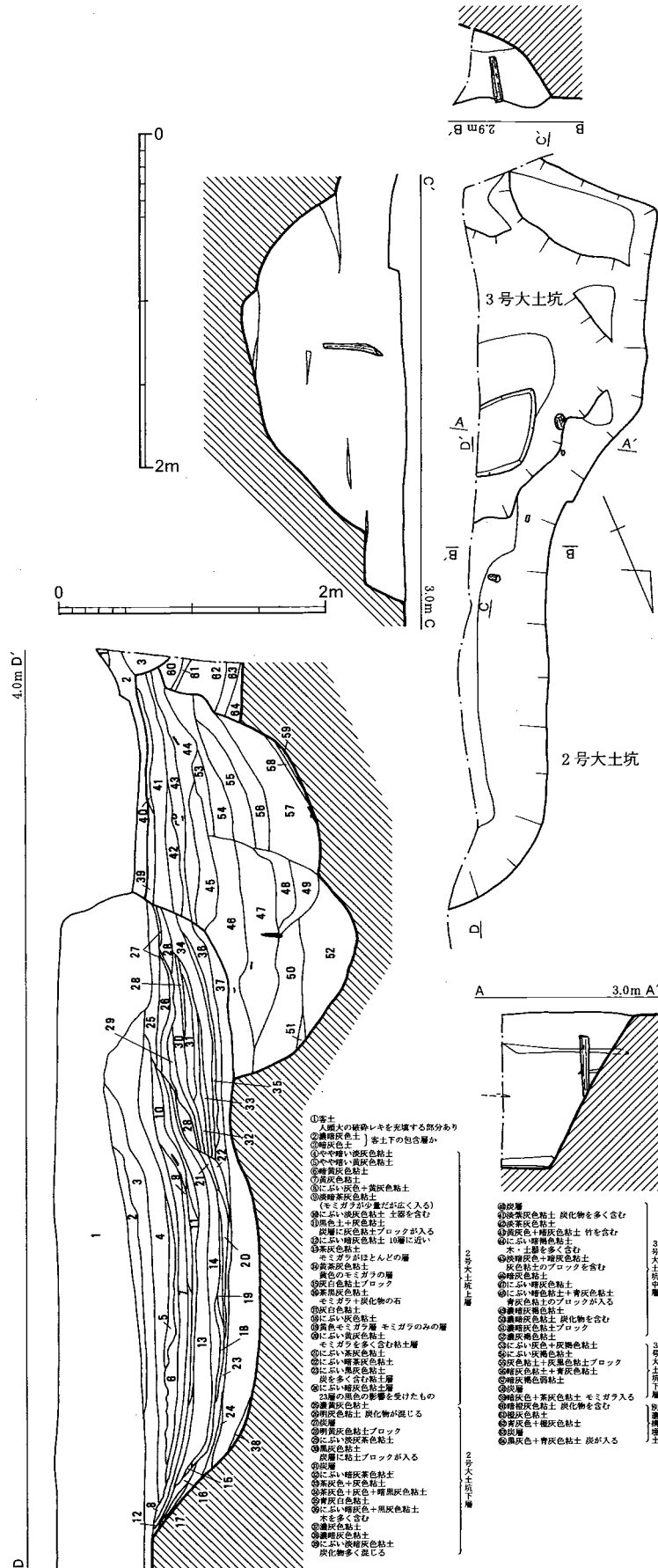
出土遺物は有機物の残りがよいにもかかわらず、種子や獣骨・魚骨、貝殻がないことから、単なる廃棄土坑でなく、籾殻など特殊なものだけを捨てた廃棄土坑であろう。年代は18世紀中葉か。

3号大土坑 (図版3-1~3、第7図)

南東端に位置し、2号大土坑に切られている。3次調査で続きが確認され、略方形の土坑の南西隅に当たることがわかっている。土層から2度の掘り直しと、調査区南側の土坑を切っていることがわかる。最後の掘り込みは2号大土坑と同規模で、2号大土坑の最初の掘り込みと見することもできる。残存長で、長軸132cm、短軸130cmを測り、深さは220cmほど残っていた。

西壁面には杭が打ち込まれていた。調査段階ではわからなかったが、この杭はクリークの泥を掘り上げる「かんぼえ」の柄を下にして差し込んだもので、3次調査で検出されている。

2号大土坑同様に炭化物や稲籾殻、木製品、木皮などを多く含み、土器・陶磁器は少ない。18世紀前葉に近い中葉か。



第7図 2次調査2・3号大土坑実測図 (1/50・1/80)

b) 溝状遺構

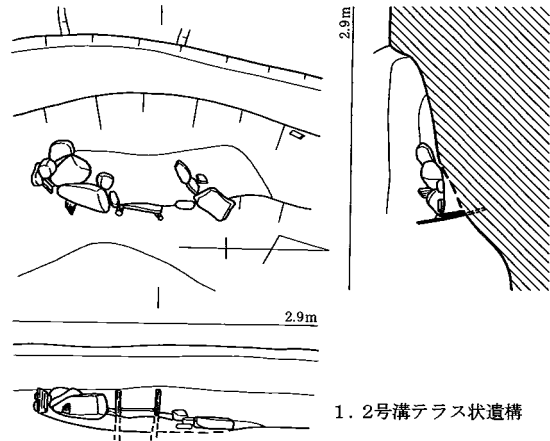
1号溝状遺構 (図版1-1・3-4、第3図)

調査区の西端をN-85°-Eに走り、南西端から東西の引き込み部がある。南北方向は溝の東壁が検出されたのみで、西に隣接する現存クレークの一部であろう。検出された南北方向の深さは約60cmある。埋土の上層は大量の炭やビニールを含む暗黒色土で、引き込み部分はこの単層となっていたことから、引き込み部分は近代の遺構として報告対象から外した。2号溝状遺構に切られるが、本来同一遺構と見るべきだろう。

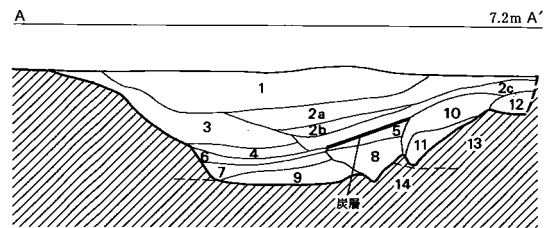
斜面部のみ調査なので、遺構の掘削時期は明らかでないが、18世紀後半代の可能性が高い。大正2年銘10銭銀貨・大正12年銘5銭白銅貨・明治13年銘1銭銅貨・昭和13年銘1銭銅貨は引き込み部から出土したものである。

2号溝状遺構 (図版1-1・4-1~3、第3・8図)

調査区の中央を直線的にN-110°-Eに走る溝で、1号溝状遺構を切っていたが、本来一体のものであろう。両岸には杭が打ち込まれていたが、護岸施設の一部ではない。ほとんどが径5cm大の落とした枝の先端をカットした丸木杭であったが、2本だけ建築材を使用していた。地盤が軟質粘土であるため、建築材の先端を加工しなくても打ち込むことができたのだろう。南斜面には両端に人頭大の石を置き、杭と瓦で護岸して整地した平坦面があり、溝で作業するためのステップと見られる。このことから1・2号溝状遺構にはこのステップを使って作業できる標高2.0m程まで水位があったようだ。北西端部には円形に杭が回るピットがあった。床面は緩やかに傾斜しており、最深部は1号溝状遺構の底面よりやや下がる程度である。

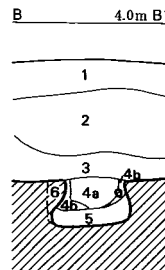


1. 2号溝テラス状遺構



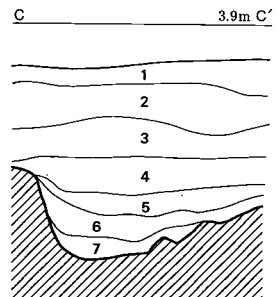
2. 2号溝土層断面図

- ①黄褐色粘土
- ②暗黄褐色粘土
- ③暗黄褐色粘土 炭化物多く混じる
- ④黄褐色粘土に炭化物多く混じる
- ⑤灰色粘土 炭化物やや多く混じる
- ⑥にぶい黄褐色粘土
- ⑦明黄褐色粘土
- ⑧暗灰色粘土
- ⑨明灰色粘土
- ⑩にぶい黄褐色粘土
- ⑪暗灰色粘土
- ⑫にぶい暗黄褐色粘土 } 裏込土
- ⑬にぶい黄褐色粘土 } 裏込土
- ⑭にぶい灰色粘土、炭化物混じり(溝6埋土)
- ⑮明黄色粘土(基盤層上層)
- ⑯灰色粘土(基盤層下層)



3. 4号溝土層断面図

- ①暗茶褐色土(表土)
- ②黒褐色土(客土上層)
- ③黄褐色土(客土下層)
- ④にぶい暗黄褐色粘土 褐色粒子混じり
- ⑤やや明るい暗黄褐色粘土 褐色粒子多い
- ⑥にぶい暗黄褐色粘土 褐色粒子混じり
- ⑦炭化物混じる
- ⑧明黄褐色粘土(基盤層)



4. 5号溝土層断面図

- ①表土
- ②暗黒色土
- ③暗褐色土 細石を含む
- ④暗灰色粘土
- ⑤淡黄褐色粘土
- ⑥暗黄褐色粘土
- ⑦灰色褐色粘土
- ⑧茶褐色粒子を多く含む

第8図 2次調査2号溝テラス状遺構、4・5号溝状遺構土層断面実測図(1/60)

1号溝状遺構の埋土に対応する暗黒色土が南北方向の中層に入っており、中層以上は戦後の客土層である。下層の遺物から19世紀後葉に掘削されたものと思われる。

3号溝状遺構（図版1-1、第3図）

調査区の北西を直線的にN-26°-Eに走る溝である。平面形はやや不整形で、幅は最大90cm、深さは15cmあり、削平されているわけではなく南北端は途切れていた。時期は不明。

4号溝状遺構（図版1-1、第3・8図）

調査区の北西を直線的にN-20°-Eに走る溝で、幅67cm、深さ61cmを測る。5号溝状遺構と併走しており南端も同様に途切れていた。2次調査の大溝や7号溝状遺構とつながる可能性もある。側壁は下部が明らかに抉れており、水が溜まっていた可能性がある。遺物はないが、5号溝状遺構と同時期か。

5号溝状遺構（図版1-1・4-4、第3・8図）

調査区の北西を直線的にN-20°-Eに走り、北端で東に直角に折れる溝で、4号溝状遺構と併走しており南端も同様に途切れていた。1号大土坑に切られおり、東端は削平されてなくなっていた。南北方向に走る部分は幅154cmで壁は直に立ち上がっており、深さ73cm程ある。出土遺物は比較的多く、17世紀末～18世紀前葉に属する。

6号溝状遺構（図版1-1、第3図）

調査区の中央部を直線的にN-21°-Eに走る短い溝で、長さ164cm、幅30cm、深さ10cm程度である。当初土坑と認識していたが、幅が均一で直線的であり、深さもほぼ均一であることから溝とした。出土遺物はほとんどなく、時期は不明。

7号溝状遺構（図版1-1、第3図） 調査区北部中央から調査区外にのびる溝で、幅165cm、深さ約60cmで、時期は不明。

2) 遺物

出土遺物については観察表に掲載しているが、付記するべき遺物についてのみ記述する。

3号土坑

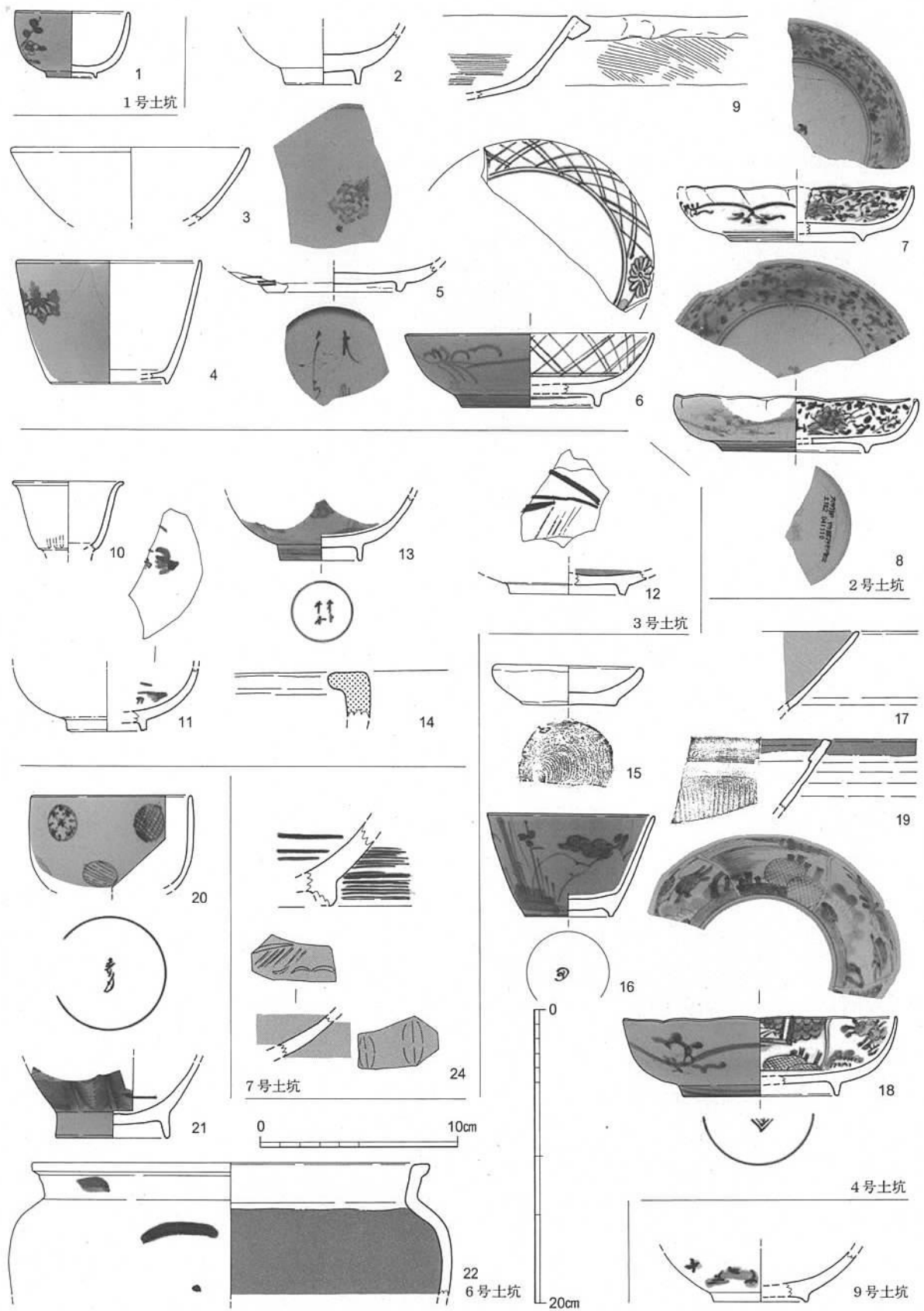
第9図10は、縦沈線文が1650年代より退化しており、器形から1680～1700年に比定した。

4号土坑

第9図19の年代は『九州陶磁の編年』には掲載されていないが、口縁形態がⅢ期より新しく、摺目上端のナデ揃えがないのでⅣ期とした。

1号大土坑

第10図2の類例は探せなかったが、口縁下に一条凸帯を有する小杯は北海道函館市五稜郭跡から出土しており、19世紀代のものか。8は底部形状がわからないため、時期を特定できない。



第9图 2次調査1~4・6・7・9号土坑出土土器・陶磁器实测图(19・22・23は1/4、他は1/3)

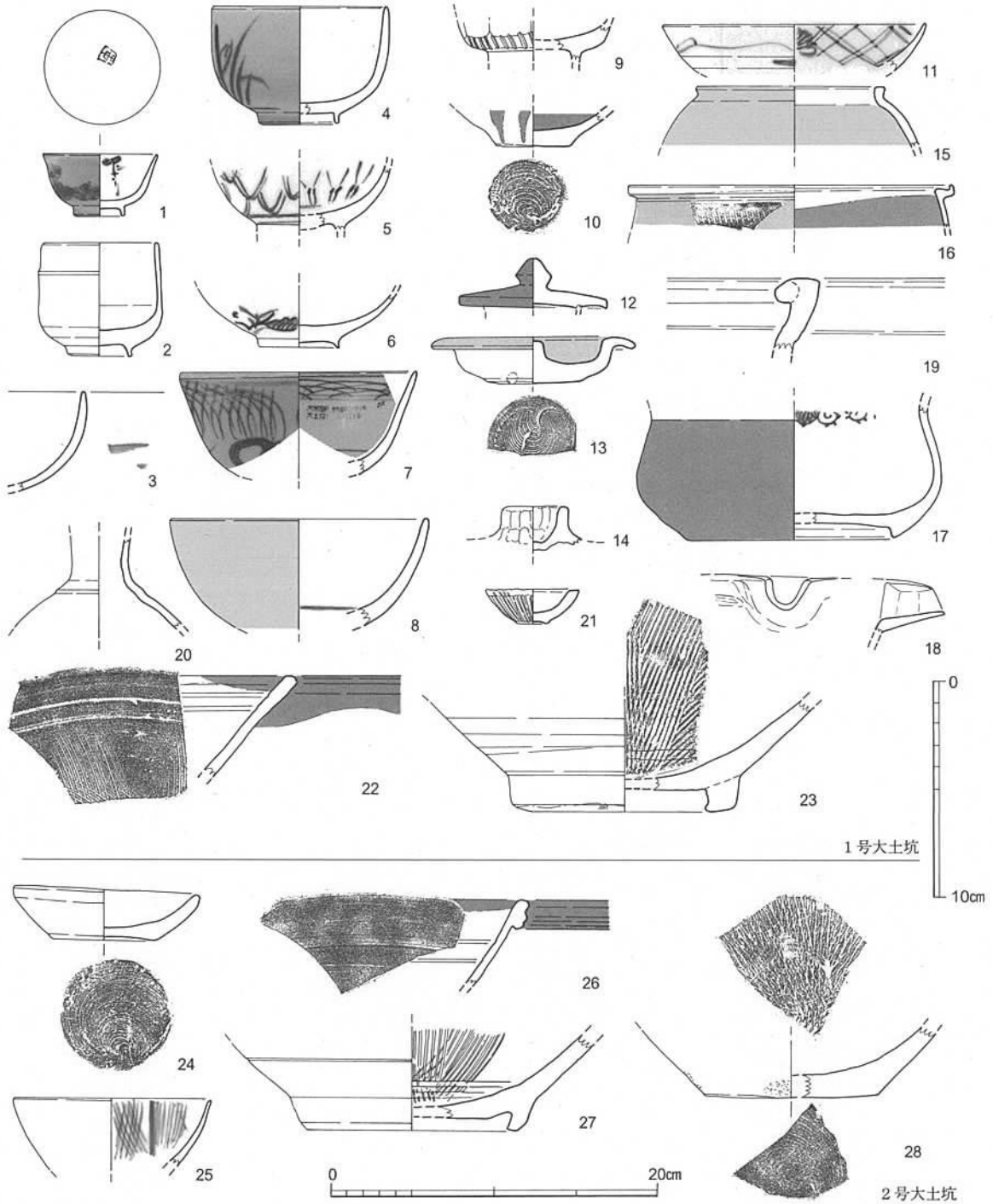
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号土坑 9図1	小杯	口径(5.8) 高台径2.6 器高3.4	磁器(染付) 灰白色 焼成不 良で軟質	透明釉 全面 発色不良で乳 白色を呈す	外面に手描き呉須染付の梅樹文 高台が小さく外に張り出している	畳付釉剥ぎ	器形・モチーフから 年代を特定でき ない	肥前系	不明
2号土坑 9図2	小碗	高台径2.5	磁器(白磁か染 付) 灰白色	透明釉 全面	残存部に文様がない	畳付釉剥ぎ や や砂目付着	器形の特徴から年 代を推定	肥前系 波佐見か	1680 / 1740
2号土坑 9図3	中碗	口径(12.0)	陶器 黄白色 やや軟 質	低火度の透明 釉 貫入あり	—	不明		肥前系	不明
2号土坑 9図4	猪口	口径(9.4) 高台径6.0 器高6.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面コンニャク印判呉須染付の桐文 裏銘の 有無は不明	畳付釉剥ぎ		肥前系	1700 / 1750
2号土坑 9図5	五寸皿	高台径(7.0)	磁器(染付) 緑灰白色 黒色 粒子あり 光沢 あり	透明釉 全面	外面は体部下位と高台に手描き呉須染付の3 条界線 見込みはコンニャク印判呉須染付の 2条界線と五弁花文 裏銘は手描き呉須染付 による崩れた「大明年製」	畳付釉剥ぎ や や砂目付着	裏銘が長与皿山窯 に近く、胎が特徴 的	肥前系 波佐見 長与町長与皿山 窯	1680 / 1740
2号土坑 9図6	五寸皿	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高3.7	磁器(染付) 緑灰白色 黒色 粒子あり 光沢 あり	青みがかった 透明釉 全面 畳付釉剥ぎ	外面は手描き呉須染付による崩れた唐草文と胴 下位に2本と高台に1本の界線 内面はコンニャ ク印判呉須染付のよ一重・二重交互の網目文 と菊花文 外底に1条界線内「富貴長春」	畳付釉剥ぎ や や砂目付着	文様パターンが長 与皿山窯に近く、 胎が特徴的	肥前系 波佐見 長与町長与皿山 窯	1750 / 1770
2号土坑 9図7	五寸皿 輪花口縁	口径(12.0) 高台径(6.8) 器高2.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による唐草文と胴下位に1本と高 台に2本の界線 内面は手描き呉須染付による花唐草文 見込みに2条界線とコンニャク印判による五弁花文 外 底に手描き呉須染付による1条界線内「富貴長春」	畳付釉剥ぎ	器形が木場山窯 文様パターンが長 与皿山窯に近い	肥前系 波佐見	1680 / 1700
2号土坑 9図8	五寸皿 輪花口縁	口径(12.4) 高台径(7.6) 器高2.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による唐草文と胴下位に1本と高 台に2本の界線 内面に花唐草文 見込みに2 条界線とコンニャク印判による五弁花文 外底に手 描き呉須染付による1条界線内「富貴長春」	畳付釉剥ぎ	器形が木場山窯 文様パターンが長 与皿山窯に近い	肥前系 波佐見	1680 / 1700
2号土坑 9図9	焙烙	復元不能	土師器 精良 金雲母多 い ぶい黄灰 褐色	—	外面は押さえの後中位ヨコハケ 口縁突帯貼 付け 内面は回転ヨコナデ1回	不明	外面煤付着	在地系	不明
3号土坑 9図10	小杯 端反形	口径(5.6)	磁器(白磁) 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面に縦方向の沈線	不明		肥前系	1680 / 1700
3号土坑 9図11	中碗	高台径(4.0)	陶器 やや軟質で精良 黄白色	低火度の透明 釉 畳付・高台 以外に施釉	見込みに鉄絵による崩れた山水文 高台は削 り出して、外底は高台内沈線の有無不明	不明	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山 1号窯に類例あ り	18c 中葉
3号土坑 9図12	中碗	高台径(6.0)	陶器 灰茶褐色 白色 粒子あり	鉄釉 畳付・高台内 以外に施釉	見込みに黒色の鉄絵と白泥による植物文の上 絵 高台は削り出し	不明		肥前系か	18c 中葉
3号土坑 9図13	中碗	高台径(4.2)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による花文・草葉文と 胴下位に1本と高台に2本の界線 外底に手 描き呉須染付による1条界線内「大明年製」 の裏銘	畳付釉剥ぎ 見込みに灰被り		肥前系	1700 / 1740
3号土坑 9図14	鉢 火鉢	復元不能	瓦質土器 ぶい灰白色 金雲母目立つ	—	内面と見込みはヨコナデ	不明		在地系	不明
4号土坑 9図15 図版5	小皿 かわらけ	口径(7.4) 底径4.8 器高2.0	土師器 軟質で精良 金 雲母なし ぶ い明黄褐色	—	外面は中位ヨコナデ後、口縁部を丸くヨコナ デ 内面は回転ヨコナデ1回 外底は糸切り	底部に変色の範 疇がある 焼き 台の痕か	胎土から蒲池焼と 推定	蒲池焼	不明
4号土坑 9図16	猪口	口径8.4 高台径4.5 器高8.4	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子入る	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による梅竹文 裏銘は 簡略化された渦福	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着		肥前系 波佐見か	1700 / 1750
4号土坑 9図17	中皿	復元不能	陶器 灰白色	内面青灰色の 銅緑釉、外面 透明釉の掛け 分け	—	不明		肥前系	1690 / 1780
4号土坑 9図18	小鉢 輪花口縁 芙蓉手・ なます皿	口径(14.0) 高台径(8.0) 器高4.0	磁器(染付) 白色 黒色粒 子入る	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による唐草文と胴下位に1本と高 台に2本の界線 内面は花文・草葉文・丸文 見込みに 2条界線とコンニャク印判呉須染付による五弁花文 外 底は1条界線内に二重方形内の「福」の裏銘	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	区画線が木場山窯 に近い	肥前系 波佐見か	1680 ~ 1740
4号土坑 9図19	摺鉢	復元不能	陶器 茶褐色	内外口縁部 のみ黒茶褐色の 鉄釉	摺目上端未処理 見込みはヨコナデ	—	口縁部のみ施釉の 特徴から甕屋窯の 可能性高い	肥前系 武雄市甕屋窯か	1690 / 1750
6号土坑 9図20	小碗 腰張形 小丸碗	口径(8.2)	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	丸文散らし 呉須染付 手描き	不明		肥前	1820 / 1860
6号土坑 9図21	中碗 広東形	高台径(5.8)	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による葉文 見込みは 1条界線内に崩れた「寿」の裏銘	畳付釉剥ぎ		肥前系 波佐見か	1820 / 1860
6号土坑 9図22	中甕 半胴甕	口径(27.0)	陶器 茶褐色 ざっく りとして白色粒 子あり	白化粧土を外 面から頸部 内面胴部は鉄 漿	外面は鉄絵による松文の上絵付け	不明		肥前系	不明
7号土坑 9図23	中甕 半胴甕	復元不能	陶器 茶灰色 やや軟 質	—	内外面・見込みは鉄漿により刷毛目文 高台外端をカット	不明		肥前系	不明
7号土坑 9図24	皿	復元不能	磁器(青磁) 白色	淡緑灰色の青 磁釉	外面は鑄状の稜 内面は片切り彫りによる花 文 見込みは鉄釉による刷毛目文の上絵付け	不明	傾き不確実	肥前系 有田町丸尾窯に 類例あり	不明
9号土坑 9図25	中碗 丸碗	高台径(4.8)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による花文・草葉文	畳付釉剥ぎ		肥前系 高台が嬉野市志 田西山1号窯に 近い	1710 / 1750

表1 2次調査土坑出土土器・陶磁器観察表

20は福岡市西新町遺跡に多数類例があり、生産された可能性の高い器種と報告されている。胎土からみても高取系統のものであり、東皿山窯の製品と考えた。

2号大土坑

第10図25は長崎市現川焼に似ているが、現段階の資料では施文方法や生産時期が異なるので現川焼とは推定しなかった。



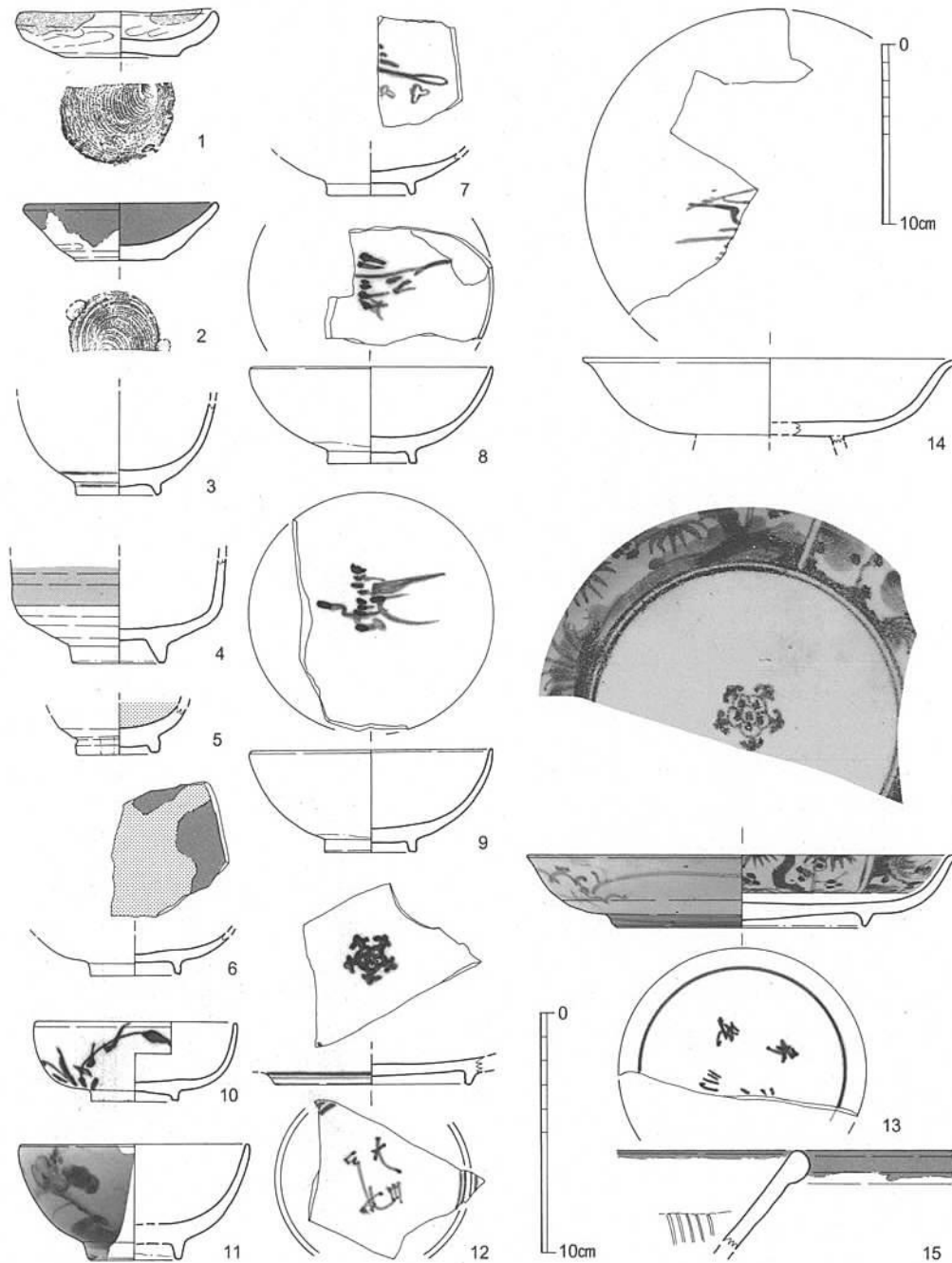
第10図 2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・18~20・22・23・26~28は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴						
1号大土坑 10図1	小杯 端反形	口径(5.4) 高台径2.4 器高2.9	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面 やや発色不良 で乳白色	外面は手描き呉須染付による草花文 内面は 手描き呉須染付による草文の上に金彩の輪郭 と赤の花文の上絵付け 見込みに赤彩による 崩れた漢字文の上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号大土坑 10図2	小碗 腰紐形 湯呑み	口径5.2 高台径5.2 器高3.0	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面中位に突帯	畳付釉剥ぎ 砂目付着		瀬戸・美濃系	不明
1号大土坑 10図3	中碗 半球形	復元不能	陶器 灰白色	低火度の透明 釉 貫入あり	外面は緑彩による葉文の上絵付け	不明	京焼風陶器	肥前系	不明
1号大土坑 10図4	小碗 腰張り形 小丸碗	口径(8.25) 高台径0.5 器高5.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による菖蒲文	畳付釉剥ぎ		肥前系	1820 1860
1号大土坑 10図5	小碗	高台径(4.0)	磁器(染付) 灰白色	青みがかった 透明釉 全面	外面は手描き呉須染付で割筆による二重網目 文 内面は網目文 見込みに菊花文 裏銘の 有無は不明	畳付釉剥ぎ		肥前系 波佐見	1750 1770
1号大土坑 10図6	中碗 浅半球形 丸碗	高台径(3.8)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による草花文	畳付釉剥ぎ		肥前系 高台が嬉野市志 田西山1号窯に 近い	1710 1750
1号大土坑 10図7	中碗 端反形 端反碗	口径(11.0)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面 焼成不良で気 泡を含む	外面は手描き呉須染付による連続弧文 内面 は口縁帯連続弧文、胴下位界線	不明	内面口縁帯の文様 が波佐見町皿山本 登窯と中尾上登窯 に類似あり	肥前系 波佐見	1820 1860
1号大土坑 10図8	中碗 青磁掛け 分け碗 染付青磁碗	口径(12.0)	磁器(染付青磁) 白色	淡黄緑色を呈 する青磁釉 (外面) 透明釉(内面)		不明		肥前系	不明
1号大土坑 10図9	小碗	高台径(4.4)	陶器 灰黄白色	低火度の透明 釉 貫入あり	型押し成形による亀甲文陽刻 胴下位へう彫り	不明	北九州市大手町遺 跡11号土坑に類 例あり	肥前系か	1820 1860
1号大土坑 10図10	小皿	底径3.4	陶器 赤茶褐色 白色微粒子あり	鉄釉を内面から 外面中位まで かける	外面ヨコナテ 外底系切り	胎土目跡なし	灯明皿としての使用 痕なし	肥前系 武雄市麩屋B窯 に類似あり	不明
1号大土坑 10図11	五寸皿	口径(12.2)	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面手描き呉須染付による崩れた唐草文と高 台に界線 内面は一重・二重交互の網目文と コンニャク印判による菊花文	不明	文様パターンが長 与皿山窯に近く、 胎が特徴的	肥前系 波佐見 長与皿山窯	1680 1740
1号大土坑 10図12	土瓶蓋	最大径6.8 つまみ径1.6	陶器 灰茶褐色 精良 硬質	黒色の黒釉を 上面にかけ、 内面は露胎	ヨコナテ	裾下面は釉剥ぎ なので身部と重 ね焼きか	1号溝22図13の土 瓶タイプとセット になる	肥前系	不明
1号大土坑 10図13	土瓶蓋	最大径8.4 つまみ径1.0 底径4.2	陶器 にぶい暗黄灰色 で、緻密	暗黄茶灰色の あめ釉を上面 にかけ、内面 は露胎	外面ヨコナテ 外底系切り	体部下位に胎土 目跡あり	内面の変色は使用 のためであろう	高取 西新町遺跡12次 土坑56に類似	不明
1号大土坑 10図14	鉢蓋	つまみ径3.0	土師器 白黄茶色で、軟 質 褐色微粒子あり	—	外面はオサエ、内面はナテ・オサエ	不明		在地系	不明
1号大土坑 10図15 図版5	土瓶 球胴か	口径(11.8)	陶器 軟質にぶい黄 灰色	内外低火度の灰 緑色の灰釉 口 唇部から内面口 縁部は釉剥ぎ 貫入あり		不明		不明	不明
1号大土坑 10図16	土鍋	口径(14.8)	陶器 にぶい黄橙灰色 堅緻	外面鉄漿 内面 鉄釉 口縁部 釉剥ぎ	外面飛びガンナ 内面ヨコナテ	不明		不明	不明
1号大土坑 10図17	鉢 火入れ・ 香炉	底径(9.6)	磁器 (鉄釉掛分け鉢) 白色	鉄釉(外面) 暗茶褐色 透明釉(内面)	外面ヨコナテ 見込みに手描き呉須染付による 蜻蛉草と花文 底部は削り出しの萐葎底	底部と畳付は釉 剥ぎ		肥前系	不明
1号大土坑 10図18	片口鉢	復元不能	陶器 にぶい黄灰～灰 色	鉄釉全面	外面口縁下の凹線は成形時のもの	不明		高取か	不明
1号大土坑 10図19	大甕 ハンズ ー ガメ	復元不能	陶器 赤茶褐色 白色 粒子入る	暗褐色鉄釉全 面	口唇部は内面貼付けにより肥厚させている 内外灰被りあり	不明		肥前系	18c代
1号大土坑 10図20	中瓶 ペコかん 徳利	頸部径3.3	陶器 灰色 軟質で精 良	発色不良の鉄 釉	外面口縁下の凹線は成形時のもの	不明	福岡市西新遺跡12 次2号土坑に類 例あり	高取 福岡市東皿山窯 か	不明
1号大土坑 10図21	紅猪口 紅皿	口径(4.2) 底径1.4 器高1.5	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明 釉を内面から 外面口縁部ま で	外面に型押しによる菊花文の陽刻	—		肥前系	1840 1860
1号大土坑 10図22	摺鉢	復元不能	陶器	内外口縁部の み黒茶褐色の 鉄釉	摺目上端ナテ揃え 見込みはヨコナテ	—	口縁部のみ施釉の 特徴から麩屋窯の 可能性高い	肥前系 武雄市麩屋窯か	不明
1号大土坑 10図23	摺鉢	底径(13.8)	陶器 にぶい暗灰褐色	紫茶褐色の鉄 釉を高台内外を 全面施釉 高台 内は焼成不良	摺目単位不明 高台内削り出し	畳付釉剥ぎ 下 面の鉢の摺目 内 面に重ね焼き痕	高台が重ね焼き時 の下の鉢の形に沿 って変形している	小石原系	19c前半
2号大土坑 10図24 図版5	小皿 かわらけ	口径8.4 底径4.7 器高2.2～2.5	土師器 軟質で精良 金 雲母含む 明黄 灰色	—	外面中位ヨコナテ後、口縁部を丸くヨコナテ 内面から見込みは回転ヨコナテ1回 外底 は系切り	底部に変色の範 囲がある 焼き 台の痕か	完形	在地系	不明
2号大土坑 10図25	小碗	口径(9.0)	陶器 紫褐色	透明釉	内面は白化粧土の打刷毛目文	不明		肥前系 嬉野市内野山西 窯に類似あり	不明
2号大土坑 10図26	摺鉢	復元不能	陶器 紫褐色	内外口縁部の み黒茶褐色の 鉄釉	内面・見込みはヨコナテ	—	口縁部のみ施釉の 特徴から麩屋窯の 可能性高い	肥前系 武雄市麩屋窯か	1690 1750
2号大土坑 10図27	摺鉢	高台径(13.0)	陶器 赤褐色 光沢あ り 白色微粒子 含む	紫茶褐色の鉄 釉を高台以外 全面 高台は 焼成不良	高台は貼付けで、焼成時のへたれで歪んでいる	内面に砂目跡 畳付け釉剥ぎ 砂目付着	胎土が特徴的	小石原系か	19c前半
2号大土坑 10図28	摺鉢	底径(10.6)	陶器 灰茶褐色 白色 微粒子含む	無釉 口縁部 のみ鉄釉タイ プの底部か	外面は横ナテ 外底は系切り	胎土目跡	内面に小型器種を 重ね焼きしたよう な痕跡	肥前系 武雄市麩屋窯か	不明

表2 2次調査1・2号大土坑出土土器・陶磁器観察表

3号大土坑 (図版5)

第11図1は金雲母を含んでいないことと胎土の精良さから蒲池焼の可能性が高い。第11図2は灯明皿として使用される器種だが、煤の付着はなかった。第11図4は2号大土坑と接合した。第11図6は類例がないが、胎土から高取系と推定した。第11図7~9は京焼き風肥前陶器だが、高台内の挟り込みがないので内田大谷窯より志田西山1号窯に近く、文様の崩れ方からやや後出するものと思われるので18世紀中葉とした。第11図15の年代は『九州陶磁の編年』には掲載されていないが、Ⅲ期の玉縁口縁に近いが、摺目上端のナデ揃えがないのでⅣ期とした。



第11図 2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3)

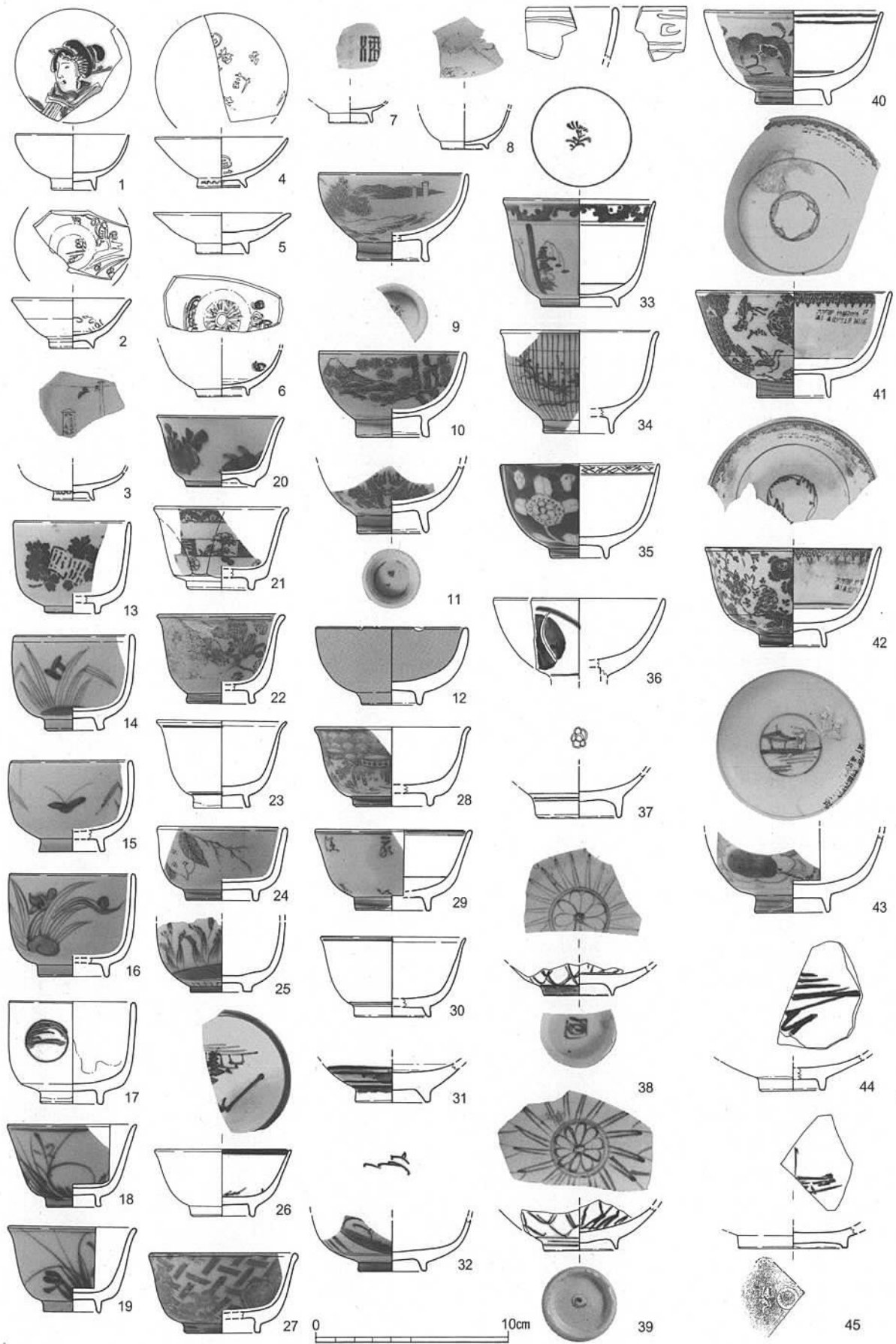
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴						
3号大土坑 11図1 図版5	小皿 かわらけ	口径8.05 底径4.9 器高1.9	土師器 軟質で精良 角 閃石を含む 黄灰色	—	外面は中位ヨコナデ後、口縁部を丸くヨコナ デ 内面・見込みは回転ヨコナデ 外底は糸 切り	底部に変色の範 疋がある 焼き 台の痕か	口縁部に煤が付着 灯明皿として使用 している	在地系	不明
3号大土坑 11図2	小皿	口径(8.1) 底径3.7 器高2.3	陶器 暗灰～紫灰褐色 白色微粒子あり	鉄釉を内面か ら外面中位ま でかける	外面ヨコナデ 外底糸切り	胎土目跡2箇所 あり	灯明皿としての使 用痕なし	肥前系 武雄市 壺屋B窯 に類例あり	1690 / 1750
3号大土坑 11図3	小碗 半球形	高台径(3.45)	磁器(染付) 黄灰色で黒色 粒子混入	透明釉 発色不良のため 白磁状を呈 する	2条界線 他にも文様があるが見えない	畳付釉剥ぎ	発色不良で界線が 黒色のまま 外面 がひび割れている	肥前系	1700 / 1740
3号大土坑 11図4	中碗 筒形 半球碗	高台径(3.8)	陶器 明黄褐色で緻密 な土師質状	低火度の暗緑 灰色の灰釉が 外面の体部中 位まで	削り出し高台	畳付が剥がれて いる		肥前系 壺野市内野山北 窯に類例あり	1680 / 1780
3号大土坑 11図5	小碗 半球形	高台径3.4	灰白色でやや軟 質 精良	褐色胎釉が内 面・見込みに かかる 高台 に一部付着	高台接合後削り 接合痕あり	不明		肥前系 壺野市内野山北 窯に類例あり	1680 / 1780
3号大土坑 11図6	中碗	高台径(3.8)	陶器 にぶい黄灰色で やや軟質だが精 良	暗褐色の胎釉 全面	内面から見込みは灰白色の薬灰釉流し掛け	畳付釉剥ぎ		高取系	不明
3号大土坑 11図7	中碗	高台径(3.6)	陶器 やや軟質な黄白 ～灰黄白色	低火度の透明 釉 畳付・高台内 露胎	見込みは鉄絵による崩れた山水文 高台削り 出して高台内沈線なし	不明	京焼き風陶器 発色不良	肥前系 壺野市志田西山 1号窯に類例あり	18c 中葉
3号大土坑 11図8	中碗	口径(10.1) 高台径(3.7) 器高4.0	陶器 やや軟質な黄白 色 精良で緻密	低火度の透明 釉 畳付・高台内 露胎 光沢・貫入あり	見込みは鉄絵による崩れた山水文 高台削り 出して削り痕が沈線状に見える	不明	京焼き風陶器	肥前系 壺野市志田西山 1号窯に類例あり	18c 中葉
3号大土坑 11図9	中碗	口径10.1 底径3.8 器高4.3	陶器 やや軟質な黄白 色で緻密	低火度の透明 釉 畳付・高台内 露胎 光沢・貫入あり	見込みは鉄絵による崩れた山水文 高台削り 出して削り痕が沈線状に見える	不明	京焼き風陶器	肥前系 壺野市志田西山 1号窯に類例あり	18c 中葉
3号大土坑 11図10	小碗	口径(8.2) 底径(3.6) 器高2.3	磁器(染付) 灰白色で黒色粒 子多い	透明釉 全面	外面手描き呉須染付による草葉文	畳付砂目付着		肥前系 波佐見か	1700 / 1740
3号大土坑 11図11	小碗	口径(9.6) 高台径(4.8) 器高4.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面手描き呉須染付による雪輪草花文	畳付釉剥ぎ	皿山本登窯に類例 あり	肥前系 波佐見	1750 / 1770
3号大土坑 11図12	五寸皿	底径(8.1)	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面手描き呉須染付による体部下位と高台に 2条界線 見込みはコンニャク印判による五 弁花文 外底に1条界線と崩れた「大明年製」 の裏銘	不明	呉須薄い 裏銘が木場山窯に 近い	肥前系 波佐見	1680 / 1740
3号大土坑 11図13	中皿	口径(17.8) 底径11.0 器高3.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面手描き呉須染付による崩れた唐草文と高 台に界線、内面に草樹文・笹文・雪輪文 見 込みはコンニャク印判による五弁花文 外底 に1条界線と崩れた「大明年製」の裏銘	ハリ目跡 畳付釉剥ぎ	—	肥前系	1700 / 1740
3号大土坑 11図14	高台付杯	口径(20.8)	陶器 やや軟質な黄白 色で緻密	低火度の透明 釉	見込みは鉄絵による崩れた山水文 高台削り 出し	不明	京焼き風陶器	肥前系 壺野市志田西山 1号窯に類例あり	18c 後半
3号大土坑 11図15	摺鉢	復元不能	陶器 焼成不良のため 黒灰色	口唇部のみ鉄 釉 焼成不良 のため一部黒 変	摺目上端ナデ揃え	—	肥前産と異なるよ うに見えるが焼成 不良のため	肥前系 武雄市 壺屋窯に 類例あり	1690 / 1750

表3 2次調査3号大土坑出土土器・陶磁器観察表

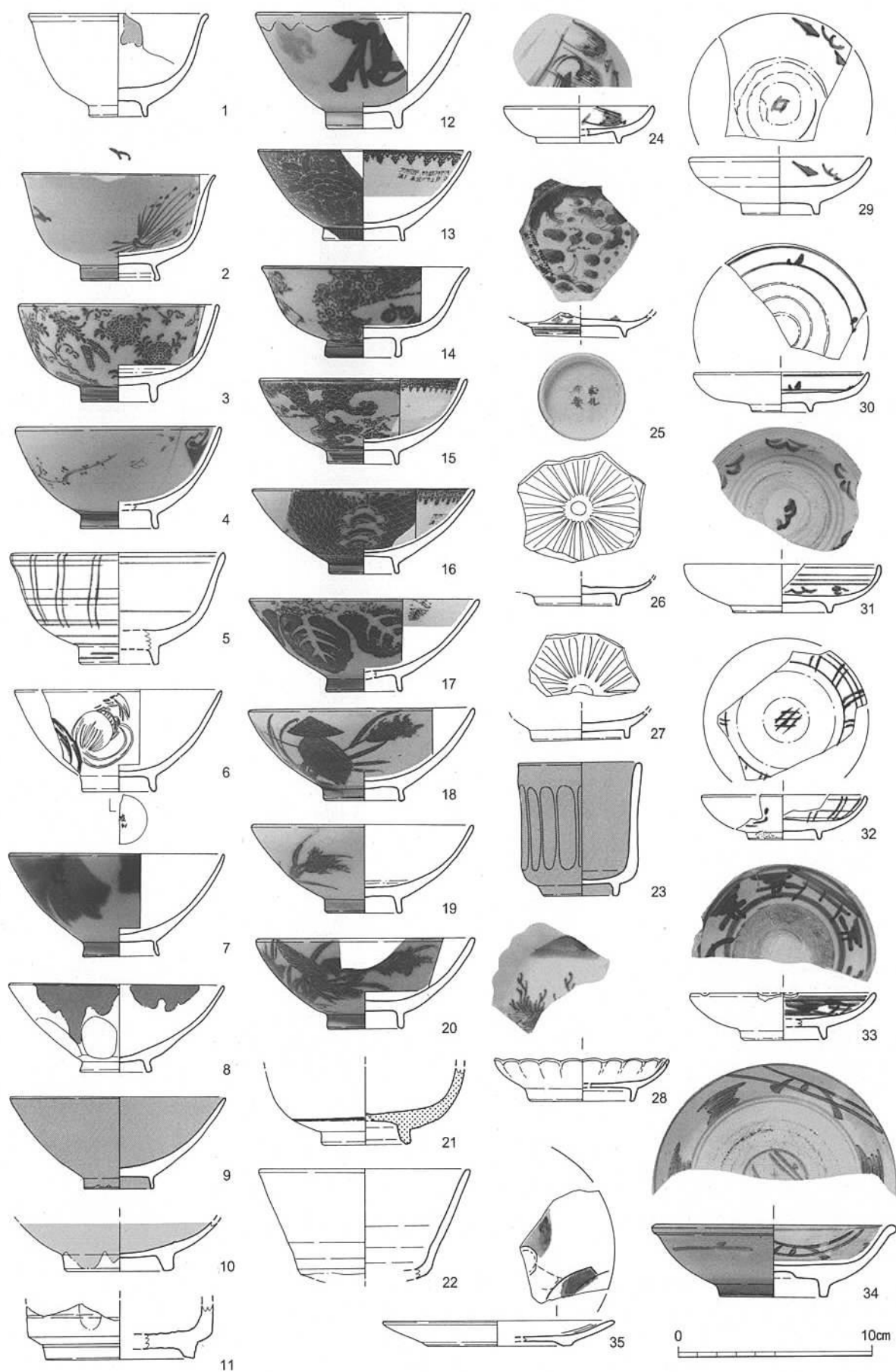
1号溝状遺構 (図版5・6・9・10)

第12図1の見込み文様は浮世絵をモチーフにしたものか。第12図3の見込み文様は明治5(1872)年制定の黒漆郵便箱と電線・電柱の描かれたもので、本来のポストには「郵便箱」と書かれるが、ここでは「海老□」と書かれている。欠損のため不確実だが、商家の名前の可能性が高い。第12図9・10はの文様は富士山と松と帆掛け舟を描いたもので、外面を一回りして一つの文様になっている。第12図12の裏銘は戦時統制により昭和16(1941)年以降に記入が義務付けられた統制番号で、「岐」の後には3桁の番号が入るはずだが、欠損している。第12図33の文様は19世紀中葉のモチーフだが、器形は新しいものなので、復古的な作風と考えられる。第12図45の裏銘「清水」の刻印は、字体が完全に一致する資料を発見できなかったため、窯を特定できない。第12図45の龍泉窯青磁は中世の混入品である。

第13図10は特徴的な胎土から高取系と判断した。第13図21は陶胎染付としたが、呉須の発色不良から、焼成不足で軟質な状態の磁器の可能性もある。第13図31の文様は、楓文の描き方と同じなので楓文が簡略化されたものだろう。第13図33は口縁の打ち欠き部が黒変していることから灯明皿として使用されたもので、打ち欠きは芯置きのためであろう。4箇所等間隔に打ち欠いている理由はわからない。第13図35は類例がない土師質の絵皿で、胎土の特徴から蒲池焼と推定した。



第12図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(1/3)



第13図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

遺構名 挿入番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 12図1 図版5	薄手小杯 盃	口径6.0 高台径2.4 器高2.9	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みに女性の人物文 輪郭は金・赤・黒・ 黄彩の上絵付け	疊付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	不明
1号溝 12図2	薄手小杯 盃	口径(6.2) 高台径2.2 器高2.6	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	見込みは金彩の輪郭線による梅樹文で蛇の目 釉剥ぎ上にも金彩	疊付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 12図3 図版5	薄手小杯 盃	口径(7.0) 高台径2.6 器高2.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面高台に手描きコバルト染付による凹凸線 文 見込みにコバルトによる電信柱・電線と ポストを上絵付け	疊付釉剥ぎ	文明開化をモチフ にしたもの	瀬戸・美濃系	19c 中葉
1号溝 12図4	薄手小杯 盃	口径(7.0) 高台径2.6 器高2.6	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面高台に手描きコバルト染付による凹凸線 文 見込みに金彩による店舗名「時計口」 「瀬川」と屋号を上絵付け	疊付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 20c 前半
1号溝 12図5	薄手小杯 盃	口径(7.2) 高台径2.8 器高2.1	磁器(白磁) 白色 黒色粒子 多い	青味のある乳 白色の透明釉 全面	—	疊付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 12図6	薄手小杯 盃	高台径(2.6)	磁器(色絵) 白色	やや発色悪く 乳白色の透明 釉 全面	見込みに赤彩の火炎文、蛇の目釉剥ぎ上に金 彩と赤彩で車輪文を上絵付け	疊付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 12図7	薄手小杯 盃	高台径(2.25)	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みに型紙刷りコバルト染付による「酒」 の篆書体と金彩で「百薬ノ長也」を上絵付 け	疊付釉剥ぎ	久留米市三本町遺 跡SK1に類例が あり、口縁部は端 反形	瀬戸・美濃系	20c 初頭
1号溝 12図8	薄手小杯 盃	高台径(2.5)	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	内面に金彩による1条界線の上絵付け 見込み は金彩の輪郭線による富士・鷹羽・茄子の上 絵付け	疊付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝 12図9	小杯 丸腰湯呑 み	高台径(2.5)	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	褐彩と緑の銅版2色刷りによる富士と松の山 水文の上絵付け 裏銘はクロムによる銅版転 写で「乾山精製」を上絵付け	疊付釉剥ぎ	2号溝24図5と同 一器種	瀬戸・美濃系	19c 末 20c 第1 四半期
1号溝 12図10	小杯 丸腰湯呑 み	高台径(2.5)	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	褐彩と緑の銅版2色刷りによる富士と松の山 水文の上絵付け 裏銘はクロムによる銅版転 写で「乾山精製」を上絵付け	疊付釉剥ぎ	2号溝24図5と同 一器種	瀬戸・美濃系	19c 末 20c 第1 四半期
1号溝 12図11	小杯 丸腰湯呑 み	高台径3.9	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による龍文か 裏銘は手描きコバルト染付による1条界線内 「舜山」	疊付釉剥ぎ	2号溝24図4と同 一器種	瀬戸・美濃系	19c 末 20c 第1 四半期
1号溝 12図12 図版5	小碗 丸腰湯呑 み	口径(8.0) 高台径(3.2) 器高4.1	磁器(青磁) 灰白色	緑灰色の青磁釉 全面	長石釉のような貫入を意匠とする	疊付釉剥ぎ後、 鉄槌掛け	口唇部に灰落とし として使ったらし い打ち欠きがある	瀬戸・美濃系 美濃	20c 中葉

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(1)

第14図2・3は同一版だが、2は版が偏っている。第14図5は愛知県土岐市肥田産で、上限年代は1855年に求められるとされている。第15図4は底部に布目跡が付くことから久留米市両替町遺跡SE276出土のような型押しにより成形された可能性が高い。

第17図3は朝鮮半島に多く見られる器形で、朝鮮半島向けに作られた器種ではないだろうか。

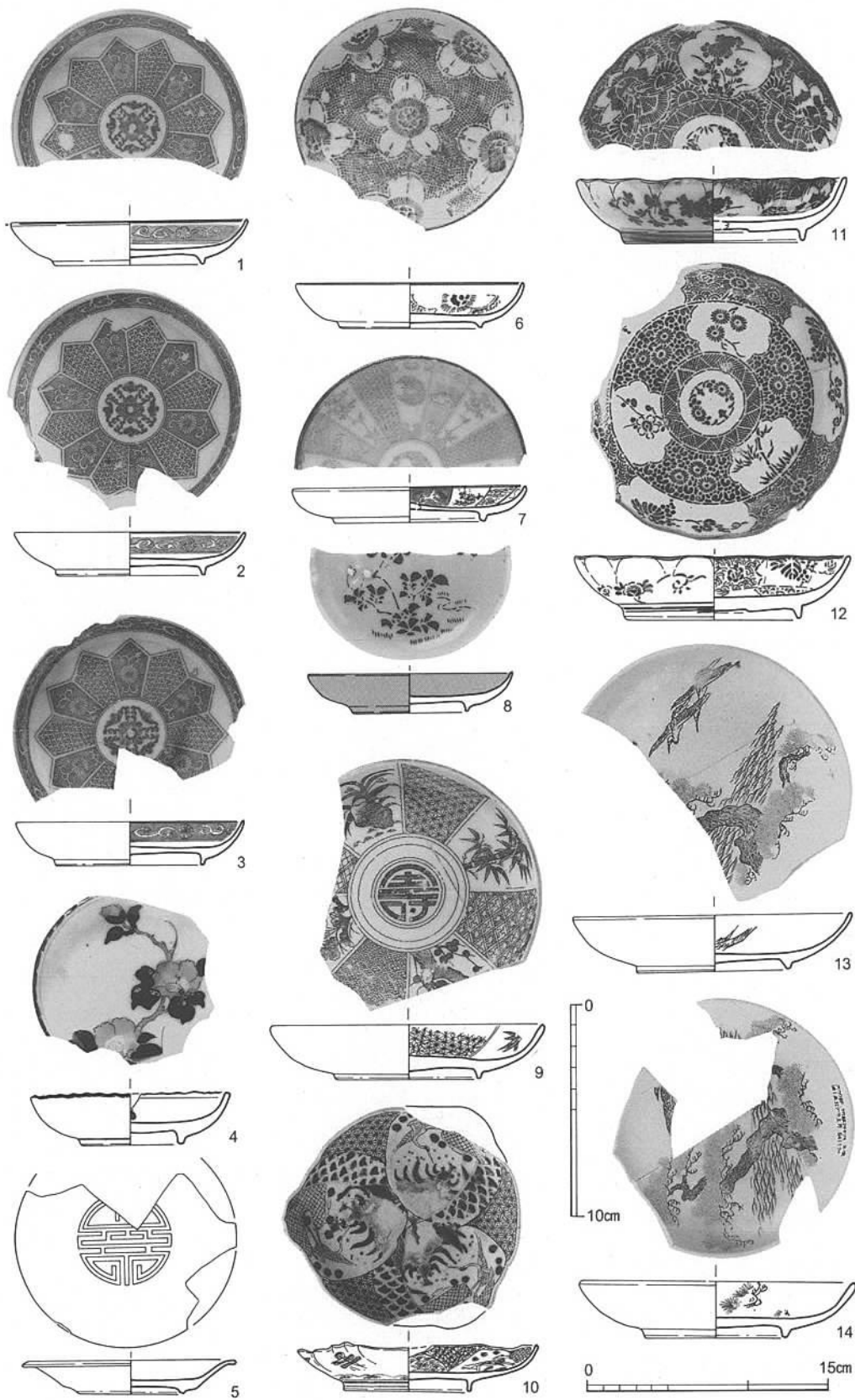
大分県竹田市由学館跡で同一器形に「大音謹製」の裏銘がある。鹿島市浜町皿山窯にも類例あり。第17図4は産地不明で、3次調査の第56図14と同一器種。文様字体に油沢があり、他に類をみない。第17図7は外底の焼き台の痕跡部分が高くなっている。焼成時のへたれのため、底部の焼き台により底部が押し上げられたものであり、本来は平底であろう。第17図8のように土師質で内面透明釉か灰釉のもの土鍋、17図9のように鉄釉が帯状に掛かり、飛びカンナ装飾のものは行平鍋の蓋。

第17図12は口縁形態が特異だが、胎土は肥前系であり、小型器種は口縁形態が異なるのかもしれない。第17図15は「肥前 鳥犀園」と染付された合子で、「鳥犀園」という漢方薬を入れた薬盒の蓋。第17図16は15の蓋と径が一致し、他に近い蓋の例がないことから、15の身と考えられる。第17図18・19と20・21は胎の特徴から蓋と身のセットになる。第17図22は肩部に別の個体の小片が貼りついているが、破片は無釉であることから、施釉後に釉薬に貼りついたものである。

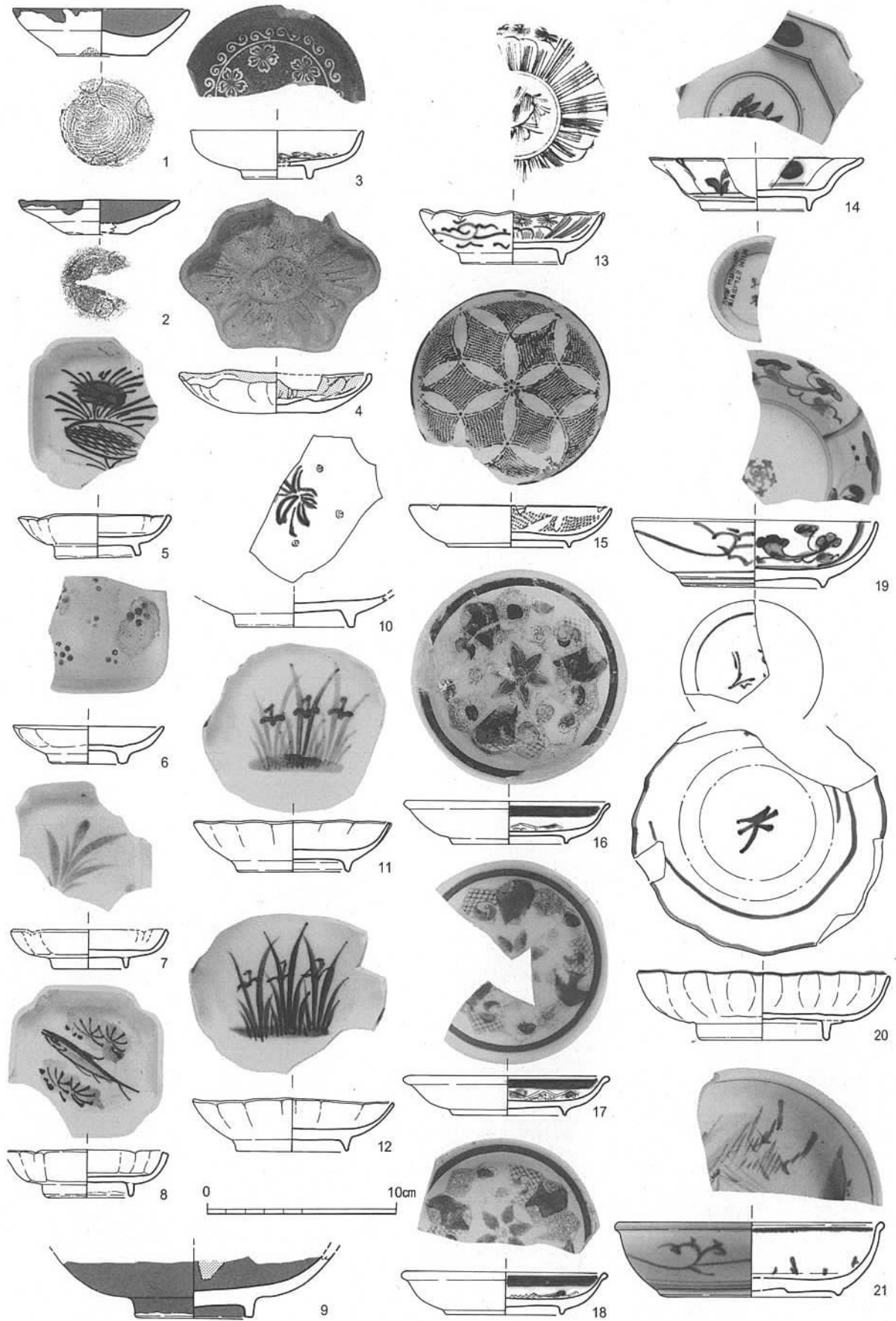
第18図7と14は接合しないが、色調や胎から同一個体の可能性が高い。第18図13の見込みは重ね焼きした個体の高台が重なっていた部分の器面が剥落している。第19図5・12のタイプの焜炉は各地で焼かれているようだが、胎土から福岡市博多瓦町焼の可能性が高い。

第20図3は久留米市東野亭焼窯跡に口縁部から胴部にかけての類例あり。

23図32はいわゆる「汽車土瓶」だが、形態が既に土瓶ではないので、ここでは「汽車茶瓶」とし



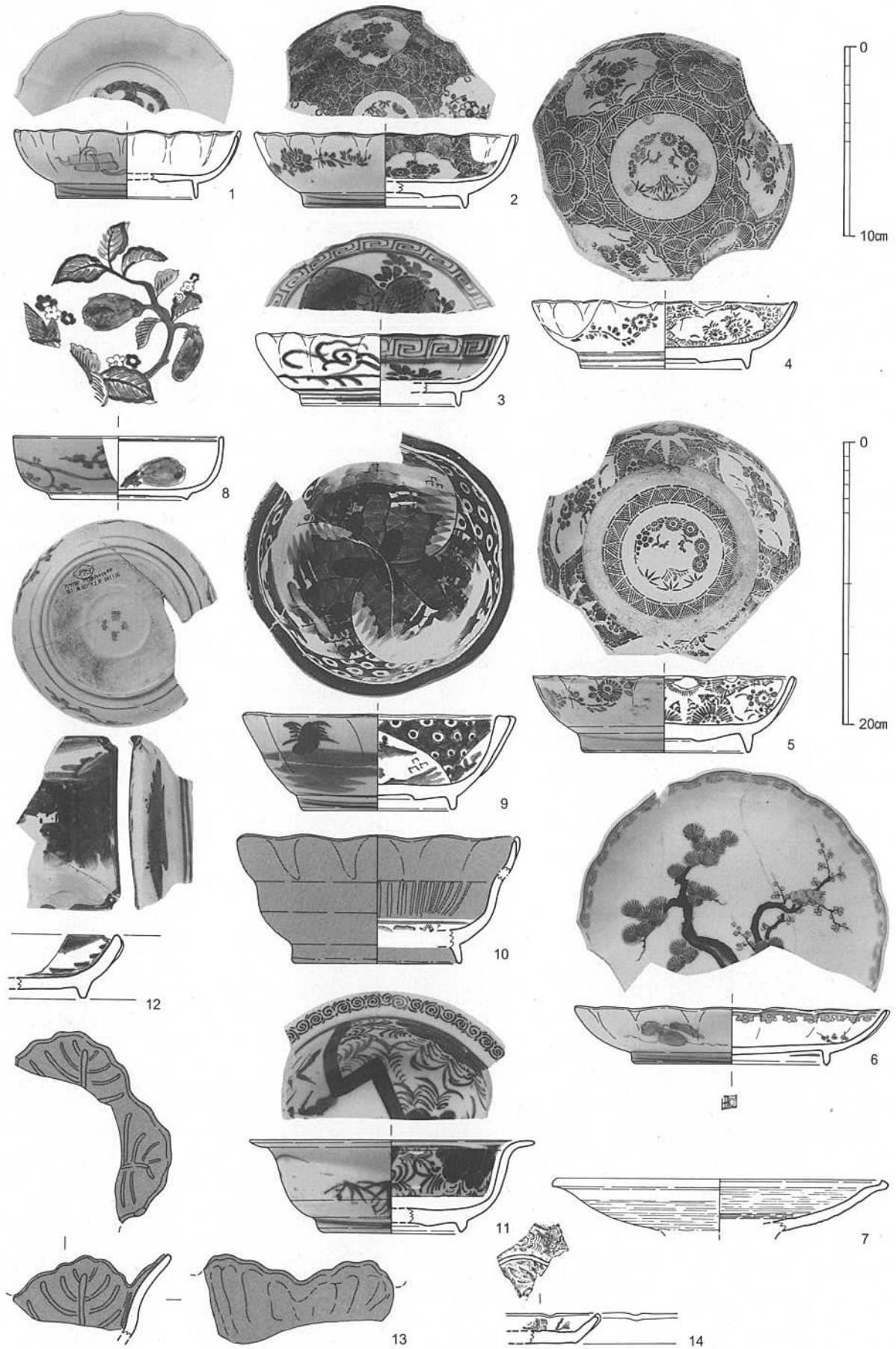
第14図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3 (10は1/4、他は1/3)



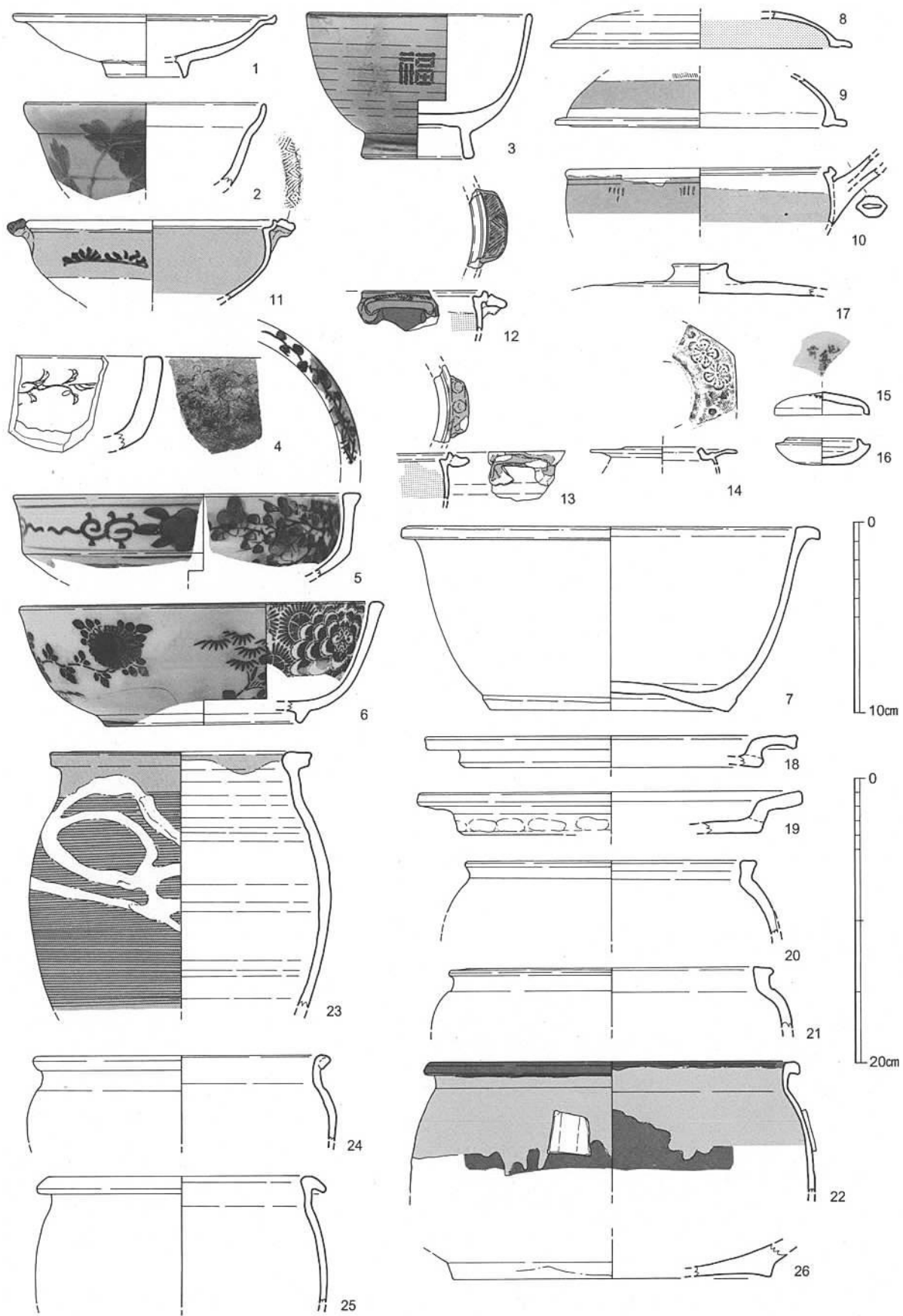
第15图 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図4 (1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴						
図版番号	通称名								
1号溝 12図13	小杯 湯呑み	口径(6.1) 高台径4.0 器高4.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による花文と草紙文	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図14	小杯 湯呑み	口径(6.2) 高台径3.2 器高4.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による菖蒲文	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	12図14・15は同一器種で、15は14の反対側の文様	肥前系 モチーフが鶴野市吉田2号窯に近い	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図15	小杯 湯呑み	口径(6.4) 高台径(3.4) 器高4.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による菖蒲文と蝶文	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	12図14・15は同一器種で、14は15の反対側の文様	肥前系 モチーフが鶴野市吉田2号窯に近い	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図16 図版5	小杯 湯呑み	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による菖蒲文	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図17	小杯 湯呑み	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	磁器(染付) 白色	焼成不良で乳白色の透明釉 全面	外面はコンニャク印判具須染付による秋草円文	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図18	小杯 端反形 湯呑み	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による草花文	畳付釉剥ぎ	東京都沙留遺跡4F-010遺構(1899年~1911年)に類例あり	瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝 12図19	小杯 端反形 湯呑み	口径(6.6) 高台径(3.0) 器高4.25	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による草花文	畳付釉剥ぎ	東京都沙留遺跡4F-010遺構(1899年~1911年)に類例あり	瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝 12図20	小杯 端反形 湯呑み	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	磁器(染付) 白色 黒色粒子 多い	青味のある透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による蕪文と玉葱文	高台外縁部釉剥ぎ	高台形状が東京都紀尾井町遺跡SR10(明治20~30年)に類例あり	肥前系	19c 第4 四半期
1号溝 12図21	小杯 端反形 湯呑み	口径(7.1) 高台径(3.6) 器高4.3	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面はクロムの銅版転写で花文と「壽」字文上絵付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝 12図22	小杯 端反形 湯呑み	口径(6.8) 高台径(3.6) 器高4.7	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は褐彩の銅版転写で大根・鼠・宝袋・宝文散らしを上絵付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 末 20c 初頭
1号溝 12図23	小杯 端反形 湯呑み	口径(6.7) 高台径2.8 器高4.5	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による口縁下に1条、胴下位に2条界線	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝 12図24	小杯 端反形 丸腰湯呑み	口径(6.8) 高台径(3.8) 器高3.9	磁器(染付) 白色 黒色粒子 多い	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による葉樹文	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c 第1 四半期
1号溝 12図25	小杯 湯呑み	高台径3.2	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による菊文と凸凹線文 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図26	小杯 端反形 丸腰湯呑み	口径(7.2) 高台径(3.4) 器高3.4	磁器(染付) 白色	青味がかった透明釉 全面	口縁部を口紅状にコバルト施釉 見込みはコバルト手描き染付による山水文 畳付はV字状に削っている	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c 第1 四半期
1号溝 12図27	小杯 端反形 湯呑み	口径(7.8) 高台径(4.0) 器高4.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写によるコバルトで牡丹文と籠目文の地文を上絵付け 高台削り出し	畳付釉剥ぎ	東京都沙留遺跡4F-010遺構(1899年~1911年)に器形の類例あり	瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 12図28	小杯 端反形 湯呑み	口径(8.2) 高台径(4.2) 器高4.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付けによる酒樽文と青海波文の地文 高台削り出し	畳付釉剥ぎ	浮羽市堂畑遺跡2区近代遺構に類例あり	瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 12図29	小杯 端反形 湯呑み	口径(8.2) 高台径(2.0) 器高4.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面手描きコバルト染付による漢詩文と口縁下に1条、高台に2条界線 内面は口縁下に3条、胴下位に1条界線 高台削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 12図30	小杯 端反形 湯呑み	口径(8.2) 高台径(2.0) 器高4.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面コバルト手描き染付による口縁下に1条、胴下位に1条界線	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 12図31	中碗	高台径(4.0)	磁器(染付) ガラス質 白色	外面錆釉、内面透明釉の掛け分け	高台削り出し	見込みに蛇の目釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 12図32	中碗	高台径(3.6)	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は赤・黄・青で花文 体部に2条、高台に1条界線を上絵付け 見込みは赤彩で削れた「寿」が山水文を上絵付け 高台削り出し	畳付釉剥ぎ	端反形と思われる	瀬戸・美濃系	19c 中葉 19c 末
1号溝 12図33 図版5	小碗 端反形	口径8.0 高台径4.2 器高5.8	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト手描き染付による雲文帯下に区画内花草文と高台に2条界線 内面は口縁部に雲文帯 見込みは菊文 器壁の薄さから高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形 大分県竹田市炭倉Ⅱ区SK1に類例あり	瀬戸・美濃系	19c 末 20c 前葉
1号溝 12図34	小碗 端反形	口径8.4 高台径3.8 器高5.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による格子文に花樹文 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 末 20c 前葉
1号溝 12図35	小碗 丸腰湯呑み	口径8.4 高台径3.1 器高4.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は呉須手描き染付による区画内に墨弾きによる唐子文と草花文 高台に2条界線 内面は口縁部に複線歯文帯	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 12図36	小碗 丸腰湯呑み	口径(9.0)	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	赤玉と界線は赤、葉文は緑、金彩の線文の3色で上絵付け 高台削り出し	不明		瀬戸・美濃系	20c 第2 四半期
1号溝 12図37 図版5	中碗	高台径(4.6)	磁器(陶胎染付・色絵) 灰色 砂粒多い	青みがかった透明釉 全面 貫入多い	外面は手描き呉須染付による胴下位に2条界線、高台に1条界線 赤絵で花文を上絵付け	畳付釉剥ぎ 砂目付着	産地不明	肥前系か	不明
1号溝 12図38	中碗	高台径3.8	磁器(染付) 灰白色	青みがかった透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による割筆で描いた二重網目文 内面は網目文 見込みは菊文文 裏銘は方形内に崩れた漏福 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	1760 1780
1号溝 12図39	中碗	高台径4.0	磁器(染付) 灰白色 粒子多い	透明釉 全面	外面は呉須手描き染付による割筆で描いた二重網目文 内面は網目文 見込みは菊文文 裏銘は崩れた漏福	畳付釉剥ぎ		肥前系	1820 1860
1号溝 12図40	小碗 端反形 端反碗	口径(9.2) 高台径(4.0) 器高4.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 発色悪く白化粧土が垂れている	外面は手描きコバルト染付による口縁下1条界線と胴下位の2条界線、高台に1条界線 内面は口縁下2条界線と胴下位の1条界線 見込みは蛇の目にアルミナ掛け 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系 波佐見か	1820 1860
1号溝 12図41	中碗 端反形 端反碗	口径(10.3) 高台径3.9 器高5.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りコバルト染付による鳥文・花文等 高台に2条界線 内面は口縁部に雲文帯 胴下位1条界線 見込みに1条界線内崩れた環状松竹文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 第3 四半期
1号溝 12図42	中碗 端反形 端反碗	口径(10.3) 高台径2.9 器高5.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りコバルト染付による袋文・花枝文等 高台に2条界線 内面は口縁部に雲文帯 胴下位1条界線 見込みに1条界線内崩れた環状松竹文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 第3 四半期
1号溝 12図43	中碗	高台径(4.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による区画線内に花文等 高台に2条界線 内面は胴下位1条界線 見込みは1条界線内崩れた山水文	畳付釉剥ぎ	端反形と思われる	肥前系	19c 第3 四半期か
1号溝 12図44	中碗 半球形 小丸碗	高台径(3.2)	陶器 黄灰白色 やや軟質 黒色粒子あり	低火度の透明釉 内面から 体部下位まで	見込みは鉄絵による崩れた山水文 外底は円刻・沈線なし	不明	京焼き風陶器	肥前系 伊万里市御経石窯	18c 前葉
1号溝 12図45	中碗 半球形 小丸碗	高台径(5.8)	陶器 ぶい灰緑色	低火度の透明釉 内面から 体部下位まで	見込みは鉄絵による崩れた山水文 外底は円刻と「清水」印	畳付に砂目跡	京焼き風陶器	肥前系 体部と高台形状が伊万里市御経石窯に近い	1660 1680
1号溝 12図46	中碗	高台径(5.8)	磁器(青磁) 灰白色	淡緑灰色の青磁釉 全面	外面は線刻による雷文 内面は沈線	不明		中国・龍泉窯	15c 後半 16c 前半

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(2)



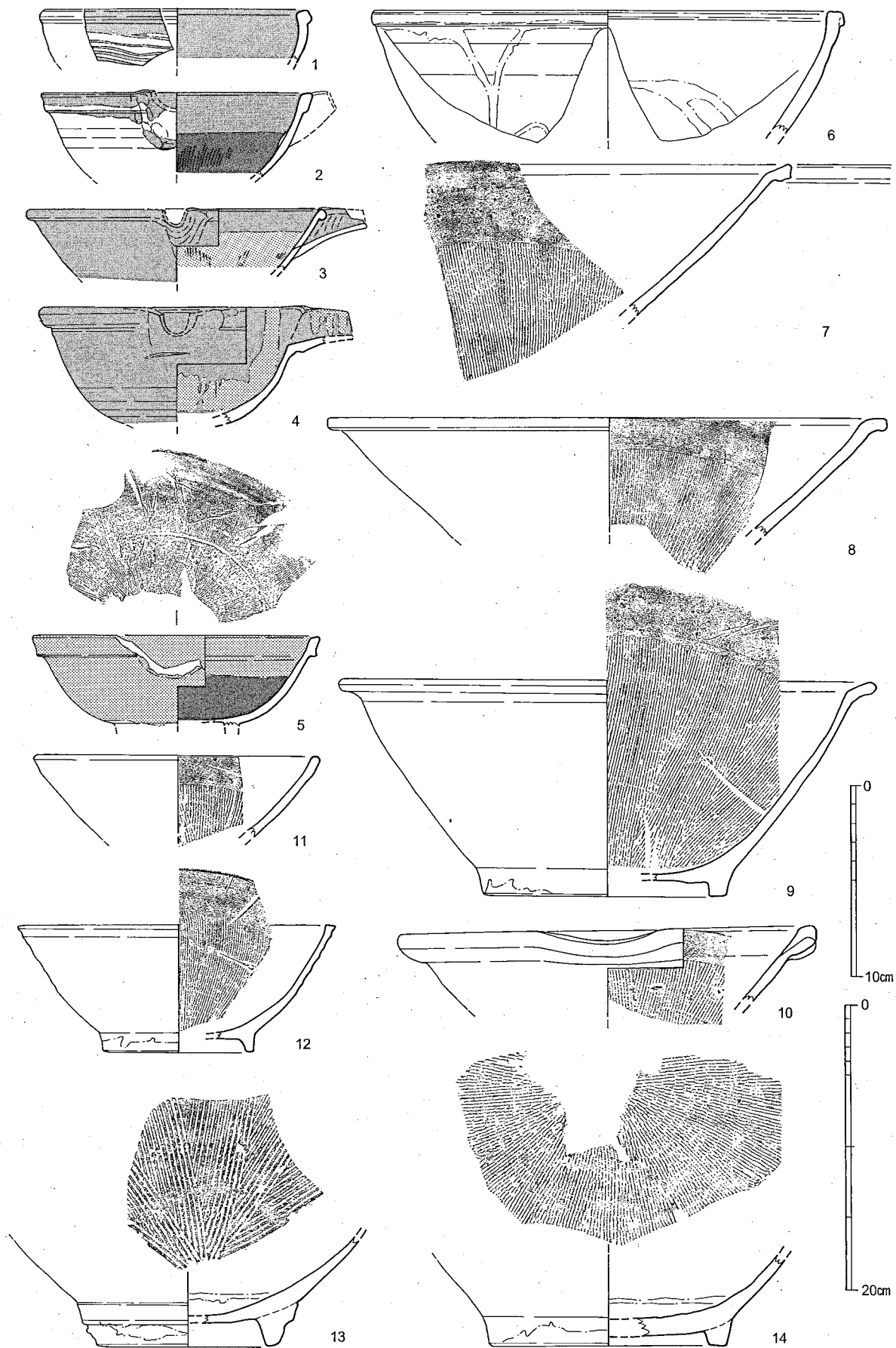
第16図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図5(1・6~8・10・14は1/4、他は1/3)



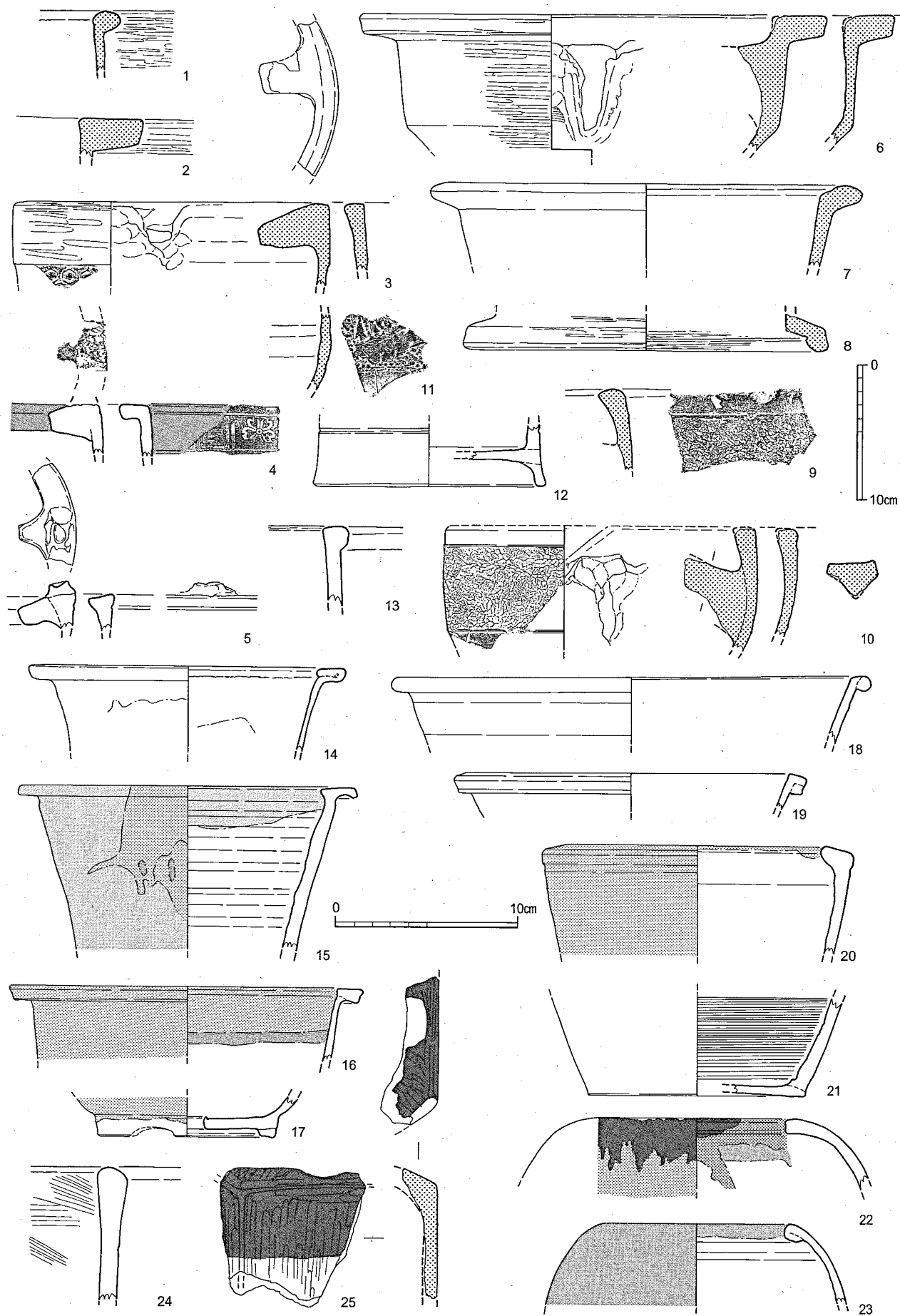
第17図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図6(4~6・9・14~17・24は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 第13図1 図版5	中碗 端反形 碗	口径(9.2) 高台径3.1 器高5.3	陶器 にぶい黄灰色	低火度の透明 釉 全面	内面は銅緑釉流し掛け 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	端反形から年代を 推定	肥前系か	19c第3四半 19c第4四半
1号溝 第13図2	中碗 端反形 碗	口径10.0 高台径4.0 器高5.6	磁器(染付) 灰白色 粒子多い	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による稲東文・鳥文 内面は胴下位1条界線 見込みは簡略化されすぎて 本来の文様がわからない 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c第3 四半期
1号溝 第13図3	中碗 端反形 碗	口径(10.4) 高台径4.0 器高5.1	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りコバルト染付による花文・唐 草文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇の目 釉剥ぎ		肥前系	19c第3 四半期
1号溝 第13図4	中碗 丸碗	口径(10.4) 高台径4.0 器高5.3	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による梅樹文と胴下位1 条・高台2条界線 梅と鳥文は赤彩、枝は茶 彩の上絵付け 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c第4 四半期
1号溝 第13図5	中碗 端反形 碗	口径(11.0) 高台径4.1 器高5.8	磁器(染付) 灰色	透明釉 全面	呉須手描き染付による二重網目文、胴界1条・ 高台1条界線 内面は口縁2条・胴下位1条 界線	畳付釉剥ぎ や や砂目が付く	器壁が厚い	肥前系 波佐見	19c第3四半 19c第4四半
1号溝 第13図6	中碗 飯碗	口径(10.8) 高台径3.9 器高5.3	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は宝文を赤彩と青彩で上絵付け 高台は 削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第2 四半期
1号溝 第13図7	中碗 飯碗	口径11.0 高台径3.8 器高5.4	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	ゴム印判コバルト染付の花文が 高台は削り 出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c第2 四半期
1号溝 第13図8	中碗 八角面取り 平碗	口径11.0 高台径3.2 器高4.6	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	内外鉄釉の流し掛け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図9	中碗 平碗	口径(11.0) 高台径3.7 器高4.8	磁器(青磁) ガラス質 白色	クロム青磁釉 全面	—	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図10	中碗か	高台径(5.6)	陶器 にぶい黄灰色～暗 灰色 精良	鉛釉 内面から 体部下位まで	高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		高取系	不明
1号溝 第13図11 図版5	中碗か香 炉・火入 れ	高台径(7.6)	陶器 半磁器質 緑がかった灰色で乳 白磁子あり	—	内外灰白色の薬灰釉を流し掛け 高台は削り 出し	不明	ケズリの凹みを残 す 胎が特徴的	不明	不明
1号溝 第13図12	中碗 飯碗	口径(12.2) 高台径3.8 器高6.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面 口縁部に厚く かかる	手描きコバルト染付による漢字3文字と正円 子の花文・朱点文の上絵付け 文字は判読で きない 高台は削り出しでカンナ削り痕残る	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第2 四半期
1号溝 第13図13	中碗 平碗	口径(12.0) 高台径4.2 器高4.7	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面の唐草文・牡丹文、内面口縁部環珞 文は型紙刷りによる、外面高台輪文は手描き による コバルト染付 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	1号溝22図9とセ ットになる	肥前系 嬉野市志田か	20c第1 四半期
1号溝 第13図14	中碗 端反形 碗	口径(10.8) 高台径4.0 器高4.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りによる桜花文・窓絵梅樹文、 手描きによる高台1条界線をコバルト染付 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇の目 釉剥ぎ		肥前系	19c第4 四半期
1号溝 第13図15	中碗	口径(10.7) 高台径(3.7) 器高4.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面の青海波文・窓絵山水文と内面口縁部 環珞文は型紙刷り、高台2条界線は手描きの コバルト染付	畳付釉剥ぎ	モチーフは塩田町 志田陶器株式会社 蔵品に類似あり	肥前系 嬉野市志田か	19c第4 四半期
1号溝 第13図16	中碗 平碗	口径(11.5) 高台径3.5 器高4.4	磁器(染付) ガラス質 白色	青味のある透明 釉 全面	外面の青海波文・窓絵文と内面口縁部環珞 文は型紙刷り、高台2条界線は手描きのコ バルト染付 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	モチーフは塩田町 志田陶器株式会社 蔵品に類似あり	肥前系 嬉野市志田か	20c第1 四半期
1号溝 第13図17	中碗 平碗	口径(12.0) 高台径(4.0) 器高4.8	磁器(染付) 灰白色 黒灰色 粒子含む	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による花葉文 内面は口縁部外面の花文と連続する葉文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1 四半期
1号溝 第13図18 図版5	中碗 平碗	口径11.7 高台径4.2 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による稲穂と案 山子文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	口唇部内面に細か い打ち欠き痕あり	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図19	中碗 平碗	口径11.6 高台径4.0 器高4.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面はゴム印判コバルト染付による稲穂文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇の目 釉剥ぎ	13図20と同一文 様の製品	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図20	中碗 平碗	口径11.7 高台径4.7 器高4.0	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による稲穂文 高台は削り出し	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇の目 釉剥ぎ	13図19と同一文 様の製品	肥前系	20c第1 四半期
1号溝 第13図21 図版5	中碗 腹張り形	高台径(4.4)	磁器(陶胎染付) 暗灰色	透明釉 全面 発色不良で灰 色がかかる	外面は手描き呉須染付による1条界線だが、 発色不良で褐色を呈する	畳付釉剥ぎ や や砂目が付く	波佐見の陶胎染付 とは高台の形状が 異なる	肥前系 産地不明	不明
1号溝 第13図22	中碗 朝顔形	口径(11.0)	陶器 黄白色 軟質	低火度の透明 釉 全面 貫 入あり	体部に小さな稜が入る	不明		肥前系か	不明
1号溝 第13図23 図版5	小碗 筋形 面取り 長筒形丸腹 器	口径(6.3) 高台径3.9 器高7.0	磁器(青磁) 灰色	長石釉の青磁 釉(貫入志野 釉) 全面	内外貫入を意匠とする	畳付釉剥ぎ後鉄 染		産地不明	20c第2 四半期
1号溝 第13図24	小皿	口径(7.8) 高台径(4.4) 器高1.9	磁器(染付) 灰白色 泥入物 多い	青味のある透明 釉 全面	内面は手描き呉須染付による山水文 高台は 削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c第3四半 19c第4四半
1号溝 第13図25	小皿	高台径4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による胴部文様は不明、 高台に1条界線 見込みに龍文 高台は削り 出し 裏銘「成化年製」	畳付釉剥ぎ		肥前系	18c後半 19c後半
1号溝 第13図26	小皿 輪花形	高台径4.4	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高 台貼り付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	1800 1860
1号溝 第13図27	小皿 輪花形	高台径4.8	磁器(白磁) 白色	青味がかつた 透明釉 全面 貫入あり	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高 台貼り付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	1800 1860
1号溝 第13図28	小皿 輪花形	口径(9.0) 高台径5.4 器高2.2	磁器(染付) ガラス質 白色	青味のある透明 釉 全面	型打ちによる輪花形成形後、ろくろ成形の高 台貼り付け 見込みは手描き呉須染付による 山水文の上に金彩の上絵付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c第3四半 19c第4四半
1号溝 第13図29	小皿	口径(9.5) 高台径4.0 器高3.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	内面は手描き呉須染付による鳥文 見込みに 井形文	畳付釉剥ぎ 見込 みの蛇の目釉剥ぎ 部にアルミナ塗布		肥前系 波佐見か	19c中葉 19c後半
1号溝 第13図30	小皿	口径(9.1) 高台径3.2 器高2.0	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による2条界線と鳥文か	畳付釉剥ぎ 見込 みの蛇の目釉剥ぎ 部にアルミナ塗布	蛇の目釉剥ぎ部に重 ね焼きした個体の畳 付部の痕跡あり	肥前系	19c中葉 19c後半
1号溝 第13図31	小皿	口径(10.2) 高台径(5.2) 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	内面は手描き呉須染付による口縁部と胴下位 に4条界線と簡略化された楓文 見込みは草 文か	畳付釉剥ぎ 見込 みの蛇の目釉剥 ぎ	発色悪く呉須が暗 緑色を呈する	肥前系	19c中葉 19c後半
1号溝 第13図32	小皿	口径(8.5) 高台径3.8 器高2.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による崩れた唐草文か 内面から見込みは格子文	畳付釉剥ぎ 見 込みは蛇の目釉 剥ぎ	蛇の目釉剥ぎ部に重 ね焼きした個体の畳 付部の痕跡あり	肥前系	19c中葉 19c後半

表4 2次調査1号溝遺構出土土器・陶磁器観察表(3)



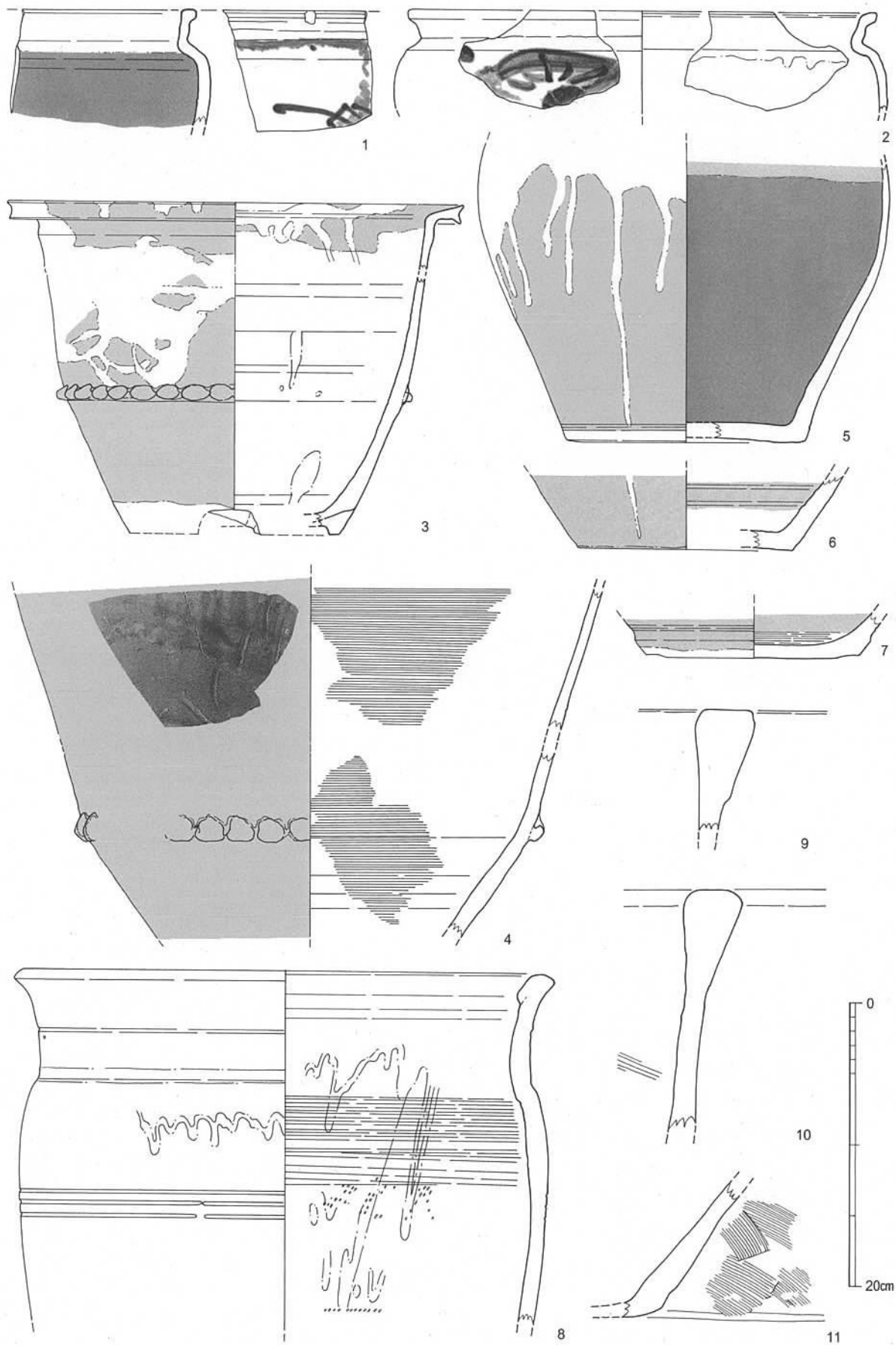
第18図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図7 (10は1/3、他は1/4)



第19図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図8 (25は1/3、他は1/4)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	量目(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 第13図33	小皿	口径(9.6) 高台径5.0 器高2.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	内面は手描き呉須染付による2条の界線内に鳥居と樹文	見込みの蛇の目軸割き部	口唇部に4箇所等間隔に打ち欠きがあり、1つは黒染している	肥前系	19c 中葉 19c 後半
1号溝 第13図34	五寸皿	口径(12.5) 高台径5.6 器高4.7	磁器(染付) 灰白色	発色悪く乳白色の透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による簡略化された宝文か 内面は1条と2条の界線内に鳥居と樹文 見込みはモチーフ不明 口縁玉 蛇の目高台	蛇の目高台は軸割きしてない 壺付軸割きのみ	高台の器壁が厚い	肥前系か	19c 中葉 19c 後半
1号溝 第13図35 図版5	小皿	口径(12.0) 高台径7.6 器高1.3	土師器 黄白色 精良 金雲母なし	—	見込みの線描きは黒、赤で彩色している上絵でモチーフ不明 高台削り出し	不明		浦池焼か	不明
1号溝 第14図1	小皿	口径11.0 高台径7.0 器高2.1	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部黄彩による口紅状施釉 銅版転写コバルト染付による内面口縁部の唐唐草文帯、見込みの剣菱繋ぎ区画充填文と中央に若松文	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期
1号溝 第14図2	小皿	口径11.0 高台径7.0 器高2.1	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部黄彩による口紅状施釉 銅版転写コバルト染付による内面口縁部の唐唐草文帯、見込みの剣菱繋ぎ区画充填文と中央に若松文	壺付軸割き	版がずれている	瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期
1号溝 第14図3	小皿	口径11.0 高台径7.0 器高2.1	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部黄彩による口紅状施釉 銅版転写コバルト染付による内面口縁部の唐唐草文帯、見込みの剣菱繋ぎ区画充填文と中央に若松文	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期
1号溝 第14図4	小皿	口径(9.3) 高台径4.8 器高2.4	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部銅軸の口紅装飾(口筒・縁筒) 外面胴下位の1条界線、内面口縁部の1条界線は手描きコバルト染付 見込みは銅版転写クロム染付にコバルト・正円子・帯彩の上絵付けによる帯文	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期
1号溝 第14図5	小皿 端反形 壽文皿	口径(10.0) 高台径4.9 器高1.7	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みは型打ち成形で鎌字「壽」文の除刻を施す 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		美濃系	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 第14図6	小皿	口径10.7 高台径6.7 器高2.1	磁器(染付) 白色 白色粒子あり	透明釉 全面	口唇部は口紅状にコバルト染付 内面は型紙刷りコバルト染付の桜花散らし	壺付軸割き	モチーフが愛知県 勝川遺跡SK100 下層に類似あり	肥前系	19c 第4四半期 20c 第1四半期
1号溝 第14図7	小皿	口径11.0 高台径7.2 器高1.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部は口紅状に黄彩施釉 内面から見込みは銅版転写の黄彩による区画充填文と環状花文の上絵付け	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期
1号溝 第14図8	小皿	口径(9.5) 高台径(4.3) 器高1.8	磁器(青磁) 全面 高台内のみ透明釉	クロム青磁釉 全面 高台内のみ透明釉	型紙刷りクロム染付による花鳥文の上絵付けとイッチンによる花卉の上絵付け	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第3四半期 19c 第4四半期
1号溝 第14図9	小皿	口径(12.8) 高台径(6.9) 器高2.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部銅軸の口紅装飾(口筒・縁筒) 見込みは銅版刷りクロム染付による区画充填文・界線内「壽」字文 高台削り出し	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第3四半期 19c 第4四半期
1号溝 第14図10	中皿 菱形皿	口径(12.8) 高台径(6.9) 器高2.6	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付により体部下位の唐草文・2条界線と赤彩による帯文散らしの上絵付け 内面から見込みは型紙刷り赤彩による唐草文 区画内は手描きコバルト染付による唐草文 赤・緑・黄・黒・紫彩による輪・鳥などの上絵付け 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 第3四半期 20c 第1四半期
1号溝 第14図11	中皿 輪花形 並皿	口径(12.8) 高台径(8.6) 器高3.0	磁器(染付) 白色 白色粒子あり	透明釉 全面	外面の唐草文、内面の口唇部、窓内の草花文、アザシ(白)された帯文、見込みの縁筒部帯内に環状松竹梅は型紙刷り 外面口唇部は口紅状施釉 体部下位1条・高台2条界線は手描きによるコバルト呉須染付	壺付軸割き 蛇の目高台 壺付から外輪部まで軸割き		肥前系 武雄市皿山窯に類似あり	19c 第4四半期 20c 第1四半期
1号溝 第14図12	中皿 輪花形 並皿	口径(13.0) 高台径8.4 器高3.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面の唐草文、内面の窓内松竹梅文、菊花文、見込みの縁筒部帯内に環状松竹梅は型紙刷り 外面口唇部は口紅状施釉 体部下位1条・高台2条界線はコバルト染付	壺付軸割き 蛇の目高台 壺付から外輪部まで軸割き		肥前系	19c 第3四半期 20c 第1四半期
1号溝 第14図13	中皿	口径(13.0) 高台径7.2 器高2.7	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みはコバルトで海・鳥・樹、クロムで松葉を銅版転写 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 第4四半期 20c 第1四半期
1号溝 第14図14	中皿	口径(13.0) 高台径7.2 器高2.7	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みはコバルトで海・鳥・樹、クロムで松葉を銅版転写 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 第4四半期 20c 第1四半期
1号溝 第15図1	小皿	口径(9.3) 底径4.8 器高2.5	陶器 茶褐色	鉄軸を内面から外面口縁部までかける	底部糸切り	胎土目跡あり 見込みに灰被り	灯明皿としての使用痕なし	肥前系 武雄市壺屋B窯に類似あり	不明
1号溝 第15図2 図版5	小皿	口径(8.3) 底径(3.1) 器高1.8	陶器 茶褐色	鉄軸を内面から外面口縁部までかける 発色不良発色悪い	底部糸切り	胎土目跡あり	灯明皿としての使用痕なし	肥前系 武雄市壺屋B窯に類似あり	不明
1号溝 第15図3	小皿 三鳥手	口径(9.2) 底径(2.5) 器高3.8	陶器 橙褐色	鉄軸 全面 細かい貫入あり	外面白化粧土の象嵌による桜花文と蕨手文	壺付軸割き		肥前系か	19c 中葉
1号溝 第15図4 図版5	小皿 菱形皿 手塩皿	長軸10.3 短軸7.8 器高2.2	土師器 橙褐色	内面から外面口縁部まで白化粧土	布目跡が残ることから、布を架けて型押し成形している。口縁部はカット 見込みは型押し成形による花文	不明		在地系	不明
1号溝 第15図5	小皿 方形 手塩皿	長軸(8.3) 短軸(3.1) 器高1.8	磁器(染付) 白色	青味のある透明釉 全面	見込みはコバルト手描き染付による花文	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図6	小皿 方形 手塩皿	長軸(7.8) 短軸(7.8) 器高2.0	磁器(染付) 白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉 全面	見込みは手描き呉須染付による崩れた星梅鉢文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図7	小皿 方形 手塩皿	長軸(8.3) 短軸(3.1) 器高1.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手描き呉須染付による草葉文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図8 図版5	小皿 方形 手塩皿	長軸(8.3) 短軸(3.1) 器高1.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手描きコバルト染付による魚文・水草文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図9	五寸皿	高台径(6.2)	陶器 にぶい黄灰～暗灰色	海鼠釉 全面	内外に灰白色の薬灰釉の上掛け	壺付軸割き		小石原系 釉調は東峰村火口谷1号窯に近い	不明
1号溝 第15図10 図版5	中皿	高台径(6.4)	磁器(染付) 黄灰色 粒子多く陶胎に近い 貫入あり	透明釉 全面 発色不良	見込みは手描き呉須染付による紅葉文 外底は糸切り	壺付軸割き 見込みの軸面に布目跡あり、ハリ目跡が切る	見込み文様は徳野町吉田1号3094-1遺跡に類似あり	肥前系 産地不明	19c 中葉
1号溝 第15図11	小皿 輪花形	口径(10.6) 高台径6.0 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手描きコバルト染付により葛蒲文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図12	小皿 輪花形	口径(10.6) 高台径5.9 器高2.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは手描きコバルト染付により葛蒲文 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図13	小皿 輪花形	口径(9.8) 高台径7.4 器高2.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面の崩れた唐草文、内面の細線による花葉文は手描き呉須染付 見込みの2条界線内山水文は手描き 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、削り出し	壺付軸割き		肥前系	19c 中葉
1号溝 第15図14	小皿 八角形	口径(11.2) 高台径(6.0) 器高2.8	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面の区画区内に花文、内面の2条界線内草花文、裏銘の1条界線内「□□年製」は手描き呉須染付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、削り出し	壺付軸割き	「□□年製」は「成化年製」の可能性が高い	肥前系 字体が有田町黒牟田新窯に近い	19c 前葉か
1号溝 第15図15	小皿	口径10.7 高台径6.5 器高2.1	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部に口紅状のコバルト施釉 内面は型紙刷りコバルト染付により点文を地文として破線による花文	壺付軸割き	灰落として使用した打ち欠きが口縁部に見られ、黒染している	瀬戸・美濃系	19c 後葉
1号溝 第15図16	小皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面口縁下に赤色帯を上絵付け 見込みは地文を赤彩の銅版転写、その上に赤・黄・黒・緑で上絵付け	壺付軸割き		瀬戸・美濃系	19c 第4四半期 20c 第2四半期

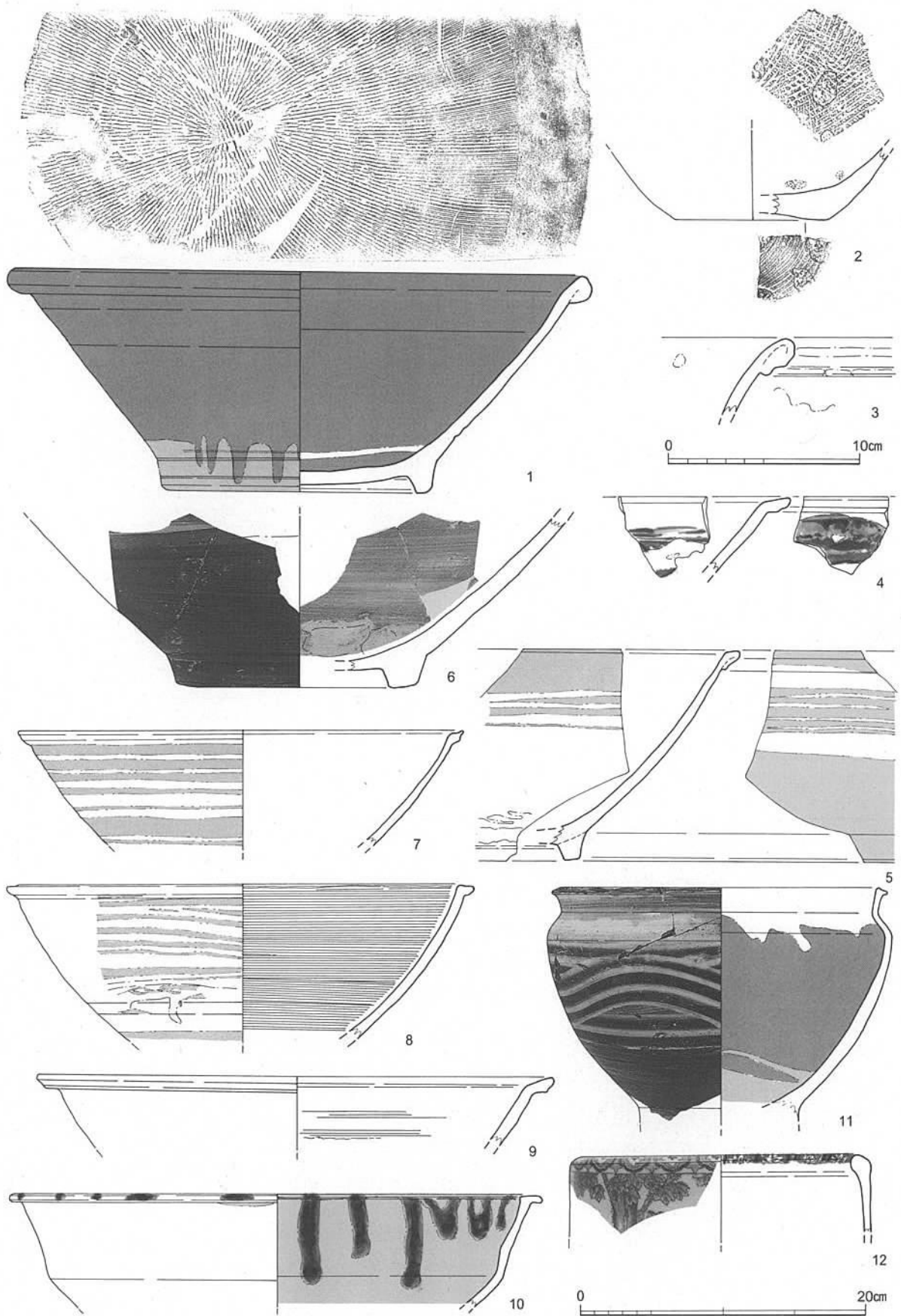
表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(4)



第20图 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図9 (1/4)

遺構名 挿図番号	器種 形状	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 第15図17	小皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面口縁下に赤色帯を上絵付け 見込みは地文を赤彩の銅版転写、その上に赤・黄・黒・緑で上絵付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c第4四半期 20c第2四半期
1号溝 第15図18	小皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面口縁下に赤色帯を上絵付け 見込みは地文を赤彩の銅版転写、その上に赤・黄・黒・緑で上絵付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c第4四半期 20c第2四半期
1号溝 第15図19	小皿 なます皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.2	磁器(染付) 灰白色	磁器(染付) 青味のある透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による崩れた唐草文 体部下位に1条、高台に2条界線 内面の区画内に松文・花文 見込みはコニヤク印料による五弁花文 裏銘は1条界線内「大明年製」	畳付釉剥ぎ 砂目付着	裏銘の字体が波佐見町木場山窯に近い	肥前系 波佐見	1680 1740
1号溝 第15図20	小皿 輪花形 なます皿	口径13.4 高台径7.0 器高3.5	磁器(染付) ガラス質 白色	磁器(染付) 透明釉 全面 釉の沸騰した痕跡あり	外面の体部下位は3段のケズリ痕 手描き呉須染付による内面の歪んだ界線1条 口縁部に口紅状の呉須施釉 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け後、削り出し	畳付釉剥ぎ	崩れた山水文か	肥前系	19c 後葉
1号溝 第15図21	五寸皿 玉縁口縁	口径(14.2) 高台径3.9 器高3.9	磁器(染付) 灰白色	磁器(染付) 青のある透明釉 全面	手描き呉須染付による内面唐草文と体部下位に1条、高台に2条界線、内面口縁下に1条界線 見込み山水文 蛇の目高台	蛇の目高台～畳付釉剥ぎ 砂目付着	器形が山水文が堀野市吉田1号3094-1遺跡に近い	肥前系	1780 1860
1号溝 第16図1	五寸皿 輪花形 なます皿	口径(16.0) 高台径10.1 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により、外面の体部に宝文、高台に2条界線、内面の口唇部に1条界線、見込みの2条界線内に龍文 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	畳付から外輪部まで釉剥ぎ		肥前系	19c 第3 四半期か
1号溝 第16図2	小皿 輪花形 なます皿	口径(13.0) 高台径7.2 器高2.7	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面体部の唐草文、内面の青海波地文と窓絵、見込みの裏線唐文帯内に環状松竹梅文は型紙刷り 外面体部1条、高台2条界線、内面の口唇部1条界線は手描きコバルト染付 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	畳付から外輪部まで釉剥ぎ		肥前系 波佐見か	19c第4四半期 20c第1四半期
1号溝 第16図3	五寸皿 輪花形 なます皿	口径(16.0) 高台径10.1 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面体部の唐草文、胴下位の1条、高台の2条界線、内面口縁部の雷文帯は手描きコバルト染付 見込みの山水文は型紙刷りコバルト染付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	畳付から外輪部まで釉剥ぎ 蛇の目高台	志田西山6号窯に器形と裏文様と雷文の類似あり	肥前系	19c第3四半期 19c第4四半期
1号溝 第16図4	五寸皿 輪花形 なます皿	口径14.0 高台径9.0 器高3.6	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面体部の唐草文、内面は牡丹花地文と窓絵、見込みの裏線唐文帯内に環状松竹梅文は型紙刷り 外面体部1条、高台2条界線、内面口唇部1条界線は手描きコバルト染付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	蛇の目高台 畳付から外輪部まで釉剥ぎ 見込みにハリ目跡	環状松竹梅文は浜町山窯に類似ある	肥前系 鹿島市浜町山窯か	19c第4四半期 20c第1四半期
1号溝 第16図5	五寸皿 輪花形 なます皿	口径13.8 高台径3.8 器高4.0	磁器(染付) 灰白色	発色悪く乳白色の透明釉 全面	外面体部の唐草文と内面唐文帯と窓絵、見込みの裏線唐文帯内に環状松竹梅文は型紙刷り 外面体部1条、高台2条界線、内面口唇部1条界線は手描きコバルト染付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	高台は畳付のみ釉剥ぎ 見込みに蛇の目釉剥ぎ	型紙文様が2号溝25図5に近い	肥前系	19c第4四半期 20c第1四半期
1号溝 第16図6	五寸皿 輪花形 並皿	口径(16.0) 高台径10.1 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による外面体部に花文、高台に2条界線 内面口唇部に1条界線と蓮文様 見込みの裏線唐文はコバルト、黒線はウラニウムによる2色手描き染付 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け 裏銘は棒内に「青」字	畳付釉剥ぎ	裏銘は青木兄弟商會の明治～大正のもの	肥前系 右田町青木兄弟商會窯	19c第4四半期 20c第2四半期
1号溝 第16図7	中皿	口径(22.8)	陶器 暗灰～灰色 軟質 粗放	油沢をもち黄茶褐色を呈する胎釉 高台のみ露胎	カキ目の窪みに釉が厚く溜まるので刷毛目状に見える 内面は釉拭き取りで鉄葉を下に掛けていることがわかる	見込みは蛇の目釉拭き取りでアルミナを厚く塗布	特徴的な胎だが肥前系に近い 鉄葉も灰を混じるが厚い	小石原系	不明
1号溝 第16図8	中鉢	口径14.7 高台径4.4 器高5.5	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により、体部に唐草文 体部下位1条、高台2条界線 内面に口唇部1条界線と茄子 内面は金彩で輪郭や葉脈を線描きし、若葉の緑・黒、花卉の赤は上絵付け 裏銘は手描き呉須染付により「富貴長壽」	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	良品で5/6残存	肥前系	1810 1860
1号溝 第16図9	中鉢 輪花形	口径14.0 高台径8.5 器高5.1	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により、外面体部に山水文、体部下位1条、高台に2条界線 内面はダグミによる輪文を施す区画と帆掛船を含む松山水文パターンを振り放射射状に3連続 口唇部は口紅状施釉 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	5/6残存	肥前系	19c第4四半期 20c第2四半期
1号溝 第16図10	中鉢 輪花形	口径(20.0) 高台径12.0 器高9.0	磁器(染付青磁) 白色	見込みのみ透明釉でそれ以外は淡緑色を呈する青磁釉 全面	口縁部は型打ち成形により花卉状 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り付け 1条界線内の文様があるが不明で呉須手描き染付	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 第16図11	中鉢	口径14.0 高台径8.5 器高5.1	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面体部の竹笹文、体部下位の1条、高台の2条界線、内面2区画内の異なる草葉文は手描きコバルト染付 口唇部の連続陶文は型紙刷りコバルト染付 蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ			肥前系	19c第4四半期 20c第2四半期
1号溝 第16図12	小皿 方形 手皿皿	短軸9.2 器高3.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面体部の山水文、高台の2条界線、内面・見込みの山水文は手描き呉須染付 口唇部は口紅状に呉須施釉 方形高台内に布目跡があるので、余切り成形後の付け高台			肥前系	不明
1号溝 第16図13	小鉢 葉形 向付・割鉢	反転不能	磁器(青磁) 灰白色	緑色を呈する青磁釉 全面	体部外面は型打ち成形による葉脈印刻の葉形	不明	九州陶磁資料館蔵 柴田コレクションに類似ある良品	肥前系	1740 1790
1号溝 第16図14 図版5	小皿 木瓜形? 手皿皿	器高2.1	陶器 軟質 灰白色	見込みは透明釉 体部は緑釉 底部は黄釉	内面は余切り成形による花文の陽刻 見込みは2条界線内に葉文の陽刻	不明		瀬戸・美濃系	不明
1号溝 第17図1	中皿	口径(18.0) 高台径5.8 器高4.4	陶器 軟質 暗灰色～橙灰色 白色粒子あり	暗緑灰色を呈する灰釉を体部のみ	内面は薬灰釉のイッチン掛け 高台削り出し	高台にアルミナ付着 見込みに蛇の目釉剥ぎ		高取系か	不明
1号溝 第17図2	中鉢	口径(16.4)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面はコバルト手描き染付けによる三つ葉文、葉脈はクロム染付け	口縁部に釉剥ぎがないことから蓋を被せて焼成していない		肥前系	19c末 20c前半
1号溝 第17図3	中鉢	口径(16.4)	磁器(染付) 白色	乳白色を呈する透明釉 全面	外面は界線は手描き、「福」字は型紙刷りのコバルト染付 「壽」文と花文は型紙刷りの灰色染付 高台削り出し	畳付釉剥ぎ	朝鮮半島向けの輸出品として製作されたもの	肥前系 鹿島市浜町山窯に類似がある	19c末 20c前半
1号溝 第17図4 図版5	中鉢	反転不能	陶器 軟質 色 におい灰色	油沢をもつ黄釉 全面	鉄絵?による花文	不明	3次調査1号溝56図14と同一型式	産地不明	不明
1号溝 第17図5	中鉢	口径(18.0)	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付により唐花草文、口縁下1条・中位2条界線、内面は口唇部は唐花草 花樹文	不明		肥前系	不明
1号溝 第17図6	中鉢	口径(19.0) 高台径10.3 器高6.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型紙刷りによる外面の菊文と竹文は、内面の牡丹文・花文 高台の2条界線は手描き 口唇部に口紅状施釉 コバルト染付 蛇の目高台	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ		肥前系	19c第4四半期 19c第4四半期
1号溝 第17図7	中鉢	口径(27.2) 高台径(16.8) 器高12.8	陶器 黄橙～黒灰色	茶褐色の胎釉 全面	——	底部・口唇部釉剥ぎ 底部中央に焼き台の痕跡あり	上げ底なのは焼き台のため	小石原系	不明

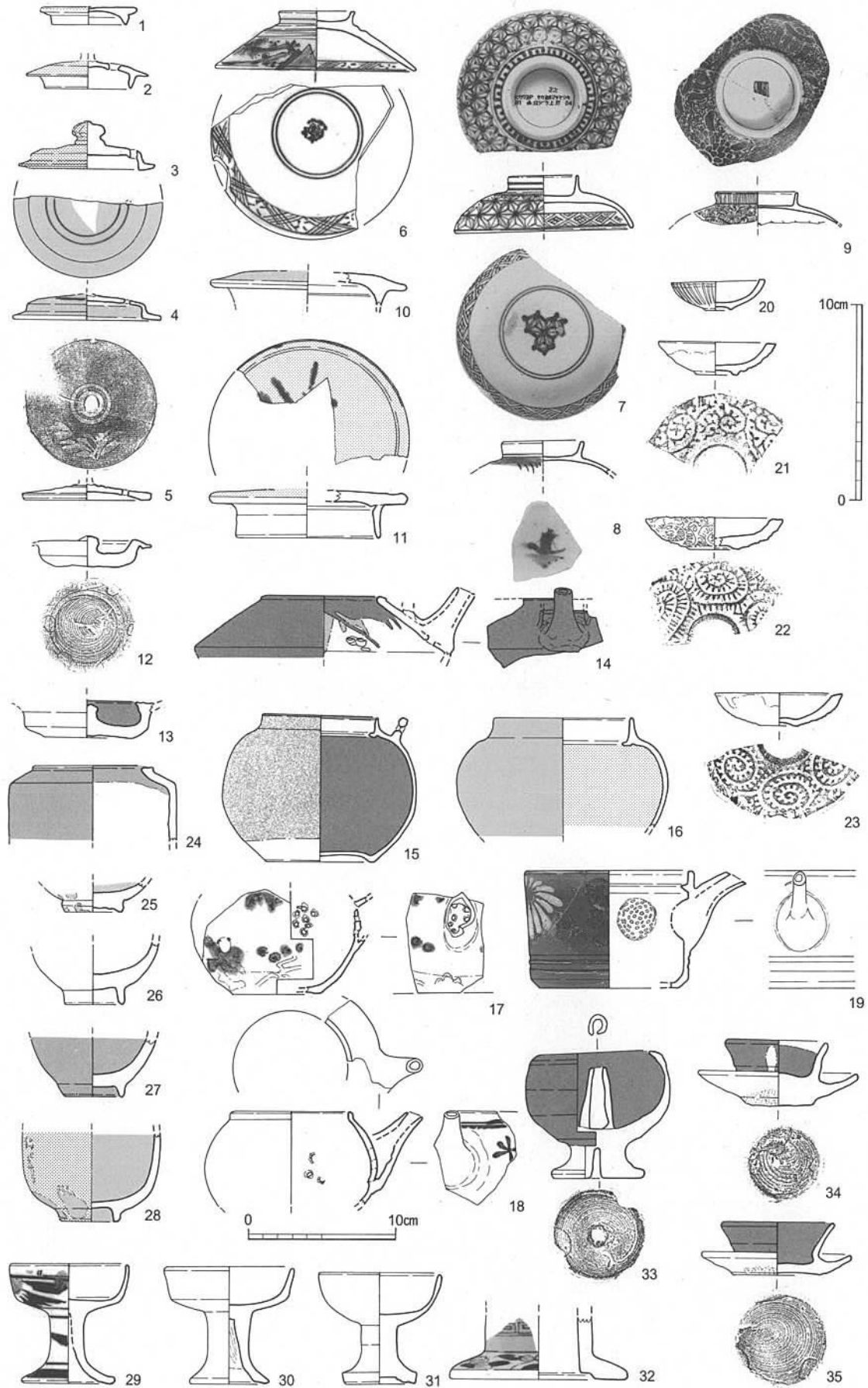
表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(5)



第21図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図10(3は1/3、他は1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 1号溝 17図8	土鍋蓋	口径(21.0)	陶器 土師質 黄白～黄褐色 軟質精良 金雲母あり	発色の悪い低 火度の透明釉 を内面のみ	—	口唇部釉剥ぎ	外面に煤付着	在地系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図9	行平鍋蓋	口径(15.2)	陶器 土師質 黄白～黄褐色 軟質精良 金雲母あり	低火度の透明 釉を内面のみ	外面中位に鉄葉を掛け、上位に飛びカンナ	口縁部釉剥ぎ		在地系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図10	行平鍋	口径(19.0)	陶器 灰白色	外面は鉄葉 把手部 は鉄軸 内面は黄緑 色を呈する灰釉	外面上位に飛びカンナ	受け部釉剥ぎ	把手の文様は欠損 のため判別できない	産地不明	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図11	土鍋	口径(17.1)	陶器 土師質 黄白～黄褐色 軟質精良 金雲母あり	暗黄灰色を呈する 灰釉を内面と外面 中位 把手は鉄軸	外面に鉄絵の松絵	受け部釉剥ぎ	底部と把手下面、 口縁部に煤付着	在地系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図12	土鍋	反転不能	陶器 土師質 橙白色 軟質精良 金雲母あり	黄灰色を呈する 灰釉を内面 把手は鉄軸	型押しで成形された把手を貼付け	受け部釉剥ぎ	把手下面に煤付着	在地系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図13	土鍋	反転不能	陶器 土師質 黄白～黄褐色 軟質精良 金雲母あり	黄褐色を呈する灰 釉を内面 把手は黒 褐色を呈する胎軸	型押しで成形された把手を貼付け 上面にオ サエ痕あり	受け部釉剥ぎ	把手下面に煤付着	在地系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図14	杯受台	口径(8.0) 鏝径(7.7)	磁器(白磁) 白	乳白色を呈する 透明釉を外 面のみ	鏝上面に型押し成形による桜文の陽刻	不明		肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 17図15	合子蓋	口径(5.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	天井部に「肥前 鳥犀園」の呉須染付	裾部釉剥ぎ	「肥前 鳥犀園」 の字体が有田町年 木谷1号窯に近い	肥前系 有田町年木谷1 号窯か	1778 19c中頃
1号溝 17図16	合子	口径3.9 底径3.0 器高1.4	磁器(染付) 白色 黒色粒 子あり	青味のある透 明釉 全面	—	底部・受け部釉 剥ぎ	「肥前 鳥犀園」 合子の身だらう	肥前系	18c中葉 19c中頃
1号溝 17図17	壺蓋	つまみ径2.8	土師器 褐色 軟質精良 混入物あり	—	外面回転ナデ、内面ヨコナデ つまみ貼り付 け後、丁寧なナデ	不明		在地系	不明
1号溝 17図18	壺蓋	口径(26.0) 底径(21.2) 器高2.2	土師器 明褐色～黄灰色 金雲母等混入物あり	—	内外ヨコナデ	不明	17図20・21の壺タ イブの蓋か	在地系	不明
1号溝 17図19	壺蓋	口径(26.0) 底径(21.2) 器高2.9	土師器 黄褐色 金雲母等混入物あり	—	内外ヨコナデ オサエ痕が残る	不明	17図20・21の壺タ イブの蓋か	在地系	不明
1号溝 17図20	中壺	口径(20.4)	土師器 黄褐色 金雲母等混入物あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号溝 17図21	中壺	口径(22.6)	土師器 灰黄褐色 金雲母等混入物あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号溝 17図22	中壺	口径(22.6) 最大径(28.3)	陶器 にぶい黄灰白色 軟質 精良	鉄軸を全面削けた上 に外面から内面口縁部 まで鉄軸を直し掛け	口唇部は鉛釉ふき取り		肩部に別個体の破 片が融着している	高取系か小石原 系	不明
1号溝 17図23	中壺	口径(18.1) 最大径(21.0)	陶器 黒灰色 白色粒子あり	鉄軸を全面削けた上 に外面から内面口縁 部まで鉄軸を直し掛	カキ目の上に薬灰釉流し掛け	口唇部は鉄軸ふき 取りし、その上に アルミナ塗布		高取系	不明
1号溝 17図24	小甕	口径(14.4)	陶器 赤茶褐色	鉄軸 全面	外面肩部にカキ目 内面ヨコナデ 口縁部玉 縁状	不明		肥前系	不明
1号溝 17図25	中甕	口径(20.0)	陶器 にぶい灰黄色	厚い鉄軸 全 面	口縁部は丸く折り曲げて外反	不明		須佐唐津か	不明
1号溝 17図26	甕か	底径(22.0)	陶器 土師質 黄灰白色 精良 金雲母あり	黄釉 全面	底部は回転ヘラケズリ	底部釉剥ぎ		瀬戸・美濃系か	不明
1号溝 18図1	片口鉢	口径(18.0)	陶器 褐色	内外鉄葉かけ	外面は中位に白化粧土を条線状に拭き取り、 その上に白化粧土の刷毛目文 内面は白化粧 土が薄く掛かっている	口唇部鉄葉・白 化粧土拭き取り	口縁部が内傾する のは18c中葉以降 の特徴	肥前系 嬉野市志田西山 窯に類似あり	18c中葉 19c中葉
1号溝 18図2 図版6	片口鉢	口径(19.0)	陶器 黄灰～暗青灰色 やや軟質 精良	外面から内面口縁部 まで鉄軸 内面は鉄葉 の上に掛けている	海鼠軸は、体部は下から流れ、内外口縁部は 上から流れるように掛ける 摺目上端ナデ揃 え 摺り目単位不明	不明		高取系	不明
1号溝 18図3	片口鉢	口径(11.0)	陶器 にぶい明灰黄白 色 軟質 精良	外面から内面口縁部 まで鉄軸 内面は透明 釉の上に掛けている	外面は薬灰釉を口唇部に口紅状に掛ける ヨ コナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	—		高取系	不明
1号溝 18図4 図版6	片口鉢	口径(19.0)	陶器 橙灰～暗青灰色 やや軟質 精良	鉛釉	外面ヨコナデ 内面は薬灰釉を口縁部から流 し掛け	不明		高取系	不明
1号溝 18図5 図版6	片口鉢	口径(20.0)	陶器 褐色 軟質 精良	鉄軸の上に焼成 不良で発色して ない鉛釉掛け	外面はヨコナデ 放射状の摺り目施文 摺目 上端ナデ揃え 摺り目15本単位で体部中位か らも施すため2段になる 外底は回転ナデ	不明	釉薬が発色してい ないが、掛かり方から小石 原系の可能性高い	小石原系か	不明
1号溝 18図6	中鉢	口径(33.0)	陶器 暗茶褐色～橙茶褐色 白色粒子多い	にぶい暗灰緑 褐色を呈する 鉄軸	流外面はし掛け状の自然釉が垂れる ロク ロ成形 ヨコナデ	口唇部釉拭き取 り	特徴的な胎だが肥前 系に近い、鉄軸も灰 を混じるが厚い	肥前系か	不明
1号溝 18図7	摺鉢	復元不能	陶器 暗茶褐色 硬質 で緻密	暗茶褐色の鉄 軸全面 光沢 あり	外面口縁部の肥厚が残っている ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目23本単位で深く施 文	不明		肥前系 18図14と同一個 体か	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図8	摺鉢	口径(39.0)	陶器 茶褐色 やや軟質 白色粒子入る	暗茶褐色の鉄 軸全面 光沢 なし	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃 え 摺り目21本単位	不明		肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図9	摺鉢	口径(37.6) 高台径(17.0) 器高15.1	陶器 暗茶褐色 硬 質で緻密	暗茶褐色の鉄 軸全面 光沢 なし	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃 え 摺り目30本単位で深く施文	不明	畳付から高台釉 剥ぎ 見込みに 砂目跡	肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図10 図版6	摺鉢 小型	口径(11.8)	陶器 にぶい黄灰色 軟質	黒茶色で、黒色に 茶色する鉄軸を厚く(全面 に)掛かる 光沢あり	口縁玉縁状に肥厚し、片口部小さい ロクロ 成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺 り目23本単位 摺り目幅やや広い	不明	胎土が特徴的 2 号溝26図7と同一 個体	須佐唐津系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図11	摺鉢	口径(20.0)	陶器 暗茶褐色 硬質 で緻密	暗茶褐色の薄 い鉄軸全面 光沢なし	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃 え 摺り目18本単位で深く施文	不明		肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図12	摺鉢	口径(22.2)	陶器 暗茶褐色 硬質で緻 密 白色粒子あり	暗茶褐色の鉄 軸全面 光沢 あり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃 え 摺り目15本単位で深く施文	不明	見込みに重ね焼き の痕跡なし	肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図13	摺鉢	高台径(12.5)	陶器 暗茶褐色 粗放 白色粒子あり	暗茶褐色の鉄 軸厚く全面 光沢あり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺り目13本単位 で深く施文 外面にケズリによる段を持つ 高台内外底は施釉	高台にアルミナ 塗布	高台にアルミナは鉄軸 の上に塗布し、その上 に砂目跡が付着	肥前系	19c第3四半期 20c第2四半期
1号溝 18図14	摺鉢	高台径(12.5)	陶器 暗茶褐色 硬質で緻 密 白色粒子あり	暗茶褐色の鉄 軸全面 光沢 あり	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺り目15本単位 で深く施文 外底回転ヘラケズリ 高台内外 底は施釉	見込みに重ね焼き の砂目跡 畳付は釉剥 ぎ、砂目跡が付着		肥前系 18図7と同一個 体か	19c第3四半期 20c第2四半期

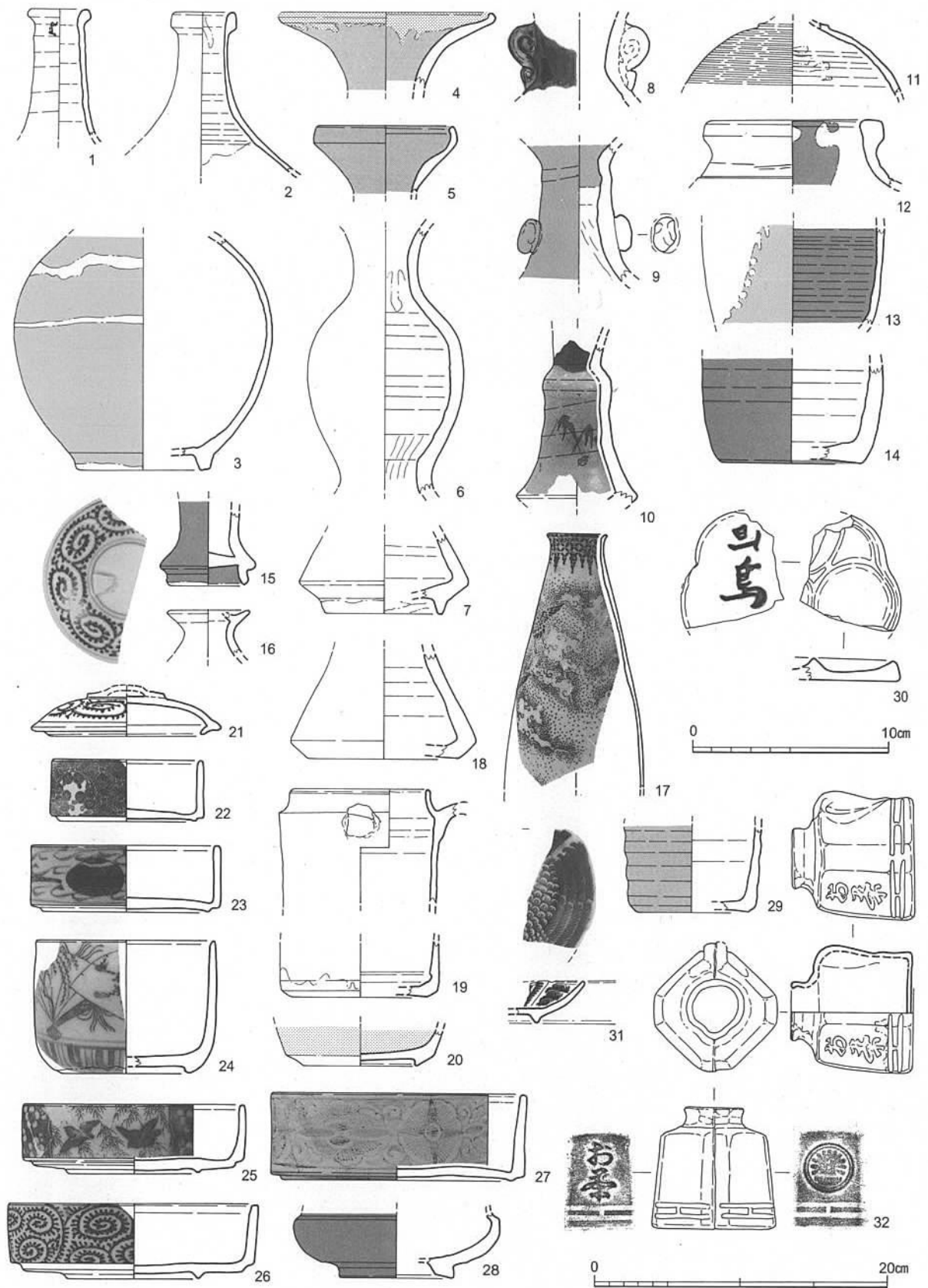
表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(6)



第22図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(11・14・15・17・18は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝 19図1	中鉢 火鉢	復元不能	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色-黒灰色 器表は黒灰色	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面ヨコナデ	不明	口唇部の器表が使用のためか剥離している	在地系	不明
1号溝 19図2	中鉢 火鉢か焔炉	復元不能 箱形ではない	瓦質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は灰色-黒色 器表は黒灰色	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面ヨコナデ 口唇部もミガキ	不明	口唇部の器表が摩滅していないので高台ではない	在地系	不明
1号溝 19図3	中鉢 火鉢	復元不能	瓦質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は灰色-黒色 器表は黒灰色	—	丁寧なヨコミガキで光沢あり 亀甲繁文のスタンプ施文	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため器表剥落	在地系	不明
1号溝 19図4	中鉢 火鉢か焔炉	復元不能	土師質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色	赤色顔料を外側から内面口縁部に掛ける	外面に雷文と桜花文のスタンプ施文 内面はヨコナデ 口唇部に突起を接合するための刺突あり	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため赤色顔料剥落	在地系	不明
1号溝 19図5	焔炉(七輪)	復元不能	土師質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は灰色-黒色 器表は灰白色	—	内外ヨコナデ 口唇部に突起貼り付け 口縁部にサヤ受け貼り付け 見込みに回転ヨコナデ 高台に弧状の挟りが入るタイプだが、遺存範囲にない	不明	口唇部突起の内面は煤付着	在地系 博多瓦町焼の博多七輪か	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 19図6	焔炉	口径(34.6)	瓦質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色-黒灰色 器表は黒灰色	—	外面に丁寧なヨコミガキで光沢あり 内面はヨコナデ、サヤ受け貼り付け後粗くナデ	不明	サナ受け部の先端上面は使用のため黒変している	在地系	不明
1号溝 19図7	中鉢 火鉢	口径(32.0)	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は灰色-黒灰色	—	外面のミガキが摩滅している 内面は器面摩滅のため調整不明	不明	内面は黄灰色に赤色 火鉢として使用したためか	在地系	不明
1号溝 19図8	中鉢 火鉢	高台径(27.0)	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は灰白色-灰黒色 器表は黒灰-灰色	—	内外丁寧なヨコミガキで光沢あり	不明		在地系	不明
1号溝 19図9	焔炉	復元不能	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色-黒灰色 器表は黒灰-灰色	—	外面は型押しによるタタキ装飾の上下を丁寧なヨコナデ 口縁部弧形窓あり 内面は丁寧なヨコミガキで光沢あり サナ受け部は欠損	不明		在地系	不明
1号溝 19図10	焔炉	口径(23.0) 最大径(23.2)	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色	—	外面は型押しによるタタキ装飾の上下を丁寧なヨコナデ 口縁部弧形窓あり 内面は丁寧なヨコミガキで光沢あり 口唇部は使用のため器表摩滅	不明		在地系	不明
1号溝 19図11	中鉢 火鉢	復元不能	瓦質土器 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色	—	外面は型押しによる陽刻装飾 龍の下顎と鱗か 内面はヨコナデ	不明		在地系	不明
1号溝 19図12	焔炉(七輪)	高台径(17.2)	土師質土器 精良 軟質 金雲母あり 胎は灰色-黒色 器表は黒灰色	—	外面に丁寧なヨコミガキで光沢あり 体下位に沈線 内面ヨコナデ、口唇部もミガキ 見込みに回転ナデ 高台に弧状の挟りが入るタイプだが、遺存範囲にない	不明		在地系 博多瓦町焼の博多七輪か	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 19図13	中鉢 火鉢-火入れ	復元不能	土師質土器 軟質 金雲母あり 胎は黄灰色	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
1号溝 19図14	中鉢 植木鉢	口径(24.8)	陶器 軟質 胎は黄灰色	黄褐色の灰緑で部分的に青白い斑あり 外面から内面口縁部	外面 外面に灰緑の流し掛け 内面ヨコナデ	不明		小石原系	不明
1号溝 19図15 図版6	中鉢 植木鉢	口径(23.2)	陶器 やや暗い 橙茶褐色	白化粧土を外面から内面口縁部	不明	不明		産地不明	不明
1号溝 19図16	中鉢 植木鉢	口径(26.0)	陶器 明黄灰色 精良	外面から内面口縁部に白化粧土→灰褐色の透形種の順に施す	内面ヨコナデ	不明	19図17と同一個体の可能性高い	産地不明	不明
1号溝 19図17	中鉢 植木鉢	高台径(13.2)	陶器 明黄灰色 精良	外面から胴下位まで白化粧土→灰褐色の透形種の順に施す	内面ヨコナデ 底部は下から穿孔し見込みは丁寧なナデている 高台削り出し後、側面に弧形の透し穴	不明	胴下位から畳付は白化粧土拭き取り	産地不明 の可能性高い	不明
1号溝 19図18	大鉢 植木鉢	口径(35.4)	陶器 明橙白灰色 精良	内外胎釉	玉縁口縁	不明	19図19と同一胎土	産地不明	不明
1号溝 19図19	中鉢 植木鉢	高台径(25.6)	陶器 精良	内外胎釉	逆し字に折った口縁部の下に貼り付け肥厚	不明	19図18と同一胎土	産地不明	不明
1号溝 19図20 図版6	小鉢 植木鉢	口径(18.2)	土師器 黄橙- 黄灰色 金雲母・ 白色粒子あり	外面から胴下位まで白化粧土	外面白化粧土をヨコハケで刷毛目文状にする 内面ヨコナデ	不明		産地不明	不明
1号溝 19図21	小鉢	口径(18.2)	土師器 内外、胎ともに黄褐色 金雲母・白色粒子あり 軟質	—	外面ヨコナデ 内面カキ目状のヨコナデ 見込みは未調整 外底は粗い回転ナデ	不明		産地不明	不明
1号溝 19図22 図版6	小鉢 火鉢	口径(18.2)	陶器 橙灰色-暗青灰色 軟質で土師質に近い 精良	外面から内面口縁部まで、下から天目釉を掛け、薬灰釉を流し掛け	—	不明		小石原系	不明
1号溝 19図23 図版6	小鉢 火鉢	口径(13.6)	陶器 橙灰色-暗青灰色 軟質で土師質に近い 精良	外面から内面口縁部まで緑暗褐色を呈する灰緑	—	不明		小石原系	不明
1号溝 19図24	大甕	復元不能	土師質土器 軟質 精良 胎・器表ともに黄灰色	—	外面口縁下に沈線 ヨコナデ 内面はヨコナデ・ヨコハケ カルキ付着	不明	外器面の剥落がないので、口縁部は地上に露出していた	在地系	不明
1号溝 19図25 図版5	小鉢 六角形 火鉢か手廻り	復元不能	瓦質土器 灰色 軟質 土師質に近い 金雲母・白色粒子多い	—	外面外面口縁部は炭粉を摺り込んで磨いている 胴中位は灰白色 内面は器表はほとんど剥落しているが、ヨコナデが残る	不明	板東寺焼系であるが、胎から蒲池焼と判断	柳川市蒲池焼	不明
1号溝 20図1	大甕 半胴甕	復元不能	陶器 茶褐色	鉄釉を全面付けて白化粧土を外面から内面口縁部までかける	外面に鉄絵による松文	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 20図2 図版8	大甕 半胴甕	口径(62.8) 最大径(34.6)	陶器 橙茶褐色と暗灰色が斑状に混じる	鉄釉を全面付けて白化粧土を外面から内面口縁部までかける	外面に鉄絵による松文	不明	胎が特徴的	みやま市二川焼	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 20図3 図版5	中鉢 植木鉢	口径(32.0) 高台径(14.6) 器高(23.3)	陶器 暗灰紫色で緻密 白色粒子入る	鉄釉を内面口縁部から外面胴下位まで磨き 器底部分は青灰色	外面カキ目の上に刻目突帯貼り付け 灰白色の白化粧土を流し掛け 高台に弧形の透かし穴	不明	口縁・胴・底部の合成復元	久留米市東野亭焼	1865 1875
1号溝 20図4	大鉢 植木鉢	胴屈曲部径(32.8)	陶器 明灰黒色 白色 粒子多い	淡緑色を呈する薬灰釉を外面の入りける胎は黄灰色	外面刻目突帯貼り付け カキ目調整後、沈線で施文 緑釉を流し掛け 内面カキ目	不明	沈線文は瀬戸・美濃系の水変に近い	産地不明 在地系か	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 20図5 図版5	中甕	底径16.8 最大径29.0	陶器 胎は黄褐色 軟質 精良だが粗放	黄褐色を内面に、外面から内面胴部まで灰白色の薬灰釉を掛ける	外面淡緑灰色の灰緑を流し掛け 胴下位の沈線は軸抜き取り時のもの	見込みは蛇の目軸抜き取り 外面胴下位から底部は軸抜き取り 底部中央に焼き台の痕跡		小石原系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 20図6	中甕	底径(15.0)	陶器 明橙灰色 軟質 精良だが粗放	黄褐色を内面に、外面は灰白-灰緑色の薬灰釉を掛ける	外面灰白色の白化粧土を流し掛け	見込みは軸抜き取り 底部中央に焼き台の痕跡		小石原系	不明
1号溝 20図7 図版6	中甕	底径(14.9)	陶器 胎は明黄灰色 軟質 精良だが粗放	黄褐色を全面に、見込みに黄褐色の薬灰釉を掛ける	見込みに蛇の目軸抜き取りのため成形時のカキ目が見られる 外底は底部は使用のため摩滅している	見込みを蛇の目軸抜き取り 外面胴下位から底部は軸抜き取り		小石原系	不明
1号溝 20図8	大甕 ハンダーガメ	口径(37.4) 最大径(36.8)	陶器 暗茶褐色 緻密で硬質	鉄釉を全面付けて、口縁部から器底は泥灰釉を上掛け	外面胴中位に沈線 タタキ痕ナデ消し 内面は格子目のタタキ当て具痕跡ナデ消し	口唇部は軸抜き取り 頸部は軸抜き取り		肥前系	18c 後葉
1号溝 20図9	大甕	復元不能	土師質土器 白色粒子・角閃石あり 灰色 器表は黄灰色	—	口縁貼り付け肥厚 内外ヨコナデ	不明	内外器面剥落している	在地系	不明

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(7)



第23図 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図12(2・3・10~14・16・18・22・24・25・32は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝 20図10	中甕	復元不能	土質土器 白色粒子・角閃石あり 暗灰色器表はふい黄灰色	—	口縁貼り付け肥厚 外面ヨコナデ 内面ヨコナデ・ヨコハケ	不明	内外器面の摩滅著しい	在地系	不明
1号溝 20図11	大甕	復元不能	土質土器 褐色粒子・黒点あり 胎・器面ともにふい暗灰茶褐色	—	見込みヨコナデ 外底細かい丁寧なハケ	不明	底部はレンズ底 見込みと外面は摩滅している	在地系	不明
1号溝 21図1	摺鉢	口径40.6 高台径19.0 器高15.4	陶器 赤茶褐色 粗放	鉄質の上に暗灰褐色の濃い鉄軸を高台以外に掛ける 光沢なし	ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目25本単位で深く施文 高台回転ヘラケズリ 高台内外底は露胎	見込みに重ね焼きの砂目跡・畳付跡剥き 砂目跡が付き	約1/2残存	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図2	摺鉢	底径(10.8)	陶器 灰茶褐色 粗放 白色粒子あり 硬質	露胎	ロクロ成形 外面ヨコナデ 残存部が小さいため摺り目単位不明 摺り目と交差方向の摺り目あり 外底糸切り	胎土目跡底部縁に3箇所、見込みに1箇所		肥前系	不明
1号溝 21図3	大鉢	復元不能	陶器 暗灰茶褐色	内外茶褐色の厚い鉄軸 光沢あり	外面口縁部は自然釉が垂れている	不明	自然釉は口縁部から流し掛けたように見える	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図4 図版8	大鉢	復元不能	陶器 灰色 白色粒子あり	内外刷毛目状に白化粧土を掛け、内面口縁部から外面に透明釉	外面鉄結	不明	胎土が特徴的	みやま市二川焼か	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図5	大鉢	復元不能	陶器 紫灰色 白色粒子あり 硬質	外面は中位以外に刷毛目状に鉄軸を掛け、その上に上半は白化粧土を掛けて条線状に軸を拭き取り、その上に上半分に透明釉掛け、口縁下以外は刷毛目状に白化粧土を掛けた上に全面透明釉掛け 高台削り出し		見込みに胎土目跡あり 畳付は釉剥き	21図7と同じ技法と胎土	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図6	大鉢	高台径(16.8)	陶器 紫灰色 白色粒子あり	外面は中位以外に刷毛目状に鉄軸を掛け、その上に上半は白化粧土を掛けて、内面から見込みは刷毛目状に白化粧土を掛け、全面透明釉掛け 高台削り出し 高台内外底は鉄軸施釉		見込みにアルミナと胎土目跡あり 畳付は釉剥き		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図7	大鉢	口径(30.8)	陶器 紫灰色 白色粒子あり 硬質	外面は中位以外に刷毛目状に鉄軸を掛け、その上に上半は白化粧土を掛けて条線状に軸を拭き取り、その上に上半分に透明釉掛け 内面は刷毛目状に白化粧土を掛けた上に全面透明釉掛け		不明	21図5と同じ技法と胎土	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図8	大鉢	口径(32.4)	陶器 紫灰色	外面は中位以外に刷毛目状に鉄軸を掛け、その上に上半は白化粧土を掛けて条線状に軸を拭き取り、その上に上半分に透明釉掛け 内面はカキ目の上に刷毛目状に白化粧土を掛けた上に全面透明釉掛け		不明	21図5・7と同じ装飾技法だが、胎土とカキ目が異なる	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図9	大鉢	口径(36.0)	陶器 茶灰褐色	内外鉄軸の上に刷毛目状に白化粧土掛け		不明	21図5・7と同じ装飾技法だが、胎土とカキ目が異なる	肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図10 図版8	大鉢 植木鉢か	口径(37.0)	陶器 灰色 やや軟質 精良	内外暗緑灰色の灰軸を下掛けし、口唇部から外面は白化粧土掛けて、内面口縁下は拭き取り、その上に口唇部から内面に暗緑褐色の灰軸の掛け流し		不明	特徴的な胎で肥前系でない	産地不明	不明
1号溝 21図11	小甕	口径(23.4) 最大径14.2	陶器 暗灰色 白色粒子あり	内外鉄軸の上に鉄軸を掛け、内面口縁部から外面中位まで刷毛目状に白化粧土を掛け、横条線を残すように拭き取った後に、4本単位の筆で波状文を描く		不明		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 21図12	大鉢 火鉢	口径(19.3)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面銅版転写コバルト染付による山水文と連弁文	不明	調査区西壁2層30図18と同一個体の可能性高い	肥前系	20c 前半
1号溝 22図1	合子蓋	口径3.8 最大径4.8	陶器 ぶい暗灰灰色の灰軸 上面のみ	—	—	不明	同様の形状の合子蓋がある	産地不明	不明
1号溝 22図2	急須蓋	口径(4.3) 最大径(6.2)	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉 上面のみ	上から下に穿孔した蒸気穴 つまみ欠損	不明		肥前系	不明
1号溝 22図3	急須蓋	口径6.8 つまみ径1.7	陶器 ガラス質 白色 磁器質に近い	灰白色の長石透明釉 上面のみ 貫入あり	上から下に穿孔した蒸気穴 型押し成形によるつまみ貼り付け	口唇部釉剥き	2号溝24図25とセットをなす	瀬戸・美濃系	20c 前半
1号溝 22図4	急須蓋	口径(7.3)	陶器 灰白色 精良 軟質	乳白色の低火度の透明釉 全面	蒸気穴 外面に鉄軸の2条同心円文の下絵 つまみ欠損	受け部と重なる部分だけ釉剥き	口唇部に茶渋付着	産地不明	不明
1号溝 22図5	急須蓋	口径6.4	炆器 黒灰色	—	蒸気穴 外面に2条同心円文の沈線とハケによる樹文の施文 つまみ欠損	受け部と重なる部分だけ釉剥き	つまみのみ欠損	備前焼か	不明
1号溝 22図6	中碗蓋 朝顔形	口径(10.1) 高台径3.8 器高3.1	磁器(染付) 白色 やや軟質	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により、外面に松・梅樹文と天井部に2条つまみ部に2条界線 内面に裾部に四方標文帯 裏面に2条界線内五弁花文	つまみ部釉剥き	器高が低さから青磁掛け分け碗の朝顔形碗蓋の末期形態	肥前系	1780 1810
1号溝 22図7	中碗蓋	口径(10.1) 高台径3.8 器高3.1	磁器(染付) 白色 やや軟質	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により外面体部に麻葉文 上位に2条界線・連弁文、つまみ部に2条界線、内面裾部に四方標文帯、つまみ部削り出し	つまみ部釉剥き	モチーフ・文様構成が壺野市吉田2号窯に近い	肥前系	19c 前葉
1号溝 22図8	中碗蓋	つまみ径4.2	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により上位に2条界線、体部の文様不明、天井部内面に帆掛け船文	つまみ部釉剥き		肥前系	19c 前葉
1号溝 22図9	中碗蓋	つまみ径3.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面に渦文の地文に牡丹花文 高台に梅葉文、内面口縁部に環路文か、つまみ内四角枠内に「清」コバルト型紙刷り染付	つまみ部釉剥き	1号溝13図3とセットになる	肥前系 壺野市志田か	20c 第1 四半期
1号溝 22図10	土瓶蓋	口径(7.4) 最大径(10.0)	陶器 橙灰色 軟質 白色粒子多い	黄緑灰色を呈する灰軸を上のみ灰被りが著しい	つまみ欠損	受け部下面釉剥き	西新町12次調査の2・103号土坑類例の土瓶とセットか	高取系 福岡市東皿山窯か	1780 1810
1号溝 22図11	土瓶蓋	底径(7.2) 最大径(10.2)	陶器 ぶい黄灰色 黒色粒子あり 半磁器質	白化粧土の上に透明釉を上面のみ掛ける 貫入あり	外面に鉄結を上掛 モチーフは不明 内面天井部はヨコナデ 受け部貼り付け後面未調整 つまみ欠損		西新町13次調査の類例から扁球形のつまみがつく	肥前系か	不明
1号溝 22図12	土瓶蓋	底径(3.2)	陶器 ぶい黄灰色 黒色粒子あり	—	内面天井部はヨコナデ 底部糸切り つまみ貼り付け	底部に胎土目跡 4箇所あり		産地不明	不明
1号溝 22図13	土瓶蓋	底径(4.3)	陶器 灰茶褐色 白色粒子あり	黒褐色の鉄軸を上面のみ掛ける	内面天井部はヨコナデ 底部回転ヘラケズリ つまみ貼り付け			肥前系	不明
1号溝 22図14	土瓶	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 暗灰色 ガラス質	内面口縁部から外面脚下部までは天目釉 内面は鉄軸	注口孔は3つのみ	口唇部釉剥き		肥前系	不明
1号溝 22図15 図版6	急須	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 暗灰色 ガラス質	内外茶褐色の鉄軸を掛けたら、外面は下位まで天目釉を掛ける	口唇部は鉄軸を掛けて口紅装飾(口鏝・縁鏝) 体部は窯変を意匠とする 注口部は欠損 削り出しによる上げ底	受け部釉剥き	均質な作りの良品 2/3残存	肥前系 胎土は長与町長与血窯に近い	不明
1号溝 22図16	急須	口径7.8 最大径13.0 器高10.1	陶器 黄白～黄橙色 軟質	外面は光沢ある暗灰褐色の胎土 貫入あり内面は低火度の透明釉	注口部は欠損	受け部釉剥き		産地不明	不明
1号溝 22図17	急須	底径(6.0)	磁器(染付) 白色 ガラス質	乳白色の透明釉 外面下位まで	松樹文と唐子文を型押しによる陽刻 松葉や唐子の服・髪をコバルト染付 注口孔は7つ	不明		瀬戸・美濃系	不明
1号溝 22図18	急須	口縁径(8.4)	磁器(染付) 白色 ガラス質	乳白色の透明釉 内面中位から外面	外面型押しによる陽刻 花文と口縁下に手描きコバルト染付 注口は欠損	不明		瀬戸・美濃系	不明

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(8)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝 22図19 図版8	急須	口縁径(8.4)	磁器(白磁) 灰白色	茶褐色の鉄釉を内面口唇部から外面	外面は白化粧土による菊花卉と金彩による花芯、緑彩による葉茎の上絵付け 注口は貼り付け 削り出しによる上げ底	受け部と底部釉剥ぎ	内面に暗褐色の変色あり	産地不明	不明
1号溝 22図20 図版6	紅猪口 紅皿	口径4.8 底径1.4 器高1.5	磁器(白磁) 白色	透明釉を内面から外面口縁部まで	型押しによる菊花卉の陽刻	—		肥前系	1840 1860
1号溝 22図21	紅猪口 紅皿	口径(6.0) 底径2.2 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を内面から外面口縁部まで	型押しによる蛸唐草文の陽刻	—		肥前系	19c 中葉
1号溝 22図22	紅猪口 紅皿	口径(7.0) 底径(2.6) 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を内面から外面口縁部まで	型押しによる蛸唐草文の陽刻	—	蛸唐草が崩れて口径に比べて器高が低くなるので未期形態	肥前系	19c 中葉
1号溝 22図23	紅猪口 紅皿	口径(6.5) 底径(2.0) 器高1.6	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉を内面から外面口縁部まで	型押しによる蛸唐草文の陽刻	—		肥前系	1840 1860
1号溝 22図24	小壺 肩形 茶入れ	口径(6.0) 最大径(8.4)	陶器 暗灰色 白色 粒子あり	内面口縁部から外面は鉄系一帯灰褐色の鉄釉に施釉	—	口唇部灰釉のみ 拭き取り	2号溝24図39と同 一単位	肥前系	不明
1号溝 22図25	小壺か小 碗	高台径3.0	陶器 黄灰白色 軟質 精良	外面体部下位から内面は褐釉	外底回転ヘラケズリ	高台に胎土目跡	1690~1780年代の肥前系陶器碗の可能性もある	不明	不明
1号溝 22図26	小壺か小 碗	高台径(3.4)	陶器 黄白色 黒色 粒子あり	内外黄白灰色の鉄釉 全面	—	高台釉剥ぎ		産地不明	不明
1号溝 22図27	小壺か小 碗	高台径(2.8)	磁器(青磁) 灰白色	淡緑色の青磁釉 全面	—	—		肥前系	不明
1号溝 22図28	小壺か小 碗	高台径(4.0)	陶器 にぶい黄灰色 黒 色粒子あり 硬質	内外暗褐色の鉄釉 全面	外面薬灰釉の流し掛け 高台削り出し 体部下位は削り込み	高台釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図29	仏飯器	口径(6.0) 高台径(4.7) 器高6.1	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 杯内から外面	外面花卉文と界線の赤、花芯の黄と緑の上絵付け 脚内部は絞りののち裾部を回転ナデ	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図30	仏飯器	口径(6.7) 高台径(4.0) 器高6.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 杯内から外面	全面コバルト染付 脚内部は絞りののち裾部を回転ナデ	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 22図31	仏飯器	口径(6.0) 高台径(3.4) 器高5.6	磁器(白磁) 灰白色 黒色 粒子あり	透明釉 杯内から外面	削り出しによる上げ底	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図32	器台 筆立て	口径(6.0) 高台径(3.4) 器高5.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面コバルト手描き染付による雷文・花文 削り出しによる上げ底	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 22図33 図版6	乗燭 台付たん ころ形	口径5.5 高台径4.5 器高6.5	陶器 橙茶褐色 白色 粒子あり	内外暗褐色の鉄釉 体部のみ	見込みに粘土板を断面C字形に丸めた芯を立て貼り付け 外底糸切り 高台畳付内に釘固定用の穿孔	高台畳付の胎土目跡あり	ほぼ完形	肥前系	不明
1号溝 22図34 図版6	灯明受皿	口径5.0 底径3.3 器高3.3	陶器 橙茶褐色 やや 粗放	染色の悪いにぶい暗 灰褐色の鉄釉が薄く 上面のみ掛かる	底部糸切り	底部に胎土目跡あり 口縁部にアルミナ付着		肥前系	不明
1号溝 22図35 図版6	灯明受皿	口径5.5 底径4.4 器高2.7	陶器 橙茶褐色 やや 粗放	暗灰褐色の鉄釉 上面のみ	底部糸切り	底部に胎土目跡あり 底部は器面に荒れあり		肥前系	不明
1号溝 23図1 図版6	中瓶	口径3.2	陶器 暗灰色	黒褐色の鉄釉が焼成不足で裏に染色している 全面	口縁部に墨書が見られるが文字を判別できない	不明	口縁部の墨書は使用者が内容物を記した可能性がある	肥前系	1780 1860
1号溝 23図2	中瓶	口径4.5	磁器(白磁) 白色 黒色 粒子あり	緑がかった透明釉 内面肩部から外面	不明	不明		肥前系	19c 末 20c 前葉
1号溝 23図3	中瓶	底径(9.2) 最大径(17.7)	陶器 暗灰~暗茶褐色	灰緑色の鉄釉 外面のみ	外面は白化粧土流し掛け 高台は削り出し	畳付から内面は釉剥ぎ 畳付アルミナ付着		肥前系	1780 1860
1号溝 23図4	仏花瓶 喇叭口形	口径(10.3)	陶器 暗灰色 やや軟 質	鉄釉 全面	内外薬灰釉流し掛け 削り出しによる上げ底	畳付釉剥ぎ		産地不明	不明
1号溝 23図5	仏花瓶 袋状口縁	口径(7.2) 最大径(7.4)	磁器(青磁) 灰白色 黒色 粒子あり	暗灰緑色の透明釉 全面 光沢あり	貫入を意匠とする	不明		肥前系か	不明
1号溝 23図6	仏花瓶	最大径8.1	陶器 にぶい暗灰色	天目釉 青白い 窯変あり 内面 肩部から外面	耳部欠損 下位は絞りが見られる 外底糸切り	底部に胎土目跡あり 底部は器面に荒れあり		産地不明	不明
1号溝 23図7	仏花瓶	最大径8.6	陶器 紫灰~茶褐色	暗茶褐色の鉄釉 外面のみ	高台内露胎	畳付に砂目跡あり		肥前系	不明
1号溝 23図8	仏花瓶	最大径7.2	陶器 灰色 やや軟質	鉄釉 全面	蕨手形の耳部貼り付け	不明		肥前系か	不明
1号溝 23図9	仏花瓶 瓶子丸耳 形	最大径5.8	陶器 茶褐色 白色 粒子あり	茶褐色の鉄釉 上面のみ	丸耳形の耳部貼り付け 内面絞りの上をヨコナデ	不明		肥前系	不明
1号溝 23図10	仏花瓶 変形	最大径8.3	陶器 赤茶褐色 白色 粒子あり	黄灰色の鉄釉 内面口縁部から外面	外面口縁部は茶褐色の鉄釉上掛け 体部に鉄絵の笹文 内面ヨコケズリ 後未調整	不明		肥前系	不明
1号溝 23図11	中瓶	頸部径(4.8)	陶器 灰色 白色 粒子あり 硬質	暗茶褐色の鉄釉 外面のみ	外面カキ目 内面ヨコケズリ 後未調整	不明		肥前系	不明
1号溝 23図12	中壺	口縁径(9.4)	陶器 暗灰色	内面口縁部に部分的に鉄釉掛かる	外面頸部に沈線	不明		肥前系	不明
1号溝 23図13	中瓶	最大径(12.6)	陶器 橙灰色 精良 やや軟質	灰緑色の鉄釉が外面、鉄釉が内面に掛かる	外面は白化粧土による施文 高台は削り出し	胴下位から高台は釉剥ぎ		小石原系	不明
1号溝 23図14 図版8	中瓶	底径(9.3)	陶器 橙~灰色 硬質 白色粒子あり	黄茶灰色の鉄釉が外面から底部まで掛かる	内外ヨコナデ 見込み回転ナデ 外底回転ヘラケズリ	不明	器壁が厚くつくりが粗い 鉄釉の色合いや底部施釉が特徴的	産地不明 筑後地方産か	不明
1号溝 23図15	神酒徳利	高台径(3.9)	磁器(染付) 灰色	瑠璃釉 外面のみ	高台は削り出し	畳付釉剥ぎ	有田町窯の谷窯に類例あり	肥前系	1780 1860

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(9)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝 23図16	油德利	油受け部径 (5.6)	陶器 暗灰色	暗灰褐色の褐 釉 内外に厚 く掛かる	不明	不明		肥前系	不明
1号溝 23図17	德利 燭德利	口径(3.2) 最大径(7.4)	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 内面 口縁部から外 面	外面型紙刷りコバルト染付による鶴雲文か 内面ヨコケズリ	不明		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 23図18	器種不明	底径(10.4)	陶器 暗灰白~淡灰黄色 緻密 やや硬質	濁灰釉 底部 以外全面	削り出しによる上げ底	畳付釉剥ぎ	壺と思われるが高 台を持たない	肥前系	不明
1号溝 23図19	中水注	口径(9.2) 底径(4.2)	陶器 灰白~白色 陶 質	灰白色の長石釉 内面口縁部から 外面体部下位	貫入を意匠とする 把手欠損 底部回転ヘラ ケズリ	口唇部釉剥ぎ 胴下位から底部 露胎		瀬戸・美濃系	不明
1号溝 23図20	器種不明	底径(5.8)	陶器 灰白色	透明釉 底部 以外全面	削り出しによる萐筍底	不明		肥前系	不明
1号溝 23図21	段重蓋	口径(7.8) 最大径(9.8)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面手描き呉須染付による蜻唐草文・1条界 線 天井部2条界線 板状つまみ貼り付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝 23図22	段重	口径(10.4) 高台径(9.4)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面型紙刷りコバルト染付による菊花文・菱 菊文	口唇部・高台外 面釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 23図23	段重	口径(9.6) 高台径(8.5)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面手描きコバルト染付による火炎宝珠文	口唇部・高台外 面釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 23図24	段重	口径(12.1) 高台径(8.9)	磁器(染付) 白色 黒色粒子 あり	透明釉 全面	外面銅版転写コバルト染付による扇子文・連 弁線 削り出しによる萐筍底	口唇部・高台外 面釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
1号溝 23図25	段重	口径(15.0) 高台径(9.1)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面銅版転写染付クロムによる竹笹文とコバ ルトによる梅文散らし・雀文	口唇部・高台外 面釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
1号溝 23図26	段重	口径5.5 高台径(6.9) 器高2.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付による蜻唐草文・1条界線	口唇部・高台外 面釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 23図27	段重	口径(13.0) 高台径(11.8) 器高4.5	磁器(染付) 白色 粒子あり	発色悪く乳白 色を呈する透 明釉 全面	手描きコバルト染付による牡丹花文と口縁部 1条・体部下位2条界線	口唇部・高台外 面釉剥ぎ	透明釉の表面をナ デている	瀬戸・美濃系か	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 23図28	香炉	高台径(6.0)	陶器 赤褐色	やや発色の悪い 黒褐色の鉄 釉 外面	見込みヨコケズリ 高台削り出し	高台畳付から高 台内釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 23図29	器種不明	底径(5.8)	磁器(青磁) 白色	淡緑色を呈す る青磁釉 外 面体部のみ	凹線による凹凸を意匠とする 外底回転ヘラ ケズリ	底部釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝 23図30	小皿 変形 手皿皿	復元不能	磁器(染付) 白色 粒子あり	透明釉 全面	糸切り成形 ふくら雀を印刻で描き、型の凹 凸部の深い部分に呉須を施釉するコバルト染 付	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系か	19c 中葉 19c 後葉
1号溝 23図31	絵の具皿 花形	復元不能	磁器(白磁) 白色	透明釉 上面 から側面	型打ち成形で、花卉形の皿部を陽刻 底部糸 切り	底部釉剥ぎ	所有者の墨書あり 「壺崎」か 他にも あるが判別できない	肥前系か	不明
1号溝 23図32 図版6	汽車茶瓶 (汽車土 瓶)	口径5.5 底長軸7.3 器高8.3	陶器 土質 黄白色 金雲母 入る	暗茶褐色の薄 い鉄釉 外面 体部下位以外	型合わせによる成形で、外面は「お茶」は陽 刻 「工」字は陰刻 把手部は穿孔なし 底 部糸切り	口唇部釉剥ぎ 底部 に粘土目の可能性 のある粘土敷付者	ほぼ完形	産地不明	不明

表4 2次調査1号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表(10)

た。『吉塚本町遺跡』の報告によれば、型物づくりの駅茶瓶は佐賀県三養基郡北茂安町の白石焼で焼かれていたらしいが、これに当たるかは不明。

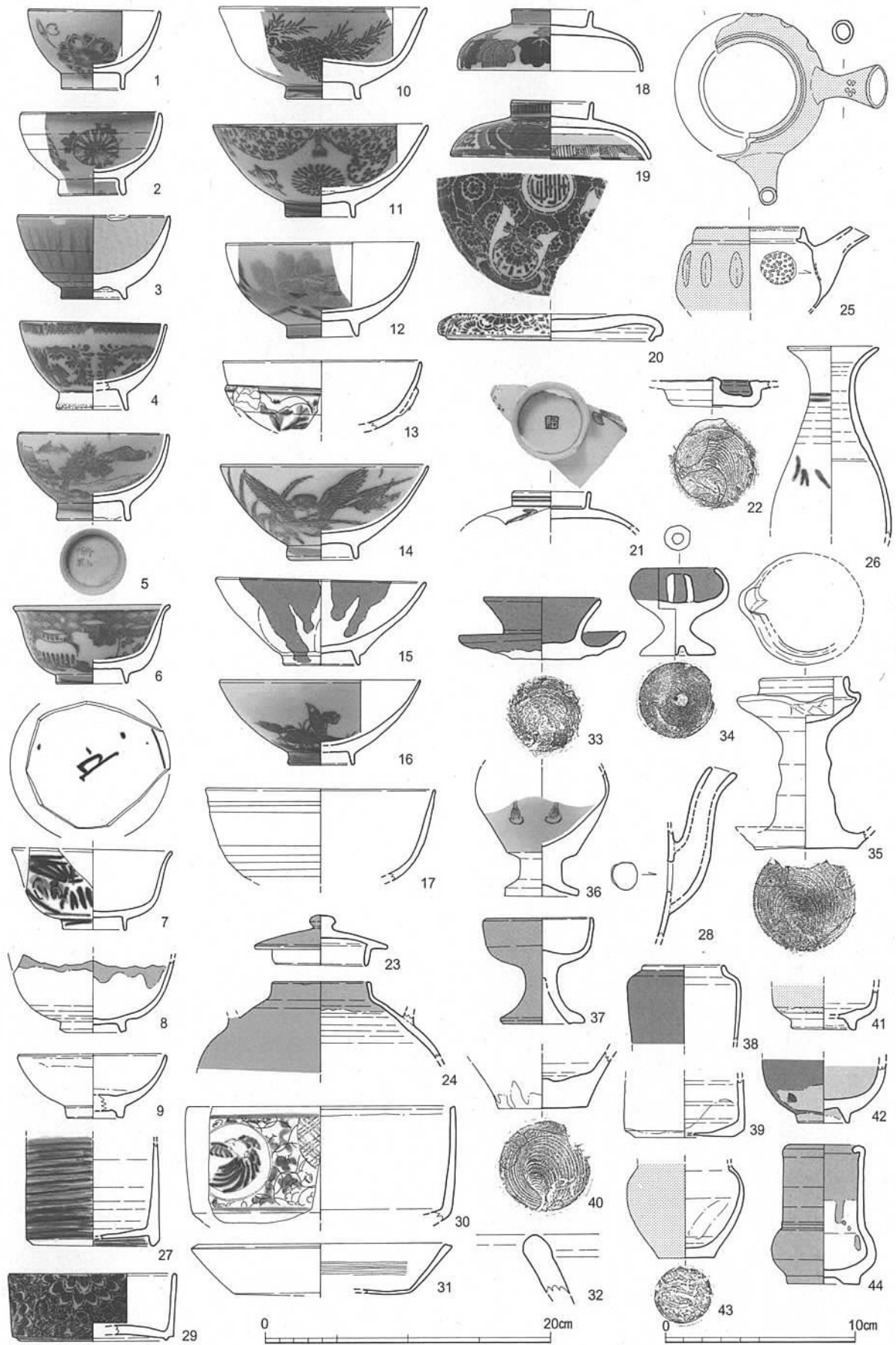
34図23・5～8・10・11の瓦当文様は久留米城下町遺跡でも見られる文様であり、『久留米城外郭 佐々木家敷跡』で分類されている。福岡県内では、筑後地域に流行した文様らしく、福岡城下町や小倉城下町には見られない。

久留米城下町では中心文様が三葉文のG類が多いようだが、本遺跡では菊文を中心文様とするG類が多い。同じ筑後地域でも久留米城下と柳川城下で、使用される文様が異なる可能性がある。

39図9・10は七輪のサナのような形態だが、焼け方の弱い部分があるので、サナのように炭を置いたものではないだろう。むしろ、小型窯の窯道具の一種を想定したい。

43図3は用途不明の木簡で、下端に穿孔があり釘で打ちつけたものかもしれない。表裏の「大」以外は墨痕が薄く判読できない。表面1文字目は「汙」(さんずい)の文字か。2文字目は「大」を重ね書きする。4文字目は「え」の可能性もある。裏面中程に「大」とあり、表裏の「大」は2次的な利用にともなったものだろうか。

釈文 ・ □□^(重ね書き)「大」こは ^(な力)ふ□ ○
・ 大 ○



第24図 2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1(9・22~28・31・38・39・41・43・44は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
2号溝 24図1	小杯 丸腰湯呑み	口径(7.0) 高台径(3.4) 器高4.2	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写襷彩とコバルトの2色刷りによる桜花文 高台削り出し 畳付は斜めに削っている	畳付部は薄い透明釉があることから拭き取りか	10・11は同一器種	肥前系か	19c末 20c第1四半期
2号溝 24図2	小杯 丸腰湯呑み	口径(7.4) 高台径(3.6) 器高4.3	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	口縁部を口紅状にコバルト施釉 外面は銅版転写により襷彩の唐花丸文を上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前系 大分県竹田市炭電1区SK1に同じモチーフあり	20c第1四半期
2号溝 24図3 図版6	小杯 丸腰湯呑み	口径(8.0) 高台径(3.5) 器高4.4	磁器(青磁) ガラス質 白色	クロム青磁釉 高台内以外	外面飛びカンナ状の印刻 渦巻き高台	畳付釉剥ぎ	口唇部の等間隔の打ち欠きから灰落としに使用したか	瀬戸・美濃系	19c第4四半期 20c第1四半期
2号溝 24図4	小杯 丸腰湯呑み	口径(7.8) 高台径(3.8) 器高4.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による龍文か裏銘は欠損しているが類例から1条界線内「舜山」	畳付砂目付着	1号溝12図11と同一器種	瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 24図5 図版6	小杯 丸腰湯呑み	口径(7.8) 高台径(3.8) 器高4.6	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	襷彩と緑の銅版2色刷りによる富士と松の山水文の上絵付け 裏銘はクロムによる銅版転写で「乾山精製」を上絵付け	畳付砂目付着	1号溝12図11と同一器種	瀬戸・美濃系	19c末 20c第1四半期
2号溝 24図6 図版6	小杯 端反形丸腰湯呑み	口径(8.2) 高台径(3.9) 器高4.1	磁器(色絵) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面銅版転写による青海波地文に酒樽文 高台は手描きによる1条界線 コバルト染付高台削り出し	畳付部は薄い透明釉があることから拭き取りか	福岡県堂畑遺跡2区近代遺構に類例あり	瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 24図7	小杯 端反形丸腰湯呑み	口径(8.3) 高台径(3.3) 器高4.3	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は赤・緑・青色の上絵付けによる花文 内面は赤彩の上絵付けによる口線下1条界線 見込みは赤彩の上絵付けの文字のようだが判別できない 高台削り出し	畳付部は薄い透明釉があることから拭き取りか		瀬戸・美濃系	19c第3四半期 20c第1四半期
2号溝 24図8 図版8	小杯 端反形	口径(8.3) 高台径(3.4)	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 高台内以外全面	内外口縁部緑釉を上掛け			瀬戸・美濃系	不明
2号溝 24図9	小杯	口径(10.2) 高台径(4.0) 器高5.4	陶器 軟質の灰白色	暗灰白を呈する低火度の灰釉 高台内以外全面	高台削り出し	畳付から高台内部まで釉剥ぎ 見込みは蛇の目釉剥ぎ		産地不明 瀬戸・美濃系の灰釉に近いが、肥前系の器形	不明
2号溝 24図10	中碗 端反形	口径(10.8) 高台径(4.1) 器高4.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りによる魚と水草文と、手描きの界線 コバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みは蛇の目釉剥ぎ		肥前系	19c第4四半期
2号溝 24図11	中碗	口径(11.2) 高台径(3.7) 器高4.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りによる海松文などと手描きの界線 コバルト染付	畳付釉剥ぎ 砂目・海松文に同じモチーフがある	浜町皿山窯に花文・海松文に同じモチーフがある	肥前系 鹿島市浜町皿山窯	19c第4四半期
2号溝 24図12	中碗	口径(10.2) 高台径(3.8) 器高5.0	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面はゴム印判の牡丹文で、花は襷彩と正円子、葉脈はクロム、葉と茎はコバルト	畳付釉剥ぎ 外面に重ね焼した型紙刷りコバルト染付中碗の破片が融着 24図12と同種で、融着する個体も同種		肥前系	20c第1四半期 20c第2四半期
2号溝 24図13	中碗	口径(10.4)	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面はゴム印判の牡丹文で、花は襷彩と正円子、葉脈はクロム、葉と茎はコバルト	畳付釉剥ぎ 外面に重ね焼した型紙刷りコバルト染付中碗の破片が融着 24図11と同種で、融着する個体も同種		肥前系	20c第1四半期 20c第2四半期
2号溝 24図14 図版6	中碗 平碗	口径(10.9) 高台径(3.8) 器高5.0	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面はゴム印判コバルト染付による稲と雀文	畳付釉剥ぎ		肥前系	20c第1四半期
2号溝 24図15	中碗 八角面取り平碗	口径(10.9) 高台径(4.0) 器高4.6	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	内外鉄釉の流し掛け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 24図16	中碗	口径(10.9) 高台径(3.8) 器高5.0	磁器(染付) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外面銅版刷りコバルト染付による山芋葉花文	畳付釉剥ぎ 拭き取り 外底は露胎		瀬戸・美濃系	20c第1四半期
2号溝 24図17	中碗 平碗	口径(12.0)	陶器 にぶい淡灰色	鉛釉 全面 青白い蒸染あり	外面カキ目による濃淡を意匠としたものか	不明		小石原系	不明
2号溝 24図18	中碗蓋	口径9.8 つまみ径4.3 器高3.3	磁器(染付) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外面ゴム印判コバルト染付による南瓜葉文	つまみ部畳付釉剥ぎ	完形	肥前系	不明
2号溝 24図19	中碗蓋	口径(10.6) つまみ径(4.4) 器高3.0	磁器(染付) ガラス質 灰白色	透明釉 全面	外面手描きコバルト染付による花文・蜻蛉草文 高台は手描きによる樹菌文 内面口縁部に崩れた雷文帯	つまみ部畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図20	段重蓋	口径(10.8) 最大径(11.8) 器高1.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は型紙刷りコバルト染付による花地文に宛文 天井部に「寿」字文	受け部釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図21	中碗蓋	つまみ径(4.2)	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面高台の界線はコバルト染付、梅樹文の枝は襷彩、花は赤、扇文の骨は赤の上絵付け 界線はコバルト手描き染付、天井部に赤で「肥」字の上絵付け	つまみ部畳付釉剥ぎ		肥前系	20c第1四半期 20c第2四半期
2号溝 24図22	土瓶蓋	底径5.4 つまみ径1.2 器高2.1	陶器 赤橙褐色	発色悪く灰ばかりの鉄釉 上面のみ	底部糸切り	底部胎土目跡あり		肥前系	19c中葉 20c第1四半期
2号溝 24図23	土瓶蓋 青土瓶	口径(6.5) つまみ径1.1 器高3.6	陶器 紫灰～暗紫灰色	銅緑釉 上面のみ	受け部接合	裾下は釉剥ぎ	24図24とセットをなす	肥前系	19c中葉 20c第1四半期
2号溝 24図24	土瓶 青土瓶	口径(7.0)	陶器 暗紫灰色	銅緑釉 外面から内面口縁部	内面にヘラケズリ痕	口唇部釉剥ぎ	24図23とセットをなす	肥前系	19c中葉 20c第1四半期
2号溝 24図25	急須	口径6.8 つまみ径1.7	陶器 ガラス質 白色 磁器質に近い	灰白色の長石透明釉を内面口唇部から外面 貫入あり	連続凹線文部が乳白色の白化粗土を上絵付け 把手は中空で、桜花形の透かし	受け部釉剥ぎ 内面露胎	1号溝22図3とセットをなす	瀬戸・美濃系	20c前半
2号溝 24図26	中瓶	口径6.6 最大径8.5	磁器 灰白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	兵須手描き染付による2条界線・葉文 内面ヘラケズリ	不明		肥前系	不明
2号溝 24図27	中瓶	高台径9.3 最大径9.2	磁器 灰白色 黒色粒子あり	錆釉 外面	外面刷毛目状施釉 内面ヘラケズリ	不明		肥前系	不明
2号溝 24図28	中水注 汁注ぎ	復元不能	磁器(色絵) ガラス質 灰白色	透明釉 注口内以外全面	穿孔1つのみ	不明		瀬戸・美濃系	不明
2号溝 24図29	段重	口径(8.8) 高台径(7.6) 器高3.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面型紙刷りコバルト染付による蓮花文	口唇部・高台外面釉剥ぎ		肥前系	19c末 20c第1四半期
2号溝 24図30 図版8	段重か蓋物	口径(14.0)	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は手描きコバルト染付による界線間に赤・緑・黒で唐草文・格子丸文・鳥丸文を上絵付け	口唇部釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図31 図版6	中皿か蓋	口径(18.2) 底径(12.4) 器高3.6	土師器 にぶい黄灰褐色 金雲母多い	—	外面・外底は型押し成形後未調整 内面ヨコハケ 見込みは回転ハケ	底面が焼成不良で灰黒色	外面未調整であり型押し成形なので大量生産品か	在地系	不明
2号溝 24図32 図版8	火鉢か	復元不能	土師器 黄白色 精良で金雲母なし	—	内外ヨコナデ	不明	胎土から蒲池焼の可能性が高い	柳川市蒲池焼	不明
2号溝 24図33 図版6	灯明受皿	口径6.1 底径3.7 器高3.3	陶器 橙茶褐色 やや粗粒	発色の悪いにぶい暗灰褐色の鉄釉が薄く上面のみ着かる	底部糸切り	底部に胎土目跡あり 唇部下位が集中的に剥離している		肥前系	不明
2号溝 24図34 図版6	乗燭 白付たんころ形	口径3.7 高台径3.9 器高4.6	陶器 橙茶褐色 白色粒子あり	内外暗褐色の鉄釉内面から外面唇部 中位まで	見込みは粘土板を六角柱形に丸め、中位から斜めに切ったものを忠立として貼り付けた高台糸切り 高台量付内に釘面定用の穿孔	底面摩滅のため胎土目跡不明	ほぼ完形	小石原系 東峰町中野上の原窯に忠立て類例あり	不明
2号溝 24図35	灯明受皿 皿付	口径4.7 底径5.5 器高9.0	陶器 橙茶褐色 やや粗粒	暗褐色の鉄釉が底部以外着かる	把手欠損 底部糸切り	底部に胎土目跡あり		肥前系	不明
2号溝 24図36	脚付き杯	最大径(7.0) 高台径(3.9)	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は金彩上掛けによる鳥文 高台削り出し 畳付は斜めに削っている	高台裾部は釉剥ぎ		肥前系か	不明

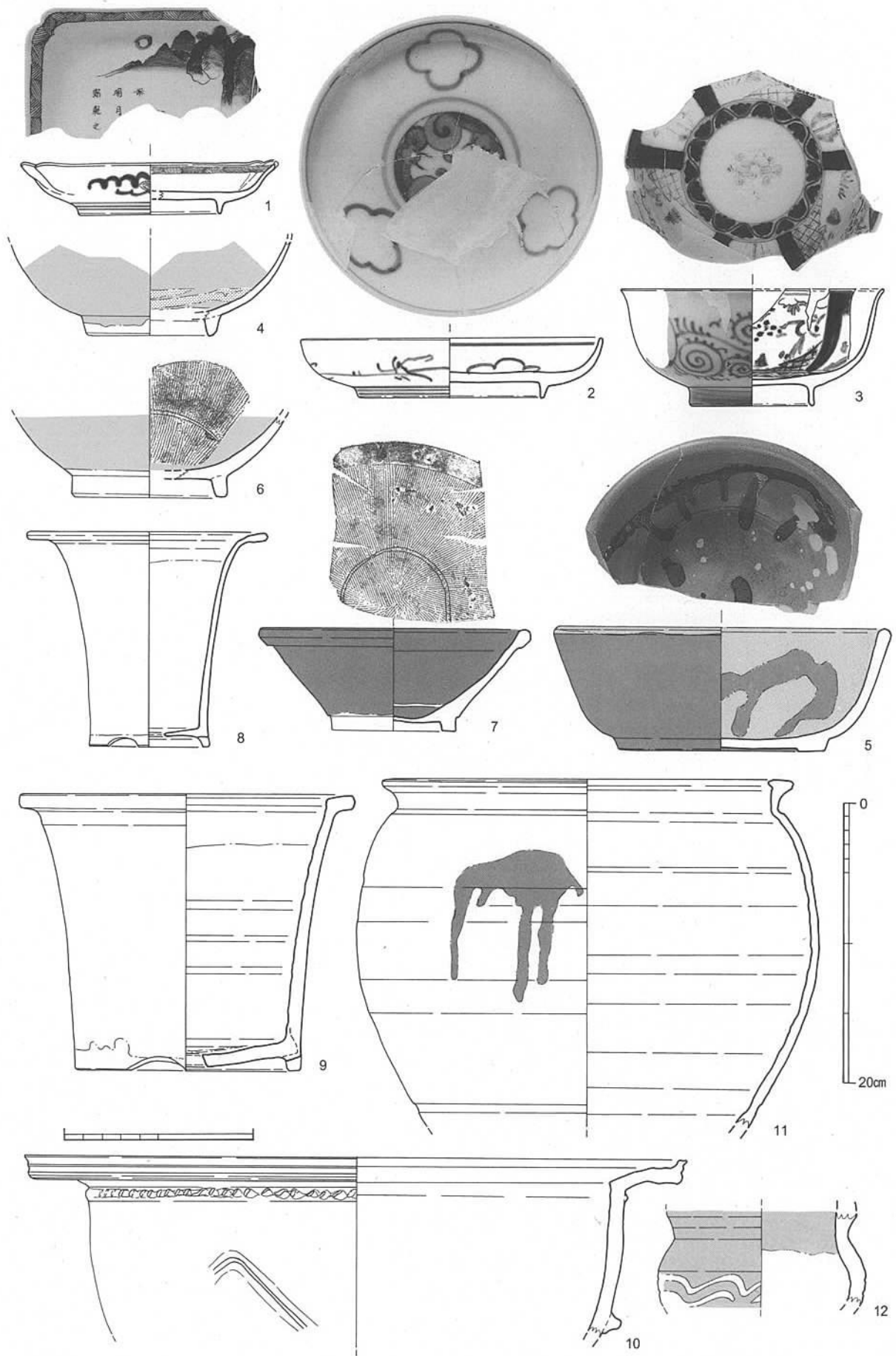
表5 2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(1)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
								特記事項	推定産地	推定年代
2号溝 24図37	仏飯器	口径(5.8) 高台径(4.4) 器高5.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 杯内 から外面	全面コバルト染付 脚内部は絞りののち裾部を回転ナデ	全面コバルト染付 脚内部は絞りののち裾部を回転ナデ	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 20c 前葉
2号溝 24図38	小壺 肩衝形 茶入れ	口径(5.8) 最大径(8.0)	陶器 暗灰色 堅緻	外面口縁下から鉄土目録	—	—	口唇部釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図39	小壺 茶入れ	口径(8.3) 最大径(8.5)	陶器 暗灰色 白色粒	暗灰緑色の灰釉を内外体部下位まで掛ける	底部回転ヘラケズリ	—	外面体部下位から底部は釉剥ぎ	1号溝22図24と同一個体	肥前系	不明
2号溝 24図40 図版8	小壺 茶入れ	高台径4.7	陶器 にぶい暗黄灰色 やや軟質	外面体部下位までは茶褐色の釉、内面は暗色の薄い鉄釉	底部糸切り	—	高台胎土目録		産地不明 種調が肥前系に近い	不明
2号溝 24図41	小壺 茶入れ	高台径4.7	陶器 にぶい暗黄灰色 やや軟質	外面体部下位まで鉄釉の上に白化粧土	高台削り出し	—	体部下位から高台内まで釉剥ぎ	内面露胎なので、口が締まる器種	産地不明	不明
2号溝 24図42 図版8	小壺 茶入れ	高台径2.6	陶器 黒灰色 硬質	褐色の厚い鉄釉の上に外面体部中位まで黒釉上掛け	高台削り出し	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 24図43	小壺	底径4.0 最大径8.2	土師器 黄褐色 軟質 金雲母あり	外面から外底まで白化粧土かけ	底部糸切り	—	不明		在地系	不明
2号溝 24図44	小瓶 線香立てか	口径5.8 高台径5.1 器高3.8	磁器(青磁) 白色	内面口縁部から外面に淡緑色の青磁釉	—	—	畳付釉剥ぎ 砂目跡付着	口縁部を内側に折り曲げるのは肥前の香炉に多い特徴	肥前系	不明
2号溝 25図1 図版7	小皿	口径9.5 高台径3.8 器高2.7	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	内面は手描き呉須染付による2条の境界内に鳥唐と蘭文	—	見込み蛇の目釉剥ぎ内に崩れた源氏香文が		肥前系	19c 中葉 19c 後半
2号溝 25図2	小皿	口径(10.8) 高台径(6.8) 器高2.1	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部口紅装飾(口鏝・線鏝) 銅版転写クrom染付による重要形繋ぎ地に桜花文	—	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
2号溝 25図3 図版7	小皿	口径10.6 高台径5.8 器高2.3	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部口紅装飾(口鏝・線鏝) 銅版転写クrom染付による内面口縁部の雷文帯と牡丹目と見込みの雷文帯内に「壽」字文	—	畳付部は薄い透明釉があることから拭き取りか		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
2号溝 25図4	小皿	口径9.9 高台径3.9 器高2.6	磁器(染付) 白色 白色粒子あり	透明釉 全面	コバルト手描染付により内面から見込みに梅樹文と菊文	—	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目釉剥ぎは下絵が残る		肥前系か	19c 末 20c 第1四半期
2号溝 25図5	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.8 高台径8.6 器高3.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により内面の青海波地文に窓絵内菊文と見込みの複線銅文帯内に環状松竹梅 手描きによる外面の波文 体部下位に1条、高台に1条界線 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	—	畳付から外輪部まで釉剥ぎ 畳付にアルミナ付着	完全に一致しないが塩田町お蔵窯に近い	肥前系 薩野市志田か	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図6	五寸皿 輪花形 並皿	口径13.8 高台径8.8 器高3.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により外面草花文、内面に花地文に窓絵内菊文、見込みに複線銅文帯内に環状松竹梅 手描きによる外面体部下位に1条、高台に1条界線 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	—	畳付から外輪部まで釉剥ぎ 畳付にアルミナ付着		肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図7 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.2) 高台径(8.4) 器高3.4	磁器(染付) 灰白色 焼成不良 に陶質に近い	発色不良の透明釉 全面	口唇部口紅装飾 銅版転写コバルト染付により内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊文、手描きによる外面波文 体部下位に1条、高台に2条界線 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	—	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	コバルト不発色不良 25図8と同一器種	肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図8 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.2) 高台径(8.0) 器高3.4	磁器(染付) 灰白色 焼成不良 に陶質に近い	発色不良の透明釉 全面	口唇部口紅装飾 銅版転写コバルト染付により内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊文、手描きによる外面波文 体部下位に1条、高台に2条界線 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	—	蛇の目高台外輪部のみ釉剥ぎ	25図7と同一器種	肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図9 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径(13.0) 高台径8.2 器高3.3	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により内面に青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊文、手描きによる外面波文 体部下位に1条、高台に2条界線 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする	—	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ 見込みに三足ハマ使用	完全に一致しないが文様構成が武雄市皿山窯に近い	肥前系 武雄市皿山窯か	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図10 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.4 高台径4.0 器高3.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により外面草花文、内面から見込みは青海波地文に牡丹花文と窓絵内菊文、手描きによる外面体部下位に1条、高台に2条界線 口唇部口紅装飾(口鏝・線鏝) 状コバルト施釉 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする 外底に墨書あり	—	高台外輪部のみ釉剥ぎ 見込みの釉剥ぎは下絵が残る	完全に一致しないが武雄市皿山窯に近い	肥前系 武雄市皿山窯か	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図11 図版7	五寸皿 輪花形	口径13.0 高台径8.0 器高3.2	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により外面草花文、内面に花地文に牡丹花文と馬と草花を描いた鳳凰文、窓絵内菊文、手描きによる外面体部下位に1条、高台に2条界線 口唇部口紅装飾 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする 外底に墨書あり	—	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ 見込みの釉剥ぎは下絵が残る	蛇の目高台外輪部の墨書判読不能	肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 25図12 図版7	五寸皿 輪花形 並皿	口径12.6 高台径8.0 器高3.2	磁器(染付) 灰白色	発色不良の透明釉で乳白色 全面	型紙刷りコバルト染付により外面草花文、内面に花地文に牡丹花文と窓絵内菊文、手描きによる外面体部下位に1条、高台に2条界線 口唇部口紅装飾 型打ち成形後、高台貼り付けて蛇の目高台にする 外底に墨書あり	—	高台内面から外輪部まで釉剥ぎ	蛇の目高台外輪部の墨書判読不能	肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期
2号溝 26図1	中皿 方形	長軸(17.8) 短軸(16.4) 器高3.6	磁器(染付) 白色 粒子あり	柿釉で乳白色 全面	手描きコバルト染付による外面変形波文か体部下位に1条、高台に2条界線 内面に口縁部互い違いの斜線繋ぎ文帯内に山水文と漢詩文 型打ち成形後、高台貼り付け	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
2号溝 26図2	五寸皿 並皿	口径15.2 高台径9.3 器高3.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による外面唐草文 体部下位に1条、高台に2条界線 内面は口縁下に1条界線 雲形窓文 見込みに1条界線内に騎牛文か 型打ち成形後、高台貼り付け	—	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 20c 前葉
2号溝 26図3	中鉢 芙蓉手	口径(18.9) 高台径(8.8) 器高8.4	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による外面唐草文 体部下位に1条、高台に2条界線、内面は区間文帯 環状三つ葉文帯 区間帯内山水文の充填文と見込みの花文は赤・緑・紫彩による上掛け 高台削り出し	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前葉
2号溝 26図4 図版8	中鉢(片 口鉢か)	高台径(9.4)	陶器 淡灰-黄白色 やや軟質 精良	鉛釉掛け	見込みに薬灰釉の掛け流し	—	高台釉剥ぎ	釉薬と胎の特徴から1号溝18図4を口鉢とする片口鉢だろう	高取系	不明
2号溝 26図5 図版7	中鉢	口径(24.0) 高台径(14.7) 器高8.8	陶器 明黄褐色 土師質 やや軟質 精良	外面は鉄釉を高台内まで、内面は光沢のない薄い釉	手描きコバルト染付により外面蛸唐草文 体部下位に1条、高台に2条界線 内面に光沢のある鉄釉の掛け流し 高台削り出し	—	畳付釉剥ぎ		産地不明	19c 中葉 20c 前葉
2号溝 26図6 図版8	摺鉢	高台径(11.9)	陶器 黄褐色-淡灰色	外面鉛釉 内面鉄釉	ロウ成形 外面ヨコナデ 摺目16本単位 交差方向の摺目なし	—	畳付から高台釉剥ぎ 見込みに砂目跡	畳付の外端に重ね焼き時に下にあった摺鉢の摺目跡付着	肥前系	19c 20c 前葉
2号溝 26図7 図版8	摺鉢 小型	口径(19.4) 高台径(8.8) 器高7.4	陶器 にぶい黄灰白色 軟質	明茶色で一部黒色に塗る鉄釉を厚く全面に掛ける 光沢あり	口縁玉線状に肥厚する 摺目上端ナデ揃え 摺目21本単位 摺目幅やや広い 高台削り出しで、体部を垂直に切るのが特徴的	—	見込みに重ね焼き重畳付の外端が重ね焼き時の液のため歪む	胎土が特徴的 1号溝18図10と同一個体	須佐唐津系	19c 20c 前葉
2号溝 26図8 図版7	小鉢	口径(17.1) 高台径(8.6) 器高15.4	陶器 黄白色 金雲母入る 軟質 土師質に近い	黒釉を内面口縁部から外面部下位まで薄く掛ける	見込み中央に穿孔あり 高台削り出しで、弧形の透かし穴あり	—	高台釉剥ぎ		産地不明	19c 20c 前葉
2号溝 26図9 図版7	大鉢	口径(24.8) 高台径(16.0) 器高19.8	陶器 明黄褐色 白色 粒子多い 粗放	濃灰褐色を呈する薬灰釉を内面口縁部から外面に掛ける	見込み中央に穿孔あり 弧形の透かし穴あり	—	見込みに重ね焼き痕跡あり 底部の中央が下がるのは重ね焼きした別個体を置いた重みのためだろう 高台内に胎土目付着		小石原系	19c 20c 前葉
2号溝 26図10	中鉢	口径(47.0)	陶器 明茶褐色	暗茶褐色を呈する鉄釉を全面に掛ける	外面口縁下に刻目突帯・胴中位に断面三角形の波状突帯貼り付け	—	不明	口縁形は高取・小石原系の壺に多い特徴	小石原系	19c 20c 前葉
2号溝 26図11 図版8	中壺	口径(29.0) 最大径(32.8)	陶器 灰色 やや軟質 白色粒子多い	淡緑灰色を呈する薬灰釉を全面に掛ける	外面肩部に鉄釉を流し掛ける 口縁内側を肥厚して口唇部平坦面を流し掛ける	—	不明		肥前系か	19c 中葉 20c 第四期
2号溝 26図12 図版8	器種不明	最大径(14.8)	土師器 黄褐色 金雲母・ 角閃石入る 軟質	赤色顔料のスリップを内面口縁部から外面に掛ける	外面はスリップを掛けたのち波状文を凹線で施文	—	不明		在地系か	19c 20c 前葉

表5 2次調査2号溝状遺構出土遺物観察表(2)



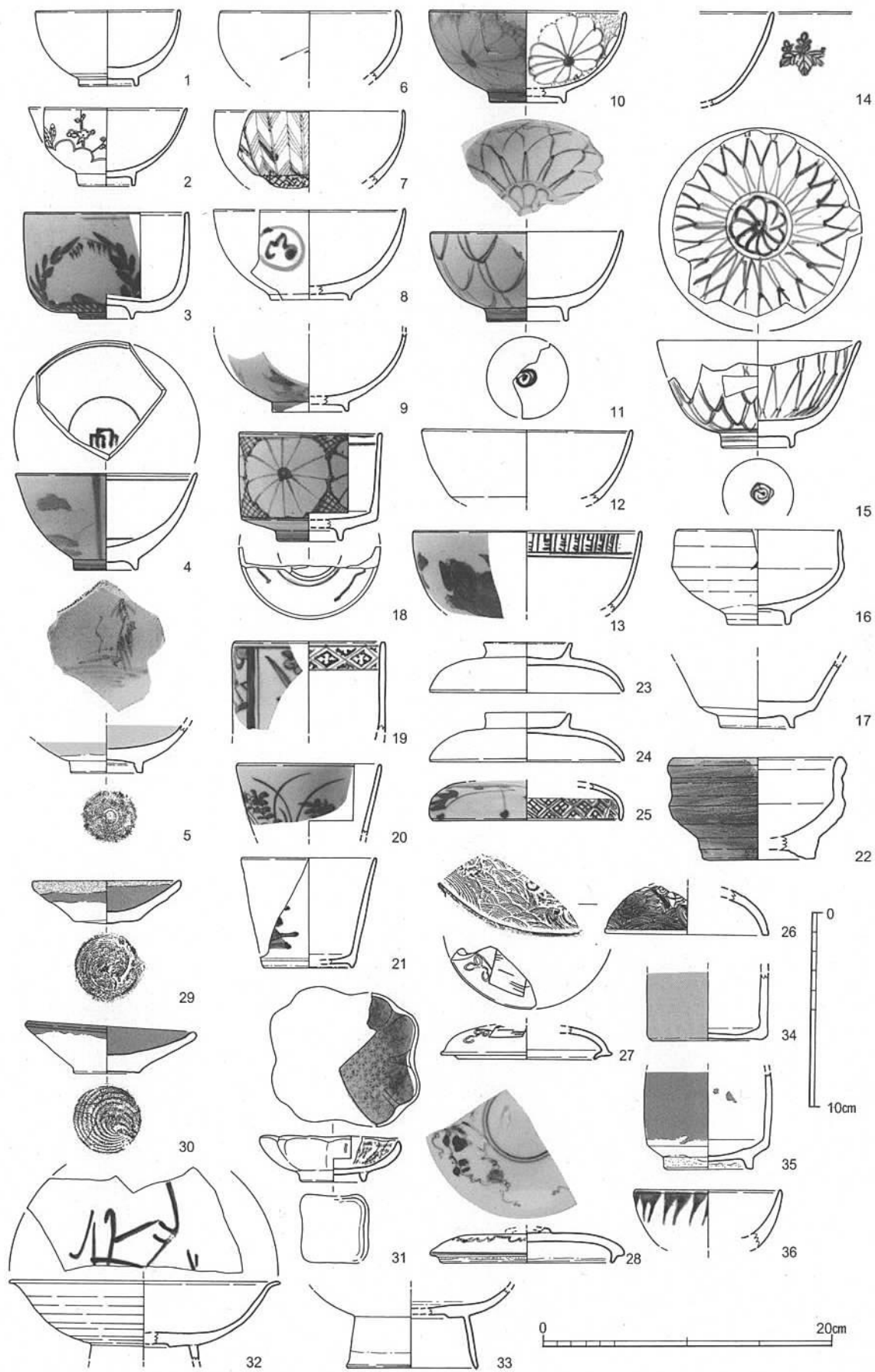
第25図 2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(1/3)



第26図 2次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(2は1/3、他は1/4)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・裝飾技法	窯詰技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
5号溝 27図1	小碗 丸形	口径(7.6) 底径3.2 器高3.9	磁器(染付) 灰白色	青みがかった 乳白色の透明 釉 全面	外面胴下位と高台に手描き呉須染付による界 線2条	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着 見込みに灰被り	大きさが窯の谷窯 で多く作られた小 碗に近い	肥前系	1700 / 1740
5号溝 27図2	小碗 丸形	口径(8.4) 高台径2.8 器高4.1	磁器(色絵) 白色	透明釉 全面	外面は赤彩による梅樹文の上絵付け 赤彩は 剥落している	畳付釉剥ぎ 見込みに砂目跡		肥前系	不明
5号溝 27図3	小碗	口径(8.6) 高台径(3.0) 器高5.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付による草花文と口縁部に1条 界線	畳付釉剥ぎ	焼成時の歪みあり	肥前系	1700 / 1740
5号溝 27図4	中碗 丸形	口径(9.4) 高台径(3.4) 器高5.0	磁器(色絵) 灰白色 黒色粒 子多い	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による方形区画中の草 花文と高台に2条界線 内面は口縁部に2条 界線 見込みに1条界線内の源氏香文	畳付釉剥ぎ		肥前系 波佐見か	1680 / 1740
5号溝 27図5	中碗	高台径2.1	陶器 黄白色 軟質	黄白色の灰釉 畳付・高台内 露胎	高台削り出しで、外底に沈線あり	不明	京焼き風陶器	肥前系	18c 前葉
5号溝 27図6	中碗 半球形 小丸碗	口径(9.5)	陶器 灰黄色 やや軟 質	低火度の透明 釉 貫入あり やや発色悪い	外面に崩れた鉄絵の山水文	不明	京焼き風陶器	肥前系	18c 前葉
5号溝 27図7	中碗 半球形 小丸碗	口径(10.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による矢羽文と氷裂文	不明		肥前系	1710 / 1740
5号溝 27図8	中碗 半球形 小丸碗	口径(10.0) 高台径4.1 器高4.65	磁器(染付) 白色	青みのある透 明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による丸に崩れた「清」	畳付釉剥ぎ	志田西山1号窯の類 例より、「清」の字 の崩れが大きい	肥前系 嬉野市志田西山 1号窯	1710 / 1750
5号溝 27図9	中碗	高台径(4.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による若松文	畳付釉剥ぎ		肥前系	1710 / 1750
5号溝 27図10	中碗 浅半球形 小丸碗	口径(10.2) 高台径4.0 器高4.0	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は手描き呉須染付による菊花散らしと氷 裂文	畳付釉剥ぎ		肥前系	1710 / 1750
5号溝 27図11	中碗 浅半球形 小丸碗	口径(10.0) 高台径4.3 器高4.6	磁器(染付) 灰白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による刺筆で描いた二重 網目文と胴下位に2条、高台に1条界線 内面 は網目文 見込みに菊花文 裏銘は崩れた満福	畳付釉剥ぎ	菊花文の描き方が 嬉野町吉田2号窯 に近い	肥前系	1700 / 1750
5号溝 27図12	中碗	口径(11.0)	陶器 にぶい灰褐色 硬質	黒釉 全面	—	不明		肥前系	不明
5号溝 27図13	中碗 腰張形	口径(11.8)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による獅子文と草花文 内面はモチーフ化した梵字文様帯	不明		肥前系	18c 中葉 か
5号溝 27図14	中碗	復元不能	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面はコンニャク印判呉須染付による桐文	不明		肥前系	1700 / 1750
5号溝 27図15	中碗 浅半球形	口径10.5 高台径3.5 器高5.5	磁器(染付) 白色	青みがかった 透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による刺筆で描いた二重 網目文と胴下位に1条、高台に2条界線 内面 に網目文 見込みに菊花文 裏銘は崩れた満福	畳付釉剥ぎ	菊花文の描き方が 嬉野町吉田2号窯 に近い	肥前系	1700 / 1740
5号溝 27図16	中碗 腰折形 腰折碗	口径(8.6) 高台径3.2 器高4.9	陶器 灰黄色 硬質で 半磁器質	低火度の透明 釉 貫入あり 畳付・高台内露胎	外面は鉄絵による山水文か 高台削り出し	—	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山1 号窯に類例あり	18c 前葉
5号溝 27図17	中碗 朝顔形	高台径(4.0)	磁器(白磁) 白色	低火度の透明 釉 貫入あり 畳付・高台内露胎	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	1740 / 1750
5号溝 27図18	中碗 筒形 筒形碗	口径(7.4) 高台径3.5 器高5.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による菊花散らしと格 子文 内面口縁部に2重界線 底部になんら かの文様	畳付釉剥ぎ		肥前系	1770 / 1780
5号溝 27図19	中碗 筒形 筒形碗	口径(8.0)	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による区画内花文 内 面は口縁部に四方禪文様帯	不明		肥前系	1740 / 1780
5号溝 27図20	猪口	口径(7.6)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による草葉文	不明		肥前系	不明
5号溝 27図21	猪口	口径(7.1) 高台径4.6 器高5.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染付による山水文と2条界 線	畳付釉剥ぎ		肥前系	1750 / 1780
5号溝 27図22	鉢 火入れ・ 香炉	口径(9.4) 高台径5.8 器高5.3	陶器 茶褐色 混人物少な いざっくりした胎	鉄釉(外面) 暗茶褐色 透明釉(内面)	体部は鉄製の刷毛目文を斜めに施す 内面は 回転ナデ 高台削り出し	高台外面に胎土 目跡		肥前系	不明
5号溝 27図23	碗蓋	口径(10.1) つまみ径(4.7) 器高2.6	磁器(白磁) 白色	透明釉	—	つまみ畳付釉剥 ぎ		肥前系	1730 / 1740
5号溝 27図24	碗蓋	口径(10.1) つまみ径(4.7) 器高2.5	磁器(白磁) 白色	透明釉	—	つまみ畳付釉剥 ぎ		肥前系	1730 / 1740
5号溝 27図25	碗蓋	口径(10.0)	磁器(染付) 白色	透明釉	外面は手描き呉須染付による中国風の城塞と 旗 内面は口縁部に四方禪文様帯	不明		肥前系	1770 / 1780
5号溝 27図26 図版7	合子蓋	口径(8.4)	磁器(白磁) 白色	透明釉	外面は型打ち成形で印刻された青海波文と女 性(髪は黒の上絵付、波と着物は褪色してい る)	合子の身と重な る内面裾部を釉 剥ぎ	海中の髪を結つて いない女性像	肥前系	不明
5号溝 27図27	鉢蓋	口径(7.2)	磁器(赤絵) 白色 黒色粒 子あり	透明釉	外面は枝葉文と草紙文か 枝葉文は緑(褪色)、 草紙文は赤の上絵付	身と重なる内面 裾部を釉剥ぎ		肥前系	1700 / 1780
5号溝 27図28	鉢蓋	口径(9.0)	磁器(染付) 白色	透明釉	外面は手描き呉須染付によるつる草文と天井 部は2条界線内に帯状つまみ	身と重なる内面 裾部を釉剥ぎ 砂目付着		肥前系	1700 / 1780
5号溝 27図29	小皿	口径(7.8) 底径3.4 器高2.2	陶器 焼成不良のため 橙褐色	鉄釉を内面から 外面中位までかける 発色不良	外底糸切り	胎土目跡見られ ない 体部下外 面にアルミナ付 着	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市麩屋B窯 に近い	1690 / 1750
5号溝 27図30	小皿	口径(9.0) 底径3.4 器高2.7	陶器 赤茶褐色 白色微粒子あり	鉄釉を内面から 外面口縁部 までかける	外底糸切り	外底部に胎土目 跡あり	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市麩屋B窯 に類例あり	1690 / 1750
5号溝 27図31	変形皿 手塩皿	長軸(8.6) 短軸(7.7) 器高2.4	磁器(染付) 白色	青みがかった 透明釉 全面	糸切り成形 型刷り呉須染付によるダミに よる斜格子文	畳付釉剥ぎ	口縁部に煤付着 灯明皿として使用	肥前系 武雄市麩屋窯に 類例あり	1690 / 1750
5号溝 27図32	高台付杯	口径(18.6)	陶器 灰黄色 硬質で半 磁器質 貫入あり	低火度の透明 釉	外面は鉄絵による山水文か 底部を基筒底に 削り出す	不明	京焼き風陶器	肥前系 嬉野市志田西山1 号窯に類例あり	1690 / 1780

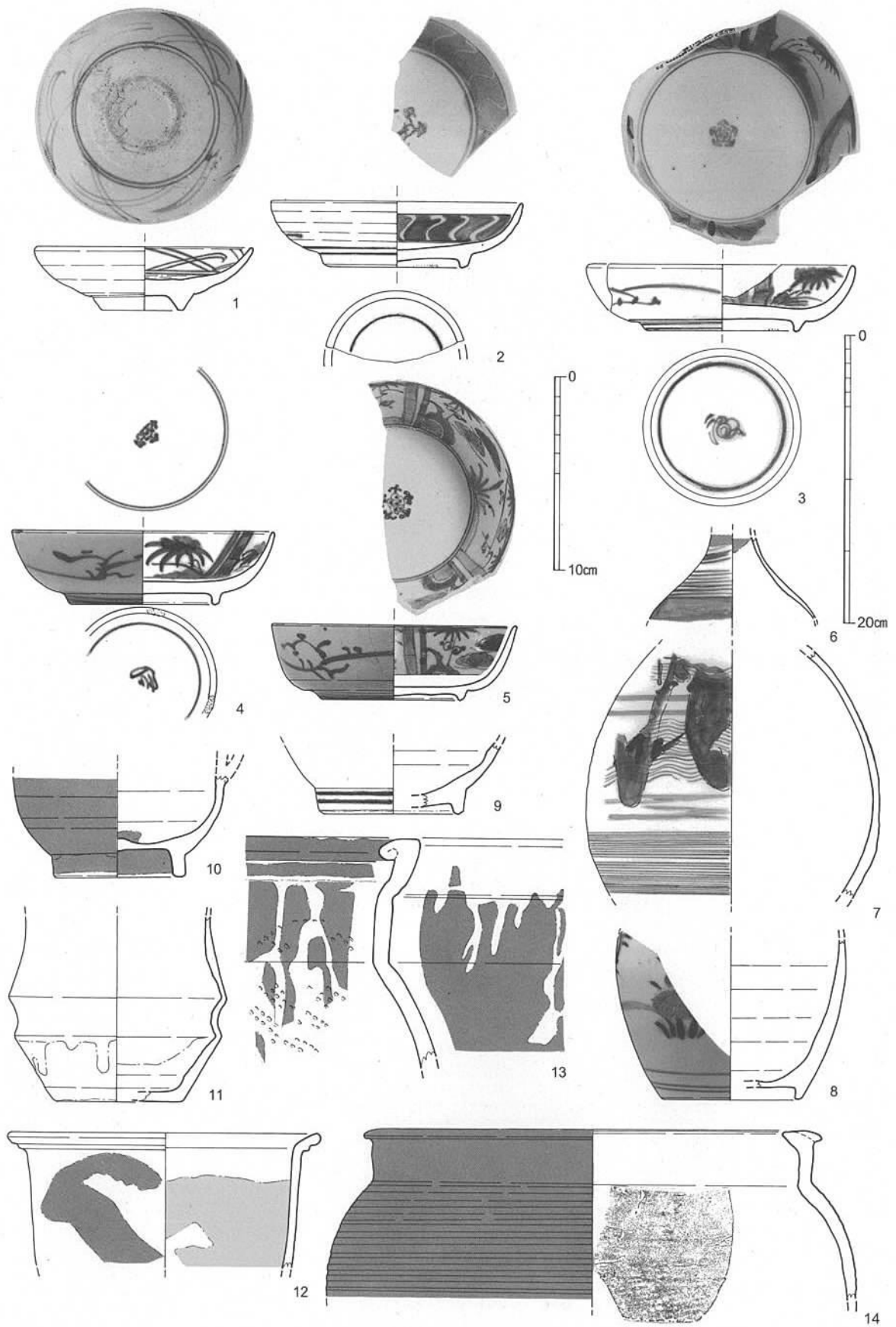
表6 2次調査5号溝状遺構出土遺物観察表(1)



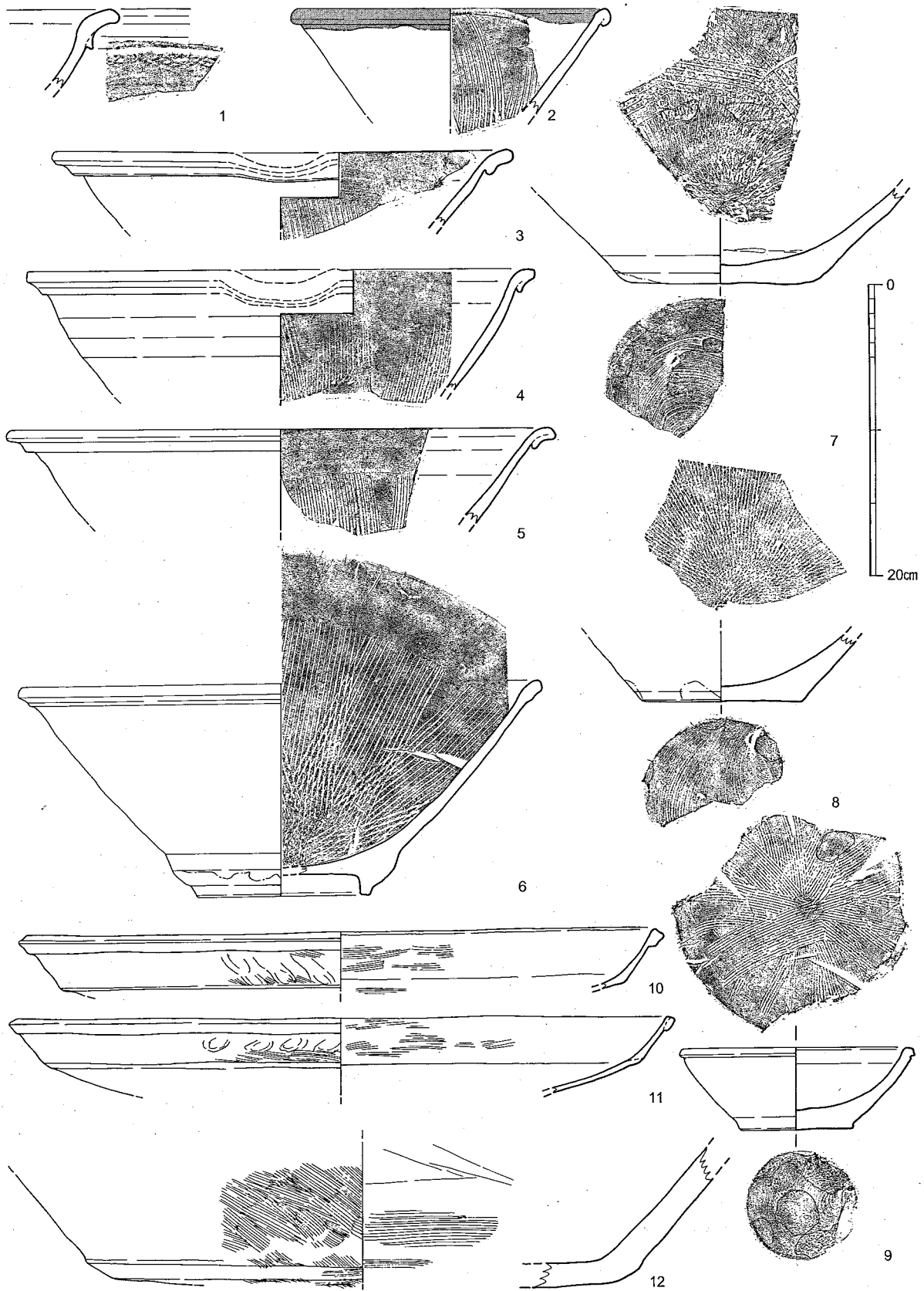
第27図 2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1 (32・33は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・裝飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
5号溝 27図33	高台付杯	高台径(9.0)	陶器 灰黄色 硬質で半 磁器質 貫入あり	低火度の透明 釉	底部を基筒底に削り出す	見込みに蛇の目 釉剥き 高台裾 は釉剥き	京焼風陶器	肥前系 埴野市志田西山1 号窯に類例あり	1690 1780
5号溝 27図34	瓶か	底径6.2	磁器(青磁) 白色	外面のみ	鉄灰塗布	不明	内面露胎で軸垂れが ないので、口縁部は 狭まっているか	肥前系	不明
5号溝 27図35	小壺 肩衝形 茶入れ	高台径4.6	陶器 にぶい灰褐色	黒釉を外面体 部下位まで	高台削り出し	高台にアルミナ 附着		肥前系	不明
5号溝 27図36	仏飯器	口径(7.8)	磁器(染付) 灰白色	透明釉	雨降り文具須手描き染付	不明		肥前系 武雄市妻屋窯に 類例あり	1690 1780
5号溝 28図1	五寸皿	口径(17.8) 底径11.0 器高3.0	磁器(染付) 乳白色	透明釉	内面は手描き呉須染付による割筆で描いた二 重網目文 胴下位に2条界線	見込みに蛇の目 釉剥き 畳付は 釉剥き砂目付着	完形品	肥前系 埴野市長田山 窯	1750 1810
5号溝 28図2	五寸皿	口径(13.0) 底径(7.5) 器高3.4	磁器(染付) 灰白色	透明釉	外面は手描き呉須染付による2条界線 内面 は墨弾きによる絵文 見込みにコンニャク印 判による五弁花文 高台は1条界線	畳付釉剥き 砂 目付着		肥前系 波佐見か	1680 1740
5号溝 28図3	五寸皿 なまけい 深皿	口径(14.0) 底径8.0 器高3.5	磁器(染付) 白色 黒色粒子 あり	透明釉	外面は手描き呉須染付による唐草文と体部下位と高台下位 に2条界線 内面は竹笹文 見込みにコンニャク印 判による五弁花文 外底はカンナ痕あり 1条界線内満福	畳付釉剥き 砂 目付着		肥前系 波佐見か	1680 1740
5号溝 28図4	五寸皿 なまけい 深皿	口径(13.5) 底径(7.7) 器高3.8	磁器(染付) 緑灰白色 黒色 粒子多い	透明釉	外面は手描き呉須染付による唐草文と体部下位に1 条、高台下位に2条界線 内面は竹笹文 見込みに 手描きによる五弁花文 裏銘は1条界線内満福	畳付釉剥き 一 部砂目付着		肥前系	1740 1780
5号溝 28図5	中鉢 なまけい 深皿	口径(12.6) 底径7.0 器高3.9	磁器(染付) 白色	透明釉 貫入あり	外面唐草文 体部下位に1条、高台下位に2 条界線 内面に竹笹文 見込みに手描きによる 五弁花文	畳付から高台内蛇 の目釉剥き 畳付 に一部砂目付着	裏銘が長与皿山窯 に近く、胎が特徴 的	肥前系 埴野市長与町 長与皿山窯	1680 1740
5号溝 28図6	中瓶	小片のため 数値なし	陶器 にぶい橙灰色		外面は頸部に白化粧土を刷毛目状に施し、透明釉掛ける 内面は露胎 口縁部は内外鉄釉	不明		肥前系	1690 1780
5号溝 28図7 図版7	大瓶 二彩唐津	最大径(20.2)	陶器 やや軟質の橙褐 色		外面の下半は鉄灰を刷毛目状に施釉、上半は白化粧土を掛け た後条線文状に拭き取り、その後波状に拭き取る その上に 緑釉の流し掛け 内面は回転ヘラケスリで露胎	不明		肥前系 埴野市志田西山1 号窯に類例あり	1690 1780
5号溝 28図8	中瓶	最大径(12.0) 高台径(7.2)	磁器(染付) 白色 貫入あり	透明釉	外面は手描き呉須染付による花草文 体部下 位に1条、高台下位に2条界線 内面回転ナ デ 底部削り出しで基筒底	畳付釉剥き		肥前系	18c後半
5号溝 28図9	中瓶	高台径(7.5)	磁器(染付) 焼成不良のため にぶい黄灰白色	透明釉だが、 発色不良のため にぶい乳白色	外面は手描き呉須染付による高台の2条界線 外面回転ヘラ削り	畳付釉剥き		肥前系	不明
5号溝 28図10	中瓶 油徳利	最大径(10.8) 高台径(6.5)	陶器 暗紫灰色	褐釉 外面塗布 内面露胎	胴中位に棒状把手あり 底部削り出し	畳付にアルミナ 附着		肥前系	不明
5号溝 28図11	中瓶	最大径15.0 底径8.4	陶器 にぶい灰黄色	胎釉 外面塗布 内面露胎	外面は底部ヘラ切りか	底部釉剥き	1号大土坑10図20 と同一個体の可能 性あり	高取	不明
5号溝 28図12	小型壺 半胴壺	口径(21.6)	陶器 灰色と黄褐色が混じり 白色粒子を含む 軟質	白化粧土を外面から内 面頸部まで掛ける 内 面中位以下は鉄釉	外面は鉄絵による松文	不明		肥前系	不明
5号溝 28図13	大壺 ハンズーガメ	復元不能	陶器 赤茶褐色	薄い鉄釉 全面 上半部に白土掛け 口唇部白土ふき取り	口唇部折り曲げ 内面にタタキ当て具痕残る 外面のタタキ痕ナデ消し	不明	1号大土坑10図19 と同一個体の可能 性あり	肥前系	18c前半
5号溝 28図14	中壺	口径(31.6)	陶器 赤褐色	薄い鉄釉 外面 内面露胎	外面の頸部から肩部に凹線帯 口唇部肥厚 タタキ当て具痕残る	口唇部釉剥き		肥前系 武雄市妻屋1~4 号窯に類例あり	17c後半
5号溝 29図1 図版7	摺鉢	復元不能	陶器 暗紫灰色	暗灰褐色の厚 い鉄釉 全面 光沢なし	外面の体部をタタキ成形後、口縁下に突帯を 貼り付けてナデ	不明	口縁部のみ施釉の 特徴から妻屋窯の 可能性高い	肥前系 埴野市志田西山1 号窯に類例あり	1690 1750
5号溝 29図2	小型摺鉢	口径(22.0)	陶器 暗赤紫色	内外鉄釉の上に 口縁部のみ黒茶 褐色の鉄釉	口唇部肥厚 摺目上端未処理 摺り目9本単 位 ロクロ成形 ヨコナデ	不明	口縁部のみ施釉の 特徴から妻屋窯の 可能性高い	肥前系 武雄市妻屋窯か	1650 1690
5号溝 29図3	摺鉢	口径(31.8)	陶器 赤茶褐色	暗灰褐色の鉄 釉 全面 光 沢あり	口唇部折り曲げ ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目16本以上	不明		肥前系	1750 1860
5号溝 29図4	摺鉢	口径(37.6)	陶器 赤紫灰色	暗灰褐色の厚 い鉄釉 全面 光沢あり	口唇部折り曲げ ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目13本単位 深く施 文	不明		肥前系	1750 1860
5号溝 29図5	摺鉢	口径(37.6)	陶器 赤茶褐色	暗灰褐色の鉄 釉 全面 光 沢あり	口唇部折り曲げ ロクロ成形 外面ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目15本単位 深く施 文	不明		肥前系	1750 1860
5号溝 29図6	摺鉢	口径(35.8) 高台径(12.0) 器高14.5	陶器 赤茶褐色	暗灰褐色の薄 い鉄釉 全面 光沢なし	口唇部肥厚 ロクロ成形 外面ヨコナデ 内 面摺目上端ナデ揃え 摺り目17本単位	不明	外面は鉄釉を刷毛 目状に粗く塗布し 上半のみ重ね塗り	肥前系	1750 1860
5号溝 29図7	摺鉢	底径(12.6)	陶器 赤茶褐色	無釉	ロクロ成形 ヨコナデ 内面摺目上端ナデ揃 え 摺り目12本単位	底部縁に胎土目跡 3箇所、見込みに 胎土目跡3箇所		肥前系	不明
5号溝 29図8	摺鉢	底径(11.0)	陶器 灰紫色~灰茶褐 色 硬質	薄い鉄釉 全面 口縁部のみ鉄釉施 釉タイプだろう	ロクロ成形 ヨコナデ 摺目上端ナデ揃え 摺り目16本単位	底部縁に胎土目 跡3箇所	口縁部のみ施釉の 特徴から妻屋窯の 可能性高い	肥前系 武雄市妻屋窯か	不明
5号溝 29図9 図版8	小型摺鉢	口径(16.0) 高台径(7.8) 器高5.6	陶器 やや軟質 にぶ い明褐色	暗灰褐色の薄 い鉄釉 全面 光沢なし	口唇部肥厚 ロクロ成形 ヨコナデ 摺目上 端ナデ揃え 摺り目16本単位	底部縁と中央に胎土 目跡5箇所 見込 み中央に胎土目跡	外底面を釉剥きし ていない 1/8 残存	小石原系か	不明
5号溝 29図10	焙烙	口径(42.8)	土師器 精良 金雲母多い にぶい黄灰褐色	—	接合部押さえの後粗いハケ 口縁突帯貼付け 内面は丁寧なヨコハケ	不明	外面煤附着	在地系	不明
5号溝 29図11	焙烙	口径(45.5)	土師器 精良 金雲母多い にぶい黄灰褐色	—	外面は接合部押さえの後粗いハケ 口縁突帯 貼付け 内面は丁寧なヨコハケ	不明	外面煤附着	在地系	不明
5号溝 29図12 図版8	大壺	底径(38.0)	土師器 精良 金雲母多い にぶい黄灰褐色	—	外面斜め方向のハケ 内面ヨコハケ 底部に もハケあり	不明	内外変色や器面の 荒れがない	在地系	不明
5号溝 30図1	鉢 火鉢か	復元不能	瓦質土器 軟質 灰白色 金雲母目立つ	—	内外ヨコナデ 内面は使用のため器面摩滅	不明		在地系	不明
5号溝 30図2	鉢 火鉢か	復元不能	瓦質土器 軟質 暗灰色 金雲母目立つ	—	外面ヨコナデ 内面ヨコハケのちナデ	不明		在地系	不明

表6 2次調査5号溝状遺構出土遺物観察表(2)



第28図 2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2 (6・7・11~14は1/4、他は1/3)



第29図 2次調査5号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図3(1/4)

2号溝状遺構 (図版6・7・9・10)

24図21の上絵付けの「肥」という銘は、浮羽市日誌遺跡2号調査3号攪乱坑に類例が見られる。ゴム印判の飯碗と共伴しており、統制番号が付いていないが戦時統制期のものと考えられる。

24図25には1号溝22図3のタイプの蓋がつく。浮羽市堂畑遺跡2区にセットの出土例あり。38図5は上面の中央に融着のない部分が帯状にある。何かに接していたようだが、他のものと異なり全面に融着があり、接した面も焼けている。

40図1～3は個体の平坦な部分を積み上げており、積み上げた側面の一面が焼けているので、複数積み上げて鍛冶炉の熱を避けるための炉壁のようなものか、あるいは小型の窯の壁かもしれない。

41図18・20の戸車はアルミナが付着する面がある。窯道具として使用した例があることから、釉着防止のためのものであろう。側面が摩滅しているので、窯道具として使用しつつ、戸車として出荷したものと思われる。

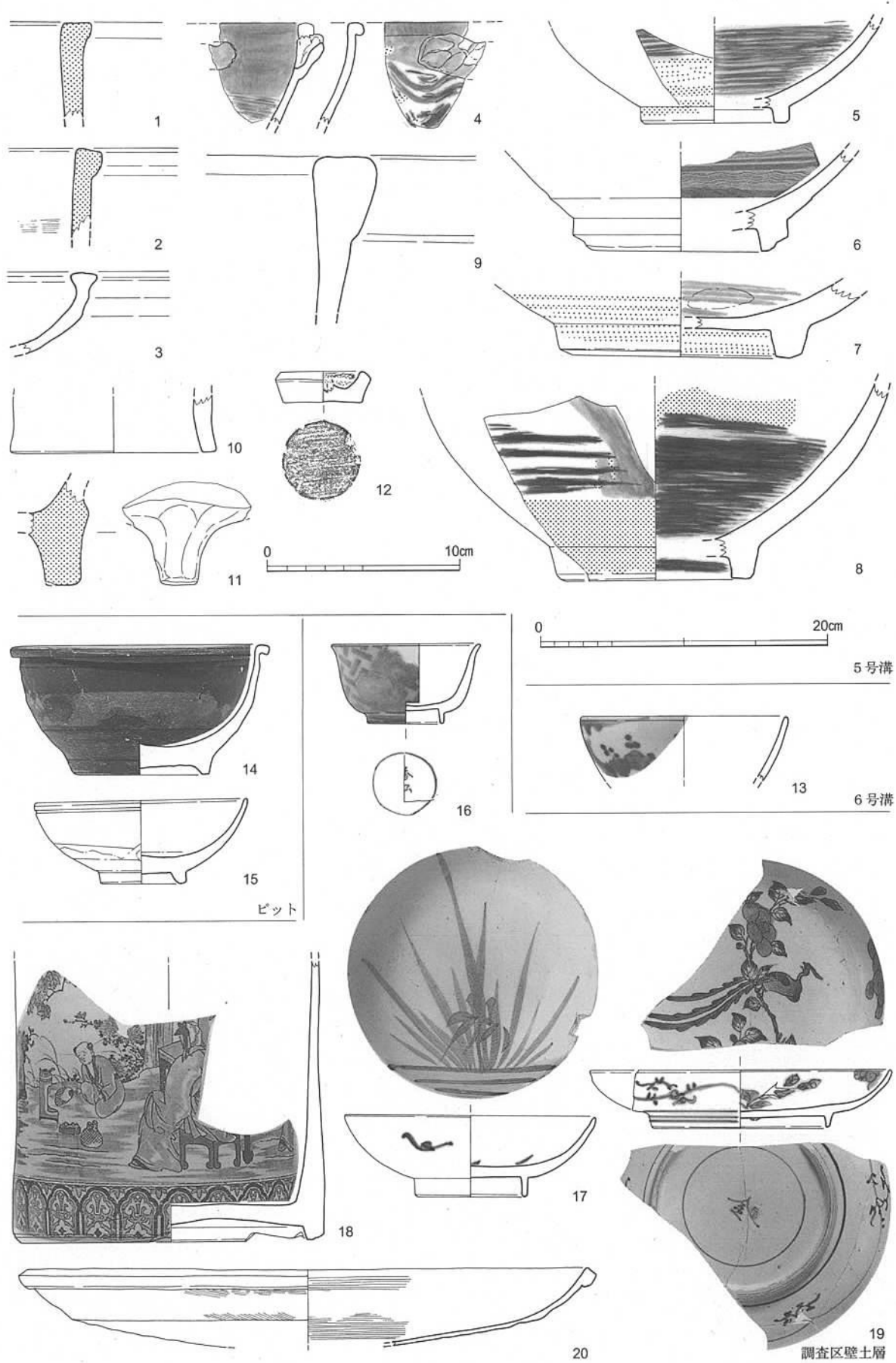
5号溝 (図版7～10)

39図16は他のサナ土製品とは厚さや火熱による融着が異なっており、七輪のサナそのものである。40図10は9のような器形になると思われる。口縁下に穿孔があるが、機能がわからない。固体するためのものだろうか。40図11は、下面外面が斜めに削られており、下面に融解物がかぶっていることから、本来下方が空いていた甌のような器形を想定している。

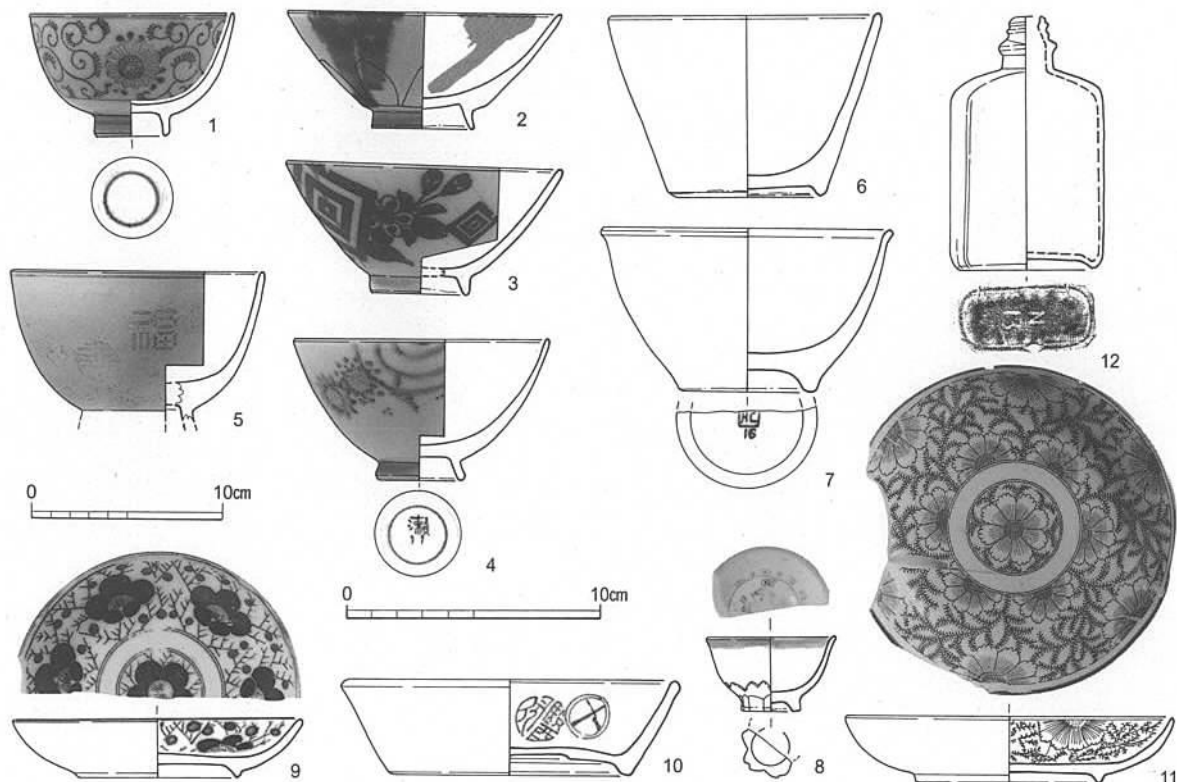
43図1は桁に挿し込み床の間など小空間を仕切る板の柱材と推定した。

遺構名 挿入番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
5号溝 30図3 図版8	鉢	復元不能	陶器 灰黄色 やや軟質	低火度の透明釉 全面 貫入あり やや発色悪い	外面ヨコナデの稜あり	不明	口縁形態が肥前系の 摺り鉢に近い	産地不明	不明
5号溝 30図4	鉢 片口	復元不能	陶器 にぶい灰紫色 やや 軟質 白色粒子あり	灰黄緑色の灰釉を 全面掛けた後、外面は 白化粧土を条線文状に 拭き取り、その上に 白化粧土の刷毛目文を 1本づつ施文 片口部 は粗いオサニ後未調整 内面下半部は白化粧土 の刷毛目状施文	外面は白化粧土を条線 文状に拭き取り、その 上に白化粧土の刷毛目 文を1本づつ施文 片口 部は粗いオサニ後未調整 内面下半部は白化粧土 の刷毛目状施文	不明	30図5と同一個体の 可能性あり	肥前系 嬉野市内野山西窯に 類例あり	1690 1750
5号溝 30図5	中鉢 片口	高台径(10.4)	陶器 にぶい灰紫色 やや 軟質 白色粒子あり	灰黄緑色の灰 釉 全面	外面は上半部は白化粧土 の波状拭き取り、下半 部は鉄漿の刷毛目文 内 面は下半部は白化粧土 の波状刷毛目文	壺付から高台内 は露胎	30図4と同一個体の 可能性あり	肥前系 嬉野市内野山西窯に 類例あり	1690 1750
5号溝 30図6	大鉢	高台径(12.3)	陶器 橙褐色 やや軟質 白色粒子多い	—	外面はヨコナデの痕跡 著しい 内面は白化粧土 を帯状に拭き取ったのち 波状に拭き取り高台外 縁斜め切り落とし	見込みに胎土目 跡あり	胎は志田西山窯に 近い	肥前系	1690 1750
5号溝 30図7	大鉢	高台径(17.0)	陶器 橙褐色 やや軟質 白色粒子多い	不明	外面から外底は鉄漿の 刷毛目文 内面から見 込みは白化粧土の波状 拭き取り	見込みに胎土目跡 あり 壺付露胎 壺付 に胎土目跡付着		肥前系	1690 1750
5号溝 30図8	中壺 半周壺	高台径(13.3)	陶器 暗茶褐色 白色 粒子 硬質	—	中位は白化粧土の帯状 拭き取り、その上に鉄 釘による松文を施文 下位は鉄釘上掛け 内面の下位は鉄漿の粗 い刷毛目文、中位は鉄 釘上掛け	見込みに胎土目跡 あり 壺付露胎 壺付 に胎土目跡付着	器壁が厚い 胎土が特徴的	肥前系	19c
5号溝 30図9 図版8	大壺	復元不能	土師器 金雲母多い やや 硬質 明橙白色	—	内外ヨコナデ	不明	内外変色・付着物 なし 器面の荒れ あり	在地系	不明
5号溝 30図10	高台付鉢 火鉢か	高台径(14.2)	瓦質土器 軟質 灰黒色 金雲母なし	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
5号溝 30図11	脚付鉢 火鉢か	高台径(14.2)	瓦質土器 軟質 橙灰色 金雲母多い	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
5号溝 30図12 図版7	灯明皿	口径4.5 高台径4.3	土師器 軟質 黄白色 精 良 金雲母なし	—	内外ヨコナデ	不明	内面煤付き	柳川市蒲池焼	不明
6号溝 30図13	中碗	口径(10.6)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	外面は手描き呉須染 付による草花文	不明		肥前系	1700 1740
ピット1 30図14	小鉢 火入れ・香炉	口径(13.2) 高台径6.7 器高7.0	陶器 橙茶褐色 混入物少 ないざっくりした胎	暗茶褐色の厚い 鉄釉 外面中位 から内面まで	外面の体部下 半は鉄釉の刷毛目文 口縁折り曲げて外反 高台削り出し	壺付から高台外 面露胎 口唇部 釉剥ぎ		肥前系	不明
ピット6 30図15 図版8	小皿	口径11.0 高台径4.4 器高4.3	陶器 灰白色 軟質	明灰緑色の低火度の 透明釉 貫入あり 壺付・高台内露胎	口縁下に沈線あり	見込みに蛇の目 軸剥ぎ	完形品	肥前系 嬉野市内野山北窯に 類例あり	不明
調査区西壁2層 30図16	小杯 端反形 端反杯	口径(7.8) 高台径(4.0) 器高4.15	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は銅版転写コバル ト染付による籠目文の 地文に牡丹文 裏銘は 1条界線内「香松」	壺付軸剥ぎ		肥前系 瀬野市内野山北窯に 類例あり	不明
調査区西壁2層 30図17 図版8	五寸皿	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高3.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 発色不良で乳 白色を呈す	外面は手描き呉須染 付による簡略化した烏 文 見込みは菖蒲文	壺付軸剥ぎ		不明	不明
調査区西壁2層 30図18	火鉢	高台径21.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 外面 内面・高台内 露胎	外面は銅版転写コバル ト染付による唐山水 文・連弁文 高台にM 字形の透かし穴	壺付軸剥ぎ	1号溝21図12と 同一個体の可能性 高い	肥前系	不明
調査区東壁 30図19 図版8	五寸皿	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高3.7	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	透明釉 全面 青味がかつた透 明釉 貫入あり	外面は手描き呉須染 付による唐草文と体 部下位に2条、高台に 2条界線 見込みに孔 雀文 裏銘は1条界線 内「金」	高台内ハリ目跡		肥前系	18c後半 19c前半
調査区東壁 30図20	焙烙	口径(40.0)	土師器 精良 金雲母多 い ぶい黄灰色	—	口縁突帯貼付け 外 面は接合部押さえの 後粗いハケ 内面は 丁寧なヨコハケ	不明	外面煤付き	在地系	不明

表7 2次調査5・6号溝状遺構、ピット・調査区壁面出土遺物観察表



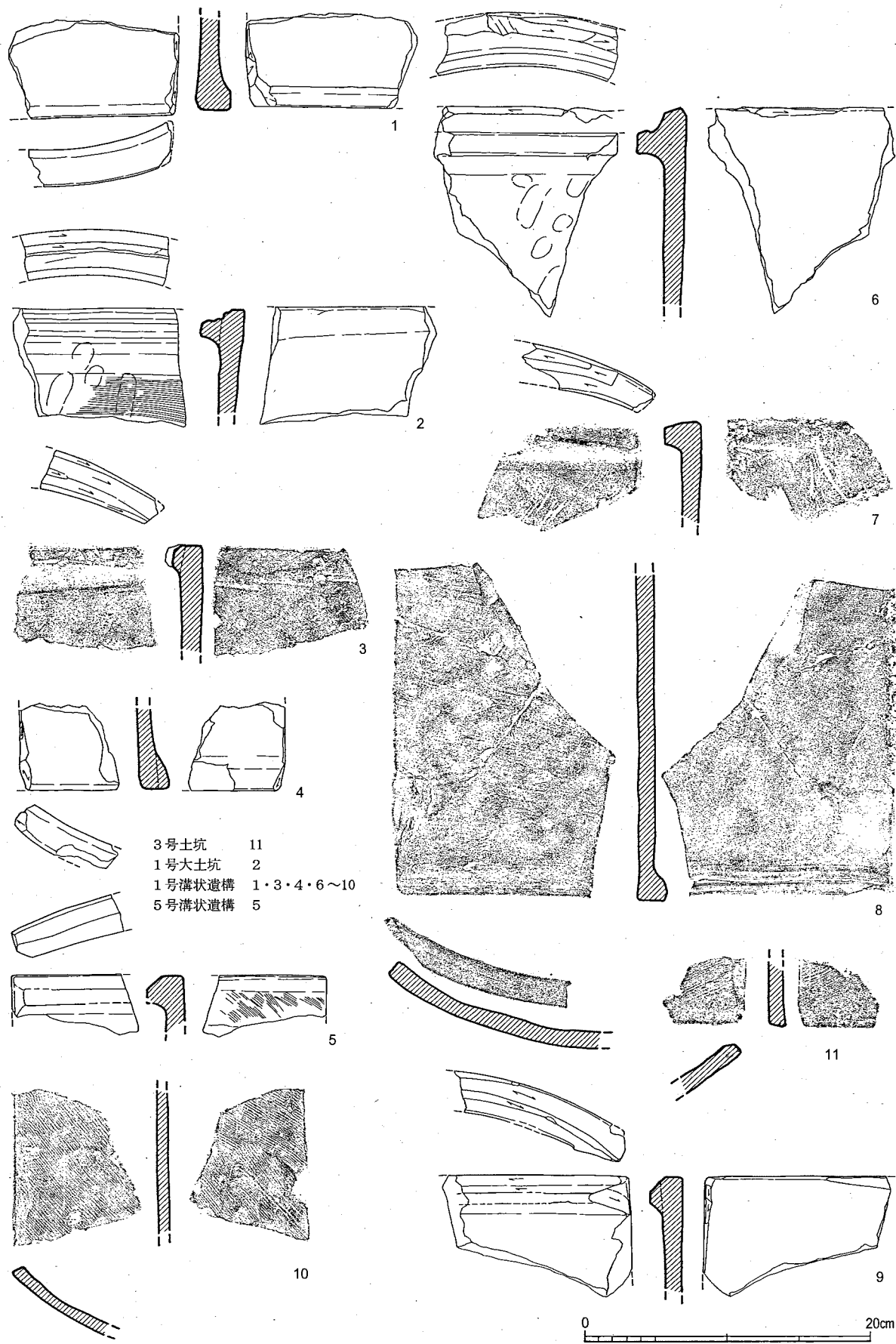
第30図 2次調査5・6号溝状遺構、ピット、調査区壁土層出土土器・陶磁器実測図(5~10・18~20は1/4、他は1/3)



第31図 2次調査客土出土磁器実測図(5は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
客土中 31図1 図版8	小杯 丸腰湯呑み	口径8.0 高台径3.0 器高4.8	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面は高台に2条界線と界線間にゴム印判コバルト染付による唐草花文。外底は高台内1条界線。高台削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第2 四半期
客土中 31図2 図版8	中碗 八角面取り 平碗	口径11.0 高台径3.2 器高4.6	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	内外鉄釉の流し掛け。高台削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1 四半期
客土中 31図3	中碗 飯碗	口径11.0 高台径3.9 器高4.2	磁器(染付) ガラス質 灰白色	やや暗い透明 釉 全面	外面は銅版転写コバルト染付による多重四角文・桜花文	畳付釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前系	20c 第2 四半期
客土中 31図4	中碗 飯碗	口径(10.2) 高台径(3.6) 器高5.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	外面はゴム印判コバルト染付による花文・重弧文と手描きによる胴下位の1条界線。外底は1条界線内にゴム印判による「瀬11」。高台は削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸窯 統制番号の「瀬」から瀬戸窯とわかる	1941~1945年 戦時統制期
客土中 31図5	中鉢	口径(13.4)	磁器(染付) 白色	乳白色を呈する 透明釉 全面	外面は界線は手描き、「福」字は型紙刷りコバルト染付による。「壽」文と花文は型紙刷りの薄いコバルトによる染付。高台削り出し	不明	朝鮮半島向けの輸出品として製作されたもの	肥前系 鹿島市浜町皿山窯に類例がある	19c 末 20c 前半
客土中 31図6	中鉢 国民食器か	口径(10.8) 高台径(6.4) 器高7.2	磁器(白磁) 灰白色	透明釉 全面	高台削り出し	畳付釉剥ぎ	統制番号が付いていないが、国民食器か	肥前系	20c 第1四半期 20c 第2四半期
客土中 31図7	中鉢 国民食器か	口径(11.6) 高台径(5.6) 器高6.5	磁器(白磁) 灰白色	透明釉 全面	削り出し高台。裏銘はコバルトゴム印判染付による方形区画内に「肥」と16	畳付釉剥ぎ		有田・波佐見以外の肥前系「肥」の番号から	1941~1945年 戦時統制期
客土中 31図8	小杯 従軍記念	口径(5.2) 高台径(2.4) 器高2.9	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	型押し成形により高台部を桜花弁形に陽刻。口縁部は正円子を口紅状に施釉。内面から見込みに金彩上掛けでと読める。絵柄はトラックか	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1四半期 20c 第2四半期
客土中 31図9	小皿	口径(9.1) 高台径3.2 器高2.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面から見込みは界線間に銅版転写同色2回刷りコバルト染付による梅樹文。口唇部に口紅装飾(口錆・縁錆)	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1四半期 20c 第2四半期
客土中 31図10	小皿	口径(13.4) 高台径(9.6) 器高3.8	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	ゴム印判コバルト染付による交差した銃と部隊名?のマーク。蛇の目高台	蛇の目高台の外輪部釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1四半期 20c 第2四半期
客土中 31図11 図版8	小皿	口径13.0 高台径7.4 器高2.7	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面から見込みは銅版転写クロム染付による界線間の花文。口唇部に口紅装飾(口錆・縁錆)	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	20c 第1四半期 20c 第2四半期
客土中 31図12 図版8	小瓶	口径1.0 高台長軸5.2 高台短軸2.5	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	鋳出し成形か。裏銘は「N13」の刻印あり。刻印の意味不明。萐葎底	蛇の目高台の外輪部釉剥ぎ	完形	産地不明	不明

表8 2次調査客土出土磁器観察表

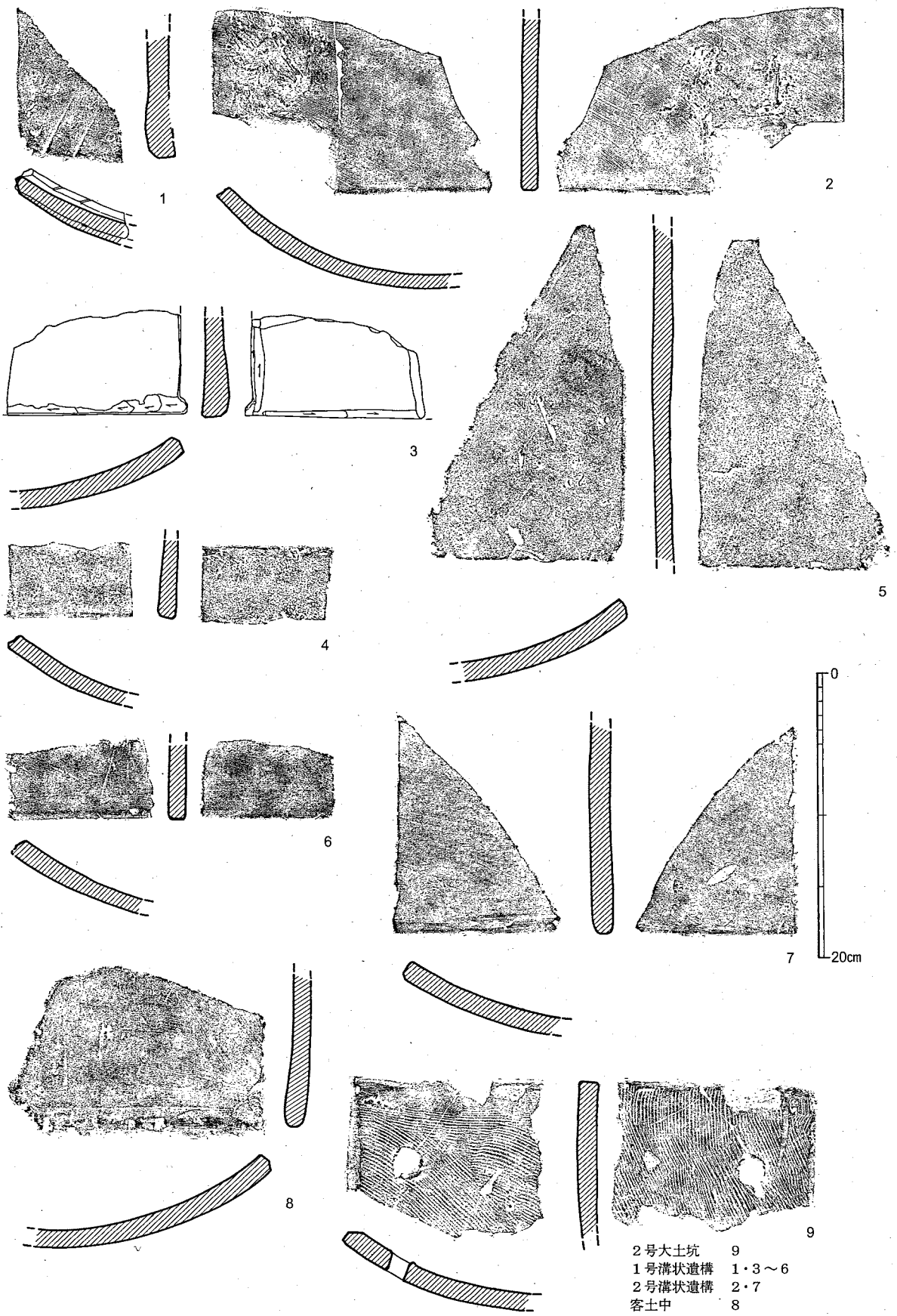


3号土坑 11
 1号大土坑 2
 1号沟状遺構 1・3・4・6~10
 5号溝状遺構 5

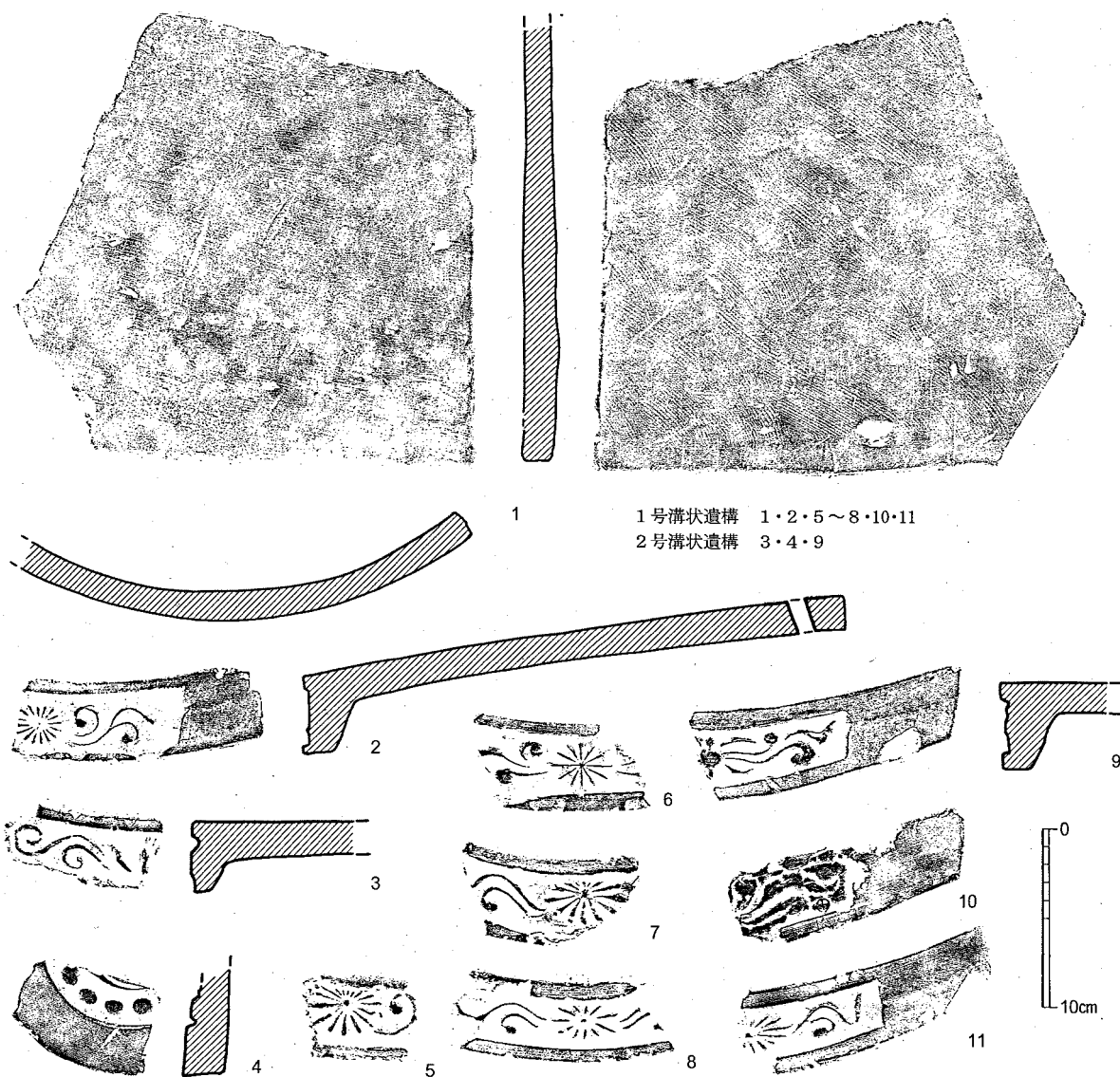
第32图 2次調査出土瓦実測図1(1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	色調	調整・成形・装飾技法				製作技法	所見	
					凹面	凸面	上端面・下端面	側端面		特記事項	推定産地
1号溝 32図1	平瓦	厚さ1.2~1.3 頸部の厚さ2.6	瓦質(土師質) 灰茶褐色 やや軟質 混入物多い	灰茶褐色	凹面ナデ、凸器面摩擦で調整不明 調整後側面をカット 側端面は凸面部分的に面取り 下端面は凹面ナデ面取り後ナデ	頸部接合後ナデ 角部は削り落とす	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は未調整	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
1号大土坑 32図2	平瓦	厚さ1.4~1.5 頸部の厚さ3.4	瓦質 暗灰色 やや軟質 混入物少ない	黒灰色~にぶい淡灰色	凹面ハケ、凸器面摩擦のため調整不明 下端面は凹面ナデ面取り	頸部接合後ナデ	不明	一枚作り	傾き不明瞭 凸面が摩滅しているため、凸面が上面	在地系	
1号溝 32図3	平瓦	厚さ1.3~1.7 頸部の厚さ2.7	瓦質 灰白~明灰色 やや軟質 角閃石目立つ	にぶい灰色	両面目の細かいハケ 調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り 下端面は凹面ナデ面取り	頸部接合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	傾き不明瞭 凹面ナデ後に指紋残る	在地系	
1号溝 32図4	平瓦	厚さ1.2 頸部の厚さ2.0	瓦質(土師質) にぶい黄褐色 軟質 白色粒子目立つ	にぶい黄褐色 色~にぶい黄褐色	凹凸両面ヨコナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り、下端面は凹面ナデ面取り	面取り後ハケ状のナデ	凸両面から半分まで擦り切った後折り、切断面を削り	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
5号溝 32図5 図版9	平瓦	厚さ1.3 頸部の厚さ2.7~2.9	瓦質(土師質) にぶい灰白~明灰色 軟質 角閃石目立つ	灰白色	凸面目の細かいハケ、凹面不明 調整後、側面をカット 側端面の面取り不明 下端面は両面ナデ	頸部接合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
1号溝 32図6 図版9	平瓦	厚さ1.4~1.5 頸部の厚さ3.5	瓦質(土師質) 灰白~黄褐色 やや軟質 黒色粒子あり	にぶい淡灰色	両面器面摩擦のため調整不明 下端面は凹面ナデ凸面部分的に面取り	頸部接合後ナデ	不明	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
1号溝 32図7	平瓦	厚さ1.2~1.3 頸部の厚さ2.5	瓦質(土師質) にぶい黄褐色 軟質 角閃石目立つ	にぶい淡灰色	両面目の細かいハケ、調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り、下端面は凹面ナデ、凸面はナデで沈線あり	頸部接合後ナデ	切断後未調整	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
1号溝 32図8 図版9	平瓦	厚さ1.3~1.4 頸部の厚さ2.2	瓦質(土師質) 橙褐色 やや軟質 金雲母あり	橙褐色	凹面ナデ凸面目の粗いハケ 調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り 下端面は凹面ナデ	頸部接合後ナデ 角部は削り落とす	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は未調整	一枚作り	傾き不明瞭 凹面の調整はハケ→指紋付着→頸部接合部のナデ	在地系	
1号溝 32図9	平瓦	厚さ1.2~1.5 頸部の厚さ2.5	瓦質(土師質) 黄緑~黄白色 軟質 褐色粒子目立つ	黄褐色	凸面ナデ凹面ナデ、調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り、下端面は凹面ナデ、凸面は部分的に面取り	頸部接合後下端面の角を面取り	欠損のため不明	一枚作り	傾き不明瞭 凸面が摩滅しているため、凸面が上面か	在地系	
1号溝 32図10	平瓦	厚さ0.8~0.9	瓦質 灰白色 やや軟質 金雲母あり	黒灰色	凹凸両面斜め方向の幅1.8cm程のハケ調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り	—	切断後未調整	一枚作り	傾き不明瞭 器壁の薄さが特徴的	在地系	
3号土坑 32図11	平瓦	厚さ1.0~1.2	瓦質 暗灰白~黒灰色 軟質 金雲母あり	黒灰~灰褐色	凹凸両面斜め方向の幅2cm程の目の粗いハケ調整後、側面を削り、角部を落とす 上端面はハケ後ヨコナデ 凹部は側端面を弧状に面取り	ハケ	切断後未調整	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	
1号溝 33図1	平瓦	厚さ1.1~1.3	瓦質(土師質) にぶい灰黒色 やや軟質 金雲母なし	にぶい橙褐色~ 灰黒色	両面斜めナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り、凹面は面取り 上端面は凹面ナデ	ナデ	ナデのため切断方法不明	一枚作り	傾き不明瞭 側面の上面目が入っていない	在地系	
2号溝 33図2	平瓦	厚さ1.0~1.2	瓦質 暗灰白~橙灰色 軟質 金雲母あり	灰白色	凹凸両面斜め方向の幅3.6cm程の細かいハケ調整後、側面をカット 上端面は凹面ヨコナデ 側端面は凹面と面取り 側端面は凹面のみ面取りナデ	ハケ	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は未調整	一枚作り	傾き不明瞭 成形時に何かに接触していた痕跡あり	在地系	
1号溝 33図3 図版9	平瓦	厚さ1.2~1.5	瓦質(土師質) にぶい灰褐~黄褐色 軟質 金雲母なし	にぶい暗灰褐色	凸面斜めナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面ナデ面取り、凹面は面取りでなく平坦なナデ	切断後、ナデ	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は未調整	一枚作り	傾き不明瞭 凹面全面が摩滅しているため、井戸縁等に転用か	在地系	
1号溝 33図4	平瓦	厚さ0.9~1.6	瓦質(土師質) にぶい暗灰褐色 軟質 混入物多い	にぶい暗灰褐色 凸面は2次焼成を受け 黒変し器面露れ	凹凸両面斜め方向のナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面のみ面取り、上端面はナデ	粗いナデ	ナデ	一枚作り	傾き不明瞭 凹面に指紋が残る	在地系	
1号溝 33図5	平瓦	厚さ1.3~1.4	瓦質(土師質) 灰黄色 軟質 金雲母あり	黄褐色	凹凸両面斜め方向のナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面と側端面ともナデ	—	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は粗くナデ	一枚作り	傾き不明瞭 凸面に焼成前のげっ歯類らしい足跡あり	在地系	
1号溝 33図6	平瓦	厚さ1.3~1.4	瓦質(土師質) 灰黄色 軟質 白色粒子あり	にぶい黄褐色	凹凸両面ナデ調整後、側面をカット	ナデ	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は粗くナデ	一枚作り		在地系	
2号溝 33図7	平瓦	厚さ1.3~1.5	瓦質(土師質) 黄緑~黒灰色 軟質 金雲母あり	黒灰~灰褐色	凹凸両面斜め方向のナデ調整後、側面をカット 側端面は凹面面取り、上端面は凹面ナデ	ハケ状のナデで丸く仕上げている	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は粗くナデ	一枚作り	焼成不良のため器面に黄褐色・灰白色・黒灰色になる	在地系	
客土中 33図8	平瓦	厚さ1.2~1.5	瓦質(土師質) 黄褐色 軟質 褐色粒子目立つ	黄褐色	凹凸両面斜め方向のハケ状ナデ調整後、側面をカット 側端面は未処理、上端面は凹面と側端面ともナデ	面取り後ナデで丸く仕上げ、側面を成さない	凸両面から擦り切った後、折っている	一枚作り	凹面中央が摩滅していることから、凹面を上とわかる	在地系	
2号大土坑 33図9 図版9	平瓦	厚さ1.4	瓦質(土師質) 黒灰色 軟質 白色粒子多い	灰~灰白色	凹凸両面斜め方向の幅3.9cm程の目の粗いハケ調整後、側面をカット 側端面は凹面、上端面は凹面のみ面取り 釘孔あり	カット後ナデ	カット後ナデ	一枚作り	傾き不明瞭 凹面は中央が摩滅	在地系	
1号溝 34図1 図版9	平瓦	厚さ1.6	瓦質(土師質) 黒灰色 軟質 白色粒子多い	にぶい黄褐色	凹凸両面斜め方向の幅3.9cm程の目の粗いハケ調整後、側面をカット 側端面は凹面、上端面は凹面ナデ	カット後粗くナデ	凸面から切り目を入れて折り、折った部分は粗くナデ	一枚作り	傾き不明瞭 凹面は中央が摩滅	在地系	
1号溝 34図2	軒平瓦	厚さ2.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	菊唐草文	不明	久留米城下町B類に近い	不明	
2号溝 34図3	軒平瓦	厚さ2.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	三葉唐草文	不明		不明	
2号溝 34図4	軒丸瓦	厚さ2.4 面径(15.0)	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	珠文帯中心巴文	不明		不明	
1号溝 34図5	軒平瓦	厚さ2.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	菊唐草文	不明	久留米城下町G類に近い	不明	
1号溝 34図6	軒平瓦	厚さ2.4 面径(15.0)	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	菊唐草文	不明	久留米城下町G類に近い	不明	
1号溝 34図7	軒平瓦	厚さ2.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	菊唐草文	不明	久留米城下町G類に近い	不明	
1号溝 34図8	軒平瓦	厚さ2.0 軒面幅4.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	面部接合部は丁寧にナデ	菊唐草文	不明	久留米城下町G類に近い	不明	
2号溝 34図9	軒平瓦	厚さ2.4 軒面幅4.9	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	宝珠唐草文	ナデ		不明	
1号溝 34図10 図版9	軒平瓦	厚さ2.4 軒面幅4.3	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	中心文不明 唐草文 端に九十字あり	ナデ	34図6・7と同型か	不明	

表9 2次調査出土瓦観察表(1)



第33図 2次調査出土瓦実測図2(1/4)

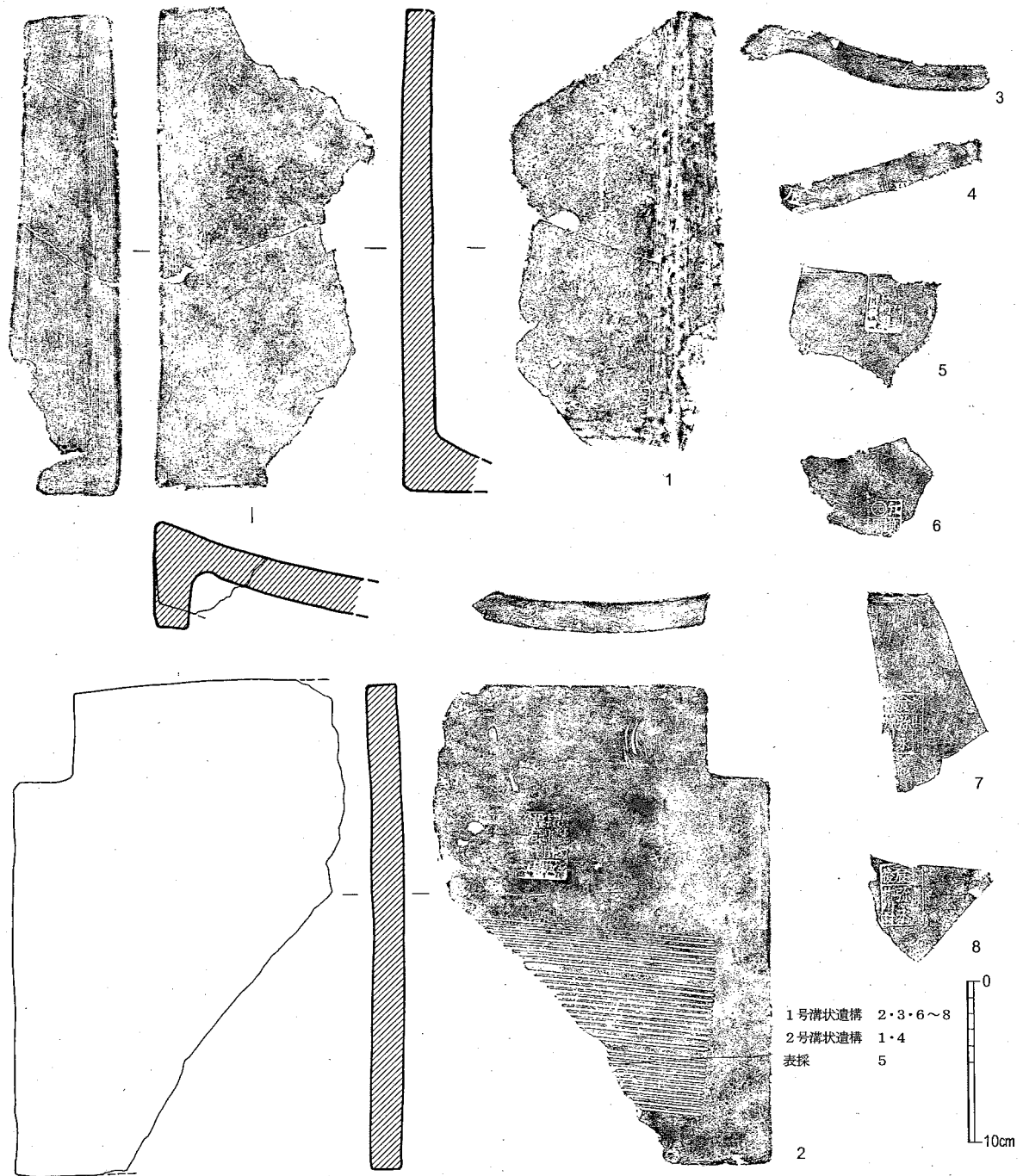


第34図 2次調査出土瓦実測図3 (1/4)

44図10は指輪のように見えるが、真鍮製であることから指貫と判断した。41図27は島村製鈴虫香油で大分県炭竈Ⅱ区SK1に蓋付きの類例あり。41図29は「桃谷順天館」製煉り白粉の瓶であろう。大分県炭竈Ⅱ区SK1に類例あり。41図34は東京の堀越嘉太郎商店製ホーカー液で大分県炭竈Ⅱ区SK1に類例あり。41図37・38は同一規格のおはじきでもう1点じゃんけんの「ぐー」がスタンプされたものがあつたが、整理中に紛失してしまった。41図40は糸で筏状に編んだ敷台と思われる。緊縛痕は残っていなかったが、ガラス棒が横に並んで出土した。

客土層 (図版8)

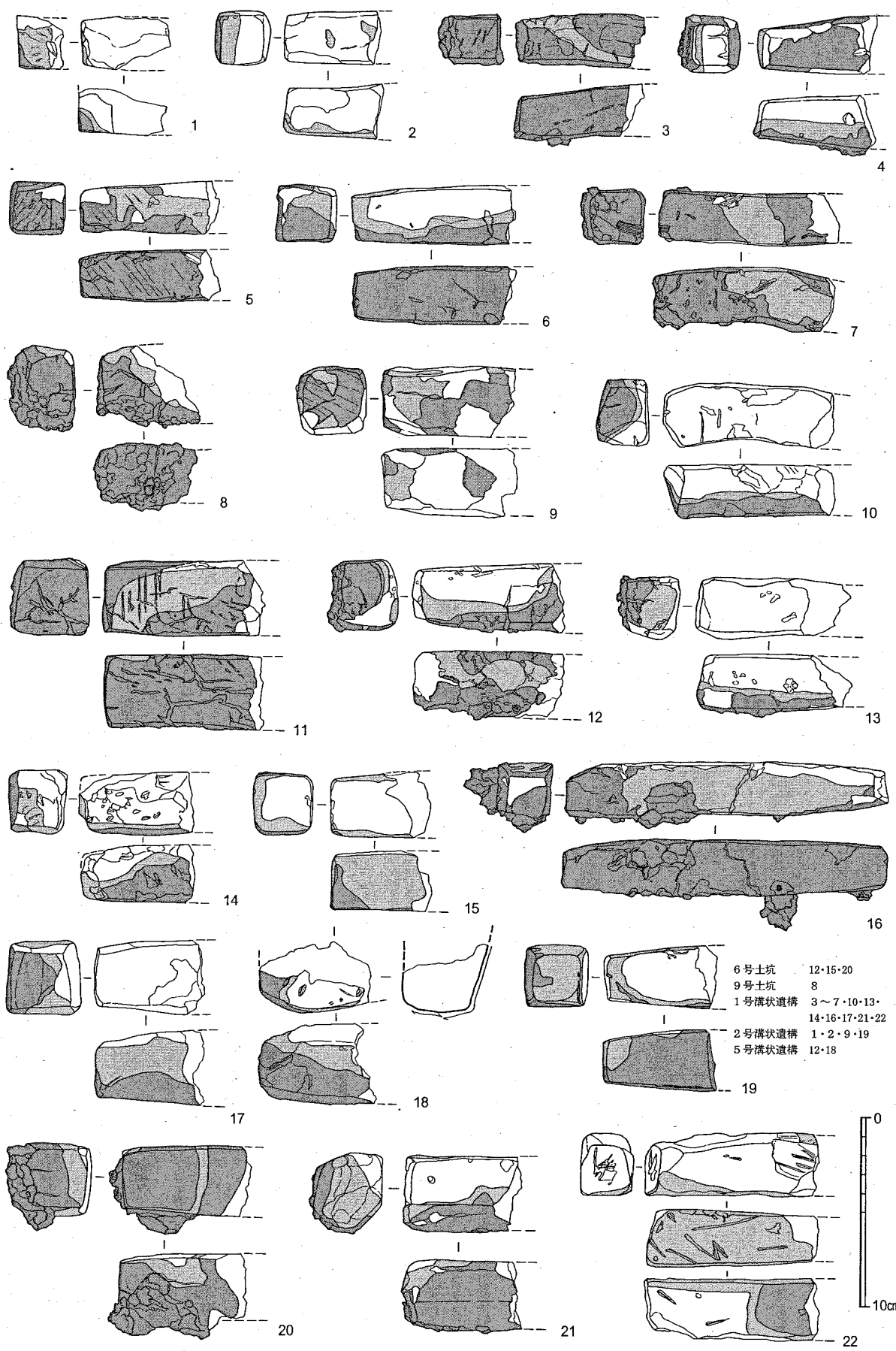
客土層出土遺物は本来考古資料とするべきではないが、戦時資料が出土していることから、共伴する残りのよい磁器とともに掲載した。



第35図 2次調査出土瓦実測図4(1/4)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・成形・装飾技法				製作 技法	所見	
					凹面	凸面	上端面・下端	側端面		特記事項	推定産地
1号溝 34図11	軒平瓦	厚さ2.4 軒面幅4.6	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	—	菊唐草文	ナデ		久留米城下町G類 に近い	不明
2号溝 35図1	袖隅瓦	厚さ2.0 縦幅24.7 側面幅5.4	瓦質 灰橙～灰白色 硬質	焼成不良のため 灰橙～灰白色	側面部接合部 は面のナデ調 整後にナデ	側面部接合部 は面のナデ調 整後にナデ	ナデ	ナデ			不明
2号溝 35図2	平瓦	厚さ2.1	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	製作所のスタンプ 中央に屋号を 入れた「兄」か「元」と「筑後国 山門郡川北村字柳川」と沈線	上端面に丸に 「八女」か「女」 のスタンプ	ナデ			不明
2号溝 35図3	平瓦	厚さ2.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	—	—	製作所のスタン プ 屋号ハ に「辰」	ナデ			不明
2号溝 35図4	平瓦	厚さ2.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	—	—	製作所のスタン プ 屋号「辰」 上の△がない	ナデ			不明
2号溝 35図5	平瓦	厚さ1.8	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	製作所のスタンプ []屋 号□]「山門郡 江崎製 柳川□□]	屋号のスタン プ 文字不明	ナデ			不明
2号溝 35図6	平瓦	厚さ1.8	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	製作所のスタンプ 中央に屋号を 入れた「江崎」と筑後の「筑」と 山門の「門」、川北の「川」が残る	—	ナデ			不明
2号溝 35図7	平瓦	厚さ1.8	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	製作所のスタンプ 中央に屋号 を入れた「筑後」と「山門郡赤 水」と柳川村の「柳川」が残る	—	ナデ			不明
2号溝 35図8	平瓦	厚さ1.8	瓦質 黒灰色 硬質	黒色	ナデ	製作所のスタンプ 中央に屋号 を入れた「筑後」と「山門郡赤 水」と柳川村の「柳川」が残る	—	ナデ			不明

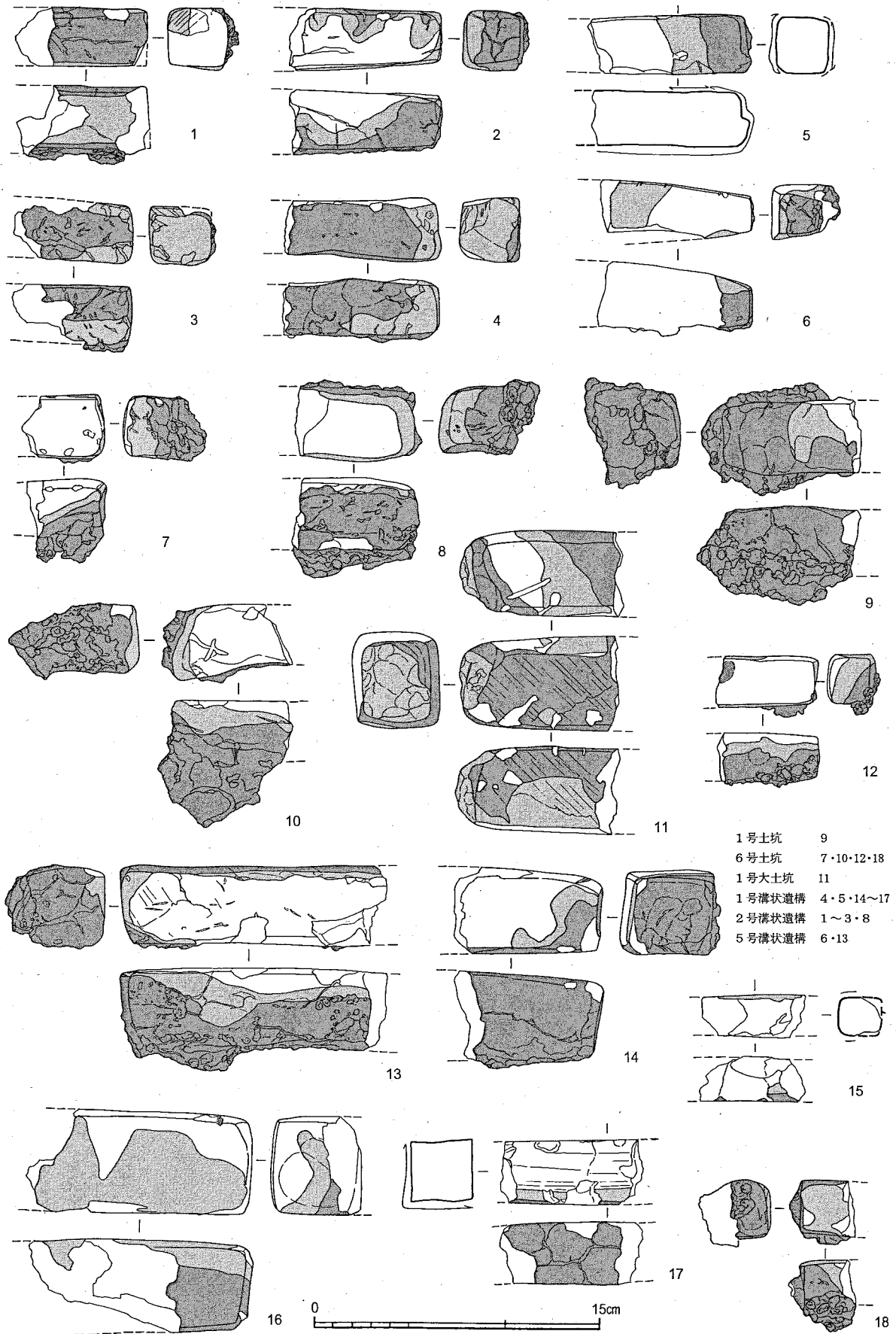
表9 2次調査出土瓦観察表(2)



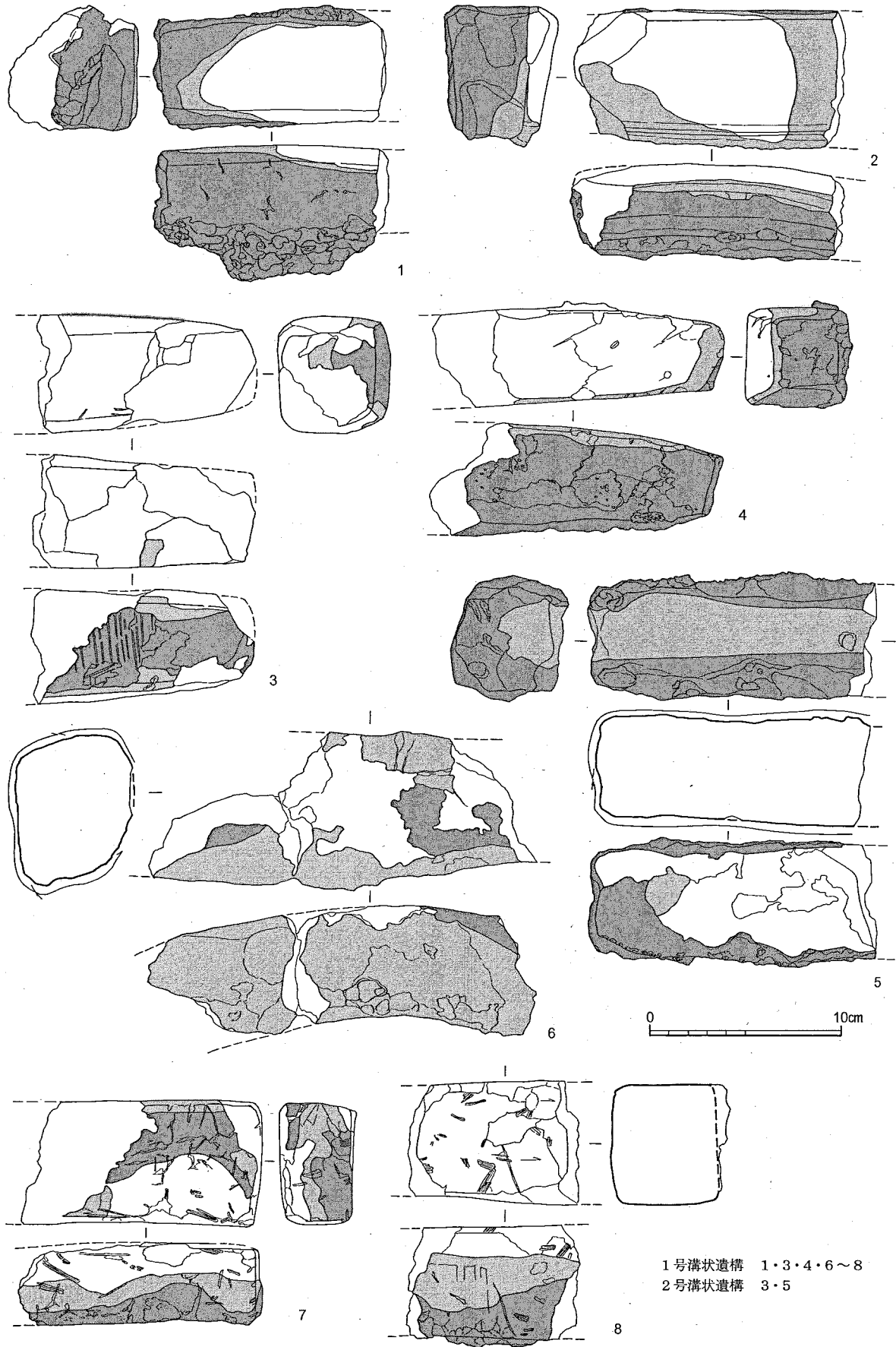
第36図 2次調査出土不明土製品実測図1 (1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	各面の特徴	遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	各面の特徴
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴		挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴	
図版番号	通称名				図版番号	通称名			
2号溝 36図1	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.7 高さ2.2 幅2.8重量17g	土師質 暗褐色 薬土痕 あり 褐色粒子 含む	面は平坦に整形され、欠損した面を 除く3面と小口面が焼けている	2号溝 37図8	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.6 高さ3.8 幅3.1重量93g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子・金雲母 あり	面は平坦に整形されており、歪んで いる。下面がよく焼けている。上面は焼 けが弱い。側面に接する面が外 れた痕跡あり。下面に融着著しい
2号溝 36図2 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ4.9 高さ2.9 幅3.0重量42g	土師質 黄褐色 金雲母 含む	面は平坦に整形され、下面がよく焼 けており、側面と小口面は下半分 程度が焼けている。上面はほとんど焼 けていない	1号土坑 37図9	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.4 高さ5.2 幅3.1重量172g	土師質 暗褐色～橙褐色 白粒子・金雲母 あり	面は平坦に整形されており、歪んで いる。全面がよく焼けているが上面 は焼けが弱い。下面と小口部は融着 著しい
1号溝 36図3	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.8 高さ2.7 幅2.6重量46g	土師質 暗褐色～橙褐色 白色粒子あり	面は平坦だが歪みあり。全面よく焼 けているが上面と1側面に焼ける弱 い部分がある。下面に融着あり	6号土坑 37図10	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.5 高さ3.7 幅3.6重量111g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子・金雲母 あり	面は平坦だが歪みあり。下面・1側 面・小口部がよく焼けており、上面 は焼けが弱い。下面と小口部は融着 著しい
1号溝 36図4	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.4 高さ2.7 幅2.6重量48g	土師質 暗褐色～橙褐色 白色粒子あり	面は平坦だが歪みあり。全面よく焼 けているが上面と1側面に焼ける弱 い部分がある。下面に融着あり	1号大土坑 37図11	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.4 高さ2.4 幅2.6重量235g	土師質 暗褐色～橙褐色 混入物少ない	面は平坦だが歪みあり。下面の角部 がよく焼けており、融着ある。上面 は焼けておらず黒斑あり
1号溝 36図5	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.4 高さ2.8 幅2.8重量54g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子あり	面は平坦に整形され、小口部が細い。下 面がよく焼けており、側面と小口面は下半分 程度が焼けている。上面はほとんど焼 けておらず黒斑がある。下面に融着あり	6号土坑 37図12	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.3 高さ2.4 幅2.8重量37g	土師質 暗褐色～橙褐色 混入物少ない	面は平坦だが歪みあり。下面の角が よく焼けており融着著しい。上面は 焼けておらず黒斑がつく
1号溝 36図6	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.5 高さ3.0 幅3.1重量76g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	面は平坦だが歪みをもつ。上面以外 がよく焼けており、上面と1側面に 焼ける弱い部分がある	5号溝 37図13 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ14.0 高さ4.4 幅4.3重量227g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母・白粒子 あり 薬土痕あり	面は平坦。下面・小口面がよく焼 けており、側面は下半分程度がよく 焼けている。上面はほとんど焼けて いない。下面に融着あり
1号溝 36図7	土製品 不明棒状土 製品	長さ9.6 高さ3.5 幅3.8重量88g	土師質 暗褐色～橙褐色 白色粒子・金雲 母あり	面は平坦だが歪んでいる。全面よく 焼けているが上面と1側面に焼ける 弱い部分がある。下面に融着あり	1号溝 37図14	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.7 高さ4.7 幅4.5重量180g	土師質 暗褐色～橙褐色 白粒子・白雲母 あり	面は平坦。下面・小口面・1側面が よく焼けており、上面と1側面は焼 けが弱い
9号土坑 36図8	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.4 高さ3.2 幅3.2重量52g	土師質 暗褐色～橙褐色 白色粒子少ない	上面が平坦に整形され、多面を整っ ていない。全面がよく焼けており、 上面と1側面に焼ける弱い部分あり 上面以外に融着あり	1号溝 37図15	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.5 高さ2.4 幅2.1重量22g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子あり	面は平坦。下面がよく焼けており、 側面は下半分程度がよく焼けてい る。上面はほとんど焼けていない
2号溝 36図9	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.9 高さ3.5 幅3.8重量84g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は削り状のナデで平坦に整形され ているが歪みと丸みをもつ。上下2 面よく焼けている	1号溝 37図16	土製品 不明棒状土 製品	長さ11.9 高さ4.7 幅3.9重量222g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母・白粒子 あり	面は平坦。小口面と1側面がよく焼 けており、下面は欠損。上面はほと んど焼けておらず、黒斑あり
1号溝 36図10	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.9 高さ3.1 幅2.8重量72g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	上面が平坦に整形され、多面を整っ ていない。下面がよく焼けており、 側面と小口面は下半分程度が焼けて いる。上面はほとんど焼けていない	1号溝 37図17	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.4 高さ3.4 幅3.3重量102g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子あり	面は角が突るほど平坦に整えられ ていない。下面と1側面がよく焼 けており、上面はほとんど焼けてい ない
5号溝 36図11	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.5 高さ3.8 幅4.0重量142g	土師質 暗褐色～橙褐色 白色粒子あり	面は平坦で上面に工具痕あり。全 面よく焼けているが上面と1側面に 焼ける弱い部分がある。下面に融着 あり	6号土坑 37図18	土製品 不明棒状土 製品	長さ2.8 高さ3.0 幅3.1重量30g	土師質 暗褐色～橙褐色 白粒子あり	面は平坦だが歪みあり。下面・1側 面・小口部がよく焼けており、上面 は焼けが弱い。下面と小口部は融着 著しい
6号土坑 36図12	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.9 高さ3.5 幅3.8重量83g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子あり	面は平坦だが丸みをもつ。全面よく 焼けているが上面と1側面に焼ける 弱い部分がある。下面に融着あり	1号溝 38図1	土製品 不明棒状土 製品	長さ12.7 高さ5.4 幅6.6重量482g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり・白 粒子多い	土師質大窯の口縁部片を利用して いるので面は平坦。下面・小口面・1 側面がよく焼けており、上面はほと んど焼けていない。下面に融着あり
1号溝 36図13	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.8 高さ3.4 幅3.8重量65g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	上面は平坦で、他面は歪みをもつ。下 面がよく焼けており、側面と小口面 は下半分程度が焼けている。上面は ほとんど焼けていない。下面と1側 面に融着あり	1号溝 38図2	土製品 不明棒状土 製品	長さ14.1 高さ4.8 幅7.7重量483g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり・白 粒子多い	土師質大窯の口縁部片を利用して いるので面は平坦。下面・小口面・1 側面がよく焼けており、上面は焼 けが弱い。下面に融着あり
1号溝 36図14	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.1 高さ3.0 幅3.4重量51g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	平坦面があるが歪みをもつ。下面が よく焼けており、側面と小口面は下 半分程度が焼けている。上面はほと んど焼けていない	2号溝 38図3 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ11.6 高さ5.2 幅6.1重量289g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり 薬 土痕あり	面は平坦。下面がよく焼けており、 板状圧痕が残る。上面はほとんど焼 けていない
6号土坑 36図15	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.4 高さ3.0 幅3.3重量50g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	面は平坦。下面と1側面がよく焼 けている。上面は焼けていない	1号溝 38図4	土製品 不明棒状土 製品	長さ15.1 高さ5.0 幅5.1重量351g	土師質 暗褐色～橙褐色 白粒子・金雲母 あり 粉痕附着	面は平坦だが歪みあり。下面・側 面・小口部がよく焼けており、上面 は焼けが弱い。下面に融着著しい
1号溝 36図16 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ16.1 高さ2.9 幅2.8重量163g	土師質 暗褐色～橙褐色 金雲母あり	平坦面があるが歪みをもつ。小口 面が細い。下面がよく焼けており、 1側面と下面は融着あり。上面と1側 面はあまり焼けていない	2号溝 38図5 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ15.0 高さ5.6 幅6.8重量553g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子多い 薬土痕あり	面は平坦だが歪みあり。下面・側 面・小口部がよく焼けており、上面 は焼けていない。側面に接する面 に何か接する痕跡あり。上面 に何か接する痕跡あり
1号溝 36図17	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.9 高さ4.0 幅3.8重量84g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	平坦面があるが歪みをもつ。下面が よく焼けており、側面と小口面は下 半分程度が焼けている。上面は欠損	1号溝 38図6 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ20.2 高さ5.7 幅8.2重量569g	土師質 暗褐色～橙褐色 白粒子あり	断面溝状で歪みあり。下面・側 面・小口部がよく焼けており、上面 は剥落している。下面に融着著しい
5号溝 36図18	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.1 高さ4.2 幅3.2重量50g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母・白色粒子 あり 薬土痕あり	上面に平坦面があるが、他面は歪み をもつ。下面がよく焼けており、側 面と小口面は下半分程度がよく焼 けている。上面はほとんど焼けてい ない	1号溝 38図7	土製品 不明棒状土 製品	長さ12.5 高さ4.0 幅6.2重量273g	土師質 暗褐色～橙褐色 金雲母・白粒子 あり	面は平坦で、下面がよく焼けており、 1側面・小口部は下半分程度がよく 焼けている。上面は焼ける弱い部分 がある
2号溝 36図19	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.8 高さ3.2 幅3.2重量61g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり 粉痕 薬土痕あり	各面に丁寧に整形された平坦面が ある。下面と1側面がよく焼けて おり、1側面・小口面・上面はやや 焼けていない。上面はほとんど焼 けていない	1号溝 38図8	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.8 高さ4.9 幅6.2重量326g	土師質 暗褐色～橙褐色 金雲母・白粒子 あり 薬土痕 多量。軟着で粗	面は平坦で、下面がよく焼けており、 1側面は下半分程度がよく焼けてい る。上面はほとんど焼けていない
6号土坑 36図20	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.8 高さ3.4 幅3.8重量111g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲 母あり	面は平坦。下面と1側面と小口面が よく焼けている。上面も焼けてい るが、焼けていない部分をもつ	5号溝 39図1	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.7 高さ2.2 幅2.4重量33g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は平坦。下面がよく焼けており、 側面は下半分程度がよく焼けてい る。上面はほとんど焼けていない
1号溝 36図21	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.1 高さ3.7 幅4.2重量80g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子あり	上面に平坦面があるが、他面は歪 みをもつ。下面と1側面がよく焼 けており、上面はほとんど焼けてい ない	1号溝 39図2	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.6 高さ4.2 幅6.4重量203g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり・白 粒子多い	土師質大窯の口縁部片を利用して いるので面は平坦。下面・小口面が よく焼けており、上面は焼ける弱 い。側面に接する面に何か接する 痕跡あり
1号溝 36図22	土製品 不明棒状土 製品	長さ9.0 高さ3.0 幅3.3重量76g	土師質 暗褐色～黄褐色 白色粒子・金雲母 あり 薬土痕あり	各面に平坦面あり。全体の焼ける 弱く、下面と側面がほとんど焼 けていない。側面が何か接してい ない。側面と小口面はほとんど焼 けていない	1号溝 39図3 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ10.3 高さ5.0 幅9.4重量408g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子少ない	土師質大窯の口縁部片を利用して いるので面は平坦。下面・1側面・ 小口面がよく焼けており、上面は 焼ける弱い。上面に黒斑あり
2号溝 37図1	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.8 高さ3.5 幅3.4重量67g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は平坦に整形され、上・下面がよ く焼けている。下面に融着あり	1号溝 39図4 図版9	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.1 高さ3.4 幅6.0重量76g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	土師質瓦片を利用している。下面は 平坦で、ハケ目をもつ。全面よく 焼けているが、上面に焼ける弱い 部分がある。下面にスタンプあり 厚さか。側面に融着がつく
2号溝 37図2	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.9 高さ3.3 幅3.2重量82g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は平坦。下面がよく焼けており、 側面と小口面は下半分程度がよく 焼けている。上面はほとんど焼 けていない。下面に融着あり	1号溝 39図5	土製品 不明棒状土 製品	長さ5.4 高さ5.2 幅5.2重量62g	瓦質 暗褐色～黄褐色	瓦片を利用してしている。下面は 平坦。欠損面を打ち欠いて板状に している。1側面ののみよく焼けて おり融着がつく。他面は瓦が2次 焼成を受けて灰白色化している
2号溝 37図3	土製品 不明棒状土 製品	長さ6.3 高さ3.2 幅3.1重量39g	土師質 暗褐色～橙褐色 薬土痕あり	面は平坦に整形されているが変形し ている。上・下面がよく焼けてい る。下面に融着あり	1号溝 39図6	土製品 不明棒状土 製品	長さ3.3 高さ1.3 幅2.7重量15g	土師質 暗褐色～橙褐色 混入物少ない	面は平坦で、上面以外よく焼 けており、重ねて使った可能性 がある
1号溝 37図4	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.8 高さ3.0 幅3.3重量71g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は平坦に整形され、オサエヤ削 り状のナデが見られる。上・下面 がよく焼けている。側面が何か接 している。側面に何か接してい ない。側面と小口面はほとんど焼 けていない	1号溝 39図7	土製品 不明棒状土 製品	長さ9.1 高さ2.0 幅5.0重量81g	瓦質 2次焼成のため 黄褐色に変色	瓦片を利用しており、融着はない。 凸面がよく焼けている
1号溝 37図5	土製品 不明棒状土 製品	長さ8.6 高さ3.0 幅3.2重量73g	土師質 暗褐色～橙褐色 薬土痕あり	平坦に整形されているが、下面以外 はほとんど焼けていない。側面は ほとんど焼けており、側面と小口 面は下半分程度がよく焼けてい る。上面に焼ける弱い部分あり	1号土坑 39図8	土製品 サナ状土製 品	長さ7.8 高さ3.7 幅5.0重量60g	土師質 暗褐色～黄褐色 薬土痕多い	上面のみ平坦で、上面を下にして 作ったものか。下面がよく焼 けており融着がつく。側面は下半 分が焼けている
5号溝 37図6	土製品 不明棒状土 製品	長さ7.9 高さ3.4 幅3.7重量56g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母あり	面は平坦。下面・1側面・小口部 がよく焼けており、下面と小口 面は融着あり。上面は余り焼けて いない部分がある	1号溝 39図9	土製品 サナ状土製 品	長さ6.2 高さ2.8 幅3.7重量53g	土師質 暗褐色～黄褐色 薬土痕あり	上面のみ平坦で、上面を下にして 作ったものか。下面がよく焼 けており融着がつく。側面は下半 分が焼けている
6号土坑 37図7	土製品 不明棒状土 製品	長さ4.1 高さ3.1 幅3.3重量45g	土師質 暗褐色～黄褐色 白粒子・金雲母 あり	面は平坦だが歪みあり。下面・1側 面・小口部がよく焼けており、よ く焼けた部分が斜めに入る	1号土坑 39図10	土製品 サナ状土製 品	長さ9.3 高さ2.6 幅3.3重量125g	土師質 暗褐色～黄褐色 金雲母・白粒子・貝 殻らしいものあり	上面のみ平坦で、上面を下にして 作ったものか。下面がよく焼 けており融着がつく。側面は下半 分が焼けている

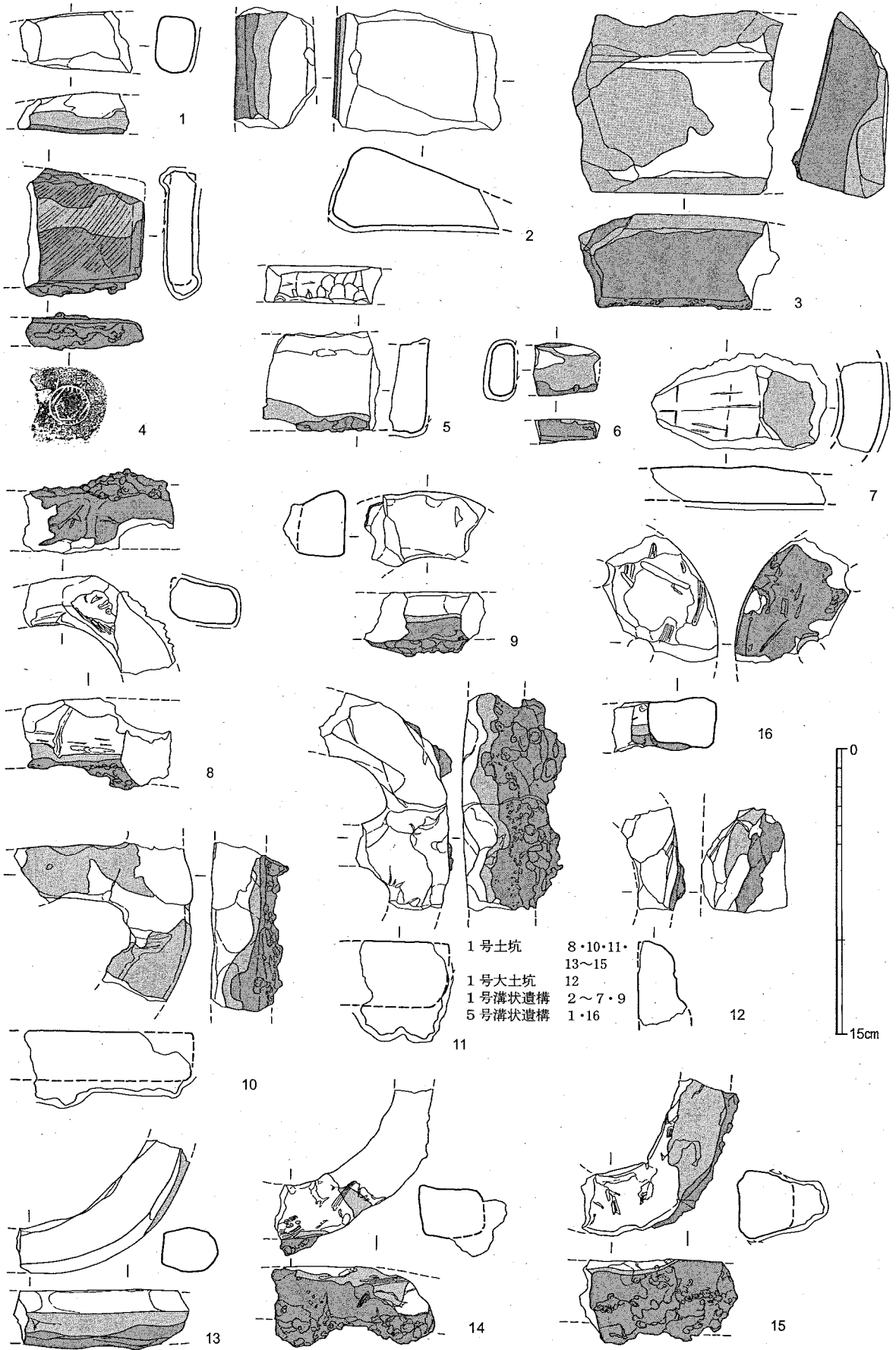
表10 2次調査出土不明土製品観察表(1)



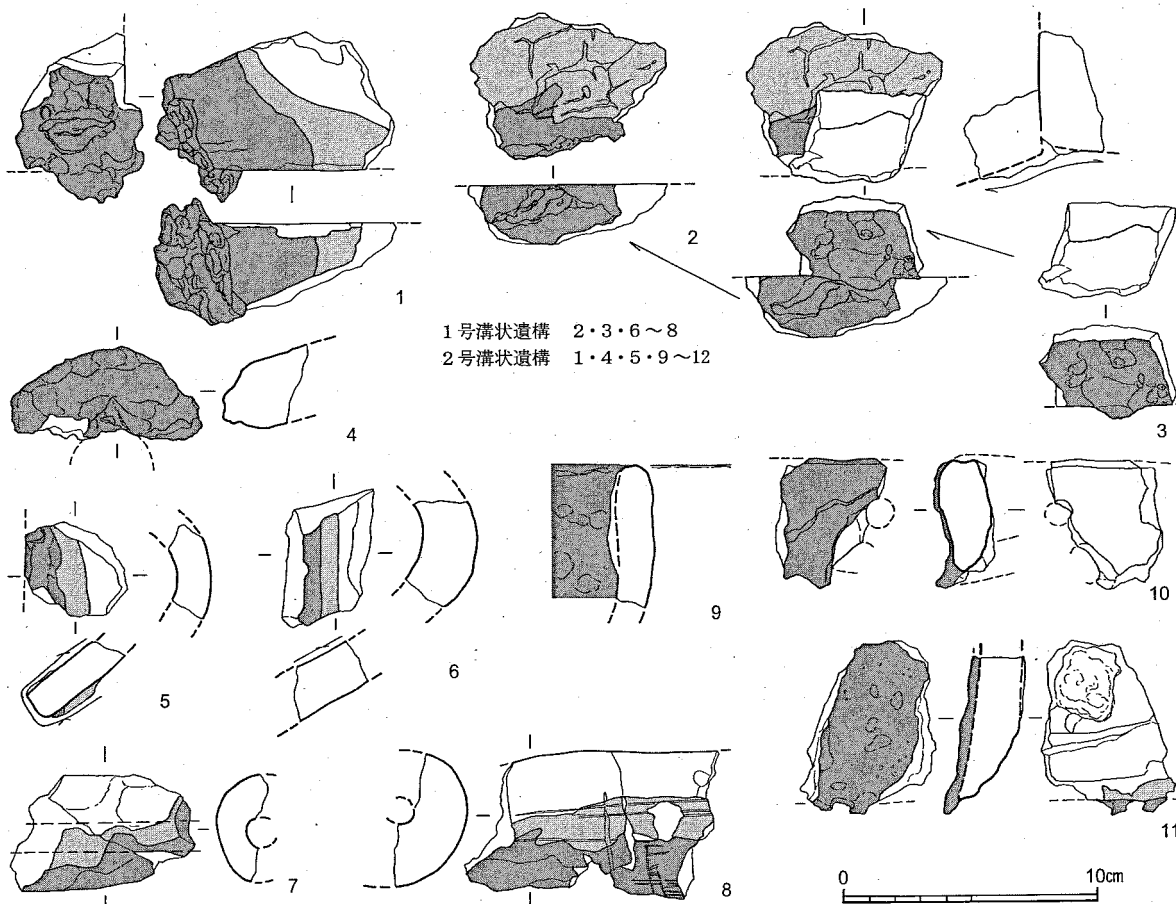
第37図 2次調査出土不明土製品実測図2 (1/3)



第38図 2次調査出土不明土製品実測図3 (1/3)



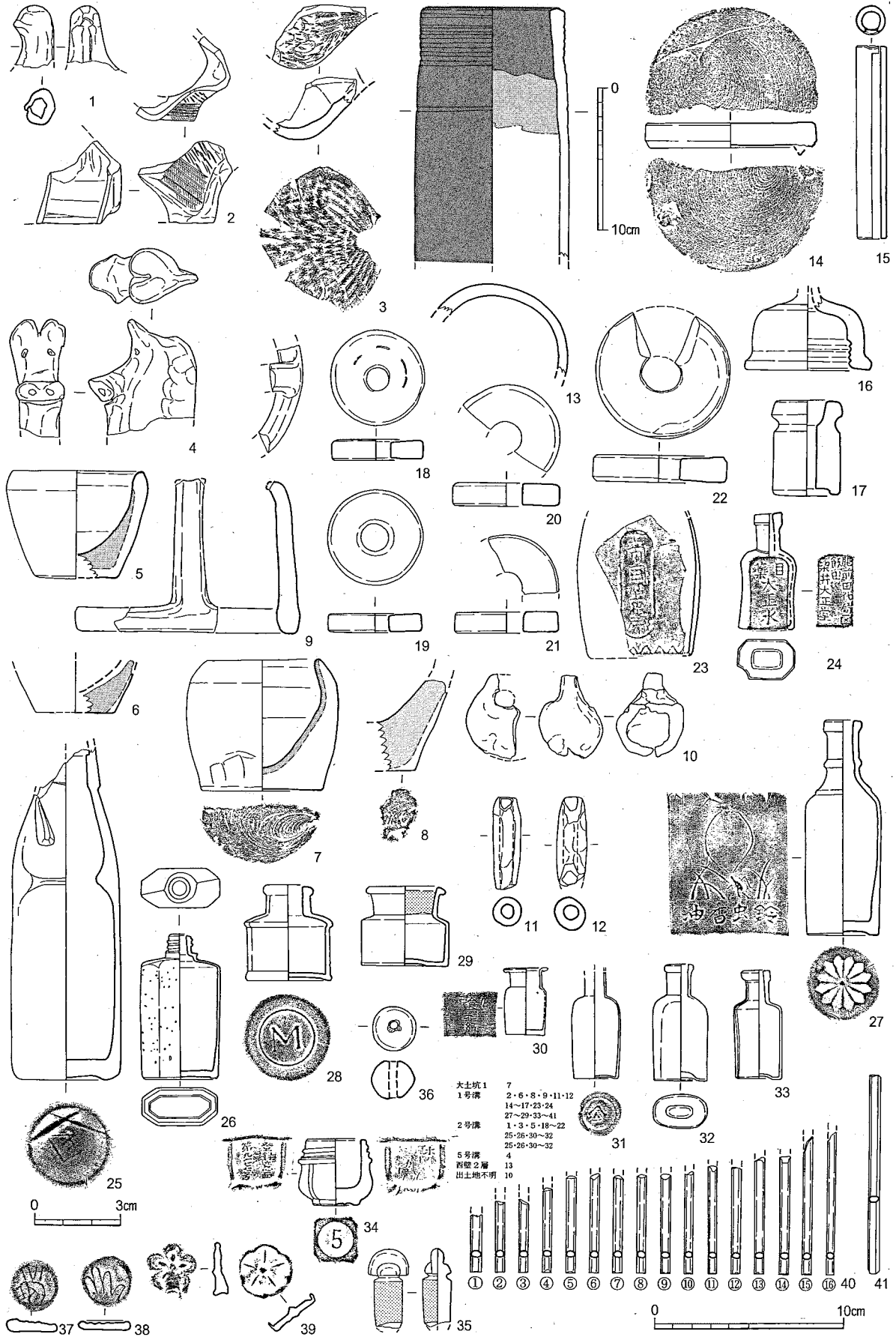
第39図 2次調査出土不明土製品・サナ状土製品実測図(1/3)



第40図 2次調査出土土炉壁状土製品・鞆羽口・湯口実測図(1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	各面の特徴	遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	各面の特徴
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴		挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴	
図版番号	通称名				図版番号	通称名			
1号土坑 39図11 図版9	土製品 サナ状土製 品	長さ11.3 高さ3.4 幅6.7重量163g	土師質 暗褐色～黄灰色 薬圧痕多い	上面のみ平坦で、上面を下にして作ったものか 下面のみよく焼けており融着がつく 側面は下半分が焼けている	2号溝 40図4	土製品 鞆羽口	長さ3.3 径(10.2) 孔径(4.0)	土師質 暗紫灰色～黄橙色 白粒子多い	先端部で表面がガラス化
1号大土坑 39図12	土製品 サナ状土製 品	長さ5.4 高さ4.4 幅2.8重量39g	土師質 暗褐色～暗黄灰色 薬圧痕多い	上面のみ平坦で、上面を下にして作ったものか 下面のみよく焼けており融着がつく 側面は下半分が焼けている	1号溝 40図5	土製品 鞆羽口	長さ4.0 径復元不能 孔径復元不能	土師質 暗紫灰色、黄褐色 花崗岩粒子 多量あり 粗散	先端部がガラス化している
1号土坑 39図13 図版9	土製品 サナ状土製 品	長さ8.9 高さ3.1 幅6.9重量74g	土師質 暗褐色～暗黄灰色 金葉母あり、白粒子多い	上面のみ平坦で、上面を下にして作ったものか 下面のみよく焼けており、側面は下半分が焼けている	2号溝 40図6	土製品 鞆羽口	長さ3.5 径(7.0) 孔径復元不能	土師質 暗紫灰色～黄褐色 花崗岩粒子多い 粗散	装着する部分で欠損している にぶい黄灰～橙褐色を呈する
1号土坑 39図14	土製品 サナ状土製 品	長さ8.9 高さ3.1 幅6.9重量78g	土師質 暗褐色～黄橙色 薬圧痕多い	上面のみ平坦で、上面を下にして作ったものか 下面・側面がよく焼けており、融着あり 上面は焼けが弱い	1号溝 40図7	土製品 鞆羽口	長さ7.2 径(4.5) 孔径(1.3)	土師質 暗紫灰色～黄褐色 白粒子多い	先端に近い部分が顕著ならよく焼けており、にぶい黄灰～橙褐色を呈する
1号土坑 39図15	土製品 サナ状土製 品	長さ8.3 高さ3.4 幅7.7重量114g	土師質 暗褐色～黄褐色 薬圧痕少ない	上面のみ平坦で、上面を下にして作ったものか 下面・側面がよく焼けており、融着あり 上面は焼けが弱い部分あり	1号溝 40図8 図版9	土製品 鞆羽口	長さ10.0 径(5.0) 孔径(1.0)	土師質 暗紫灰色～黄褐色 白粒子多い	側面に傷跡あり、下面がよく焼けており、にぶい黄灰～橙褐色を呈する
5号溝 39図16 図版9	土製品 サナ状土製 品	長さ6.3 高さ2.7 幅5.9重量61g	土師質 暗褐色～暗黄灰色 金葉母、薬圧痕入る	円筒状で穿孔している 下面のみよく焼けており融着がつく 側面は下半分が焼けている 上面はほとんど焼けていない	2号溝 40図9 図版9	土製品 湯口	器高4.5 径(15cm前後)	土師質 黒灰色～黄褐色 白粒子多い	外面に融着はなく、内外の差が明瞭 外面は黄褐色、内面は黒灰色を呈する
2号溝 40図1 図版9	土製品 炉壁状土製 品	長さ8.8 高さ3.5 幅5.8重量150g	土師質 暗紫灰色～黄褐色 白粒子多い	燧瓦の再利用か 2面は平滑な平坦面で、小口部も平坦面であったが融着著しい 融着が面的に広がることから、同様の器体と重ねていた可能性が高い	2号溝 40図10 図版9	土製品 湯口	器高5.1 径(10cm前後)	土師質 黒灰色～暗黄灰色 白粒子多い	内面に融着あり、外面は剥落 円形と三角形の穿孔がある
1号溝 40図2	土製品 炉壁状土製 品	長さ7.8 高さ2.5 幅5.8重量70g	土師質 暗紫灰色～黄褐色 白粒子多い	2面は平坦面で、小口部は融着著しい40図3と重なる部分は焼けが弱い	2号溝 40図11 図版9	土製品 湯口	器高7.7 径(10cm前後)	土師質 黒灰色～暗紫灰色 花崗岩粒子・白粒子多い	内面に融着あり、下部の孔から下に垂れており、外面は孔の周りが熱変している
1号溝 40図3	土製品 炉壁状土製 品	長さ4.5 高さ3.7 幅3.7重量47g	土師質 暗紫灰色～黄褐色 白粒子多い	2面は平坦面で、小口部は融着著しい40図2と重なる部分は焼けが弱い					

表10 2次調査出土不明土製品観察表(2)



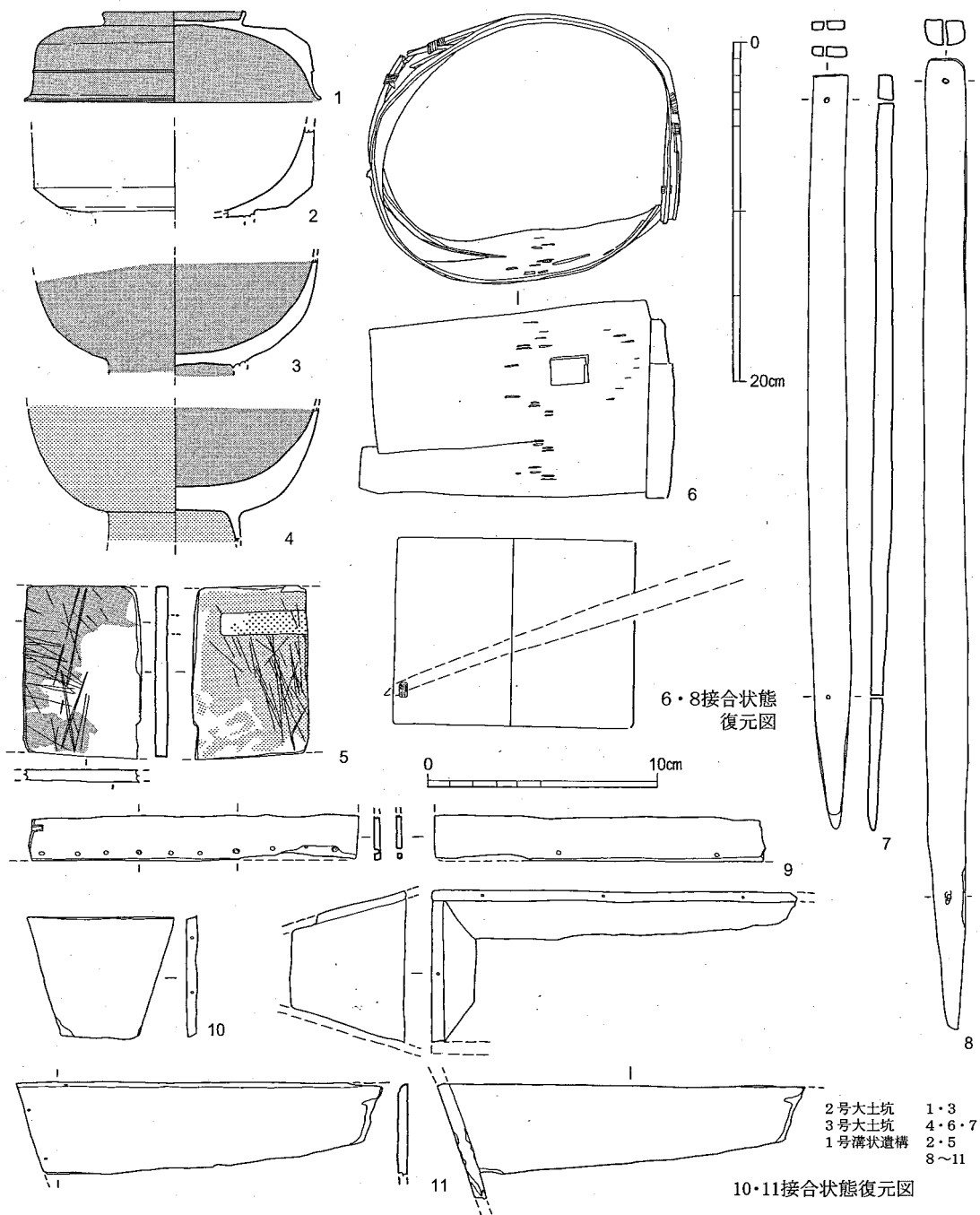
第41図 2次調査出土土製品・ガラス製品実測図(1・3・9・13・26は1/4、37~39は1/2、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	色調	調整・成形・装飾技法	製作技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 41図1 図版9	土製品 鳩笛	長軸2.7 短軸2.2	土師質 橙褐色 軟質 金雲母多い	橙褐色	型合わせでナダ仕上げ	不明	合わせ目残り、合 わせ方もずれている 彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田焼か	19c 20c前葉
1号溝 41図2 図版9	土製品 鳥形	長軸4.9 短軸5.0 高さ4.3	土師質 橙褐色 軟質 金雲母多い	橙褐色	左右の型合わせでナダ仕上げ	不明	中空で下部が空い ているので置物か 彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田焼か	19c 20c前葉
2号溝 41図3 図版9	土製品 鳩笛	長軸2.7 短軸2.2	土師質 橙褐色 軟質 金雲母多い	橙褐色	上下の型合わせ 穿孔あり	不明	合わせ目欠損し 彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田焼か	19c 20c前葉
5号溝 41図4 図版9	土製品 馬形	長軸5.8 短軸2.9	土師質 黄灰褐色 軟質	黄灰褐色	手捏ねで丁寧なつくり	不明	彩色の痕跡なし	在地系 筑後市水田焼の 胎土とは異なる	19c 20c前葉
2号溝 41図5 図版9	土製品 小壺	口径(6.8) 底径(4.4) 器高5.7	土師質 黄灰白色 軟質	内外黄灰白色だが 内面は2次加熱で 淡赤灰色に変色	成形技法・調整不明瞭 口縁部を内傾させる 内外ナダ 外底部欠損のため切り離し方法不明	不明		在地系	19c 20c前葉
1号溝 41図6	土製品 小壺	口径(4.2)	土師質 黄灰白色 軟質	内外黄灰白色だが 内面は2次加熱で 淡赤灰色に変色	磨滅のため調整不明瞭 ヘラ切りで中央部が 残ったため折っている	不明		在地系	19c 20c前葉
1号溝 41図7	土製品 小壺	口径(5.8) 底径(6.4) 器高6.4	土師質 黄灰白色 軟質 金雲母あり	内外黄灰白色だが 内面は2次加熱で 淡赤灰色に変色	ロコロ成形 下位はケズリ状のナダ 口縁部 を内傾させる 内外ナダ 糸切り	不明		在地系	19c 20c前葉
1号溝 41図8	土製品 小壺	口径(10.2) 底径(10.9)	土師質 黄灰白色 軟質 金雲母あり	内外黄灰白色だが 内面は2次加熱で 淡赤灰色に変色	ひずんでいるため反転復元できない 内外ナ ダ 糸切り	不明		在地系	19c 20c前葉
1号溝 41図9	土製品 五徳	口径(15.9) 器高(10.9)	土師質 灰白色 軟質 精良	灰白色	手捏ねでナダ仕上げ	不明	底面は接地のため 器面剥離 内面は 使用のため黒変	産地不明 在地の胎ではない	19c 20c前葉
出土地不明 41図10	土製品 土鈴	最大径(2.4) 口径3.0 重量6g	土師質 橙褐色 軟質 混入物多い	橙褐色	手捏ねでナダ仕上げ 下位に長方形の孔 つ まみに穿孔	不明		在地系 筑後市水田焼か	19c 20c前葉
1号溝 41図11	土製品 土鏝	長さ4.8 厚さ1.5 口径0.7 重量9.2g	土師質 黄褐色 少量 混入物	黄褐色	手捏ねでナダ仕上げ	不明		在地産 金雲母が入ってい ない柳川産か	19c 20c前葉
1号溝 41図12	土製品 土鏝	長さ(4.6) 厚さ1.6 口径0.7 重量10.6g	土師質 黄褐色 少量 混入物	黄褐色	手捏ねでナダ仕上げ	不明		在地産 金雲母が入ってい ない柳川産か	19c 20c前葉
調査区西側2層 41図13 図版9	土管	口径(10.2) 最大径(11.0)	陶器 黄灰褐色 白色粒 子など混入物多い	外面から内面口縁 部は鉄線の上に暗 茶褐色の薄い鉄線	口縁部の沈線は型作りによるものか 内面は 調整なし	不明	鉄線の釉調が小石 原焼に近い	産地不明 東峰村小石原焼 か	19c 20c前葉
1号溝 41図14 図版9	窯道具 4足ハマ	径9.0 厚さ1.4	磁器(白磁)	—	側面ナダ 上下両面糸切り 下面に足の欠損 痕跡3つあり	不明	焼成色調の差で径 7cm程の高台を置 いたとわかる	産地不明	19c 20c前葉
1号溝 41図15	磚子 磚管	長さ10.2 径1.1 口径1.0 重量30.0g	磁器(白磁) 白色	内面と上下端 部に乳白色の 透明釉	上面のみ一部に窪み	不明		肥前系	19c 20c前葉
1号溝 41図16	配電盤の 蓋か	径6.8 重量48g	磁器(白磁) 白色 ガラス質	内外面に乳白 色の透明釉 ネジ部は露胎	裾部が露胎	不明	側面にネジ溝の ある丸型配電盤の カバーであろう	瀬戸・美濃系	19c 20c前葉
1号溝 41図17	磚子 ノップ磚子	径3.8 口径1.0 器高5.0 重量91g	磁器(白磁) 白色	全面に乳白 色の透明釉	—	不明	高台状の下面 皿付に釉剥ぎ	肥前系	19c 20c前葉
2号溝 41図18	戸車	径5.0 口径1.5 器高1.0 重量40g	磁器(白磁) 白色	軸孔内面と側 面に透明釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り 上下面回 転ヘラケズリ	不明	上下面にアルミナが 付着 窯道具のハマ としても機能したか	肥前系	19c 20c前葉
2号溝 41図19	戸車	径5.0 口径1.5 器高1.0 重量41g	磁器(白磁) 白色	軸孔内面と側 面に透明釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り 上下面回 転ヘラケズリ	不明		肥前系	19c 20c前葉
2号溝 41図20	戸車	径5.6 口径1.6 器高1.2 重量29g	磁器(白磁) 灰白色 黒色粒 子多い	軸孔内面と側 面に透明釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り 上下面回 転ヘラケズリ	不明	上下面にアルミナが 付着 窯道具のハマ としても機能したか	肥前系	19c 20c前葉
2号溝 41図21	戸車	径5.2 口径1.6 器高1.1 重量18g	磁器(白磁) 白色	軸孔内面と側 面に透明釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り 上下面回 転ヘラケズリ	不明		肥前系	19c 20c前葉
2号溝 41図22	戸車	径7.2 口径2.1 器高1.4 重量88g	磁器(白磁) 白色 黒色粒 子あり	軸孔内面と側 面に透明釉	側面の縁は軸を掛けたのち面取り 上下面回 転ヘラケズリ	不明	使用のため側面と 上面側縁が磨滅し ている	肥前系	19c 20c前葉
1号溝 41図23 図版9	小瓶	最大径(6.5) 底径(5.5) 重量13g	緑ガラス 気泡あり 縮状 緑色が入る	—	鑄造 外面に「帝国万歳」と鋳造文の陽刻	不明		形状から牛乳瓶 の可能性あり	19c 20c前葉
1号溝 41図24 図版9	小瓶 差し込み栓 目薬瓶	口径1.6 底径3.0 器高2.1 重量26.9g	青ガラス 気泡あり	—	鑄造 胴部の一角に点眼用のガラス棒をセッ トする窪みあり 上げ底	不明	斜めの型合わせで 一部にガラスのバリ が残っている	不明	19c 20c前葉
2号溝 41図25	瓶 ラムネ瓶	最大径5.6 底径4.3 重量383g	青色ガラス 気泡あり	—	鑄造 上げ底 屋号の陽刻あり	不明		不明	19c 20c前葉
2号溝 41図26	小瓶 回転キャップ 化粧瓶	口径1.6 底径5.4 器高2.7 重量91g	緑色ガラス 気泡多い	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る	不明		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図27	小瓶 差し込み栓 香水瓶	口径2.0 底径3.8 器高1.3 重量19.1g	透明ガラス 気泡なし	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 花形 を陽刻	不明	側面に「鈴虫香油」 と草書で「鈴虫」が 陽刻されている	鳥村製鈴虫香油	1912 (大正元)年～
1号溝 41図28	小瓶 差し込み栓 インク瓶	口径2.7 底径4.6 器高3.0 重量60.0g	透明ガラス 気泡あり	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 上げ 底 円にM字を陽刻	不明		「M」の陽刻から 東京市丸善イン ク製とわかる	1878～
1号溝 41図29	小瓶 ガラス蓋差し込み 化粧瓶	口径4.2 底径4.6 器高4.2 重量46g	透明ガラス 気泡なし	—	型合わせ 接合後口縁を裁断して折り曲げて いる 蓋と接する口縁部は擦りつぶし 上げ 底	不明	大分県炭産Ⅱ区S R1に類似あり	「桃谷順天館」 製煉り白粉の瓶か	19c 20c前葉
2号溝 41図30 図版9	小瓶 差し込み栓 調味料瓶	口径2.3 底径2.1 器高3.5 重量15g	緑青色ガラス 気泡あり	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 口縁 折り曲げ	不明	側面に「官許 食料 紅」と陽刻されてお り、食紅瓶である	不明	19c 20c前葉
2号溝 41図31	小瓶 差し込み栓 薬瓶か	口径1.5 底径2.2 器高5.8 重量15.3g	透明ガラス 気泡あり	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 口縁 裁断の歪みあり	不明	歪みあり	不明	19c 20c前葉
2号溝 41図32	小瓶 差し込み栓 薬瓶か	口径1.4 底径2.9 器高1.1 重量11.1g	透明ガラス 気泡あり	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 口縁 裁断の歪みあり 上げ底 小さな凸凹あり	不明	気泡以外に側面に 歪みがある	不明	19c 20c前葉
1号溝 41図33	小瓶 差し込み栓 薬瓶か	口径2.3 底径1.6 重量16g	透明ガラス 気泡あり	—	鑄造 型合わせの鑄型で接合部が残る 上げ 底 屋号の陽刻あり	不明		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図34	小瓶 回転キャップ 化粧瓶	口径3.2 底径3.4 器高3.5 重量50.7g	白ガラス	—	鑄造 「ホーカー」「登録意匠第九一七七 号」と陽刻	不明	「ホーカー」は美顔 料・白剤剤で、瓶の 形態から後者だろ う	東京の堀越嘉太 郎商店製	1912～
1号溝 41図35 図版9	小瓶 差し込み栓	口径2.1 底径1.5 器高4.3 重量15.1g	透明ガラス 気泡あり	—	鑄造 瓶の口縁部と接する部分は擦りつぶし 欠損しているが 切り離し痕跡か	不明		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図36	玉響の玉	径1.6 口径0.2 厚さ1.3 重量6.0g	橙～白ガラス 気泡なし	—	巻き製法	不明		不明	19c 20c前葉

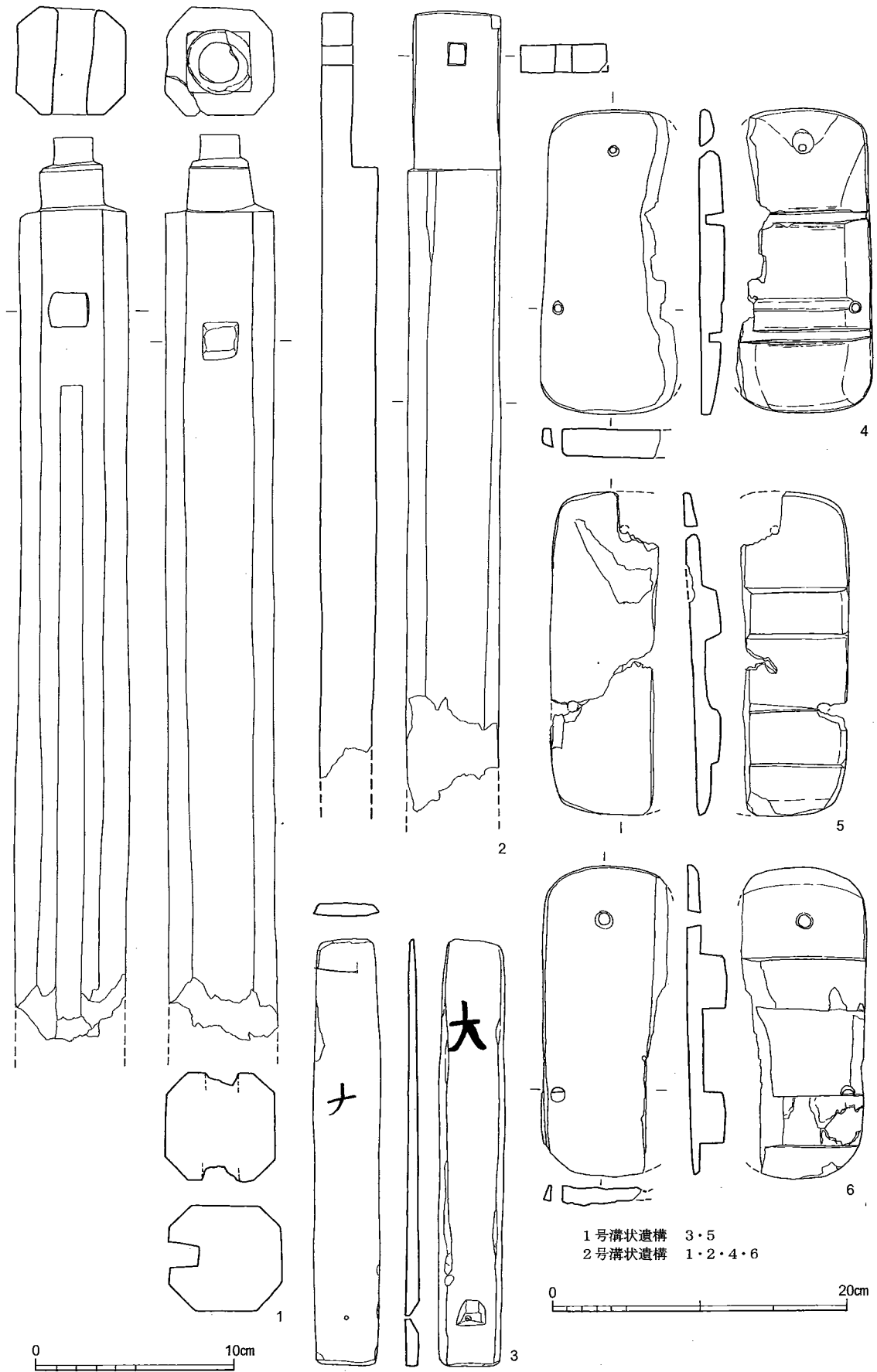
表11 2次調査出土土・ガラス製品観察表

31図8は「輜重自動車班」と読める従軍記念杯で、トラックらしいモチーフの上に数字の18と読める記号がある。輜重兵第18大隊は明治40年頃には北九州市小倉にあったが、41年に三井郡国分村(現小郡市)に移っているため、この隊に所属した人物のものかもしれない。

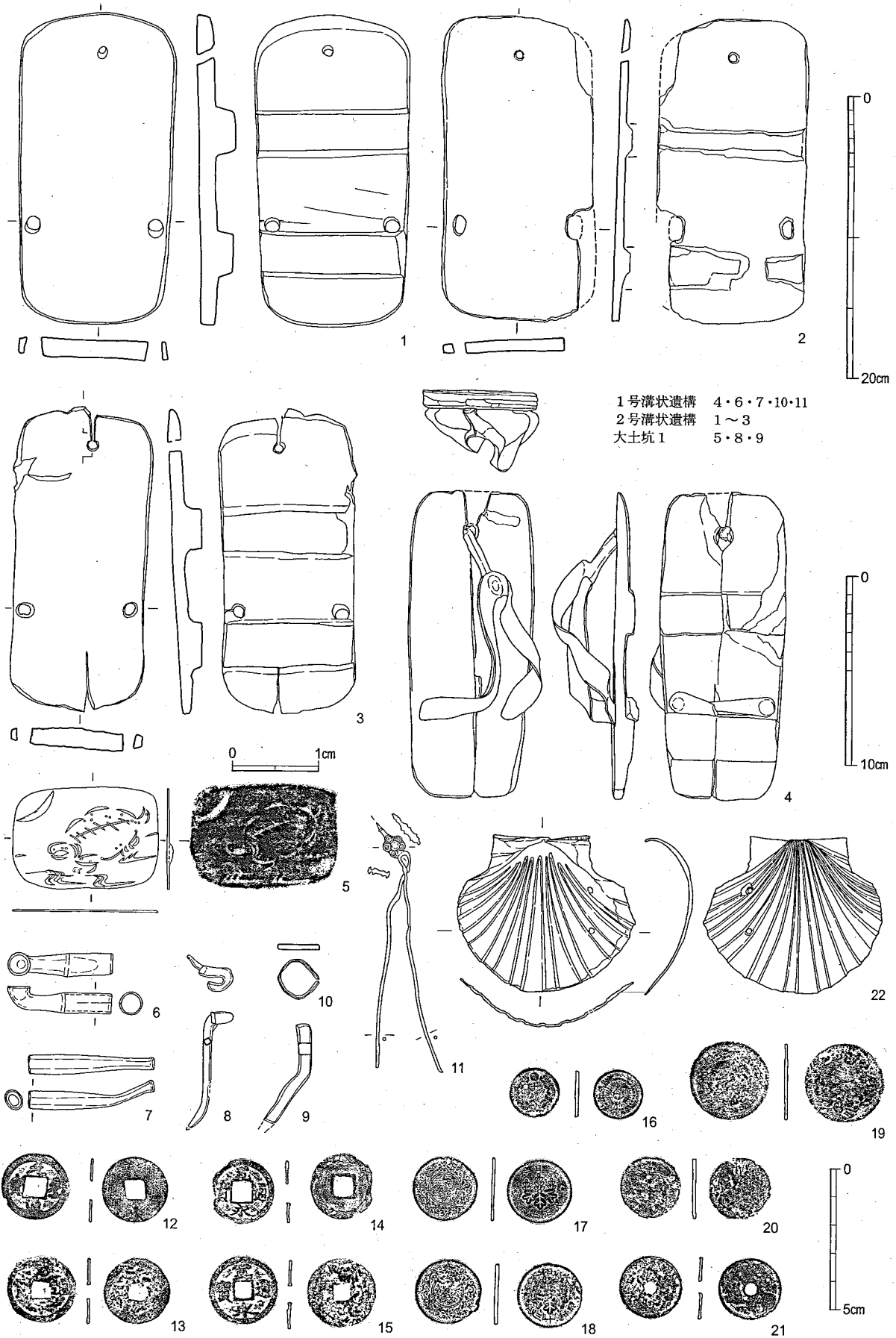
2次調査から出土した遺物は、溝状遺構のものがほとんどであった。この溝状遺構は現行のクリークの東壁部であることから、最深部を調査することはできなかった。そのため、最も古い時期の資料を得られなかった可能性が高い。



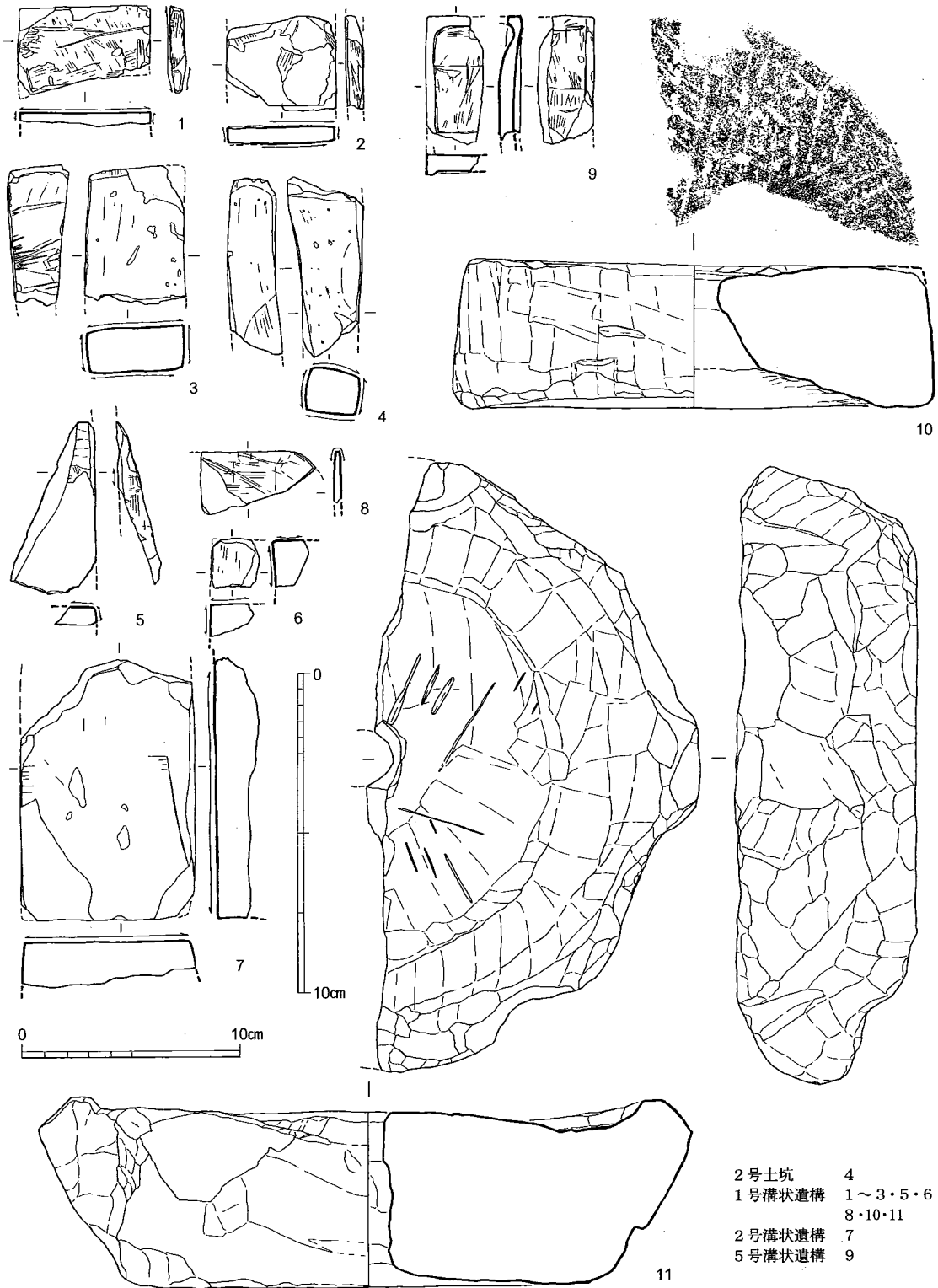
第42図 2次調査出土木製品実測図1(1~5・9は1/3、他は1/4)



第43図 2次調査出土木製品実測図2 (3は1/3、他は1/4)



第44図 2次調査出土木・金属・貝製品実測図(1~4は1/4、5は1/1、6~10・22は1/3、11~21は1/2)



第45図 2次調査出土石製品実測図 (10・11は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	調整・成形・装飾技法	製作技法	所見		
挿図番号	形状	()は復元値	胎の特徴			特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名							
1号溝 41図37 図版9	おはじき	最大径1.8 厚さ0.5 重量2.3g	緑ガラス 気泡あり 縞状に暗緑色が入る	鑄造 上面にじゃんけん の「ちょき」のスタン プ	—		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図38 図版9	おはじき	最大径1.8 厚さ0.5 重量2.4g	白ガラス 気泡あり 縞状に暗緑色が入る	鑄造 上面にじゃんけん の「ばー」のスタン プ	—		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図39 図版9	おはじき	長軸1.8 厚さ0.6 重量2.4g	緑色ガラス 縞状に暗緑色が入る	鑄造 桜花形の鑄型に 上面から花芯のスタン プ	—		不明	19c 20c前葉
1号溝 41図40	ガラス製の すのこ状 敷き台	長さ7.5 幅0.6 厚さ0.4	緑色ガラス	鑄造 端部をカットした 後、部分的に面取りして いる 41図41と同じもの	—	端部の残存のみ実測したが、両端欠損した ものは数個ある	不明	19c 20c前葉
1号溝 41図41 図版9	ガラス製の すのこ状 敷き台	長さ10.5 幅0.6 厚さ0.4重量5.8g	緑色ガラス	鑄造 端部をカットした 後、部分的に面取り している	—	端部の残存のみ実測したが、両端欠損した ものは数個ある	不明	19c 20c前葉
遺構名	器種	法量 (cm)	特 徴		特 徴			
挿図番号	形状	()は復元値	特 徴		挿図番号	形状	法量 (cm)	特 徴
図版番号	通称名				図版番号	通称名	()は復元値	
大土坑2 42図1 図版10	中碗蓋 タガ形	裾径(12.6) 器高4.0 つまみ径(6.4)	下地は柿渋 赤漆全面		1号溝 44図10 図版10	指貫の輪 飾	径2.2 幅0.3	欠損部はわからないが皿部がつくものと思 われる
1号溝上層 42図2	中碗 平碗	最大径(12.2) 高台径(7.0)	炭化しており漆不明		2号溝上層 44図11 図版10	簪	長さ13.1 先端部径0.1	銅製 頭部は扁平で中央に径0.4の窪み、 その周囲に0.2の窪みがある ガラスを埋 め込んだものか
大土坑2 42図3 図版10	中汁碗 丸形	最大径(12.4) 高台径(6.4)	下地は柿渋 赤漆全面		表探 44図12 図版10	銅銭 元豊通宝	径2.3 厚さ0.12	北宋1078年初鑄 文字は摩滅している
3号大土坑 42図4 図版10	中飯碗 丸形	最大径(12.6) 高台径(6.4)	下地は柿渋 外面と外底は黒漆 内面は赤 漆		1号溝 44図13 図版10	銅銭 寛永通宝	径2.35 厚さ0.15	しんじょうの字体が特徴的だが一致するも のがない 新寛永とはいえる 1636(寛永13)以降
大土坑3 42図5 図版10	不明木製 品 膳か	長さ7.5 幅4.9 厚さ1.0	下地は柿渋 表面は赤漆 裏面は黒漆 表面 には長方形の漆のない範囲があり、磨ら しいものが付着している 表裏面ともに刃 傷が残ることからまな板として再利用した か		表探 44図14 図版10	銅銭 寛永通宝	径2.23 厚さ0.13	新寛永で、「永」の字体が横長で、縦に詰 まっており、頭が湾曲していることから 江戸銭に比定できる 1708(宝永5)年初鑄
3号大土坑 42図6 図版10	柄杓	径(14.0) 柄高11.0	柄を装着する孔が大小あり、側板の留め具 と同じ木皮で孔の屈曲を補強している ひ ずみが大きく法量は復元値		1号溝 44図15 図版10	銅銭 寛永通宝	径2.45 厚さ0.14	古寛永で、字体の小変化のため完全に一致 しないが寛永13年から寛永17年初鑄の ものだろう 1636(寛永13)～1640(寛永17)年初鑄
3号大土坑 42図7 図版10	柄杓の柄	長さ44.5 幅2.2 厚さ0.9	2箇所に穿孔があり、先端部の穿孔位置が 先端から離れているので、別の留め具が 間に挟むことがわかる		1号溝 44図16 図版10	銀銭 10銭銀貨	径1.6 厚さ0.14	大正2年銘あり
1号溝 42図8 図版10	柄杓の柄	長さ60.2 幅2.6 厚さ1.5	2箇所に穿孔があり、先端部の穿孔位置が 先端から離れているので、別の留め具が 間に挟むことがわかる		1号大土坑 44図17 図版10	銅銭 1銭銅貨	径2.25 厚さ0.1	大正10年銘あり
1号溝 42図9 図版10	箱形製品 の側板 拵か	長さ8.4 高さ7.2 厚さ0.5	内側に10箇所、外側に2箇所の木釘孔が あり、内側は貫通していない 側板の 下端部にあたる		1号溝 44図18 図版10	銅銭 1銭銅貨	径2.25 厚さ0.11	昭和13年銘あり
1号溝上層 42図10 図版10	箱形製品 の側板	長さ22.5 高さ5.4 厚さ0.5	両側面に2箇所、上面に1箇所木釘孔が あり、上面が斜めであることから、傾斜 する小口部と推定		1号溝 44図19 図版10	銅銭 1銭銅貨	径2.8 厚さ0.14	明治6年銘あり
1号溝上層 42図11 図版10	箱形製品 の側板	長さ21.3 高さ2.0 厚さ0.3	内面端部に2箇所、上面に3箇所木釘孔 があり、上面が斜めであることから、傾 斜する側板部と推定		1号溝 44図20 図版10	銅銭 1銭銅貨	径2.1 厚さ0.11	縁部が摩滅している
2号溝南岸 43図1 図版10	建築部材	長さ71.2 幅11.0 厚さ7.3	上面の隅は四角座の上に円柱状を呈す 側 面の隅孔は上が貫通、下は木質が詰まっ ている 裏面は成形時の研磨 下面は欠 損後にも研磨されており再利用されて いる 目孔は両方から穿孔され、裏に紐 を通すタイプ		1号溝 44図21 図版10	銅銭 5銭白銅貨	径2.15 厚さ0.12	大正12年銘あり
2号溝南岸 43図2 図版10	建築部材	長さ52.9 幅6.3 厚さ3.3	上端の隅は板状で留め孔があることから 側板であろう		2号溝上層 44図22 図版10	貝杓子	長さ8.2 幅9.3	赤貝の貝殻を利用 柄と接合する穿孔2つ あり
1号溝 43図3 図版10	木筒	長さ21.8 幅3.3 厚さ0.6	上が溝 下端に穿孔しているのどこかに 打ちつけたものか 表は「大」、裏は「大」 だけ読み取れる		1号溝 45図1	砥石	長さ4.0 幅7.0 厚さ1.2重量22.2g	結晶片岩製 仕上げ砥 裏面は剥落 側面・ 上端面は成形時の研磨 下面は欠損後 も研磨されており再利用されている 1面 使用
2号溝下層 43図4 図版10	差歯下駄 陰印下駄	長さ20.9 幅10.4 厚さ2.0	側面は焼けている 目孔は両方から穿孔 されている 裏面に後目をつなぐ溝が あり、裏に紐を通すタイプ		1号溝 45図2	砥石	長さ4.4 幅5.0 厚さ0.9重量27.7g	結晶片岩製 仕上げ砥 側面は成形時の 研磨 2面使用
1号溝 43図5	連歯下駄	長さ22.3 幅7.2 厚さ2.2	後歯が前歯より擦り減っている 目孔は 両方から穿孔されている		1号溝 45図3	砥石	長さ6.6 幅4.8 厚さ2.6重量131.2g	凝灰岩(天草石)製 仕上げ砥 上端面は 成形時の研磨 側面に刃傷が多く残る 4面使用
2号溝 43図6 図版10	連歯下駄	長さ21.3 幅6.3 厚さ2.7	歯の擦り減り少ない		2号土坑 45図4	砥石	長さ8.3 幅3.5 厚さ2.4重量89g	凝灰岩(天草石)製 仕上げ砥 上端面は 成形時の研磨 4面使用
2号溝下層 44図1 図版10	連歯下駄	長さ22.0 幅11.0 厚さ2.8	後歯が前歯より擦り減っている 目孔は 斜めに穿孔されている 裏面に整痕あり		1号溝 45図5	砥石	長さ8.0 幅3.7 厚さ1.3重量26.1g	頁岩製 仕上げ砥 上端面・側面は成形 時の研磨 1面使用 欠損多い
2号溝 44図2 図版10	連歯下駄	長さ21.5 幅10.6 厚さ1.4	両歯ともほとんどなくなるほど擦り減 っている 目孔は斜めに穿孔されている		1号溝 45図6	砥石	長さ2.2 幅2.3 厚さ1.6重量13.0g	凝灰岩(天草石)製 仕上げ砥 上端面・ 側面は成形時の研磨 1面使用
2号溝 44図3 図版10	連歯下駄	長さ21.8 幅9.8 厚さ2.3	両歯とも擦り減っている 目孔は斜めに 穿孔されている		2号溝 45図7	砥石	長さ2.9 幅5.3 厚さ0.4重量31.4g	結晶片岩製 仕上げ砥 裏面は欠損 下 端面・側面は成形時の研磨 1面使用
1号溝 44図4 図版10	連歯下駄 ゴム鼻緒	長さ22.3 幅13.8 厚さ1.4	両歯ともほとんどなくなるほど擦り減 っている 背ゴムの鼻緒を黒ゴムの留め 具で裏を留めている		2号溝 45図8	石板	長さ12.3 幅8.0 厚さ2.0重量9.9g	結晶片岩製 隅部 木枠に入る部分は研 磨され狭くなっている 隅部は丸みをも つ 使用痕は横方向で深い
1号大土坑 44図5 図版10	飾り板	長さ2.4 幅3.4 厚さ0.05	銅板に鋳で彫刻したもの 月と水辺の 亀 表面には金属粒があり融着させて いたよう 小さいことから煙草入れ 袋の金具か		5号溝 45図9	小型硯 ダビ硯	長さ6.0 幅2.6 厚さ1.0重量21.8g	結晶片岩製 裏面は上げ底になって いるが、擦痕があり使用した可能性 もある 旅行者の携帯用
1号溝上層 44図6 図版10	キセル雁 首	長さ5.4 火口径1.2 首部径1.2重量17g	銅製 銀箔貼り 首部上面は窪んで平坦になっている 合わせ目が側面にある		1号溝 45図10 図版10	下白	上径(28.0) 下径(30.0) 器高9.0 孔径2.8 重量301.9g	軟質で多孔質の黒灰色の凝灰岩製 八女凝灰岩か 粗いノミ痕が残る 摺り 目分割単位は不明
1号溝上層 44図7 図版10	キセル吸 い口	長さ6.5 最大径0.7 重量11g	銅製 銀箔貼り 合わせ目が下面にある 木質が残っ ている		1号溝 45図11 図版10	下白	長軸38.7 短軸(40.4) 器高11.6 孔径3.6 重量779.0g	軟質で多孔質の黒灰色の凝灰岩製 八女凝灰岩か 粗いノミ痕が残る 摺り 目が摩滅しており分割単位は不明 下部の片口と側面の把手が削り出されている

表12 2次調査出土ガラス・木・金属・石製品観察表

3. 3次調査

矢加部町屋敷遺跡3次調査では、土坑6基、溝状遺構5条などを検出した。基盤層は中央部から西半分が緩やかに下がっている。

東壁土層断面図(第48図2)のように、東端部には遺構面が2枚あり、調査した遺構面の50cm上に18世紀後半から19世紀中葉の遺構面が存在していた。隣接する2次調査の成果や調査区内の中央から西部が大きく攪乱を受けていたことから単層と誤認して掘削してしまった。

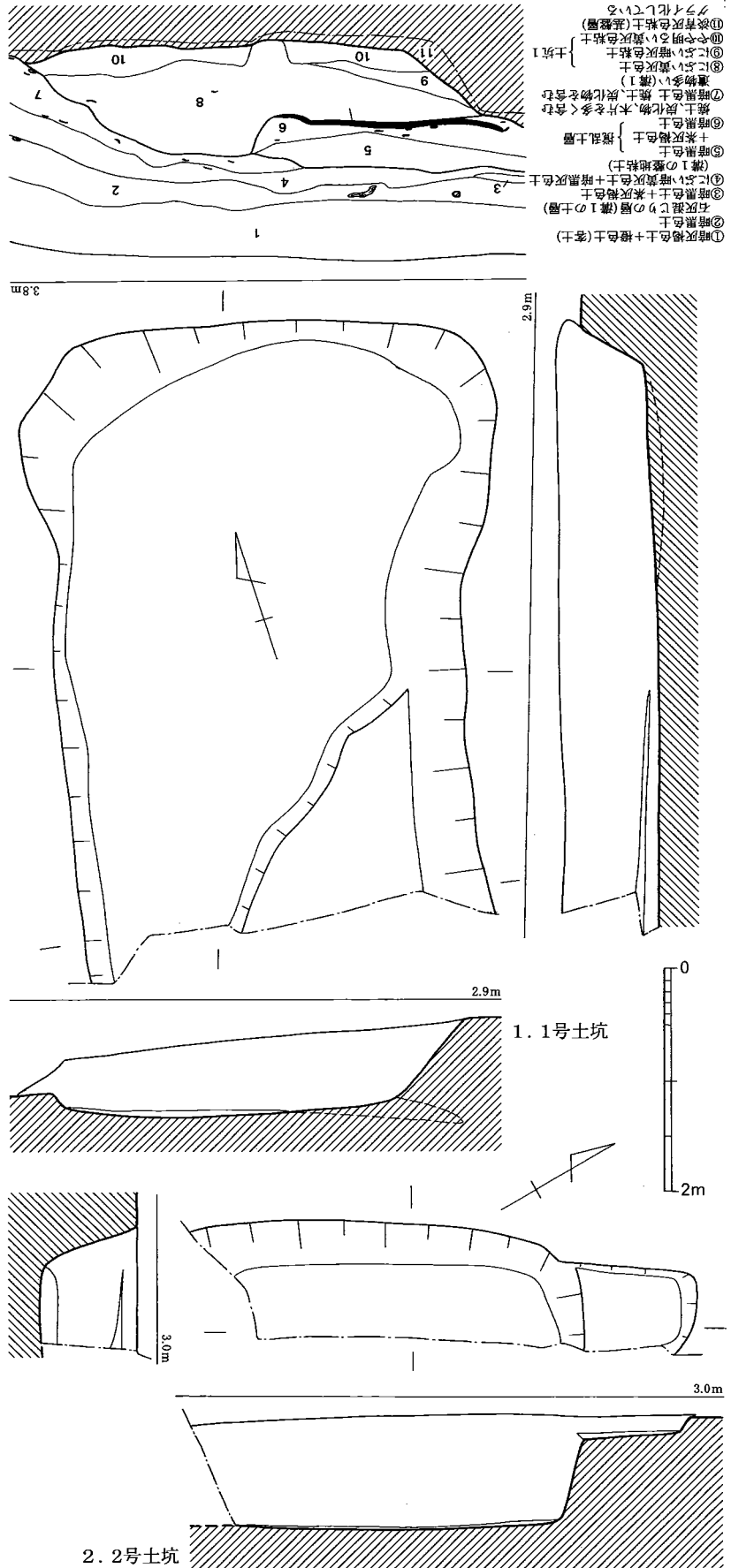
1) 遺構

a) 土坑

5号土坑は、遺構名を5号溝状遺構に付け替えており、欠番とする。8号土坑は調査時に土坑としていたが、4次調査の結果から、包含層の落ち込みと判断した。

1号土坑(図版11-2、第46図)

調査区中央南端に位置する平面方形の土坑で、南辺は調査区外に出ている。そのため長辺は調査区内で3.60m以上、短辺は2.87mを測る。主軸方向はN-17°20'-E。西辺は戦後の堆積層である暗黒色土層に切



第46図 3次調査1・2号土坑実測図(1/60)

られており、東辺はゴムを含む攪乱土坑に切られている。土層から見ると本来の掘り込み面はもっと高く、深さは98cm程あったようだが、検出面からは76cm程度であった。

埋土は粘土層で、自然堆積でなく一度に埋め戻した状態であった。

出土遺物は比較的少なく、廃棄土坑ではないようだ。年代は17世紀末～18世紀初頭。

2号土坑（図版11-3、第46図）

調査区南東隅に位置し、調査区外に遺構のほとんどが出ており、4次調査で東側の続きが検出され、平面方形の土坑であることが確認できた。調査区内の残存長で長軸457cm、短軸102cmで、深さは最深部で105cm程度。主軸方向はN-29° 30' -E。

出土遺物はわずかで、小片が多いため年代は不明。

3号土坑（図版11-4・5、第47図）

調査区中央に位置する平面長方形の土坑である。主軸方向はN-69° -Wで、北西に位置するほぼ同規模の4号土坑と主軸方向を等しくする。長軸が426cm、短軸157cmで、最深部で55cm程である。埋土は灰色土である。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は18世紀中葉。

4号土坑（図版12-1・3、第47図）

調査区中央に位置する平面長方形の土坑である。主軸方向はN-69° -Wで、南東に位置するほぼ同規模の3号土坑と主軸方向を等しくする。長軸が451cm、短軸154cmで、最深部で92cmを測る。床面直上に中央部に木皮が敷かれていた。鉄滓が1点のみ出土している。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は19世紀前葉～中葉。

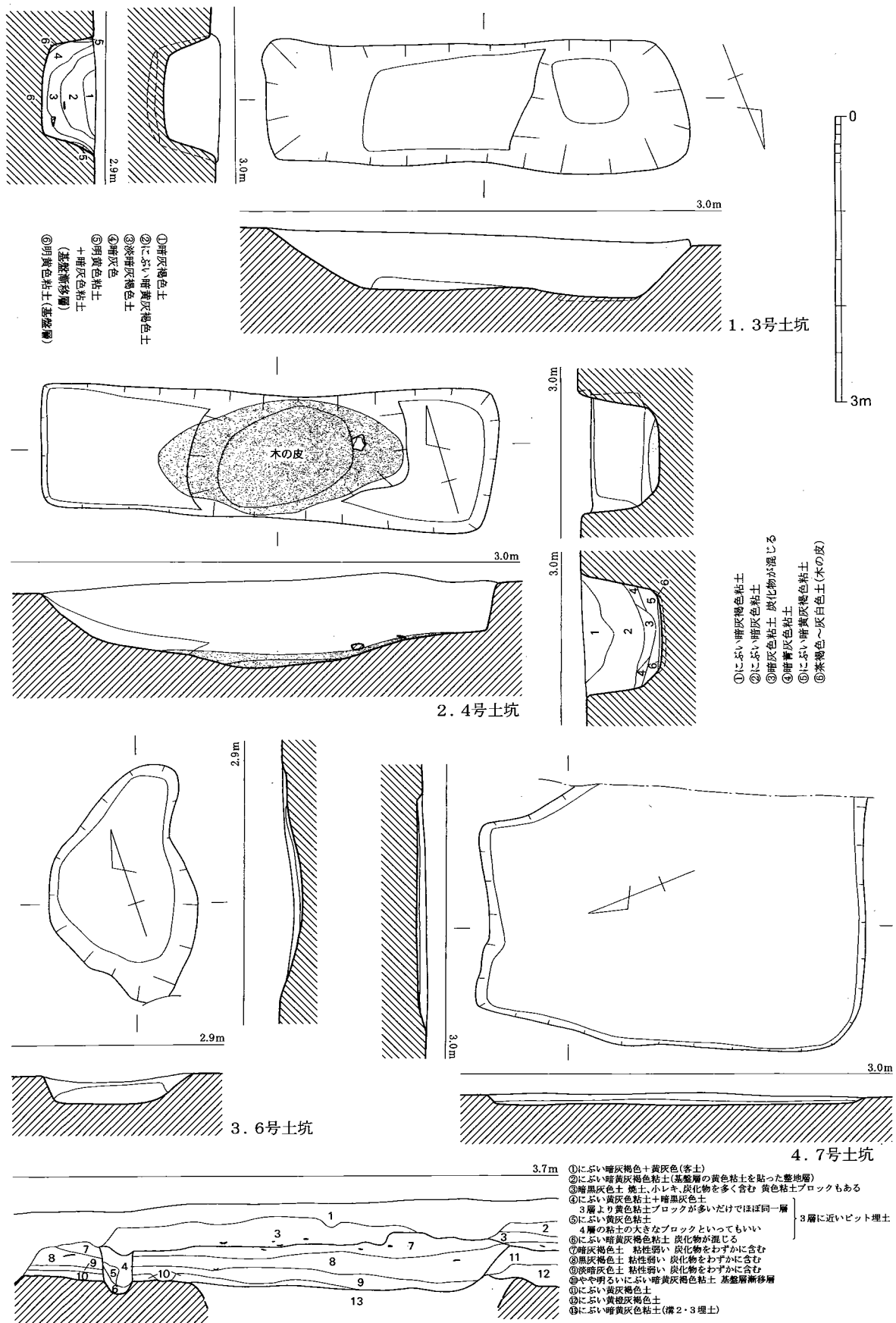
6号土坑（図版12-2、第47図）

調査区北西に位置する不整形な土坑である。長軸が254cm、短軸152cm。削平されており深さは28cm程しか残っていない。壁の立ち上がりは緩やかで、埋土は灰褐色土の単一層であった。主軸方向はN-17° 20' -Eをとる。

出土遺物はわずかで小片が多いため、年代は不明。

7号土坑（図版12-4・5、第47図）

調査区北東隅に位置する平面方形の土坑である。東端は調査区外に出ており、4次調査で続きが検出された。北端は緩やかに立ち上がっているため削平でプランが不明確になっている。2・3号溝状遺構を切っており、残存部で長軸が406cm、短軸は283cmであろう。主軸方向はN-22° -Eをとる。検出面を下げすぎているが、土層断面では最深部で60cm程残っていた。出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不確定だが19世紀中葉の包含層の下から検出されており、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。



第47図 3次調査3・4・6・7号土坑実測図(1/60)

b) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版11-1、第3図)

調査区の西半に位置し、東西に引き込みが走る。西に隣接する現存クリークの一部であり、2次調査の1号溝状遺構と同一遺構である。上位に戦後の堆積層が被っており、これに切られている範囲を攪乱と判断した。隣接するクリークを護岸しているコンクリートにヒビが入っており、上位の戦後の堆積層を除去するとクリークの水圧で護岸が崩壊する可能性があったので、西部は戦後の堆積層を掘削しないものとし、掘削可能な範囲のみを調査した。南部では1号土坑を切っており、この切り合い部の東壁には杭で押さえられた横木が置かれていた。

この隣接クリークは調査終了後の工事に伴う掘削状況を見ることができた。標高0mぐらいまで掘削したところで底面が出ており、底付近からは18世紀後半代の染付が出土していた。また、2号溝状遺構を切っていたことから、18世紀中葉～後葉に掘削されたと思われる。

2号溝状遺構 (図版11-1・13-1～3、第3・48図)

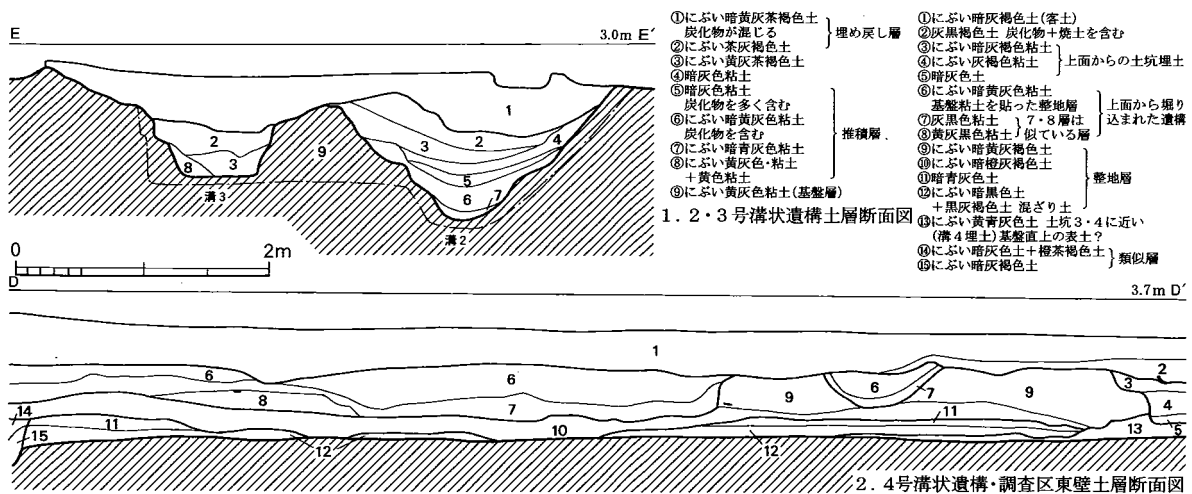
調査区の北部を直線的にほぼ東西に走る溝で、7号土坑と1号溝状遺構に切られている。3号溝状遺構とは併走しているが、東部で切り合いが認められ、3号溝状遺構に切られている。床面は西に向かって下がっており1号溝状遺構に接して排水できるようになっていたものと思われる。幅は225cm程、深さは110cm程あり、断面V字状で土層から掘り直しが見られる。3号溝状遺構とは掘り直し時の溝底面の高さが等しく、埋土が同じであることから併存していた可能性がある。

出土遺物は少なく中位から硯が、下位から大甕が出土している。時期は17世紀第3四半期か。

3号溝状遺構 (図版11-1・13-4、第3・48図)

調査区の北部を直線的にほぼ東西に走る溝で、7号土坑と1号溝状遺構に切られている。2号溝状遺構とは併走しているが、東部で切り合いが認められ、2号溝状遺構を切っている。2号溝状遺構の掘り直し段階の溝底と深さがほぼ等しく、埋土も同じであることから併存していた可能性がある。断面Y字形で検出面の幅は270cm程、深さは80cm程である。

出土遺物は少なく時期は不明。



第48図 3次調査2～4号溝状遺構、調査区東壁土層断面実測図(1/60)

4号溝状遺構（図版11-1、第3・48図）

調査区の南西を直線的にN-15°-Eに走る溝で、南側調査区外に続いているが、4次調査では検出できなかった。北側は削られてなくなっていた。非常に小さい溝で、東壁土層断面でも20cm程度しかなく、幅も50cm程であった。埋土が特徴的で黄色粘土が目立つ。出土遺物は少ないが、この埋土から、幕末から明治のものと思われる。

5号溝状遺構（図版11-1、第3図）

調査区の中央を直線的にN-15°-Eに走る溝だが、210cmほどの長さしか検出されなかったので、当初は土坑と認識していた。幅39cm、深さ8cmと規模も小さく、区画的な意味か、横木を据えた可能性をもつ。出土遺物も少なく、時期は不明。

2) 遺物

出土遺物の記述については観察表に掲載しているが、付記すべき遺物についてのみ記述する。

1号土坑（図版15）

49図4は底部穿孔をもつかかわらけで、行灯など灯火具の底板などに釘で打ちつけて灯明皿の受け皿としたものでろう。49図4・5は胎土から蒲池焼の可能性が高い。49図10は肥前系の陶器製皿・鉢に多く見られる白化粧土拭き取りによる波状文を模倣したもので、高取・小石原系。

1号溝状遺構（図版14~17）

50図2は、杉形碗で肥前系では類例を見ないが、胎土から肥前系と推定。50図3は龍泉窯の青磁で蓮弁が凹線で表現されたもの。混入品であろう。50図15はイッチン掛けの瓶で釉の特徴から筑後市赤坂焼に類例が求められるが、小片のため器形が不明瞭なので確定できない。

51図15は大型の蓋物で、合子か段重の蓋になる。51図18・20は胎土から筑後地域の焼き物と考えられる。形態的には51図19の博多瓦町焼の七輪に近い形態になろう。

52図10の土瓶は19世紀中葉に口縁部が肥厚するものが見られる。52図11は土師質の土管で胎土から筑後地域の焼き物だろう。

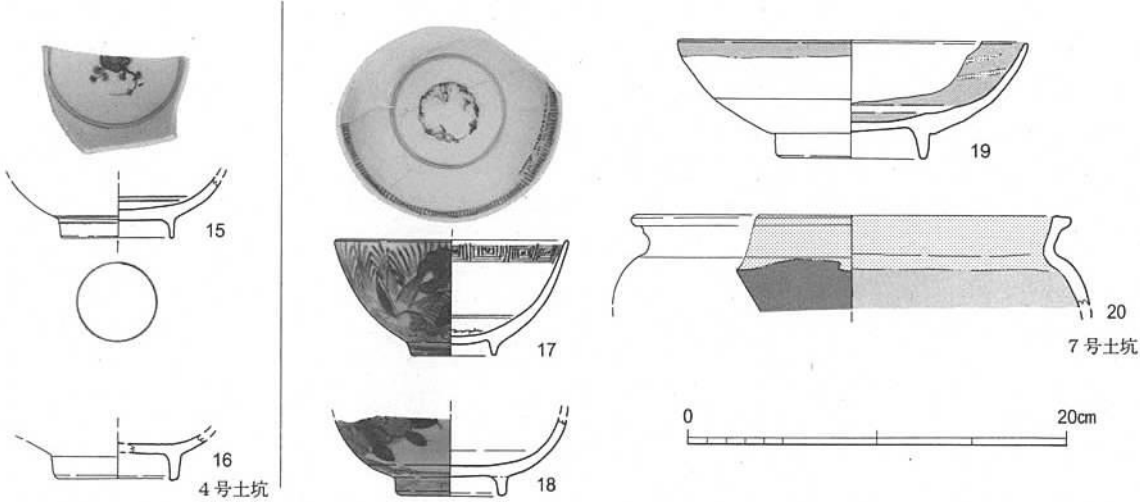
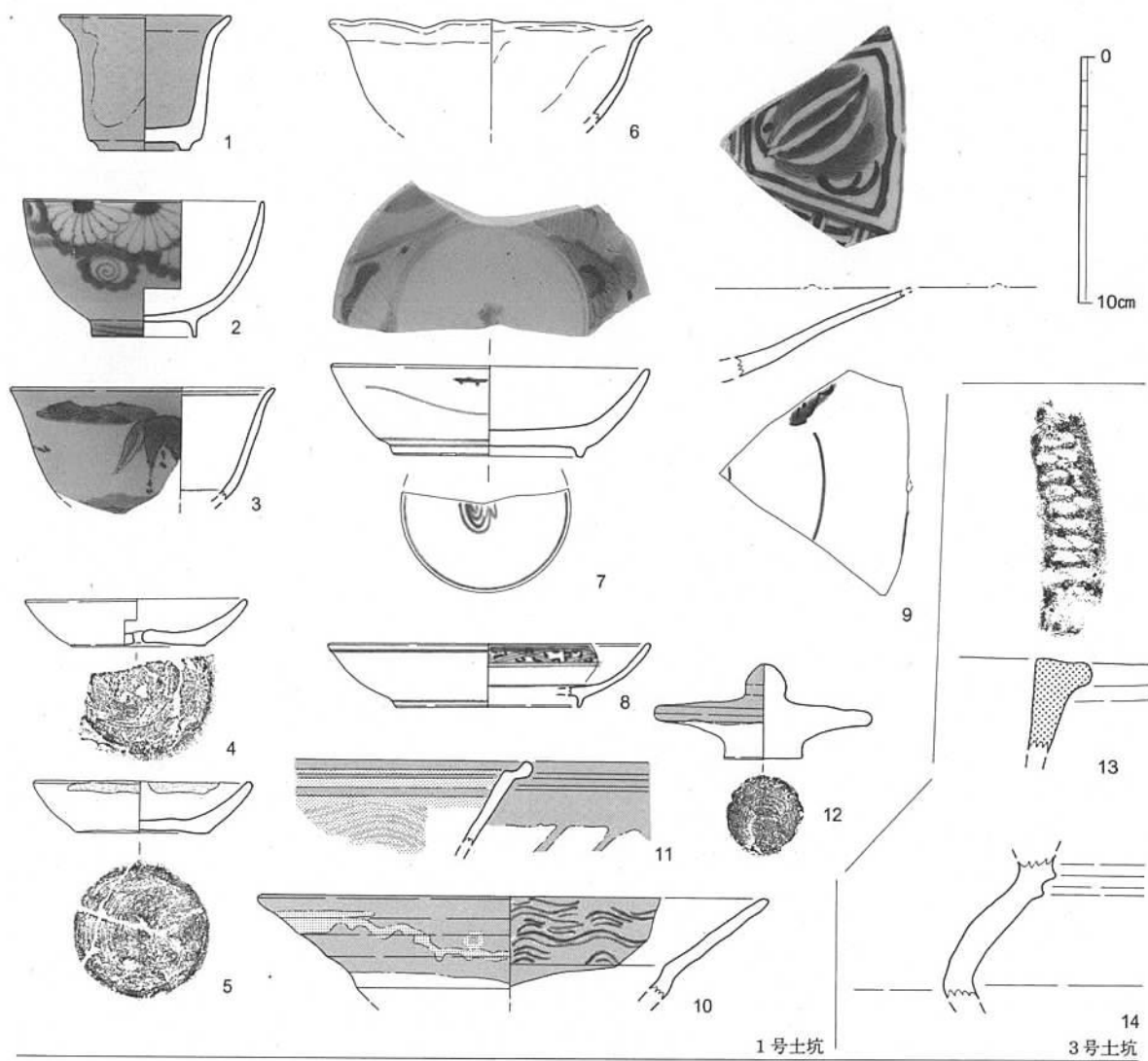
53図11は盛り絵で横書きの文字が書かれているが、判読できない。53図24は龍泉窯青磁で混入品。53図20は肥前系の染付碗だが、胎土や器形が特徴的であり、肥前以外で焼かれた可能性もある。53図29は底部の糸切りが2方向にあるが、偶発的なものだろう。

54図3は高台をきれいに打ち欠いて平坦にしている。高台が破損したので再利用するための工夫であろう。54図15は嬉野市塩田東山・西山窯採集品に類例があるが、モチーフは同じだが細部で異なるので窯を特定できない。

57図4・6と57図5は同じ刷毛目文鉢だが、胎土の特徴から前者はみやま市高田町の二川焼と考えた。57図15は磁器質だが、藁灰釉が掛かっている。福岡県内の窯の製品かもしれない。

58図2は釉薬が天目釉のように光沢を持つ黒だが、この器形は鉛釉にはほぼ限定されており、胎が半磁器状に硬化しているので、焼成過剰で鉛釉が変色したものと考えられる。

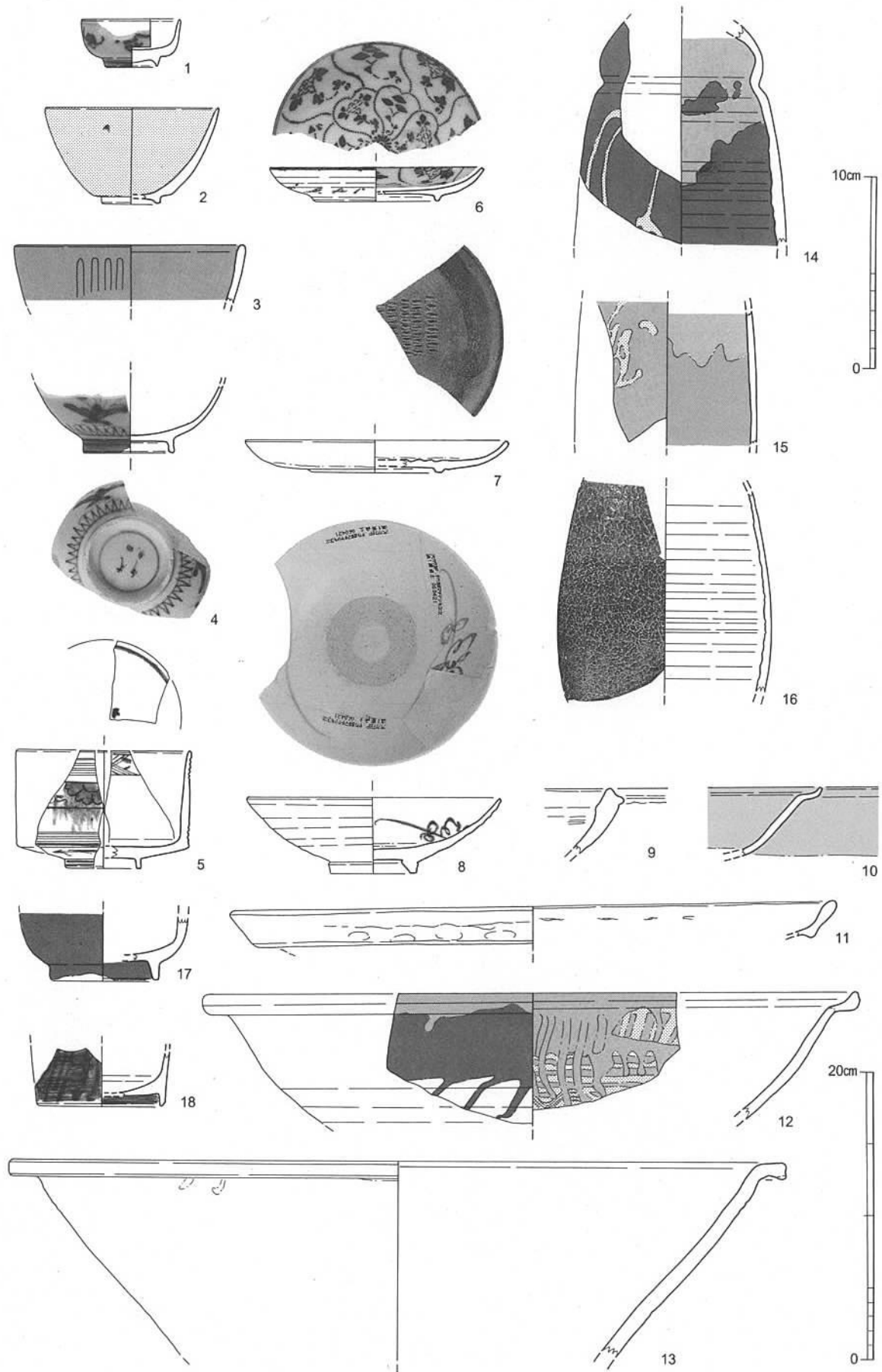
59図10は胎土が博多瓦町焼に近いが、器形が不明確なので確定できない。



第49图 3次調査1・3・4・7号土坑出土土器・陶磁器実測図1 (11・14・19・20は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所 見			
							挿入番号	形状	()は復元値	胎の特徴
図版番号	通称名									
1号土坑 49図1 図版14	小杯	口径(7.0) 高台径3.7 器高5.5	陶器(半磁器) 暗灰色 硬質 黒色粒子入る	にぶい赤茶褐色の鉄赤釉 全面	緑釉の上掛け	畳付砂目付き	8層出土 黒色粒子が入る特徴的な胎土	産地不明		不明
1号土坑 49図2	中碗 丸碗	口径(9.8) 高台径4.2 器高5.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	半菊文 呉須染付 手描き	畳付釉剥ぎ		肥前系		1680 / 1700
1号土坑 49図3	中碗 端反碗	口径(10.6)	磁器(染付) 暗灰色 黒色粒子入る	焼成不良 透明釉	手描き呉須染付による外面馬文、内面口縁部に2条界線、見込みに1条界線	不明	7層出土 呉須は発色不良で暗緑灰色	肥前系		1850 / 1860
1号土坑 49図4 図版15	小皿 かわらけ	口径9.0 底径5.2 器高1.9	土師器 黄褐色 淡褐色 金雲母 黒色粒子あり		内外回転ナデ上からの径3ミリの穿孔がある底部糸切り	不明	穿孔部に発色がないので焼成後の穿孔	柳川市蒲池焼		不明
1号土坑 49図5 図版15	小皿 かわらけ	口径8.8 底径5.5 器高2.6	土師器 黄灰白色 軟質 精良		内外回転ナデ 糸切り	不明	内外の口縁部に煤付きあり 灯明皿金雲母なし	柳川市蒲池焼		不明
1号土坑 49図6	小鉢 輪花口縁	口径(13.2)	磁器(白磁) 灰白色 光沢あり	透明釉 全面 貫入あり	斜めの花卉 型打ち成形か	不明	胎土が特徴的	肥前系 波佐見 長与町長与山山窯か		1680 / 1740
1号土坑 49図7	小皿	口径(12.8) 高台径(7.8) 器高3.7	磁器(染付) 灰白色だが、底部のみ焼成不良で灰褐色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面唐草文 胴下位に1条と胴下に1条の界線 内面花文 見込みの五弁花文はコンニャク印判 裏銘は1条界線内に「高福	畳付釉剥ぎ 砂目跡付き	7層出土 波佐見町永尾本登窯跡に類似あり	肥前系 波佐見		1820 / 1860
1号土坑 49図8	小皿	口径(13.0) 高台径(7.6) 器高2.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面草花文 内面は崩れた袈裟文帯	畳付釉剥ぎ		肥前系		19c 中葉
1号土坑 49図9	中皿 稜花口縁 美蓉手	復元不能	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面草花文 内面区画内に花卉文	不明	有田町中白川窯に類似あり	肥前系 有田町中白川窯		1650 / 1670
1号土坑 49図10 図版15	中皿	口径(20.6)	陶器 黒灰色	緑灰色の灰釉を内面と外面口縁部透明釉上掛け	外面透明釉上掛けで釉垂れあり 内面口縁部は緑灰色の灰釉を波状に拭き取り	不明	肥前系波状文だが、白化粧土を使用していない	高取・小石原系		不明
1号土坑 49図11	中鉢	復元不能	陶器 赤茶褐色で白色粒子を含む	緑灰色の灰釉を内面と外面口縁部透明釉上掛け	外面透明釉上掛けで釉垂れあり 内面緑灰色の灰釉を、口縁下を波状に拭き取ったのち、口縁部を帯状に拭き取る	不明	肥前系波状文だが、白化粧土を使用していない	高取系		1690 / 1750
1号土坑 49図12 図版14	土瓶蓋	柄径8.8 底径3.2 器高3.9	陶器 褐色 硬質 混入物少ない	緑掛かった薬灰釉 上面のみ	底部糸切り	下面は釉拭き取りなので土瓶と重ね焼きか		高取系か		不明
3号土坑 49図13 図版15	鉢	復元不能	瓦質土器 にぶい黄灰色 角閃石目立つ		内外摩滅のため調整不明 口唇部は2列刺突文	不明		在地		12c 後半 / 13c 前半
3号土坑 49図14	大甕	復元不能	陶器 赤茶褐色で白色粒子を含む	茶褐色の鉄釉	口縁下に2条突帯 内外ヨコナア	不明		肥前系		17c 後半
4号土坑 49図15	中碗	底径(4.4)	磁器(染付) 白色 黒色粒子入る	透明釉 全面	手描き呉須染付により胴下位に1本と高台に1本の界線 内面2条界線内に花文 外底に1条界線	畳付釉剥ぎ	見込みのモチーフから端反碗と考えられる	肥前系		1820 / 1860
4号土坑 49図16	中碗	底径(5.0)	磁器(染付) 灰白色 軟質 精良	緑灰色の低火度の透明釉を内面 軟装を外面	不明	畳付釉剥ぎ		肥前系		不明
7号土坑 49図17	中碗	口径(9.2) 高台径(3.3) 器高4.6	磁器(染付) 白色	青みがかった透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面 線描きの花文 高台に2本の界線 内面は口縁部に崩れた雷文帯 見込みに2条界線内に崩れた環状松葉文	畳付釉剥ぎ	3層出土	肥前系		19c 中葉
7号土坑 49図18	中碗	底径(4.4)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	花樹文 胴下位に1条の界線 コバルト染付 手描き	畳付釉剥ぎ		肥前系		19c 中葉
7号土坑 49図19	中皿	口径(18.4) 高台径(8.0) 器高6.3	陶器 暗赤茶褐色 精良	灰白色の灰釉 内面から外面口縁部	外面は白化粧土の刷毛文 高台削り出し	畳付砂目付き 見込み蛇の目釉剥ぎ		肥前系		不明
7号土坑 49図20	中鉢 ハンズ-ガメ	口径(23.2)	陶器 赤茶褐色	鉄装を下掛けし、外面から内面まで口縁部口縁部に白化粧土を掛け、その上に全面透明釉掛け 外面肩部には鉄絵の公文		不明		肥前系		不明
1号溝黒色土層 50図1	小杯	口径(5.2) 高台径(2.8) 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	漢字文 胴下位に1条、高台に1条の界線 コバルト染付 手描き	畳付釉剥ぎ		肥前系		不明
1号溝黒色土層 50図2	中碗 杉形	口径(9.0) 高台径(3.0) 器高5.0	陶器(半磁器) 黄白色の低火度の透明釉高台以外に黒釉を掛けた貫入あり	黄白色の低火度の透明釉高台以外に黒釉を掛けた貫入あり	高台削り出し	高台釉剥ぎ	胎が特徴的	肥前系		不明
1号溝黒色土層 50図3	中碗	口径(12.0)	磁器(青磁) 灰色	灰青色の青磁釉 全面	細連弁文	不明		中国・龍泉窯		15c 後半 / 16c 前半
1号溝黒色土層 50図4	中碗	高台径4.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により花文、胴下位に1条界線と鋸歯文、高台に2条界線 裏銘は1条界線内に「大明年製」	畳付釉剥ぎ	内面に界線がなく、器形から年代を比定	肥前系		18c 中葉か
1号溝黒色土層 50図5	中碗 半筒碗	口径(9.0) 高台径4.0 器高6.2	磁器(染付) 灰白色	青味のある透明釉 全面	外面は口縁下に5条と胴下位に4条の沈線 中に手描き呉須染付による花文帯 内面は口縁下に袈裟文帯 見込みに1条界線内に不明文様 底面に折れ松葉文 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ	呉須の染みあり 沈線や中位の文様帯など施文パターンが特異	産地不明		18c 中葉か
1号溝黒色土層 50図6	小皿	口径(11.0) 高台径6.2 器高1.8	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	口唇部にコバルトを口紅状に施釉 内面から見込みに点線区画内に 盤芝文から変形した花文	畳付釉剥ぎ	特徴的な胎 文様は本来盤芝文だが、花文に変化	肥前系		19c 末 / 20c 初頭
1号溝黒色土層 50図7	五寸皿 鈎皿	口径(13.6) 底径(6.7) 器高1.7	陶器 茶灰褐色～黒灰色	裏灰釉を口縁部に2度掛け 交差した部分が白く染色	見込みに8個を1列とする刺突文が5列以上削り込みで高台を作り出している	胴下半は露胎		小石原系		不明
1号溝黒色土層 50図8	小皿	口径(13.1) 底径4.5 器高4.0	磁器(染付) 白色	乳白色の透明釉 高台以外全面	内面にやや崩れた梅樹文と折松葉文	胴下半は露胎 見込み蛇の目釉剥ぎ	中尾上登窯や昭口窯跡に類似があるが、文様が異なる	肥前系 波佐見系		1650 / 1680
1号溝黒色土層 50図9	鉢	復元不能	瓦質 黒灰～黄白色 軟質 白色粒子を多い		外面ナデ 内面ハケをナゲ消し	不明		在地系		不明
1号溝黒色土層 50図10	皿	復元不能	陶器 灰で黒色粒子を多く含む 軟質	内面鉄装の上に緑灰色の灰釉		胴下半は露胎		肥前系		不明
1号溝黒色土層 50図11	焙烙	復元不能	土師質土器 暗褐色 軟質 金雲母 白粒子多い		外面口縁部積み上げ痕残る 口縁下はオサエ内面ヨコナア	不明	口縁部外面に煤付き	在地系		不明
1号溝黒色土層 50図12 図版15	鉢 二彩唐津	口径(45.6)	陶器 茶褐色 軟質 白色粒子含む	外面は暗褐色の鉄釉の上に灰釉掛け流し 内面は白化粧土の帯状拭き取りのち波状拭き取り、最後に灰釉掛け流し		不明		肥前系 糟野市志田西山1号窯に類似あり		1690 / 1750
1号溝黒色土層 50図13 図版15	鉢	口径(40.0)	陶器 黄灰色 軟質 白色粒子含む	内面は白化粧土 低火度の透明釉 全面		不明		在地系 胎は在地的		不明
1号溝黒色土層 50図14	中瓶	最大径(10.0)	陶器 黒灰色	茶褐色の鉄釉を全面に掛け、黒色の灰釉を上掛け	外面はイッチン掛けによる梅樹文 内面は黒褐色の筋釉を上掛けが上半までかかる	不明		東峰村金敷様裏1号古窯		1750 / 1860
1号溝黒色土層 50図15	中瓶	最大径(9.3)	陶器 灰褐色 精良 や軟質	外面は暗緑灰色の灰釉 内面は鉄装 全面に透明釉掛け	外面はイッチン掛けによる文字と思われるが小片のため解読できない	不明		筑後市赤坂焼か		産地不明
1号溝黒色土層 50図16	中瓶	最大径(11.0)	陶器 黒灰褐色 白色粒子多い	黄灰色の灰釉 外面		不明		上野小石原系		不明

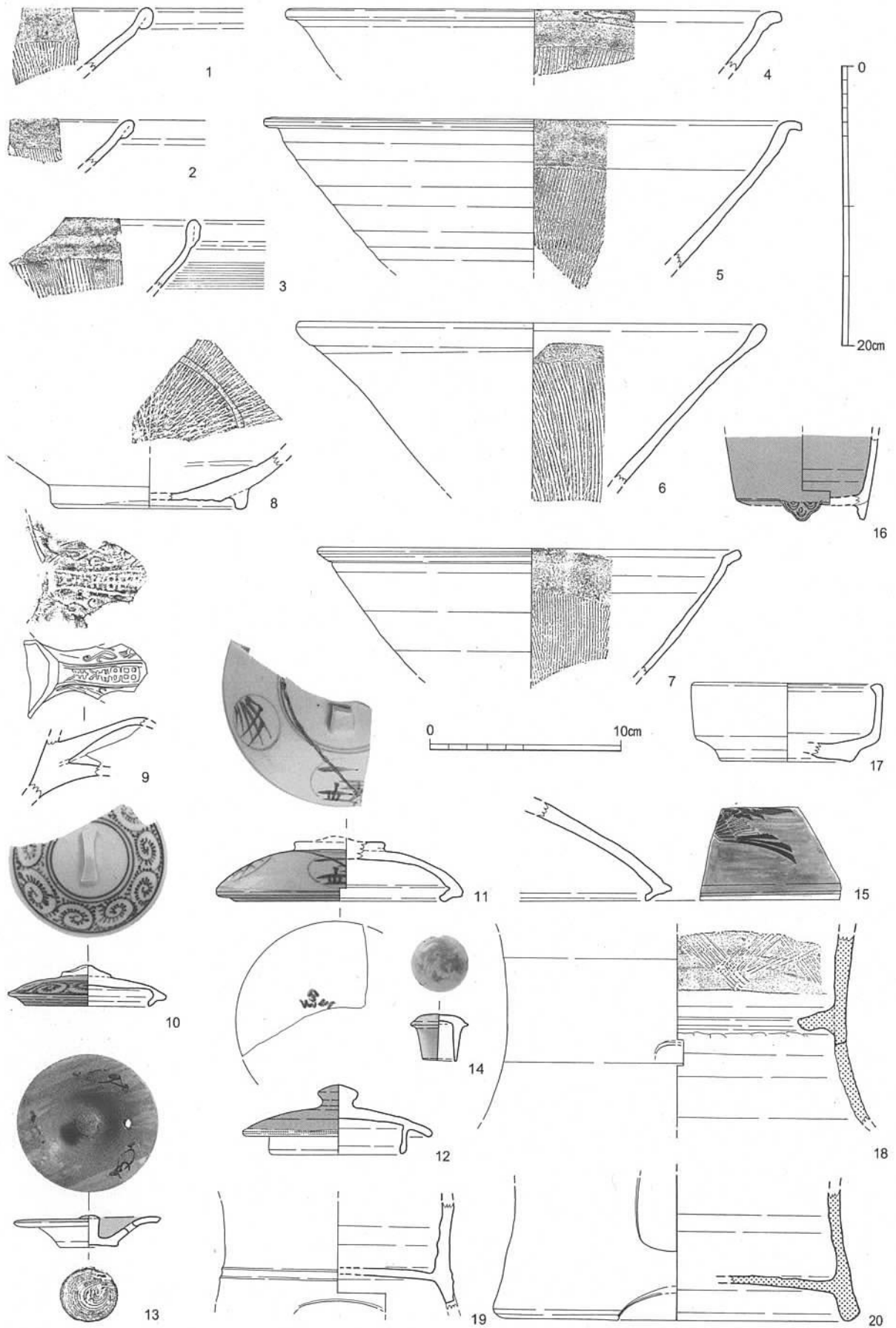
表13 3次調査土坑・1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表



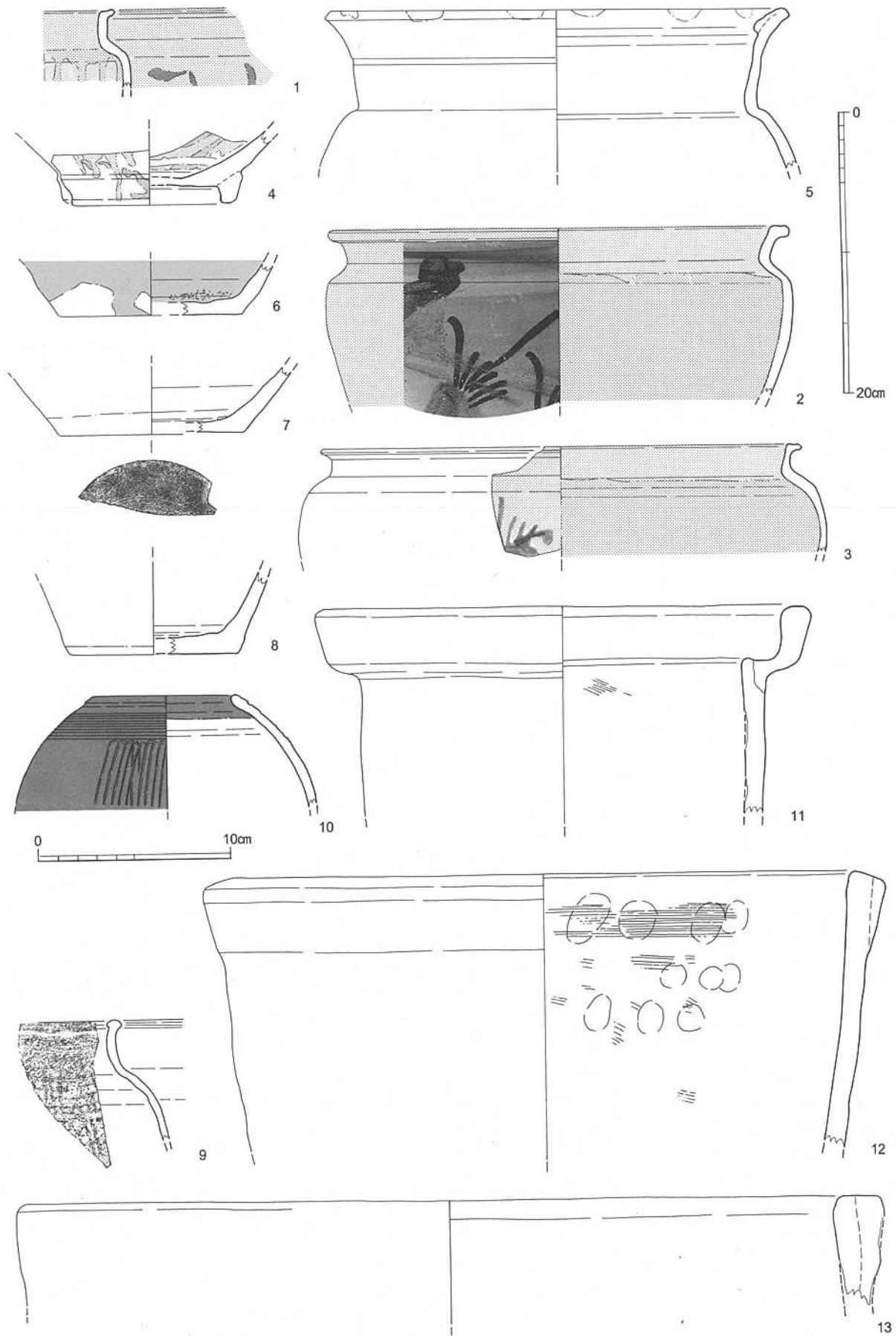
第50図 3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(9・11・12は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・裝飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝黒色土層 50図17	小壺 茶入れ	高台径(5.6)	陶器 にぶい黄灰色 硬質	黒釉 外面	—	畳付釉剥ぎ 砂目跡付き		肥前系	不明
1号溝黒色土層 50図18	瓶 茶入れ	高台径(6.6)	陶器 白色 黒色粒子 あり	褐釉の刷毛目状 施文の上に灰釉 流し掛け 外面	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝黒色土層 51図1	摺鉢	復元不能	陶器 橙褐色 軟質 白色粒子入る	内外暗褐色の 薄い鉄釉	摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	不明		小石原系	不明
1号溝黒色土層 51図2	摺鉢	復元不能	陶器 橙褐色 やや軟 質	内外茶褐色の 薄い鉄釉	摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	不明		小石原系	不明
1号溝黒色土層 51図3	摺鉢	復元不能	陶器 暗赤茶褐~黒灰色 硬質 白色粒子あり	茶褐色の鉄釉 外面は薄く、内 面は2度掛け	外面体部にカキ目 内面には2度掛け時の釉 垂れ 摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	不明		高取系	不明
1号溝黒色土層 51図4	摺鉢	口径(35.0)	陶器 にぶい暗褐色 やや 軟質 白色粒子あり	暗褐色の鉄釉 厚掛け 全面	摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	不明		肥前系	18c 中葉 19c 代
1号溝黒色土層 51図5	摺鉢	口径(28.0)	陶器 にぶい橙褐色 やや硬質	暗茶褐色の鉄 釉厚掛け 全 面	摺目上端ナデ揃え 摺り目23単位	不明		肥前系	18c 中葉 19c 代
1号溝黒色土層 51図6	摺鉢	口径(28.0)	陶器 にぶい黄橙灰色 やや軟質	茶褐色の鉄釉 厚掛け 全 面	摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明	不明		小石原系	18c 中葉 19c 代
1号溝黒色土層 51図7	摺鉢	口径(30.0)	陶器 暗赤褐色 硬質	暗茶褐色の鉄 釉 全面	摺目上端ナデ揃え 摺り目31単位	不明		肥前系	18c 中葉 19c 代
1号溝黒色土層 51図8	摺鉢	高台径(14.0)	陶器 茶褐色 やや軟 質	暗茶褐色の鉄 釉厚掛け 全 面	摺目上端ナデ揃え 摺り目単位不明 高台貼 り付け	畳付釉拭き取り 見込みは蛇の目状 に砂目がつく		肥前系	18c 中葉 19c 代
1号溝黒色土層 51図9	行平鍋	長さ(6.8) 最大幅(2.5)	陶器 黄灰白色 軟質 精良	外面は黄褐色の鉄 釉を厚掛け、内面 は低火度の透明釉	把手は上下半分ずつ型押し成形して接合し、 体部に装着 上半部は文様が陽刻	不明	把手の文様は文字 のように見えるが、 判読できない	産地不明	不明
1号溝黒色土層 51図10 図版14	合子蓋	裾径8.2 口縁径6.4 器高2.1	磁器(染付) 白色	青味がかった 透明釉 全面	天井部に帯状つまみ貼り付け 上2条、下1 条の界線の中に胡唐草文 呉須染付 手描き	返り部釉剥ぎ 砂目付着		肥前系	1820 1860
1号溝黒色土層 51図11	合子蓋	裾径(13.0) 口縁径(11.1) 器高(3.1)	磁器(染付) 白色	やや暗い透明 釉	天井部に帯状つまみ貼り付け 手描き呉須染付により 天井部外面に上2条、下1条の界線の中に秋草草文 内面天井に朱書きの墨書「細三」まで判読できる	返り部釉拭き取り 砂目付着	焼き継ぎ痕あり	肥前系	1820 1860
1号溝黒色土層 51図12	土瓶蓋 青土瓶	裾径10.0 口縁径7.3 器高3.7	陶器 暗茶褐色 やや 軟質	淡緑青色の銅緑釉 を掛けた後透明釉 上掛け 上面	天井部にボタン状つまみ貼り付け	裾端から下面は 釉拭き取り		肥前系	1750 1860
1号溝黒色土層 51図13	急須蓋	裾径7.7 底径3.1 器高1.5	陶器 黄色 精良	低火度の黄灰 褐色の灰釉 上面	つまみ貼り付け 蒸気孔あり 外面は白化粧 土を流し掛けした後、鉄絵 底部系切り	裾端から下面は 釉拭き取り	ほぼ完形	高取系か	1750 1860
1号溝黒色土層 51図14 図版14	瓶蓋	裾径3.1 口縁径1.9 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	上面に花文 コバルト染付 銅版刷り	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸・美濃系	不明
1号溝黒色土層 51図15 図版15	鉢蓋か	復元不能	磁器(染付) 白色	透明釉を全面 掛けた後、外 面のみ鉄釉	灰彩の輪郭線の間に黒・緑・白・青彩で羽を 描いた上給付けの鳳凰文か	畳付釉拭き取り		肥前系	不明
1号溝黒色土層 51図16	香炉	底径(6.0)	磁器(青磁) 白色	淡緑青色の青 磁釉 全面	底部は型押し成形による炭手文印刻された逆 山形の脚を貼り付け	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	不明
1号溝黒色土層 51図17	香炉	口径(10.2) 高台径(7.2) 器高4.1	磁器(青磁) 灰白色	淡緑色の青磁 釉 全面	—	高台釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝黒色土層 51図18 図版15	七輪	最小径(24.2)	土師器 黄白色 軟質 白色 粒子 金雲母多い	—	外面は丁寧なナデ 楕円形の空気孔のコーナ ー部がある 内面は交差歯齒文がタガの上に施さ れている タガの下は煤付着	高台釉剥ぎ		在地系	不明
1号溝黒色土層 51図19 図版15	七輪	最小径(24.2)	土師器 黄白色 軟質 白色 粒子 金雲母多い	—	外面は丁寧なヨコナデ 2条突帯 高台は半 楕円形の透かし穴	不明		博多瓦町焼か	不明
1号溝黒色土層 51図20	七輪	最小径(23.0)	土師器 にぶい灰白色 軟質 白色粒子 金雲母あり	—	外面は丁寧なナデで楕円形の空気孔のコーナ ー部がある 内面は煤付着 高台は半楕円形の 透かし穴	不明		在地系	不明
1号溝黒色土層 52図1	中甕 ハンズーガメ	復元不能	陶器 黒灰色	外面は白化粧、内面は 鉄絵の上に口縁部まで白化粧 土を掛け、灰釉を流し掛け	外面は鉄絵 松文か	不明	胎は黒灰色なのは 焼成不良のためか	肥前系	不明
1号溝黒色土層 52図2	中甕 ハンズーガメ	口径(32.6)	陶器 灰白色 硬質 精 良	外面から内面口縁部 まで白化粧土を掛け た後、透明釉掛	外面は鉄絵 松文か	不明		肥前系	不明
1号溝黒色土層 52図3	中甕 ハンズーガメ	口径(34.0)	陶器 暗赤褐~黒灰色	白化粧土を外面から 内面口縁部まで掛け た上に、透明釉掛	外面は鉄絵 松文か	不明		肥前系	不明
1号溝黒色土層 52図4	中甕か中鉢	底径(12.2)	陶器 赤茶褐色	外面は鉄絵の上に緑灰色の灰釉を掛け、その上に白化粧土を 流し掛け 内面は白化粧土の上に鉄釉が掛かっている	見込みに砂目跡	胎は黒灰色なのは 焼成不良のためか		肥前系	不明
1号溝黒色土層 52図5	中甕 ハンズーガメ	口径(33.0)	陶器 暗赤褐色 硬質	茶褐色の鉄釉 厚掛け	—	口唇部に胎土目 跡		肥前系	19c 後半 代
1号溝黒色土層 52図6 図版15	小甕か小壺	底径(9.6)	陶器 青灰色 硬質	緑灰色の灰釉 内面~外面下 位まで	—	底部に径7.4cmの 焼き台の痕跡 見 込みに砂目付着	胎土は硬質の須恵 質に近い	高取系	不明
1号溝黒色土層 52図7	小甕か小壺	底径(13.0)	陶器 青灰~黄褐色 軟質	暗褐色の胎釉 内面~外面下 位まで	底部系切り	見込みに砂目跡	胎土は須恵質に近 い	高取系	不明
1号溝黒色土層 52図8 図版15	小甕か小壺	底径(11.8)	陶器 淡黄灰~黄白色 軟質	光沢ある褐釉 全面	—	底部に焼き台の 痕跡 胴下位は 釉拭き取り		高取系	不明
1号溝黒色土層 52図9	小壺	復元不能	陶器 にぶい暗黒褐~ 暗赤褐色 硬質	茶褐色の鉄釉 厚掛け	内面は格子目タタキ当て具痕	不明	口径は11cm前後で、 武雄市郷屋1~3 号窯の小壺に近い	肥前系	不明
1号溝黒色土層 52図10	土瓶 腰折形	口径(7.0)	陶器 にぶい黄灰色	黒釉 外面~ 内面口縁部	外面は4本単位の凹線を口縁下に横方向、体 部に縦方向に施文	口唇部釉剥ぎ	口縁部の特徴から 19c 中葉以降と推 定	肥前系か	19c 後半 代
1号溝黒色土層 52図11 図版15	土管	口縁径(35.0) 胴部径(28.5)	土師器 にぶい黄灰色 軟質 白 色・黒色・褐色粒子入る	—	内面はハケをナデ消し	不明	外面は焼成のためにぶ い暗褐色、内面は使 用のため暗褐色に変色	在地系	不明
1号溝黒色土層 52図12	大甕	口径(48.0)	土師器 にぶい暗黄灰褐色 ~にぶい灰褐色	—	口縁部肥厚 外面のヨコハケナデ消し 内面 は積み上げ痕のオサエの後ヨコハケ、ナデ消 し	不明	外面の器面剥落なく、 内面は変色している がカルキなし	在地系	不明
1号溝黒色土層 52図13	大甕	口径(62.0)	土師器 灰白色 やや硬質 白色粒子多い	—	口縁部肥厚 外面の器面剥落 内面は口縁下 が器面剥落	不明	器面剥落から埋塞 として使用してい た	在地系	不明

表14 3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表



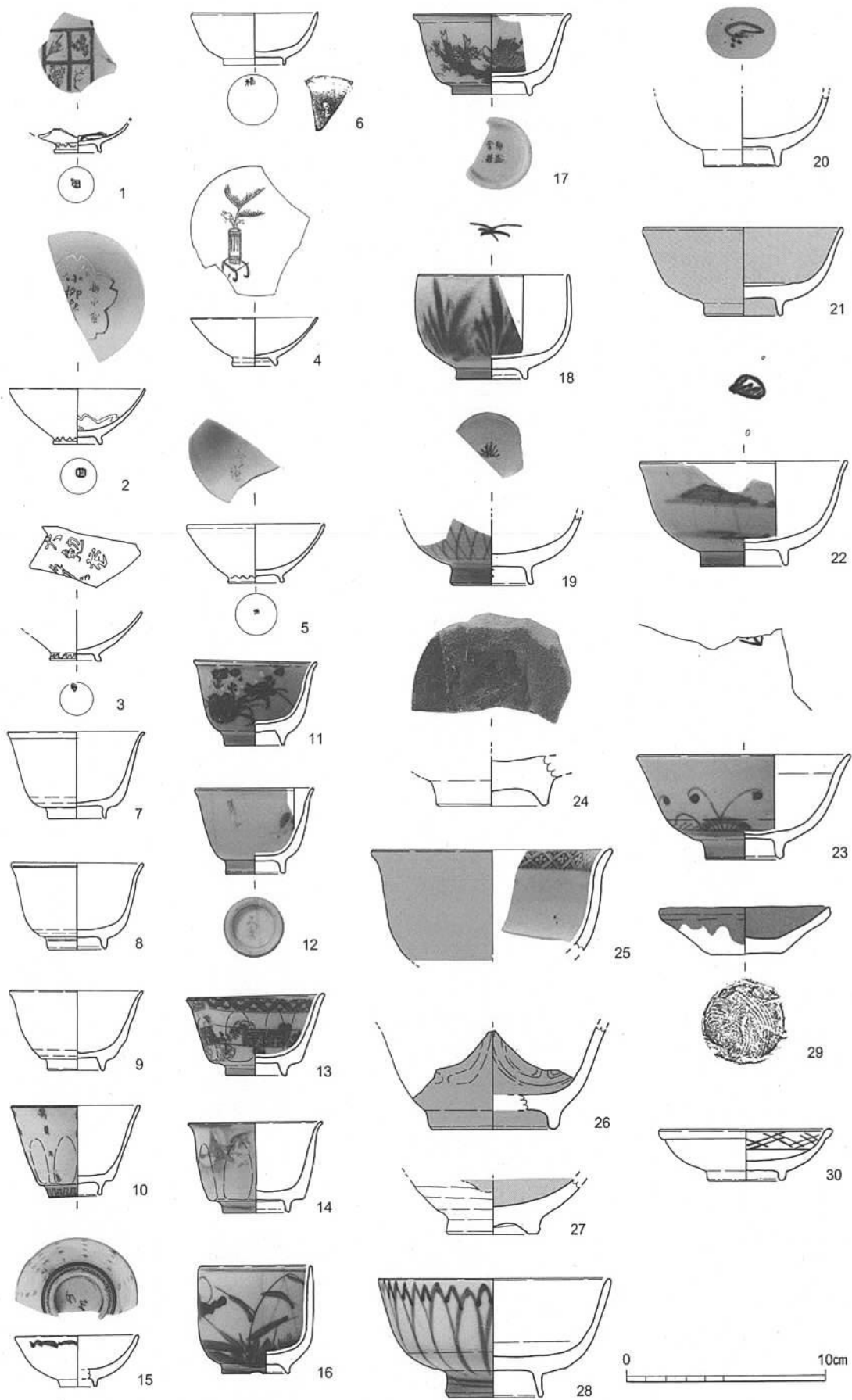
第51図 3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図2 (9~17は1/3、他は1/4)



第52図 3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器実測図3 (10は1/3、他は1/4)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝状黒色土層 53図1	小杯 盃	高台径(4.4)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は高台に凹凸文 見込みに田字形区画内花文を銅版刷りてコバルト上絵付け 金彩も一部あり 裏銘は崩れた「青」か	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図2	小杯 盃	口径(6.8) 高台径2.5 器高2.8	ガラス質 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は高台に凹凸文 見込みに金彩で桜花内に「船小屋 柳河 小樋口」と描かれている 裏銘は崩れていて判読できない	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図3	小杯 盃	高台径2.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は高台に凹凸文 見込みに金彩で2行漢字が書かれているが、「甌」しか判読できない 裏銘は崩れていて判読できない	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図4	小杯 盃	口径6.5 高台径2.4 器高2.5	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	見込みは金彩で扇とススキが、銀彩で花瓶と台座が書かれている	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図5	小杯 盃	口径(7.0) 高台径(2.9) 器高2.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は高台に凹凸文 見込みに金彩で4文字書かれているが、判読できない 裏銘は「田」字の文様化	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図6	小杯	口径(6.4) 高台径(3.0) 器高2.7	磁器(染付) 陶質 白色 軟質	低火度の透明 釉 全面	裏銘のスタンプがあるが判読できない 手描き呉須染付の「福」あり	畳付釉剥ぎ		産地不明	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図7	小杯 端反形	口径(6.8) 高台径3.0 器高4.4	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面口縁下に1条、胴下に2条界線	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図8	小杯 端反形	口径(6.6) 高台径(3.0) 器高4.4	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト手描き染付による外面口縁下に1条、胴下に2条界線	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図9 図版14	小杯 端反形	口径(6.6) 高台径(3.0) 器高4.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	—	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図10	小杯 端反形	口径6.4 高台径2.7 器高4.6	磁器(染付) ガラス質 灰白 色 黒粒子あり	透明釉 全面	外面は八角面取り 手描きコバルト染付による口縁下に1条、漢詩文、胴下に2条界線 高台凹凸文	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図11 図版14	小杯 端反形	口径(6.3) 高台径3.1 器高4.3	磁器(青磁) 白色 ガラス質	外面は淡緑灰色のク ロム青磁釉 内面・ 高台内は透明釉	外面の葉はクロム、花は白磁絵、裾が「口□□」の5 文字が上絵付けされている 見込みは金彩の輪郭線による梅 枝文 蛇の目輪郭線上にも金彩の上絵付け高台削り出し	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図12	小杯 端反形	口径5.9 高台径2.9 器高2.9	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	コバルト手描き染付により外面口縁下に1条、 花文と判読できない文字、胴下に2条界線 裏銘は1条界線内に裏銘「久兵衛」	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図13 図版14	小杯 端反腰折形	口径(7.0) 高台径3.1 器高4.25	磁器(染付) 完形のため胎土 不明	透明釉 全面	外面は八角面取り 銅版刷りクロム染付により 外面口縁下に半花菱文帯 中に壽文と花 文に梅文散らし 手描きにより高台に2条界線	畳付釉剥ぎ	版の繋ぎ目がずれ ている	瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図14	小杯 端反腰折形	口径(7.0) 高台径2.6 器高2.6	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	八角面取り 月・雁・稲は銅版刷り、口縁下 に1条、高台に1条界線は手描き コバルト 染付	畳付釉拭き取り		肥前系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図15	小杯	口径(6.0) 高台径1.8 器高2.7	磁器(染付) 緑がかかった灰色 光沢あり	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面 崩れた花文か	畳付釉剥ぎ		胎が特徴的	肥前系 流佐見 長与窯か 19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図16 図版14	小杯 長筒丸形 湯呑	口径5.2 高台径3.5 器高5.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	コバルト手描き染付により外面は月・雲・ス スキ・鳥の群れが体を一回りして描かれる 口 縁下に1条、胴下に1条、高台に2条界線	畳付釉剥ぎ	完形	肥前系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図17	小杯 端反形	口径(7.8) 高台径3.9 器高4.1	磁器(染付) ガラス質 白色	やや発色悪く 乳白色の透明 釉 全面	外面の樹の上の葉は銅版刷り、口縁下に1条、 胴下に1条界線は手描きのコバルト染付 裏銘は「陶盛舎製」	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 53図18	小碗 半球形	口径(7.7) 高台径(3.6) 器高5.3	磁器(染付) 灰白色	青味がかった 透明釉 全面	手描き呉須染付により外面草文 見込みに蝶 文	畳付釉剥ぎ	呉須の滲みあり	肥前系	1820 / 1860
1号溝状黒色土層 53図19	中碗	高台径4.2	磁器(染付) 灰色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面1条界線上に網目 文 見込み1条界線内に草文	畳付釉剥ぎ 砂目付着		肥前系 類例から端反形 であろう	1820 / 1860
1号溝状黒色土層 53図20	中碗	高台径4.0	磁器(染付) 白色 黒色粒子 多い 光沢あり	ざらつきのあ る透明釉 全 面	呉須手描き染付により見込みは岩波文か	高台外縁部剥 ぎ 砂目付着	胎・釉薬が特徴的	産地不明 器形も特徴的	19c 第3 四半期
1号溝状黒色土層 53図21	中碗 端反形	口径(4.0) 高台径(4.0) 器高4.5	磁器 光沢ある灰色	灰釉 全面 貫入あり	高台削り出し	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目剥 ぎ後アルミナ塗 布	胎が特徴的	肥前系 長与町長与窯か	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図22	中碗 端反形	口径(10.6) 高台径(4.5) 器高5.3	磁器(染付) 灰白色	乳白色の透明 釉 全面	手描き呉須染付により外面山水文 見込み は崩れた波文か	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目 跡2つあり		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図23	中碗 端反形	口径(10.8) 高台径(4.0) 器高5.3	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面蕨文 高台削 り出し	畳付釉剥ぎ	胎が特徴的	産地不明	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図24	中碗	高台径5.6	磁器(青磁) 灰色 精良	暗緑色の青磁釉 高台以外全 面貫入あり	印刻	畳付釉剥ぎ		中国・龍泉窯	15c 前半 代
1号溝状黒色土層 53図25	中碗 端反形 掛分け青磁	口径(12.2)	磁器(掛分け青磁) 白色 黒色粒子 あり	外面は淡緑色の青 磁釉、口唇部から 内面は透明釉	手描き呉須染付により内面口縁下四方禰文帯	畳付釉剥ぎ		肥前系	1820 / 1860
1号溝状黒色土層 53図26 図版15	中碗 端反形	高台径(6.2)	磁器(青磁) 灰白色	淡緑色の青磁 釉 全面	外面は彫刻文で青磁釉が薄いため白く見える 文様不明 内面は陰刻になる	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
1号溝状黒色土層 53図27	中碗	高台径4.7	陶器 灰～橙灰色 黒 ・白色粒子あり	緑灰色の緑釉 貫入あり 内面 から外面胴中位	回転ヘラケズリ 高台削り出し			肥前系か	1690 / 1780
1号溝状黒色土層 53図28	中碗	口径11.7 高台径5.0 器高6.1	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面蓮弁文 高台 2条界線 高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図29 図版14	小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.4	陶器 暗褐色 白色粒 子あり 軟質	暗赤黒褐色の鉄釉 内面から外面口 縁部に薄掛け	糸切りが2方向にあり	3箇所に胎土目 跡		小石原系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 53図30	小皿	口径8.4 高台径3.5 器高2.6	磁器(染付) 灰白色	乳白色の透明 釉 全面	玉縁口縁 手描き呉須染付により 内面口縁 下格子目文帯	畳付釉剥ぎ		肥前系 佐佐見系	1820 / 1860
1号溝状黒色土層 54図1	中碗 端反形	口径10.0 高台径(3.8) 器高6.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により外面は入地文に桜花 文散らし、内面は口縁部環状文帯 見込みは崩れ た環状松竹梅文 外面高台2条と内面胴下位の界 線は手描き 口縁部は口紅状にコバルト施釉	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目 跡3箇所アルミ ナ付着	ハリ目跡の位置か ら本来5箇所あ った	肥前 武雄市皿山窯	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 54図2	中碗 端反形	口径10.0 高台径(3.8) 器高6.0	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により外面は入地文に桜花 文散らし、内面は口縁部環状文帯 見込みは崩れ た環状松竹梅文 外面高台2条と内面胴下位の界 線は手描き 口縁部は口紅状にコバルト施釉	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目 跡5箇所		肥前 武雄市皿山窯	19c 第4 四半期

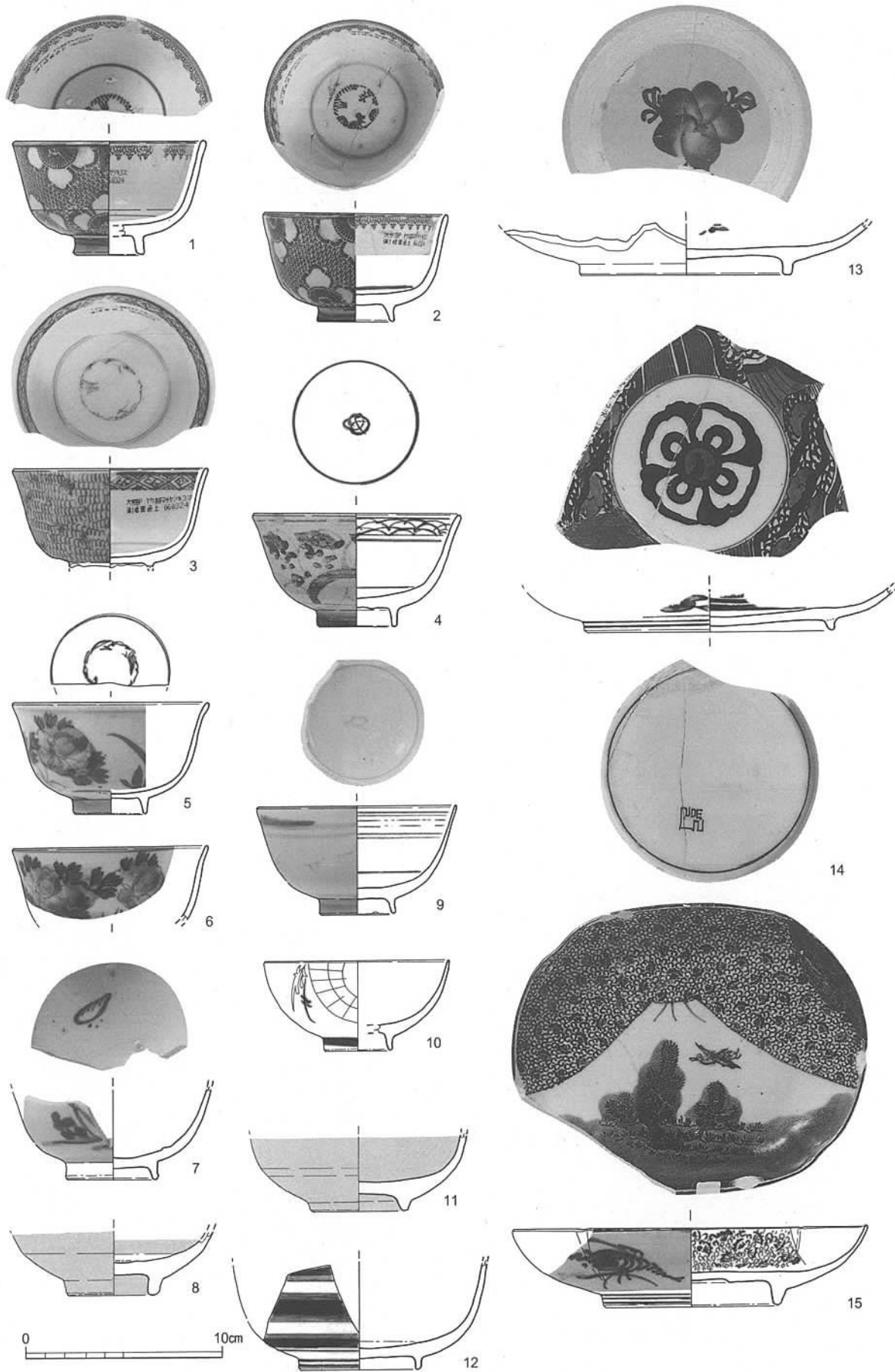
表15 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(1)



第53图 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図1(1/3)

遺構名 挿入番号 図版番号	器種 形状 通称名	量目(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝状黒色土層 54図3 図版14	中碗 端反形	口径10.0 高台径4.3 器高5.2	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面は崩れた微塵唐草文 内面は口縁下四方褥文帯 胴下位2条界線 見込みは崩れた環状松竹梅文 高台を打ち 欠いて平坦にしている	—	杯部は定形なので 高台の欠損を再利 用したもの	肥前系 嬉野市吉田1号 窯か	19c 第4 四半期
1号溝状黒色土層 54図4 図版14	中碗 端反形	口径10.8 高台径4.0 器高6.2	磁器(染付) 灰白色	発色不良で乳 白色の透明釉 全面	手描き呉須染付により外面は網目に不明文と高台 2条界線 内面は口縁下に網目文帯、文帯下に1 条、胴下位に1条界線 見込みは崩れた環状松竹 梅文 高台削り出し 畳付は斜めに削っている	高台外縁部釉剥 ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 54図5	中碗 端反形	口径(9.9) 高台径(3.5) 器高5.9	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は牡丹文 内 面は口縁下に2条界線内に雷文帯 見込みは 1条界線内に崩れた環状松竹梅文	畳付釉剥ぎ	54図6とは別個体 62図6の蓋とセット	肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 54図6 図版14	中碗 端反形	口径(9.8)	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	透明釉 全面	手描きコバルト染付により外面は牡丹文 内 面は口縁下に2条界線内に雷文帯	畳付釉剥ぎ	54図5とは別個体 62図6の蓋とセット	肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 54図7	中碗 端反形	高台径4.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により外面は草葉文 見込み は岩波文	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目 跡3つ		肥前系	19c 第3 四半期
1号溝状黒色土層 54図8	中碗	高台径(4.7)	陶器 暗茶灰色 硬質	暗黄灰褐色の 灰釉 全面	高台削り出し	畳付釉剥ぎ砂目付着 見込みの蛇の 目釉剥ぎに別個体の高台の重ねた痕 跡		肥前系	19c 第3 四半期
1号溝状黒色土層 54図9	中碗 端反形	口径(10.4) 高台径4.0 器高5.7	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	やや暗い透明 釉 全面	高台2条界線手描き呉須染付のより外面山水 文と胴下位に1条界線 内面は口縁下に2条 界線内に2点絞線文帯 胴下位に1条 見込 みは崩れた鳥文	畳付釉剥ぎ	焼成不良で発色悪 い	肥前系	19c 第3 四半期
1号溝状黒色土層 54図10	中碗 丸碗	口径9.6 高台径3.3 器高4.7	磁器(色絵) 白色 黒色粒子 あり	透明釉 全面	外面は靑色した金彩の太陽文と不明文、コバル トの不明文、高台の赤彩の帯文を上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 54図11	小鉢	高台径5.1	陶器 にぶい黄灰色 やや軟質 黒色 粒子含む	茶灰色の灰釉 全面	高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 54図12	中鉢	高台径(6.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面薄い呉須と濃い呉 須を交互に施す菊文と高台2条界線	畳付釉剥ぎ 見 込みに円状釉剥 ぎ	器形から年代を推 定	肥前系	1780 1860
1号溝状黒色土層 54図13	中皿	高台径(11.0)	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付による内面文様不明 見 込み花文	畳付釉剥ぎ 見込み蛇の目釉 剥ぎ後アルミナ 塗布	胎が特徴的 長与 窯か	肥前系	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 54図14	中皿	高台径13.5	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により内外面文様不明 外面高台界線2条 見込み花文 裏縁界線内 に中央から端にずれて裏銘「乾」	畳付釉拭き取り	裏銘から有田町槐 原貞一窯か	肥前系 有田町槐原貞一 窯か	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 54図15 図版14	中皿 変形	長軸18.3 短軸14.9 高台径9.3 器高4.1	磁器 染付 白色	乳白色の透明 釉 全面	楕円形に隅が窪む 型打ち成形 口唇部に口紅 状コバルト施釉 手描きコバルト染付により外 面胴部に海老文 高台に3条界線 内面は崩れ た微塵唐草と松の地文に墨強き手法による富士 山と鶴・若松文 蛇の目高台削り出し	畳付は釉剥ぎし ていない 見込 み蛇の目高台の 目部は釉剥ぎ	嬉野市塩田東山・ 西山窯採集品に類 例あり	肥前系 嬉野市塩田か	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 55図1	小皿	口径(8.8) 高台径4.3 器高2.7	磁器(染付) 灰白色 黒色粒 子あり	透明釉 全面	外面は回転ヘラ削りの稜が多く入る 手描き 呉須染付により内面から見込みは格子文 手描き 呉須染付により内面から見込みは格子文	畳付釉剥ぎ 見 込みに蛇の目釉 剥ぎ後アルミナ 塗布		肥前系 佐佐見系	1820 1860
1号溝状黒色土層 55図2 図版14	小皿	口径9.6 高台径4.0 器高2.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面は回転ヘラ削りの稜が多く入る 手描き 呉須染付により内面から見込みは格子文 手描き 呉須染付により内面から見込みは格子文	畳付は釉剥ぎし ていない 見込 み蛇の目釉剥 ぎ後アルミナ 塗布	口唇部に打ち欠き 煤が付着 灯明皿 として使用	肥前系 佐佐見系	19c 中葉
1号溝状黒色土層 55図3 図版14	小皿	口径9.3 高台径3.8 器高2.2	磁器(染付) 白色のため胎不 明	青味がかった 透明釉 全面	手描き呉須染付により内面は3条界線と1条 界線の間に草文か 見込みは草文か	畳付は釉剥ぎし ていない 見込 み蛇の目釉剥 ぎ後アルミナ 塗布	口唇部に打ち欠き 煤が付着 灯明皿 として使用	肥前系	19c 中葉
1号溝状黒色土層 55図4	小皿 端反形 壽文皿	口径9.8 高台径5.6 器高1.4	磁器(白磁) ガラス質 白色	透明釉 全面	見込みに型打ち成形で縁字「壽」文の除刻を 施す 型打ち成形後、ろくろ成形の高台貼り 付け	畳付釉剥ぎ	外面中位と底部端 に工具痕あり	美濃系	19c 中葉 19c 後葉
1号溝状黒色土層 55図5	小皿	口径(12.0) 高台径7.6 器高3.2	磁器(染付) 白色 黒色粒子 あり	青味がかった 透明釉 全面	口縁部折り返して玉縁口縁にしている 手描 き呉須染付により内面格子文と胴下位に1条 界線 見込みに2重格子文 蛇の目高台削り 出し 畳付を削って壽面底状をなす	畳付釉剥ぎ 見 込みに蛇の目釉 剥ぎ後アルミナ 塗布		肥前系 佐佐見系	1820 1860
1号溝状黒色土層 55図6	小皿	口径(11.1) 高台径6.4 器高2.0	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	内面は金彩による上絵付けがあるが文様不明	畳付釉剥ぎ		瀬戸・美濃系	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 55図7	小皿	口径(13.4) 高台径6.7 器高2.3	磁器(染付) 白色	青味がかった 透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により内面から見込み は鳳凰・丸文など 裏銘は「松」か	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 末 20c 第1四半 期
1号溝状黒色土層 55図8	小皿	口径8.6 底径3.4 器高2.7	陶器 黒灰・暗灰褐色 白粒子多い	にぶい灰褐色の 灰釉 内面から 外面胴中位まで 厚掛け	底部糸切り	胎土目跡3箇所 あり	灯明皿としての使 用痕なし	小石原系	不明
1号溝状黒色土層 55図9 図版14	小皿	口径8.6 底径3.7 器高2.1	陶器 赤茶褐色 軟質	にぶい灰褐色の 鉄釉 内面から 外面胴中位まで 厚掛け	底部糸切り	胎土目跡不明	灯明皿としての使 用痕なし	肥前系	不明
1号溝状黒色土層 55図10	小皿	口径9.8 底径5.9 器高1.8	磁器(青磁) ガラス質 白色	クロム青磁釉 全面	見込みの花瓶と桜の枝・葉・花はクロム 花 弁は白磁絵	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸・美濃系	19c 第3 四半期
1号溝状黒色土層 55図11 図版14	五寸皿 輪花口縁	口径13.9 高台径8.3 器高3.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 外底は蛇の目高 台 銅版刷りコバルト染付により内面から見 込みは青海波円文・梅蘭文	畳付は釉剥ぎし ていない 蛇の目 高台の目部は釉 剥ぎ		肥前系	19c 後葉 19c 末
1号溝状黒色土層 55図12	中皿 輪花口縁	口径(18.8) 高台径(11.8) 器高2.8	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	口唇部口紅装飾(口罌・縁罌) 口唇部に刻 みを入れて輪花口縁成形 手描き呉須染付に より外面高台に2条界線 内面口縁部の雲文 など 内面の紅葉の葉はコンヤ印刷	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 1700
1号溝状黒色土層 55図13	中皿	口径(21.6) 高台径(13.7) 器高3.4	磁器(染付) 白色	透明釉 全面 貫入あり	手描き呉須染付により外面牡丹唐草文 内面 口縁下に四方褥文帯・褥文、菊文 見込みは 2条界線内に松蘭文 裏銘は2重界線内に 「大明成化年製」	畳付釉剥ぎ	器形は1700~1740 年代のもの、裏銘 は1650~1780年代	肥前系	(1700) 1740
1号溝状黒色土層 56図1	中皿 輪花口縁 なます皿	高台径8.1	磁器(染付) ガラス質 白色	青味がかった 透明釉 全面	手描きコバルト染付により見込みは1条界線 内に柿文 蛇の目高台	畳付は釉剥ぎし ていない 蛇の目 高台の目部は釉 剥ぎ 見込みに ハリ目跡が5つ ある		肥前系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 56図2	中皿 輪花口縁 なます皿	口径12.9 高台径8.0 器高3.4	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 口唇部は口紅状 施釉 型紙刷りコバルト染付で見込みは2条 界線内に葉文など	畳付は釉剥ぎし ていない 蛇の目 高台の目部は釉 剥ぎ 見込みに ハリ目跡が5つ ある		瀬戸・美濃系	19c 中葉 19c 末
1号溝状黒色土層 56図3	五寸皿 輪花口縁 なます皿	口径13.8 高台径8.5 器高4.0	磁器(染付) 灰白色 軟質 黒色粒子あり	薄い透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 蛇の目高台 型紙 刷りコバルト染付により外面の唐草文、内面 の青海波文地に花文・窓内花文、見込みの多 重錦文帯内に環状松竹梅文、胴下位の1条、高 白の2条界線は手描き 口唇部は口紅状施釉	畳付は釉剥ぎし ていない 蛇の目 高台の目部は釉 剥ぎで胎土目跡 が4つあり 見込 みにはハリ目跡 が4つ 透明釉が 薄いため器面に 凹凸がある 発 色悪く呉須も 暗緑色を呈す		肥前系	19c 第4 四半期

表15 3次調査1号溝状遺構黒色土層出土土器・陶磁器観察表(2)



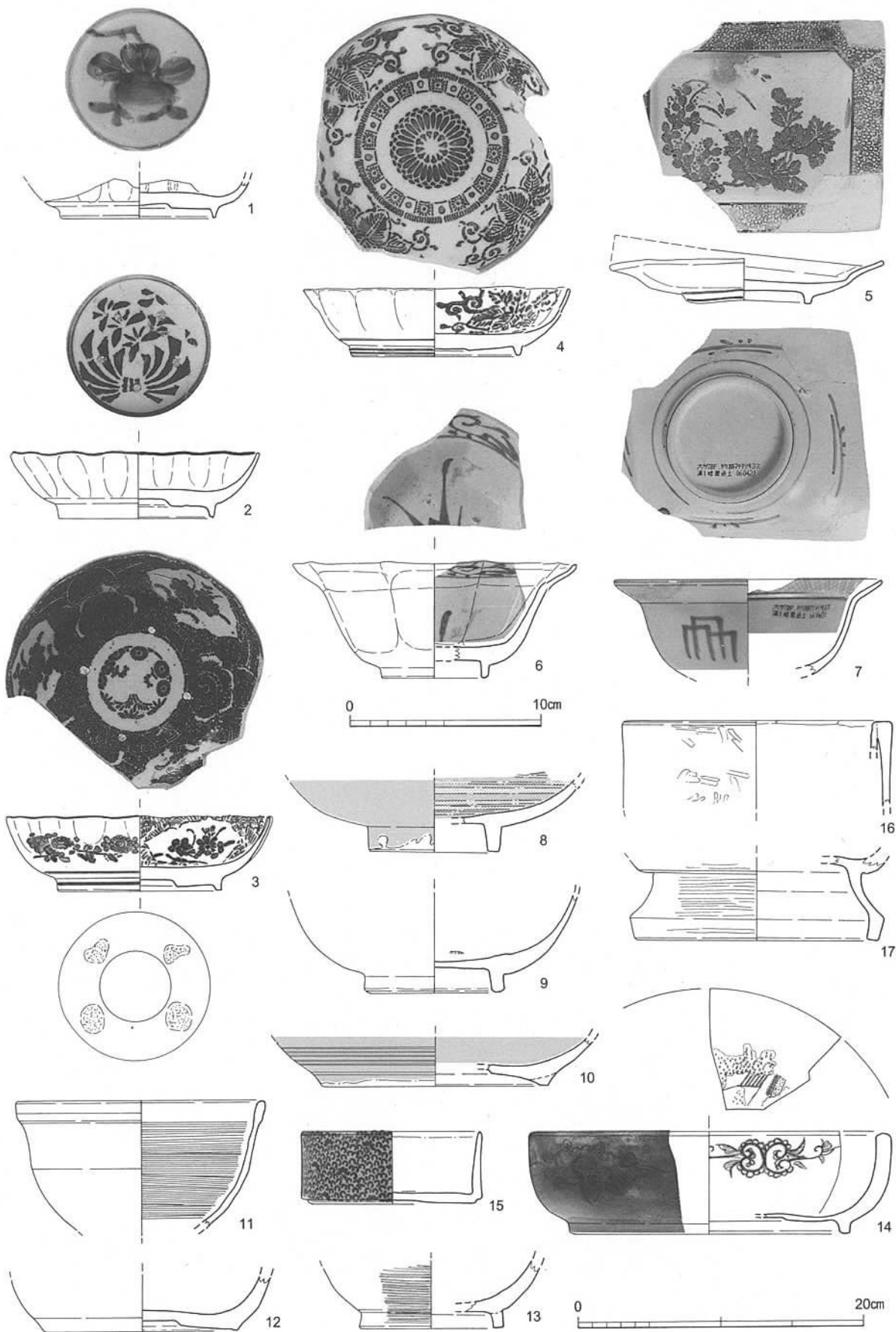
第54図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図2(1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
								特記事項	推定産地	推定年代
1号溝黒色土層 56図4	五寸皿 輪花口縁 なます皿	口径14.0 高台径8.9 器高3.7	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 蛇の目高台 型紙刷りコバルト染付で外面の唐草文、内面の桐唐文、見込みの多重半内文、目の丸、日章旗文帯内に蓮弁文副位の1条 高台の2条界線は手描き 口唇部の口紅状施釉	畳付は釉剥ぎしていない 蛇の目高台の目目は釉剥ぎ	日章旗から戦勝記念文か 塩田町塩田中通窯採集品に類似あり	肥前 嬉野市塩田中通窯か	19c 第4 四半期	
1号溝黒色土層 56図5	五寸皿 方形	長軸14.4 短軸11.5 高台径6.6 器高2.5	磁器(染付) 白色	発色悪い 透明釉 全面		畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 20c 前半	
1号溝黒色土層 56図6	中鉢 八角面取り	口径(14.8) 高台径(5.6) 器高6.1	磁器(染付) 灰白色	にごりのある透明釉 全面	型打ち成形で八角形口縁 角は突起を持つ 手描き呉須染付により内面口縁下に崩れた蜻唐草文帯 見込みは不明文様 高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前系 波佐見系	19c 中葉	
1号溝黒色土層 56図7	中鉢	口径(14.0)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面の源氏香文、内面口縁下に格子目文帯、その下に2条界線	不明		肥前系	19c 中葉	
1号溝黒色土層 56図8	中鉢	高台径(9.1)	陶器 黄緑灰色	黄緑灰釉の灰釉 内面から外面副位まで 貫入あり	内面は白化粧土の刷毛目文 高台削り出し	見込み蛇の目釉剥ぎ 畳付外面砂目付着		肥前系	18c 後半 20c 前半	
1号溝黒色土層 56図9	中鉢	高台径(7.5)	陶器(半磁器) 灰白色 光沢あり	暗緑灰色の青磁釉 全面 光沢あり	高台削り出し	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目あり	特徴的な胎	肥前系か	19c 末 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図10	中鉢	高台径(16.2)	陶器 明黄色 精良 金葉母を多く含む 軟質	低火度の黄灰色の黄釉 内面から副位まで 光沢あり	外面カキ目 断面台形の貼り付け高台 底部回転ヘラ削り	副位釉拭き取り		産地不明	不明	
1号溝黒色土層 56図11 図版15	小鉢 片口か	高台径(16.4)	陶器 黄灰色 精良 軟質 白色粒子を含む	発色不良で黄黒色の鉛釉 全面	口縁部肥厚 内面カキ目	不明	発色不良の不良品	高取系	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図12	小鉢	高台径(10.0)	磁器(青磁) 白色 黒色粒子含む	淡青緑色の青磁釉 全面	高台削り出し	畳付から蛇の目高台の目目は釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図13 図版15	小鉢か仏花瓶	高台径(10.2)	陶器 黄褐色 白色粒子を含む 軟質	暗褐色の鉄釉 外面	外面刷毛目状施釉 内面回転ナデ 畳付から高台内は発色していない	畳付釉拭き取り	内面の器面はざらつきあり 肥前系刷毛目文を模倣か	小石原系	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図14 図版14	中鉢	口径(18.8) 高台径(14.6) 器高5.0	陶器 黄灰色 軟質 精良	黄灰~暗黄緑灰色の黄釉 油沢あり 全面	外面は鉄絵の牡丹文上絵付け 内面は唐草花文 見込みは不明文様 高台削り出し	畳付は釉剥ぎしていない 蛇の目高台の目目は釉剥ぎ	2次調査1号溝17図4と同型	産地不明	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図15	段重	口径(9.2) 高台径(8.4) 器高3.8	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面手描きコバルト染付により崩れた微塵唐草と松文	内面口縁部と底端部は釉剥ぎ		肥前系	19c 第4 四半期	
1号溝黒色土層 56図16	小型焔炉	口径(19.0)	陶器(土師質) 黄灰色 軟質 精良 金葉母を多く含む	—	外面丁寧なミガキ 内面は内部施設を貼り付け ヨコナデ	不明	口唇部煤付着	在地系か	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 56図17	中鉢 火鉢	裾径(17.2)	瓦質 黒灰色 軟質 白葉母を多く含む	—	外面丁寧なミガキ	不明	畳付摩滅	在地系	19c 中葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 57図1	大鉢	口径(28.6)	磁器(色絵) 灰白色 黒色粒子多い	透明釉 全面	外面胴上半は褐影、下半は緑彩の上に黒の線描きで不明文様を上絵付け 内面口縁部は緑彩の上に青で笹 胴中に赤で蝶、松葉は緑で枝は黒を上絵付け 口唇部は口紅状に褐影施釉	不明		肥前系	19c 後葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 57図2	中鉢	口径(24.8)	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	外面手描きコバルト染付により外面は胴中に花文と窓文 内面口縁部は上1条、下2条の界線内に袈裟帯文に丸文など	不明	不明	肥前系	19c 後葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 57図3	大鉢	口径(30.0)	陶器 赤茶褐色 硬質 精良 白色粒子入る	茶褐色の鉄釉 全面	口縁部は折り返して肥厚	不明	植木鉢か	肥前系	19c 後葉 20c 第1四半期	
1号溝黒色土層 57図4 図版14	大鉢	口径35.2 高台径15.8 器高14.4	陶器 茶褐色 硬質 白色粒子入る 光沢あり	外面は鉄葉を掛けた後、白化粧土を胴中位まで掛けて液状に拭き取り、最後に透明釉を掛ける 内面は白化粧土の上に透明釉掛け 貼り付け高台 底部は回転ヘラ削り	畳付釉剥ぎ 見込みに砂目跡あり	ほぼ完成形で焼成時の歪みあり	みやま市二川焼	19c 中葉 20c 前半		
1号溝黒色土層 57図5 図版14	大鉢	口径(39.8) 高台径(17.6) 器高16.6	陶器 暗茶褐色 硬質	外面は鉄葉を掛けた後、白化粧土を胴中位まで掛けて帯状に拭き取り、最後に透明釉を掛ける 内面は白化粧土の上に透明釉掛け	畳付釉剥ぎ 畳付や見込みに砂目跡なし	見込みは使用のため白化粧土が剥落	肥前系	19c 中葉 20c 第1四半期		
1号溝黒色土層 57図6	大鉢	口径(44.0)	陶器 茶褐色 硬質 白色粒子入る 光沢あり	外面は白化粧土を胴中位まで掛けて帯状に拭き取り、最後に灰釉を掛ける 内面は白化粧土を刷毛状に掛けた上に灰釉掛け	不明	外面は灰釉が垂れて茶褐色に変色	みやま市二川焼	19c 中葉 20c 前半		
1号溝黒色土層 57図7	大鉢か中鉢	高台径(10.1)	陶器 灰色	外面は鉄葉 内面は鉄釉	外面は茶褐色の鉄絵 貼り付け高台 高台外面の歪みは焼成時の歪み	釉剥ぎした畳付に砂目付着 見込みに砂目跡	胎が特徴的だが、焼成不良のためか	産地不明	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 57図8	大鉢か中鉢	高台径(10.0)	陶器 ぶい 黄灰~青灰色 軟質	外面は暗褐色の鉄釉の上に暗緑灰色の灰釉掛け 中に露胎部あり 内面は白化粧土の刷毛目状施文の後灰釉掛け 高台削り出し 畳付外端は削り落とし	畳付釉拭き取り	胎が特徴的だが焼成不良か	産地不明	19c 中葉 20c 前半		
1号溝黒色土層 57図9	大鉢	復元不能	陶器 橙黄色 軟質 白色粒子多く入る	暗黄褐色の鉄釉 全面に薄掛け	—	不明	摺り目はないが、欠損部に摺り目をもつ挿鉢か	小石原系	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 57図10	大鉢	復元不能	陶器 赤褐色 硬質 精良	口縁部は白化粧土を掛けて帯状に拭き取り、内面は口縁下は白化粧土なし 最後に全面透明釉掛け	不明	不明	肥前系	19c 中葉 20c 前半		
1号溝黒色土層 57図11	小鉢	口径(16.6) 高台径(9.6) 器高0.5	陶器 黄緑灰色 軟質 金葉母多く入る 粗放	油沢のある褐釉 全面	外面副位下に突帯 凹線によるものか 貼り付け高台か	不明	特徴的な胎	在地系	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 57図12	大鉢 火鉢	口径(47.0) 底径(38.4) 器高15.0	瓦器(土師質) ぶい 暗黄灰色 軟質 白色粒子多く含む	—	外面は口縁部貼り付けによる肥厚 貼り付け後接合部をハケ調整、最後に凹線状に削る 口縁部にミガキがあるが摩滅 胴下部はハケの工具端が始まるため胴と底部間に接をもつ内面はヨコナゲ後、ヨコナゲ 外底部はナデ	不明		在地系	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 57図13	蓮華	長軸(9.2) 短軸(3.6) 器高(3.6)	磁器(色絵) 白色 黒色粒子多い	乳白色の透明釉 内面から高台下位まで	半菊文と2状界線 赤彩手描き上絵付け 高台削り出し	高台外端釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 57図14	仏飯器	口径(6.2) 高台径3.8 器高5.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	菖蒲文 コバルト染付	畳付釉剥ぎ 一部砂目付着	筒部の後縁は削り時のもの	肥前系	1690 1780	
1号溝黒色土層 57図15	仏飯器	高台底径5.5	磁器 白色 黒色粒子多い	ざらつきのあるぶい 緑灰白色の黄緑釉 底面以外全面	底中央部は削り	底端部釉拭き取り	肥前系の不良品なのか、肥前以外の製品なのか不明	産地不明	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 58図1	片口鉢	口径(23.0)	陶器 黄緑灰色 軟質 金葉母多く入る 粗放	暗黒茶褐色の褐釉 内面口縁部から外面高台上位まで	口縁部は丸く折り曲げて玉縁状 外面片口の接合部はオサエ 片口内面はケズリ 幅の細い摺り目23本単位	不明		高取系	不明	
1号溝黒色土層 58図2	片口鉢	口径(22.4) 高台径(12.6)	陶器(半磁器) ぶい 灰白色 硬質	光沢ある磁釉が焼成強く黒に変色 内面口縁部から外面	口縁部は丸く折り曲げて玉縁状 幅の細い摺り目31本単位 摺り目上端ナデ揃え	不明	天目釉のようだが胎が半磁器化しているため焼成不良と判断	高取系	不明	
1号溝黒色土層 58図3 図版15	摺鉢	口径(32.0)	陶器 ぶい 黄灰~黒灰色 や 軟質 白色粒子入る	暗赤茶褐色の鉄釉 外面口縁下から内面に薄掛け	口縁部は丸く折玉縁状に肥厚 幅の太い摺り目11本単位 摺り目上端ナデ揃え	不明		小石原系	19c 中葉 20c 前半	
1号溝黒色土層 58図4	摺鉢	口径(38.0)	陶器 暗赤茶褐色	暗赤茶褐色の鉄釉 内外 光沢あり	口縁部は折り曲げて扁平な玉縁状に肥厚 摺り目26本単位 摺り目上端ナデ揃え	不明		肥前系	18c 中葉 20c 前半	

表15 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
1号溝状黒色土層 58図5	摺鉢	復元不能	陶器 暗赤褐色 白色 粒子入る 硬質	暗茶褐色の鉄 釉 厚掛け 全面	外面口縁下は凹線状のヨコナデ 内面の口縁 状受け部に突起あり 摺り目単位不明 摺り 目上端ナデ揃え	不明	肥前系	19c 中業 20c 前半	
1号溝状黒色土層 58図6	小甕	口径(19.6)	陶器 赤褐色 光沢ある 硬 質 白色粒子少ない	透明釉 全面	—	不明	胎土から二川焼の 可能性高い	みやま市二川焼 か	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図7	小甕	口径(18.0)	陶器 灰色 硬質	外面は貫入ある透明 釉 内面は赤沢 ある茶褐色の灰釉	外面は口縁部折り曲げて平坦にする 肩部に 青緑灰色の銅緑釉の掛け流し	口唇部釉拭き取 り	高取系	—	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図8	小甕	口径(14.0)	陶器 黒灰色 硬質	茶褐色の鉄釉 全面	口縁を内側に折り返して肥厚 外面の肩部に 2条沈線	不明	特徴的な口縁形態	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図9 図版15	大鉢 火鉢か	復元不能	瓦器(土師質) にぶい黄灰褐色 軟質	—	口縁部肥厚後ナデ 外面口縁下ハケ調整 内 面ヨコハケ後、5本単位の書書き交差施文	不明	口唇部は黒変	在地系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図10 図版15	大鉢 火鉢か	口径(40.0)	瓦器(土師質) にぶい黄灰褐色 軟質 白色粒子 金雲母入る	—	口縁部肥厚後ナデ 外面口縁は横ハケ、口縁 下は斜めハケ調整 内面ヨコハケ後、5本単 位の書書き交差施文	不明	—	在地系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図11	大甕	口径(60.4)	土師器 にぶい黄灰褐色 軟質 白色粒子 金雲母多い	—	外面口縁下は器面剥離のため調整不明 ヨコ ナデ 内面はヨコナデ	不明	内面にカルキは付着して ないが、外面の器面剥離 から推定して使用	在地系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 58図12	大甕	口径(62.6)	土師器 黄褐色 軟質 白 色粒子 金雲母多い	—	外面は口縁下はナデのため突帯状を呈する ヨコナデ 内面口縁はナデ 口縁下は摩滅	不明	内面にカルキは付着 してないが、黄灰色 に変色している	在地系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図1	中鉢 植木鉢	口径(29.0) 高台径28.2 器高(23.3)	陶器 にぶい黄橙白色 硬質	外面から内面口縁部に白化粧土掛け後、外面から内面口縁下 に灰釉を掛け、外面から内面口縁まで透明釉掛け 貼り付け 高台	—	胴下位は釉拭き 取り	胴上部と底部は図 上接合	小石原系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図2 図版14	大鉢 植木鉢	口径37.0	陶器 黄灰色 軟質 白色粒子多く含む	内外黄茶褐色の灰釉を掛けた後、外面胴上位から内面に白化 粧土	—	不明	—	小石原系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図3	大鉢 植木鉢	最大径(46.4)	陶器 黄褐色 硬質	暗茶褐色の鉄 釉 全面	外面口縁下の突帯・刻目突帯・唐草花文は貼 り付け	不明	—	肥前系か	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図4 図版15	小瓶	高台径9.4	磁器 灰白色 黒色粒 子多い 粗放	褐釉の上に黄 灰釉掛かる 外面のみ	外面高台に手描きコバルト染付による凹凸線 文	畳付釉剥ぎ	図上接合	高取・小石原系 か	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図5 図版15	小瓶	高台径7.6	陶器 灰白色 黒色粒 子多く含む 粗放	暗黒茶褐色の褐釉外面掛けの後、胴中位から上に海鼠釉 高 ルナリ出し、外端をカット	—	畳付釉剥ぎ ア ルミナ付着	—	小石原系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図6	小瓶 爛付徳利	底径5.9	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 外面 ～内面口縁部	手描きコバルト染付により外面肩部に2条、 胴下位に1条界線 底部外端はカット	底部は釉剥ぎ	—	瀬戸・美濃系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図7	小壺	口径(10.0)	陶器 にぶい暗橙灰色 硬質 精良	黒釉 外面の み 光沢あり	—	口唇部釉剥ぎ 蓋と重ね焼きし たか	重ね焼きする蓋が あることから蓋だ らう	高取・小石原系 か	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図8	小壺	底径(4.9)	陶器 灰色 精良	低火度の灰色 の灰釉 外面 のみ	外面カキ目 内面から見込みはヨコナデ 上 げ底で基筒底状を呈する	畳付釉剥ぎ	—	肥前系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図9	小壺	高台径(6.4)	陶器 暗赤褐色 硬質	暗茶褐色の鉄 釉 全面厚掛 け	高台削り出し	高台外面から畳 付は釉拭き取り 砂目付着	外面の釉垂れは鉄 釉のもの	肥前系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図10	小型埴炉	口径(16.9)	土師器 にぶい黄灰褐色 白色 粒子入る 金雲母多い	—	外面口縁部ヨコナデ、口縁下に耳状把手貼り 付け、貼り付け部は削り 内面突起を接合、 上面は煤付き	不明	胎土は博多瓦町焼 に近い	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図11	埴炉 甕形	口径(37.0)	土師器 にぶい黄灰褐色 粗放 角閃石多い	—	一面に窓 窓枠部は肥厚させナデ 外面はハ ケ調整 五稜の接合部はオサエ 内面上面は ケズリ 他はナデ	不明	胎土が特徴的で在 地的ではない	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 59図12	七輪	口径(21.0)	土師器 にぶい黄灰褐色 軟質 白色粒子 金雲母入る	スリップ 外面 から口唇部 外半	口縁部は内側に折り曲げて口唇部を成形、外面折り曲 げ部に沈線 口唇部につまみ状突起 内面突起の接合 部はオサエ 内面上面と先端はケズリ 他はナデ	不明	つまみ状突起は手捏 ね成形で、上面の刺 突の意味は不明	福岡市博多瓦町 焼	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図1	行平鍋蓋	裾径(18.0)	陶器 にぶい灰色 硬質 白色粒子入る	鉄釉内面のみ	暗茶褐色の鉄釉を刷毛で天井部と中位に施釉、そ の間に飛びカンナ4列	裾部釉拭き取り	胎土が特徴的で高 取系に近い	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図2	行平鍋蓋	裾径(18.0)	陶器 灰色 硬質 精 良	無釉	暗茶褐色の鉄釉を刷毛で中位に施釉、その上 に飛びカンナ3列以上	—	焼成時の歪みあり	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図3	土鍋蓋	裾径(19.0)	陶器 黄灰白色 軟質 金雲母多い	黄灰色の低火 度の灰釉 内 面のみ	征文が墨書で描かれる	裾部釉拭き取り	胎土から在地系か 墨書による文様も 特異	在地系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図4	土鍋	復元不能	陶器 にぶい暗黄白色 金雲母多い	型作りの青海波文を印刷された把手を貼り付け 光沢ある褐 色の低火度の鉄釉を把手の上面のみ	—	不明	—	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図5	土鍋	口径(13.8) 最大径(14.2)	陶器 灰色 硬質 精 良	低火度の透明 釉 全面	口縁を折り曲げて逆L字形に成形口縁下に飛 びカンナ5列以上	口縁部釉剥ぎ 蓋と重ね焼きす るためか	—	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図6	土鍋	口径(18.0)	陶器 灰白色 金雲母 多い	明黄灰色の光沢あ る低火度の灰釉 内面中位以下	口縁部を接合	—	外面の煤付着	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図7	土鍋	口径(17.0)	陶器 暗赤褐色 硬質	内面から外面口縁下まで鉄釉を掛けた後、暗黒褐色の光沢あ る低火度の褐釉を同じ範囲に掛ける 口縁部を折り返して肥 厚	—	口縁部の釉剥ぎ ないで重ね焼 きなし	—	肥前系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図8	土鍋	口径(14.6)	陶器 にぶい暗黄白色	口縁部を接合して受け部を成形 青海波を印刷した型押し成 形の把手貼り付け 把手部は光沢ある褐釉内面胴中位まで光 沢ある低火度の灰釉	—	畳付釉剥ぎ	外面の煤付着 内 面は使用による変 色や剥落がある	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図9	土鍋	口径(19.7) 高台径(8.1) 器高7.2	陶器 黄白色 精良 軟質	口縁部を接合して受け部を成形 花文を印刷した型押し成 形の把手貼り付け 把手部は光沢ある鉄釉 内面胴上位以下と外面 口縁部から胴中位まで光沢ある低火度の黄褐色の灰釉 外面は 鉄絵で松文 上げ底で基筒底状を呈する 底部外端に沈線	—	—	外面の煤付着	産地不明	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図10	土鍋	長軸(6.5) 短軸(3.2)	陶器 暗茶褐色の鉄 釉 上面のみ 金雲母入る	暗茶褐色の鉄 釉 上面のみ	型押し成形で文様を印刷された把手上半部 外面端部は穿孔 内面型押しの際の指オサエ 痕あり	不明	—	肥前系か	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図11	小皿 紅皿	口径6.0 高台径2.2 器高2.0	磁器(白磁) 白色	乳白色の透明釉 を内面から外面 口縁部まで施釉	型押し成形で蜻蛉草文を印刷	不明	—	肥前系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図12 図版14	小皿 紅皿	口径6.0 高台径2.4 器高2.0	磁器(白磁) 完形のため胎不 明	乳白色の透明釉 全面	型押し成形で蜻蛉草文を印刷	不明	完形	肥前系	19c 中業 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図13 図版15	灯明受皿	受け径5.2 底径4.4 器高2.7 皿部径6.6	陶器 にぶい暗茶灰褐 色 硬質 精良	茶褐色の鉄釉 内面から受け 部まで	受け部接合 底部糸切り	2箇所胎土目 跡あり	—	肥前系	19c 中業 20c 前半

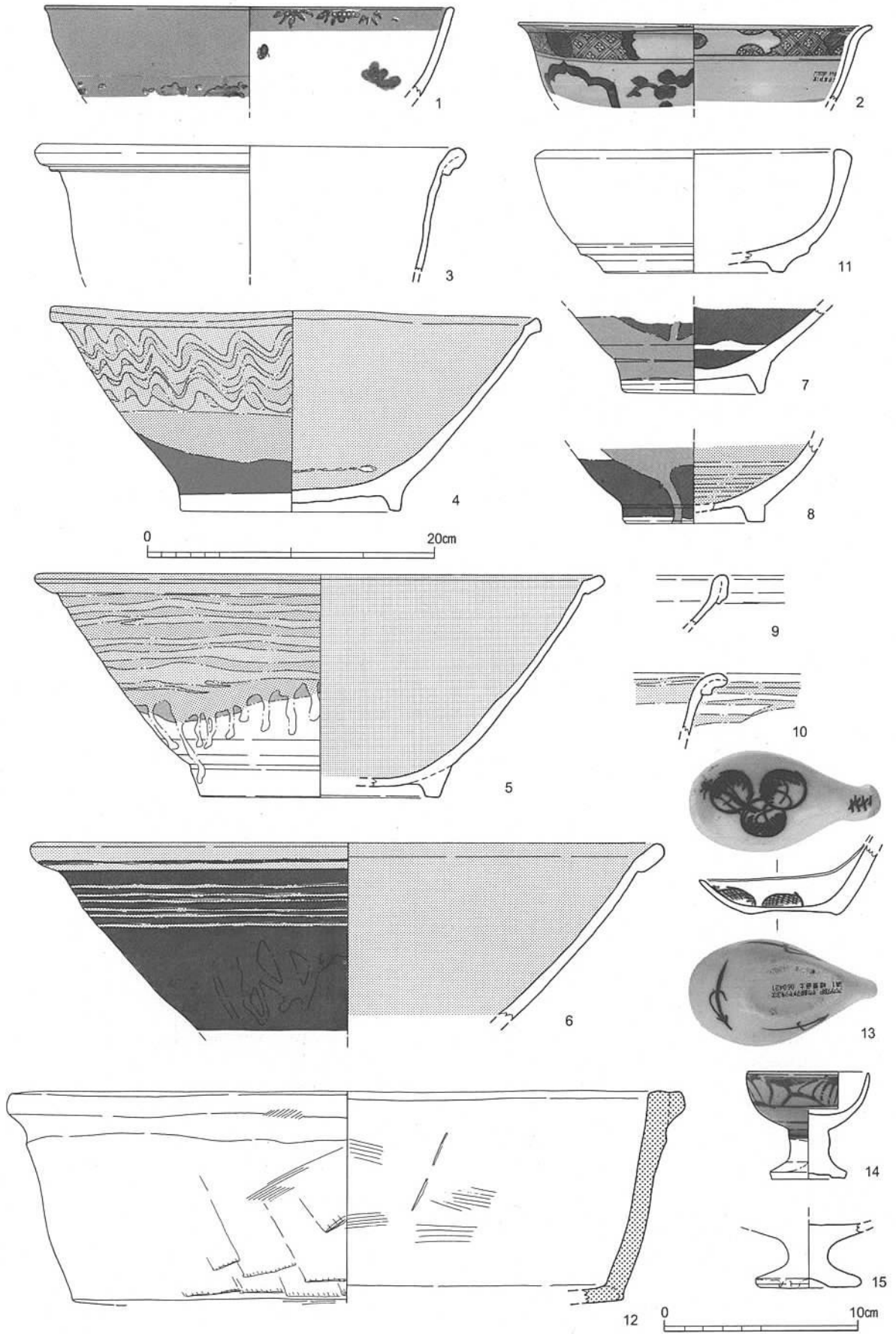
表15 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(4)



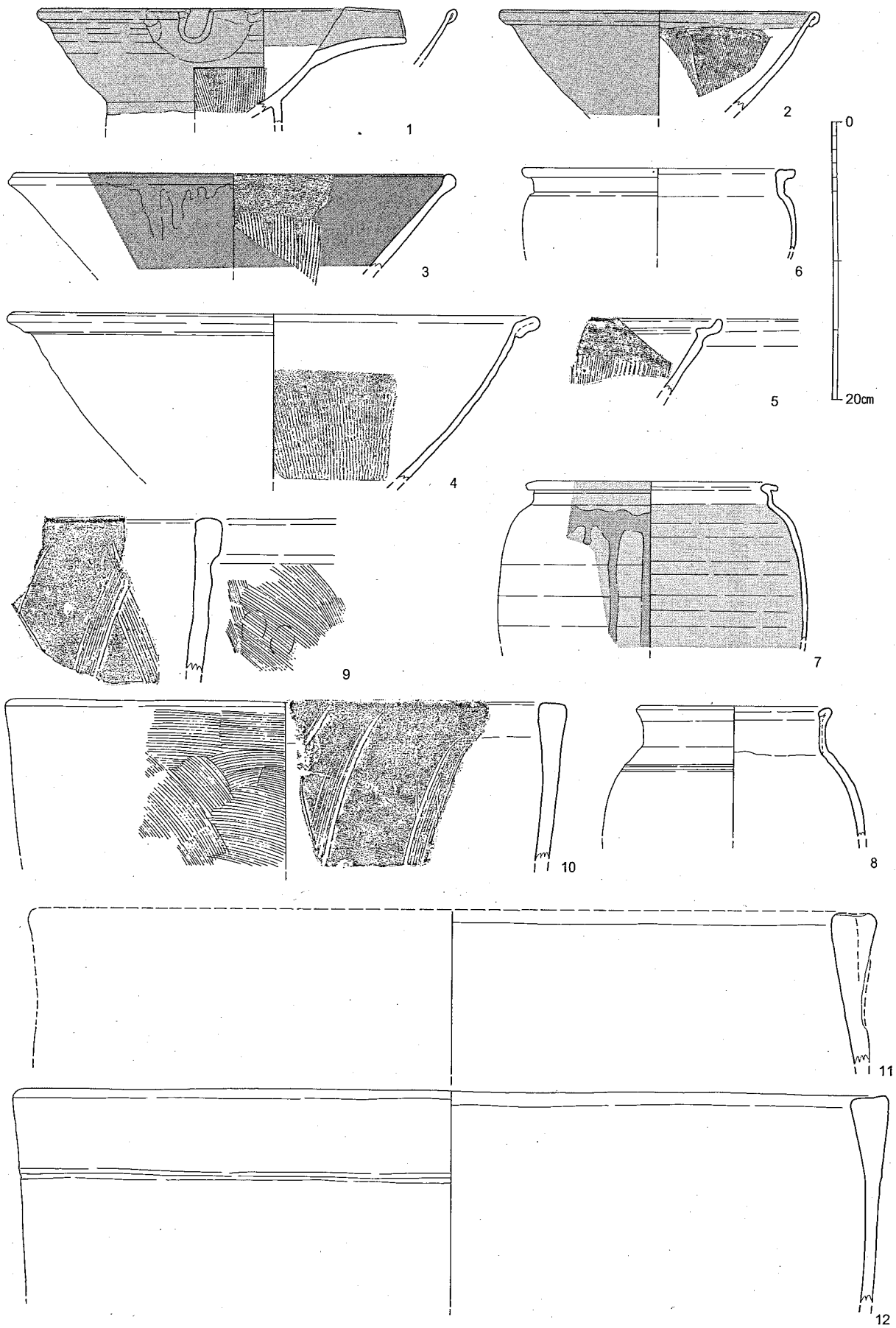
第56図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図4(8・10・11・13・16・17は4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴						
1号溝状黒色土層 60図14	灯明受皿	受け部径5.0 底径3.9 器高2.5 皿部径7.0	陶器 橙褐色 白色粒 子あり	無釉	受け部接合 底部糸切り	胎土目跡あり	受け部口縁に煤付 着	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図15	土管	受け部径5.0 筒部径24.2	陶器(土師質) 黄褐色 軟質 白色 粒子多い	内外暗褐色の 鉄釉 光沢あり	内面カキ目	不明		小石原系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 60図16	炉形土器	長軸(25.0) 内径(20.0)	土師器 にぶい黄褐色 軟質 精良 金葉母目立つ	口縁部にベン ガラ塗布	型成形の胴部に口縁接合 外面口縁下は回転 コナテ、胴部は未調整、ナゲ工具痕あり 内面コホハケ	不明	口縁部は剥離し ていないので取り 外し可能なもの	在地系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図1	土瓶蓋	裾径9.8 受け部径6.8 器高3.9	陶器 灰色 硬質 光沢あり	緑灰色の灰釉 を裾部まで	天井部にボタン状つまみ貼り付け 外面裾端 に沈線 天井部にイッテンで「し」字と点の 交互施文 受け部接合	受け部下軸拭き 取り	特徴的な胎	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図2 図版16	土瓶蓋	裾径9.2 受け部径6.8 器高2.9	陶器 赤茶褐色 精良 硬質	茶褐色の鉄釉 を裾部まで	天井部にボタン状つまみ貼り付け 裾端肥厚 受け部接合	受け部下軸拭き 取り	特徴的な胎	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図3 図版16	土瓶蓋	裾径9.4 つまみ径2.2	陶器 赤橙-黒灰色 精良 硬質	暗灰白色の長 石釉を裾部ま で	天井部に球状つまみ貼り付け 受け部接合	受け部下や内 側から軸拭き取 り	白色粒子が斑状に 入る特徴的な胎	高取系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図4 図版16	土瓶蓋	胴径6.2	陶器 黄褐色 軟質	茶褐色の薄い 鉄釉を裾部ま で	—	受け部下軸拭き 取り		小石原系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図5 図版16	土瓶蓋	裾径9.8 胴径8.0 器高2.1	陶器 黒灰色 白色粒	暗茶褐色の鉄 釉を裾部ま で子入る	胴部回転ヘラ削り	受け部下軸拭き 取り		高取系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図6	土瓶	復元不能	陶器 赤褐色	黒褐色の厚い鉄 釉を外面から内 面まで 光沢なし	注口部穿孔3つ部と接合 方形の板状の把手	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図7 図版16	土瓶	復元不能	陶器 黒灰-黒灰色 白色 粒子入る やや軟質	にぶい暗緑灰色 の鉄釉を薄掛け ざらつきあり	注口部穿孔1つ部と接合	不明		小石原系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図8 図版16	土瓶	復元不能	陶器 橙灰白色 精良	黄灰白色の長 石釉	注口部穿孔3つ部と接合	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図9 図版16	土瓶	復元不能	陶器 にぶい暗赤灰色	濃茶褐色の光 沢ある鉄釉厚 硬質	注口部穿孔3つ部と接合 方形の板状の把手	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図10	土瓶 扁平胴形 青土瓶	口径(8.0) 最大径(16.6)	陶器 にぶい暗赤灰色 硬質	白化土の上に淡青 緑色の銅緑釉掛け 、最後に透明釉掛け	山形把手貼り付け 内面肩部は白化粧土、銅 緑釉掛け後透明釉掛け、口縁部は銅緑釉を拭 き取り 胴下位は透明釉のみ	口唇部は銅緑釉 拭き取り		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図11	土瓶 扁平胴形 青土瓶	口径(8.1) 最大径(16.6)	陶器 暗赤褐色 硬質	白化土の上に淡青 緑色の銅緑釉掛け 、最後に透明釉掛け	山形把手貼り付け 内面口縁部は白化粧土の み 胴下位は透明釉のみ	口唇部は銅緑釉 拭き取り		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図12	土瓶 腰折形	口径(8.4) 最大径(18.2)	陶器 暗赤褐色 硬質	光沢ない鉄釉を外 面は胴下位から内 面口縁部まで掛け	山形把手貼り付け 外面口縁下にカキ目、胴 下位は砂粒を引いた痕跡あり 内面口縁部は 褐釉のみ 胴中位以下は鉄葉のみ	口唇部は銅緑釉 拭き取り		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図13 図版16	土瓶 扁平胴形 青土瓶	底径(7.5) 最大径(16.1)	陶器 暗赤褐色 硬質	外面は白化粧土の上 に淡青緑色の銅緑 釉掛け 内面は胴中 位以下に鉄葉掛け	注口部穿孔3つ部と接合 山形の把手 見込 み鉄葉の上に銅緑釉のこぼれ軸がある 上げ 底で基筒底状を呈する	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図14 図版16	土瓶 腰折形	最大径(19.6)	陶器 赤茶褐色 硬質 白色粒子混入	暗茶褐色の鉄 釉を厚く掛け る	注口部穿孔3つ部と接合 山形の把手	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図15 図版16	土瓶	口径(7.6) 最大径(16.2)	陶器 灰-橙灰色 硬 質	乳灰白色の長 石釉 貫入あり	注口部穿孔3つ部と接合	口唇部は銅緑釉 拭き取り		高取系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図16	土瓶	底径(7.0)	陶器 緑灰-黒灰色 硬質	内面は緑灰色の 透明釉	天井部内面に墨書がある カタカナであれば 「ホイ」と読める 豆状足あり	不明		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 61図17 図版16	土瓶	底径(8.4)	陶器 にぶい灰褐色 硬 質 白色粒子混入	外面胴中位は黒鉄 釉の上に透長石釉、内 面は茶褐色の鉄 釉	高台外面に手描きコバルト染付による凹凸線 文 上げ底で基筒底状を呈する	高台内焼成不良で 、底部外縁に 接地痕あり	焼成温度の低い肥 前系だろう	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図1 図版15	急須蓋	裾径7.8 つまみ径1.5 器高1.8	炆器 暗赤褐色 精良	—	天井部に蒸気孔2つ上から穿孔 つまみに逆 S字に点の印刻あり	不明	つまみの接合痕が ないほど丁寧なナ ゲ	常滑・万古系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図2 図版15	急須蓋	裾径7.2 つまみ径1.1 器高1.4 底径2.9	陶器 黄灰白色 軟質 で土師質に近い	上面のみ低火 度の黄灰白色 の灰釉	天井部に蒸気孔1つあり 半球状のつまみ接 合 裾端の軸拭き取り 外面に文様不明の鉄 絵あり 底部糸切り	胎土目跡見られ ない	完形	在地系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図3 図版15	急須蓋	裾径8.1 つまみ径1.3 器高2.1 底径2.9	陶器 完形のため断面観 察不能 暗灰白色	貫入のある透 明釉	天井部に蒸気孔1つあり 扁球状のつまみ接 合 裾端の軸拭き取り 文様不明の鉄絵あり 底部糸切り	胎土目跡見られ ない	完形	産地不明	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図4 図版15	碗蓋	裾径8.6 つまみ径3.5 器高2.5	磁器(染付) ガラス質 白色	透明釉 全面	つまみに凸線文、天井部に手描き呉須染付による 連弁文・鬼文・桜文、1条界線 内面口縁部に2条 界線内に雷文帯 見込みの2条界線内に雲文	つまみの畳付軸 剥ぎ		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図5	碗蓋	裾径9.0 つまみ径3.8 器高2.9	磁器(染付) 灰白色	やや暗い透明 釉 全面	手描きコバルト染付により外面区画内に青海波文地 に松絵文 つまみに1条界線 内面は口縁部に 2条界線内に雷文帯 天井部内面に1条界線内 に松絵文 つまみ内1条界線内裏銘「青？」	つまみ畳付軸剥 ぎ		肥前系 有田町小樽窯か	1830 1860
1号溝状黒色土層 62図6	碗蓋	裾径8.4 つまみ径3.6 器高2.9	磁器(染付) 白色 黒色粒子 あり	やや暗い透明 釉 全面	手描きコバルト染付により外面の界線内に牡丹文 内面の口縁部に2条界線内に雷文帯 天井部内面に 1条界線内に環状松竹梅文 つまみ削り出し	つまみ畳付軸剥 ぎ	54図5・6とセッ トになる蓋	肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図7	碗蓋	裾径9.6 つまみ径4.0 器高2.6	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	型紙刷りコバルト染付により青海波の区画内 に梅樹文、内面口縁部に環状文帯 つまみは 手描きによる2条界線 つまみ削り出し	つまみ畳付軸剥 ぎ		肥前系	19c 後葉 20c 初頭
1号溝状黒色土層 62図8	壺蓋	裾径9.0	磁器(染付) 灰白-白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により雷文の上に環状文	裾下軸剥ぎ		肥前系	不明
1号溝状黒色土層 62図9	蓋	裾径15.1 天井部径7.9 器高3.9	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	手描きコバルト染付により花葉文 天井部の つまみの有無不明	天井部内面に蛇の目 輪割と、天井部に別 個体輪割あり		肥前系	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図10	急須蓋	裾径(7.3) 天井部径(5.4) 器高(0.9)	陶器 灰色 精良 硬 質	光沢ある透明 釉 外面のみ	外面に指紋列の文様 天井裏面に型打ち成 形の布目痕あり	裾端軸拭き取り		関西系か	19c 中葉 20c 前半
1号溝状黒色土層 62図11	蓋	裾径(9.0) 器高(1.1)	陶器(半磁器) 緑がかった明灰 白色 ガラス質	緑灰白色の透 明釉 全面	受け部接合	裾下軸剥ぎ		滋賀県信楽町漆 原C遺跡窯跡に 類似あり	19c 中葉

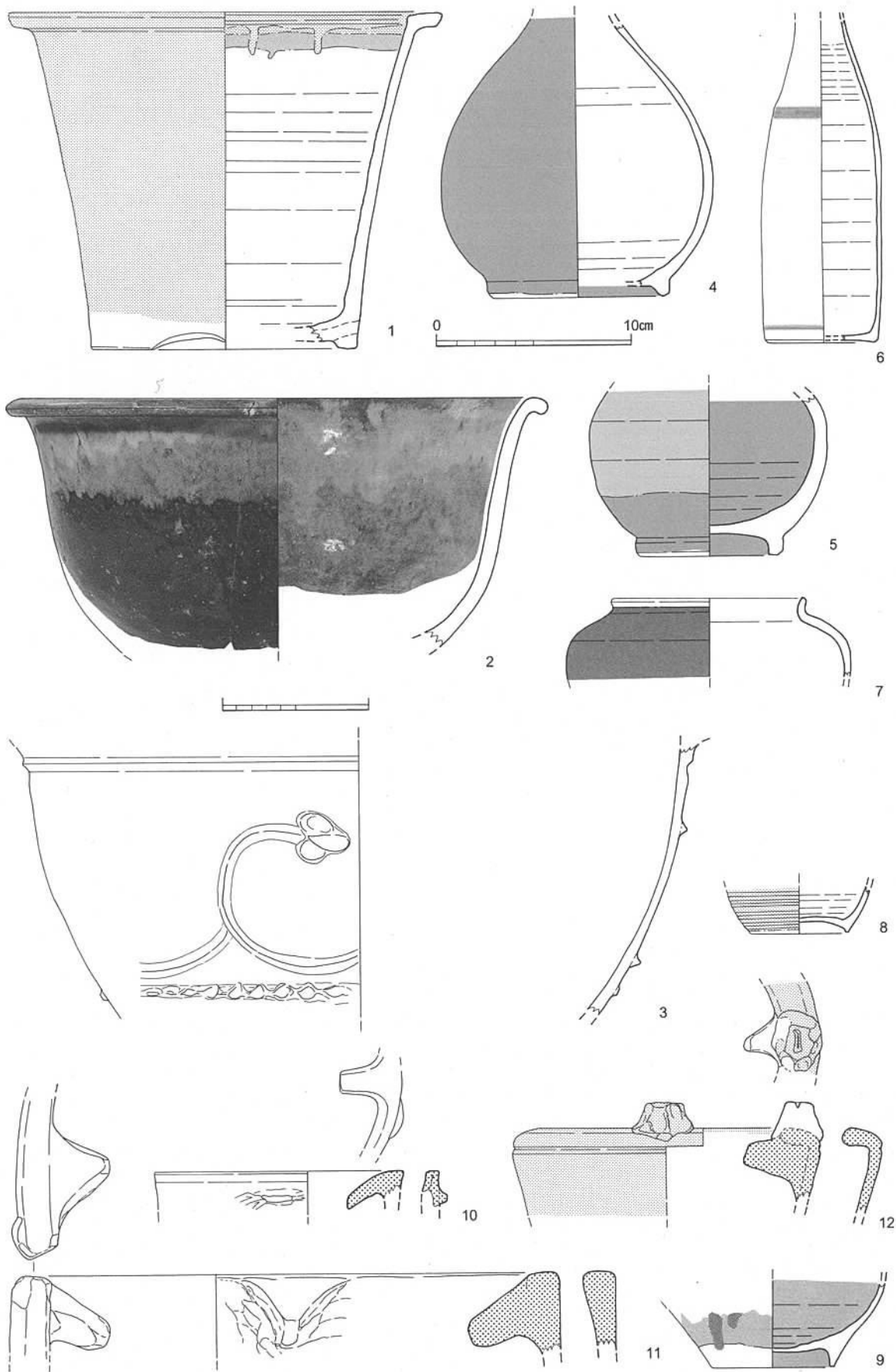
表15 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器観察表(5)



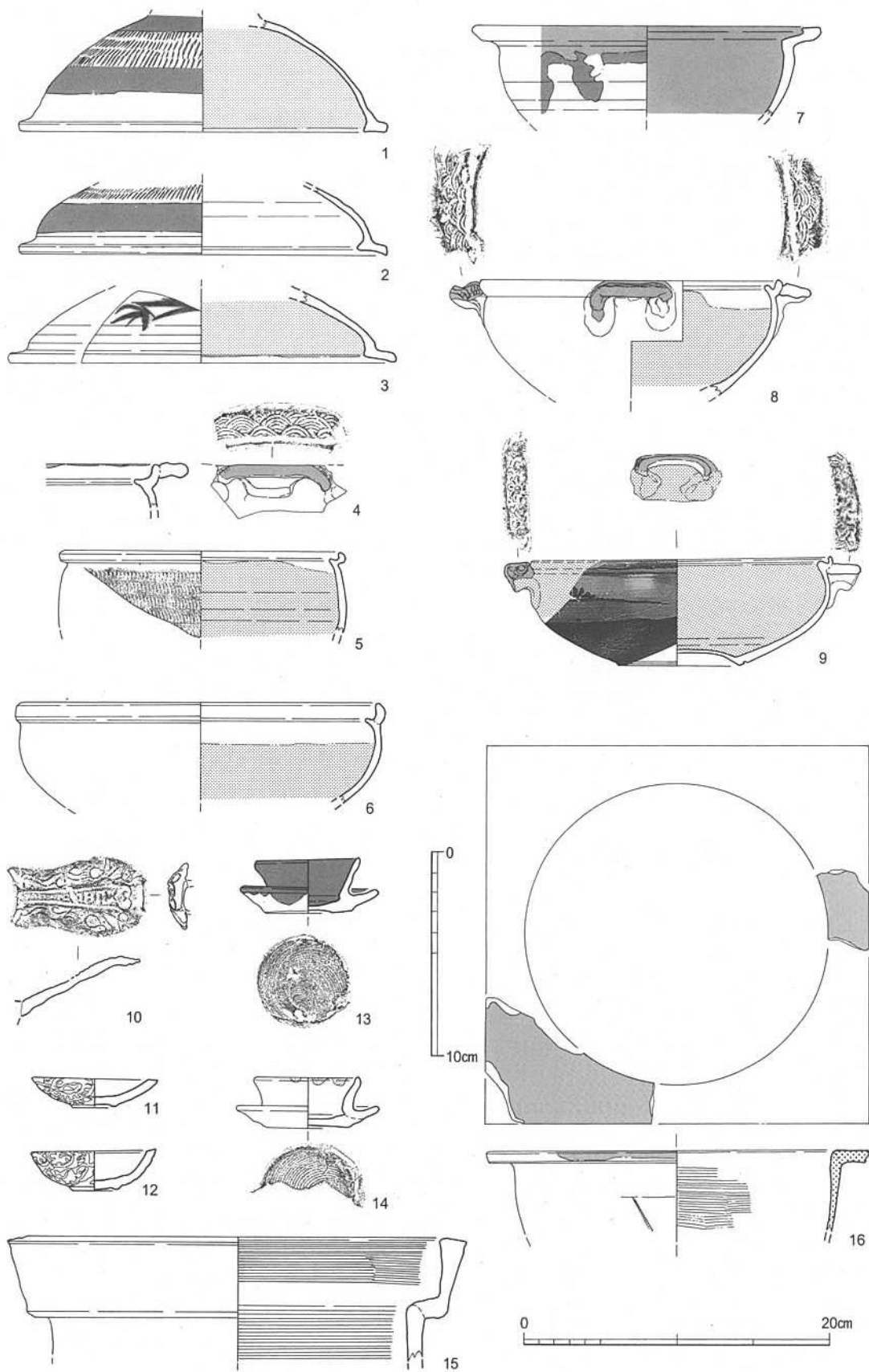
第57図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図5 (11・13~15は1/3、他は1/4)



第58図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図6(1/4)



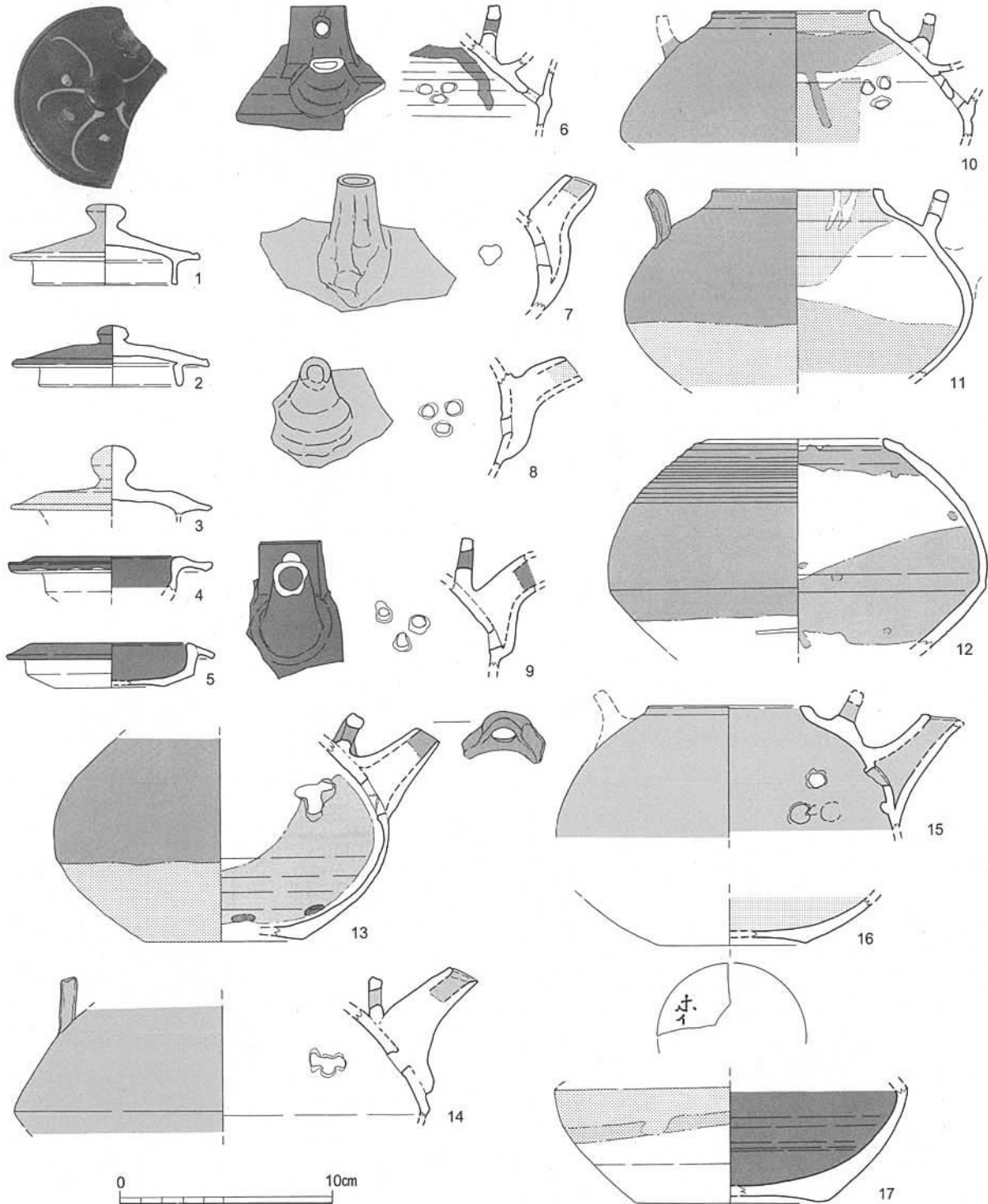
第59図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図7(4~9は1/3、他は1/4)



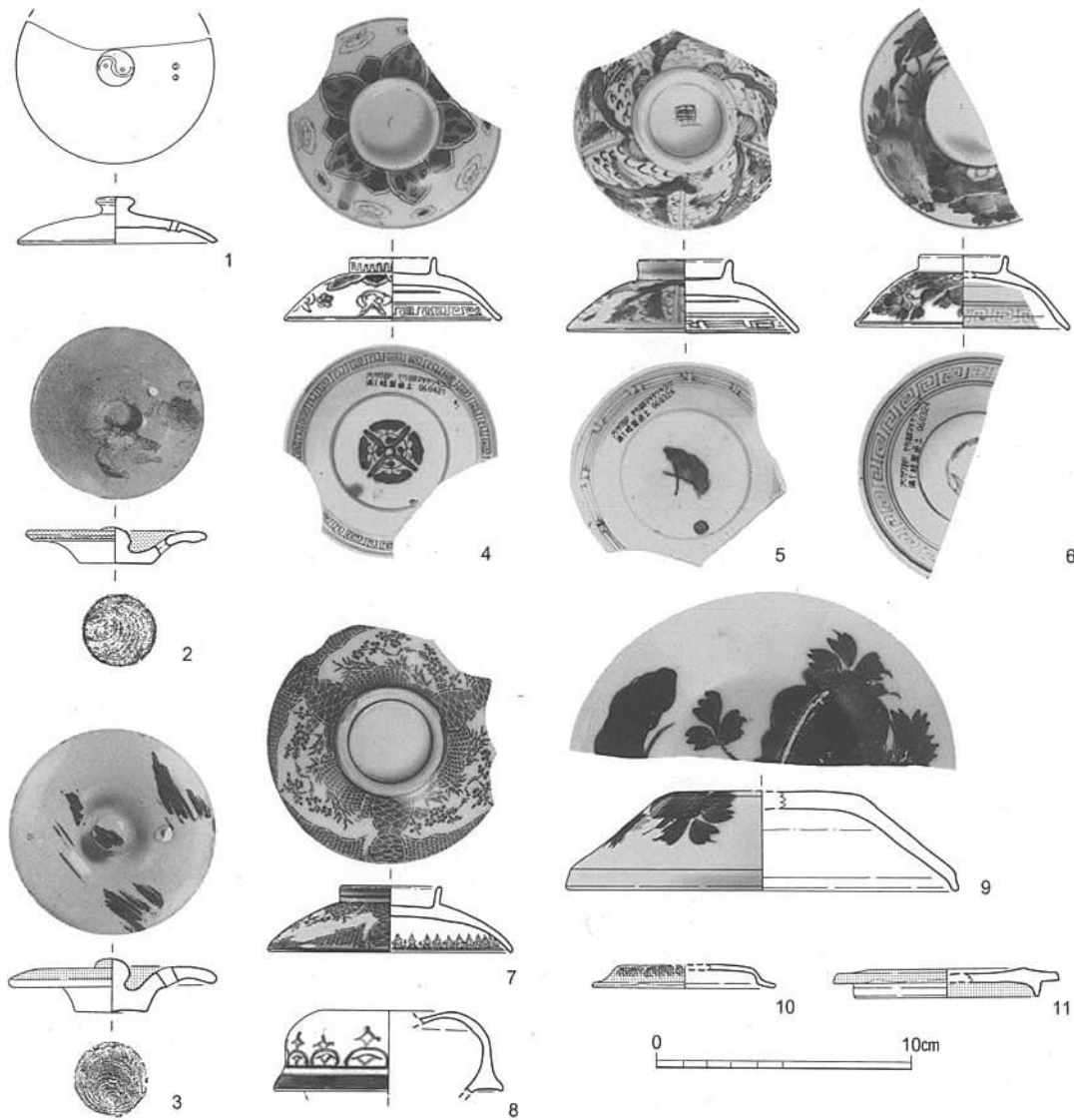
第60図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図8(9・15・16は1/4、他は1/3)

60図3は外面に墨書で文様が描かれる珍しいもので、胎土から在地産とした。60図13は口縁部に煤が付着しており、受け皿ではなく、灯明皿として使用されている。

60図16は炉形土器で、粘土板を貼り合わせて箱形にした板作り成形。外面が未調整で、板の上で成形した粘土板を使用したものか。軟質で薄いことから枠に入れられて使用するもの。



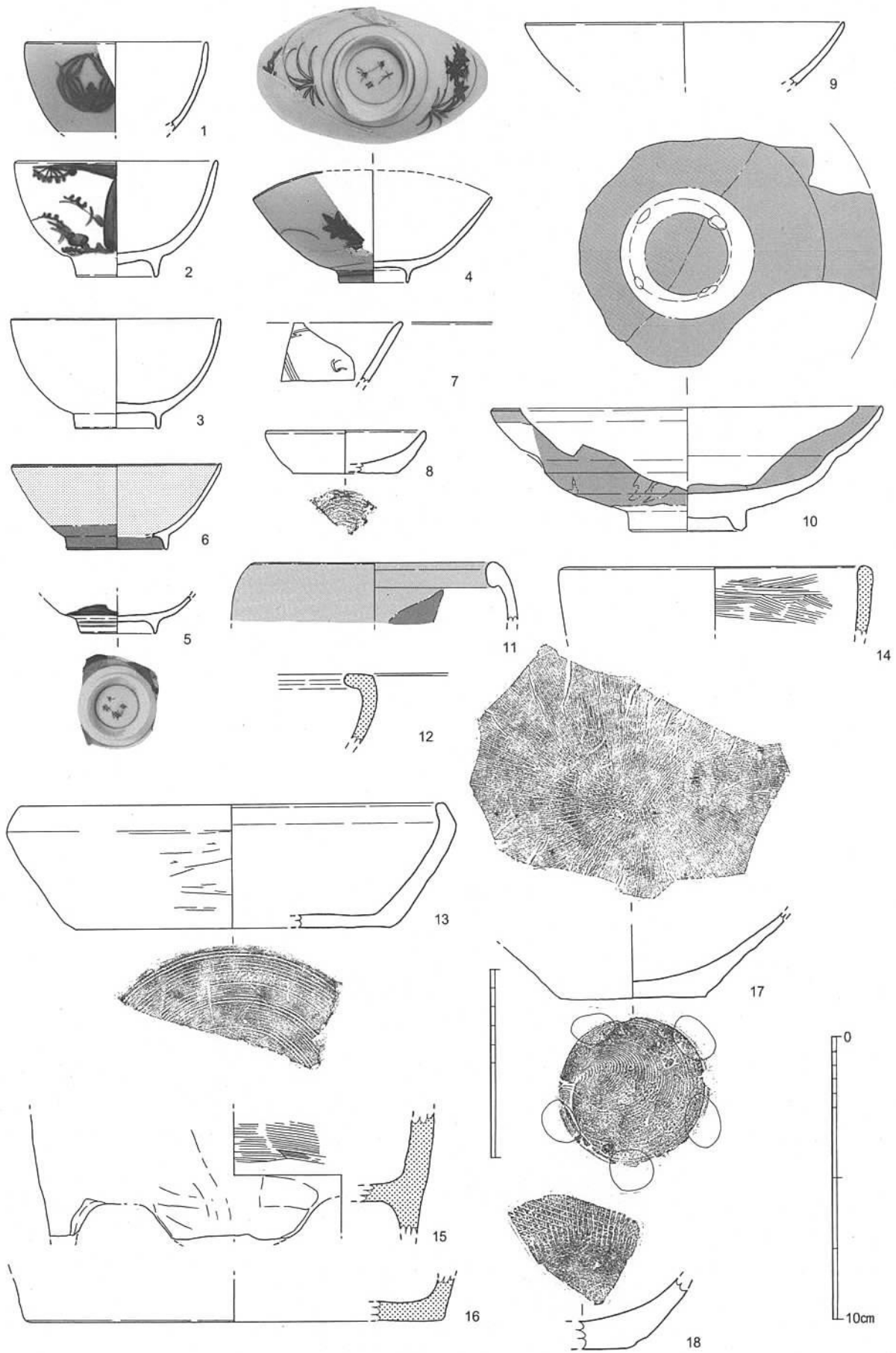
第61図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図9 (1/3)



第62図 3次調査1号溝状遺構暗黒色土層出土土器・陶磁器実測図10(1/3)

71図11は7~10のるつぼと同じような融着があるが、大きさが異なるので、大型のるつぼか、取瓶であろう。71図12・13はるつぼのように流動する金属が融着ものではなく、内面に均質に融着している。つまり、溶解した金属が流れたものではなく、高い熱を受けたために胎土内の砂粒が溶解したものである。器形は円筒形で、12は下方がすぼんでいる。すぼむ部分の外表面は挿入した痕跡があることから、同じような個体を上下に挿し込んで円筒を作っていたものであろう。13は12のように挿入するのではなく、同じ径の個体を積み上げている。口唇部や下端部が熱を受けていないのはそのためである。12・13は数個体積み上げて円筒形にし、火のついた炭を入れる大型の火入れと推定される。こうしたものは常時大量に炭を使用する施設がなければ使用しないので、るつぼともに鋳物工房で使用したものであろう。

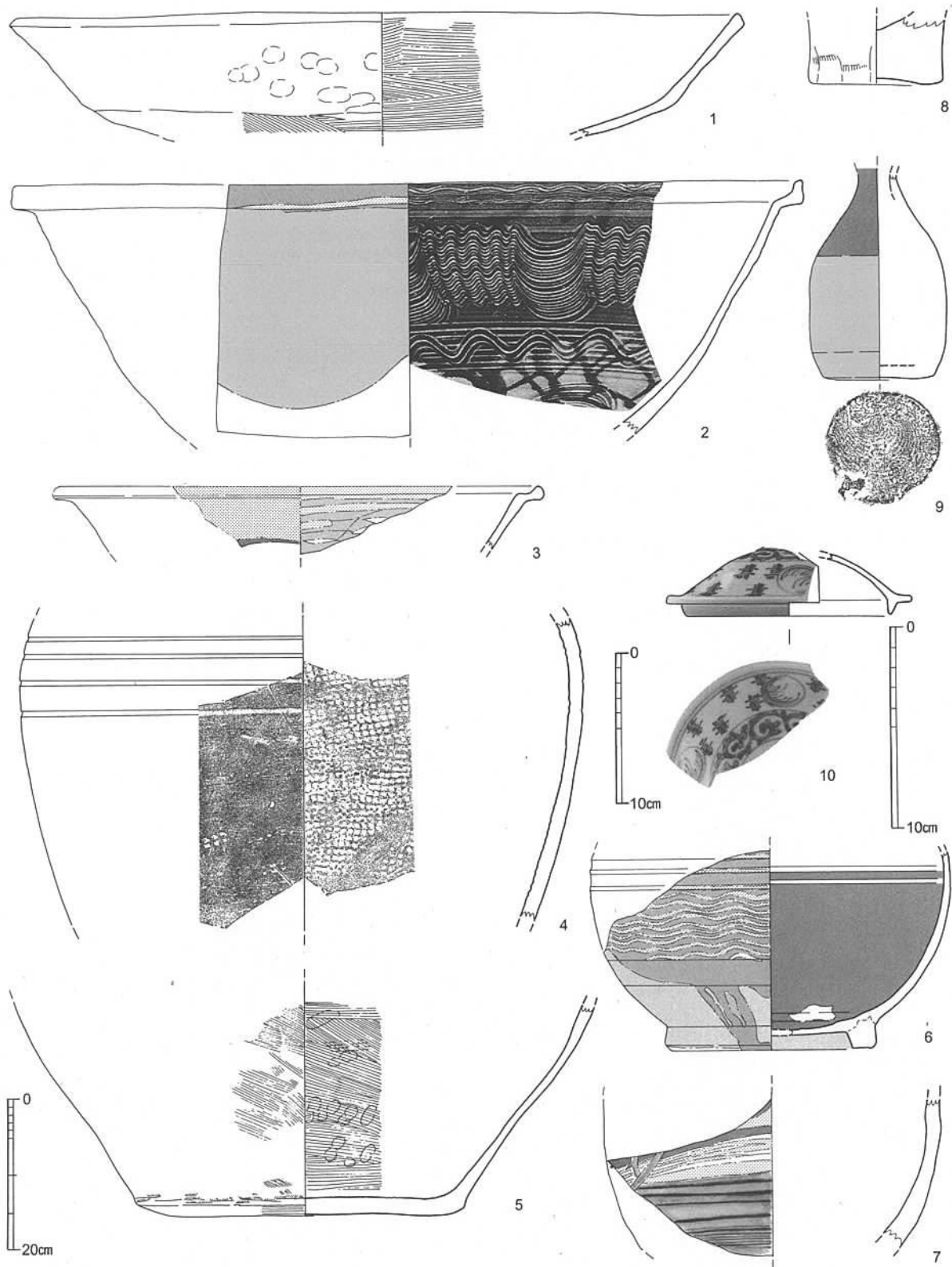
遺構面からは火を受けて赤変した範囲が多く見られたが、炉状に窪まなかったので遺構として認定しなかった。こうした火入れは底がなく、直接地表に置かれたのこうした赤変が生じたのではなからうか。



第63図 3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図1 (12~18は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	量目(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
2号溝 63図1	中碗	口径9.6	磁器(染付) 白色	透明釉 全面	コンニャク印判呉須染付による花葉文	不明		肥前系	1700 1740
2号溝 63図2	中碗	口径10.6 高台径4.4 器高6.1	磁器(染付) 灰白色	透明釉 全面	手描き呉須染付による松樹文か 高台に2条界線	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 1700
2号溝 63図3	中碗	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	—	畳付釉剥ぎ		肥前系	1680 1700
2号溝 63図4 図版15	中碗	口径(8.0) 高台径(5.0) 器高(5.0)	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面線描きの草文と胴下位と高台に1条界線とコンニャク印判による紅葉文 外底は1条界線内に「大明年製」	畳付釉剥ぎ	大きく歪んでいる	肥前系	1690 1740
2号溝 63図5	中碗	高台径4.2	磁器(白磁) 白色	透明釉 全面	手描き呉須染付による外面不明文と高台に2条界線 外底は1条界線内に「大明年製」	畳付釉剥ぎ		肥前系	17c 後葉 18c 前葉
2号溝 63図6	中碗	口径(11.0) 高台径(5.3) 器高7.5	陶器 黄灰白色 軟質 精良	貫入ある低火度の透明釉 全面	口唇部と胴下位から高台内面は鉄釉	畳付釉剥ぎ		肥前系	不明
2号溝 63図7	中碗	復元不能	磁器(青磁) 灰色	緑灰色の青磁釉 全面	内面片切り彫りの花文	不明		中国・龍泉窯	12c 後半
2号溝 63図8	小皿 かわらけ	口径8.4 底径4.5 器高2.3	土師器 黄灰白色 軟質 精良	—	内外ヨコナデ 底部糸切り	不明	胎土から蒲池焼と推定	柳川市蒲池焼	不明
2号溝 63図9	中皿	口径(16.8)	陶器 灰白色 やや軟質 精良	低火度の透明釉 全面 貫入あり	—	不明		肥前系	不明
2号溝 63図10	中皿 二彩唐津	口径(20.6) 底径6.2 器高6.5	陶器 灰白色 やや軟質 精良	口縁部から内面は半分濁釉を掛け、半分をその上に銅緑釉を掛ける 外面は緑灰色の鉄釉を胴下位まで掛け上上に鉄絵高台削り出し 畳付は斜めにカット	見込みに蛇の目釉剥ぎ、その上に胎土目跡4つ	罐野市内野山北窯に類似あり		肥前系	1690 1780
2号溝 63図11	中鉢 火入れか 火鉢	口径(12.4)	陶器 灰~暗褐色 硬質 白色粒子入り	鉄釉下掛けで内面は口縁部のみ、外面は全面海鼠釉上掛け	不明			小石原系	不明
2号溝 63図12	中鉢	復元不能	瓦質土器(土師質) 暗褐色 軟質 金雲母あり	—	内外ヨコナデ	不明		在地系	不明
2号溝 63図13 図版15	中鉢	口径(29.7) 底径(22.0) 器高8.8	土師器 灰白色 精良 軟質	—	外面ケズリ ミガキは単位不明 内外ヨコナデ 見込みにカキ目	不明	ミガキは工具不明	柳川市蒲池焼	不明
2号溝 63図14	中鉢 火入れか 火鉢	口径(22.0)	瓦質土器 灰~暗褐色 硬質 白色粒子多い 土師質	—	外面ヨコナデ 内面ヨコハケ	不明		在地系	不明
2号溝 63図15	中鉢 火鉢	底径(27.0)	瓦質土器 灰~暗褐色 やや軟質 白色粒子多い	—	外面ナデ 弧状脚あり 内面ヨコハケ 見込みヨコナデ	不明	火消し壺かもしれない	在地系	不明
2号溝 63図16	中鉢 火鉢	底径(27.0)	瓦質土器 黒灰色 白色粒子多い	—	内外・見込みヨコナデ 外底回転ハケ	畳付釉剥ぎ		在地系	不明
2号溝 63図17 図版15	摺鉢	底径10.4	陶器 黒灰~暗赤褐色 硬質	内外露胎	外面ヨコナデ 間隔が広く幅の狭い摺り目3本単位 底部糸切り	見込みと外底に胎土目跡5つあり		肥前系	1650 1690
2号溝 63図18	摺鉢	復元不能	陶器 灰橙~暗褐色 やや軟質	内外露胎	外面・外底ヨコナデ 間隔が広く幅の狭い摺り目単位不明 摺り目交差	不明		小石原系か	不明
2号溝 64図1	大鉢	復元不能	瓦質土器 灰~暗褐色 金雲母・白粒子あり	—	外面口縁部オサエ、鉢部に丁寧なナメ・ヨコハケ、口唇部ヨコナデ 内面は丁寧なヨコハケ	不明		在地系	不明
2号溝 64図2 図版16	大鉢 二彩唐津	口径(52.0)	陶器 淡赤褐色	外面は鉄釉を胴中位以上に掛け、外面口縁部から内面は白化粧土を掛けて帯状に拭き取り、その上にさらに白化粧土を掛けて波状に拭き取り 最後に外面口縁部から内面に緑釉流し掛け	不明	口縁部形態から推定年代幅内の古段階		肥前系	1690 1750
2号溝 64図3	大鉢 二彩唐津	口径(31.4)	陶器 橙色 軟質 白色粒子あり	外面は暗褐色の鉄釉を下地に掛け、その上に焼成不良で灰白色に発色した透明釉を胴中位以上に掛ける 内面は白化粧土を掛けて波状に拭き取り 最後に透明釉釉流し掛け	不明	口縁部形態から推定年代幅内の新段階		肥前系	1690 1750
2号溝 64図4	大甕	最大径(36.8)	陶器 灰色 硬質 白色粒子あり	暗赤褐色の鉄釉かけ	外面格子目タタキ目跡ナデ消し 肩部に沈線4条 内面格子目タタキ当て具痕ナデ消し	不明	胎が特徴的	産地不明	19c 中葉 20c 前半
2号溝 64図5	大甕	底径44.0	土師質土器 黄橙~黄白色 金雲母あり	—	外面は下端部から上へ丁寧なナメハケ 内面はオサエのち丁寧なナメハケ・ヨコハケ 見込みは丁寧なハケ 底面端部はナデ 外底は丁寧なハケ 端部が丸みをもち、胴部との境に後をもつ	不明		在地系	不明
2号溝 64図6 図版16	中甕 二彩唐津	最大径(27.2) 高台径(23.2)	陶器 淡赤茶褐色 軟質	外面は鉄釉の上に白化粧土を掛けて波状に拭き取り、その後帯状に拭き取る 最後に緑釉を胴中位まで掛ける 内面は鉄釉を刷毛状に施釉し、中位に帯状拭き取り 外底は鉄釉かけ 貼り付け高台	畳付釉剥ぎ 砂目府茶器 見込みに砂目付着	口縁部形態から推定される年代幅内の新段階		肥前系	1650 1750
2号溝 64図7 図版16	小瓶	最大径(16.6)	陶器 黄橙~暗灰褐色	外面は白化粧土を刷毛目状に施釉し、胴下位はその上に鉄釉を刷毛目状に施釉 最後に鉄釉を胴中位まで掛ける	不明	内面露胎なので瓶か壺形		産地不明	1650 1750
2号溝 64図8	甕	底径6.4	土師質土器 黄橙~橙白色 白粒子多い 軟質	—	外面はタテハケ 見込みは器面摩滅 上げ底	不明		在地系	弥生中期 前葉
2号溝 64図9 図版16	小瓶 二彩唐津	最大径6.6 高台径5.4	陶器 灰色	暗黒色の鉄釉を胴上位 貫入のある長石釉を下部に掛ける	底面の端部は丸味をもつ 糸切り後に釉掛けしているの、焼成方法不明				17c 前葉 17c 後葉
2号溝 64図10	小鉢蓋	裾径(10.0)	磁器(染付) 白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	手描き呉須染付による外面界線内蝸草唐文帯の下に舞字文と秋草印文 その下に2条界線	受け部釉剥ぎ		肥前系	1650 1700
2号溝 65図1	大甕	口径57.3 最大径68.0	陶器 茶褐色	内外に茶褐色の鉄釉 肩部に泥灰掛け	外面口縁部にナデによる2条突帯、丁寧なナデ 内面は胴部同心円タタキ当て具痕の上をヨコナデ 口縁部にカキメ	不明	同心円タタキ当て具痕なので17c 後葉でも古段階	肥前系	17c 後葉
2号溝 65図2 図版16	大甕	口径(80.6) 最大径(89.2)	陶器 暗赤茶褐色 硬質	茶褐色の鉄釉に泥灰掛け	外面は格子目タタキ痕ナデ消しだが部分的に残る 内面は胴部格子目タタキ当て具痕を部分的にナデ消し	不明		肥前系	17c 後葉

表16 3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器観察表



第64図 3次調査2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図2(5は1/8、7~10は1/3、他は1/4)

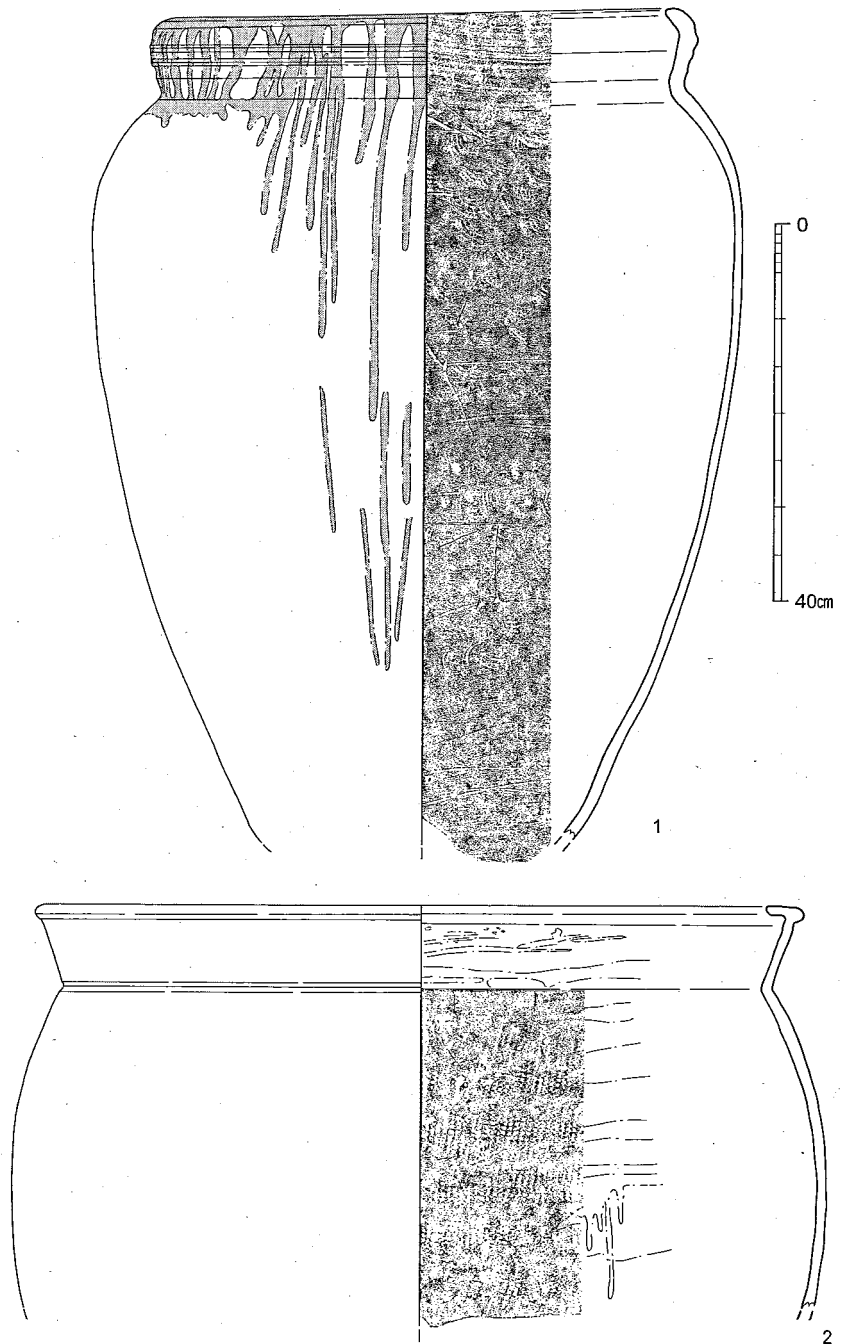
71図16は小型の磁器製人形で、龍だろうか。71図19・20の戸車はアルミナが付着する面がある。窯道具として使用した例があることから、粘着防止のためのものであろう。側面が摩滅しているの
 で、窯道具として使用しつつ、戸車として出荷したものと思われる。

72図2は湯釜片で、薄い铸造品。1次調査で湯釜の铸型が出土しており、铸物工場の製品の可能性もある。72図6は皮靴の底だが、基盤になる1枚の底板の踵ぶに皮を重ね合わせて、鋏で留める
 という製法。1号溝状遺構の上限は昭和初期なので、革靴が一般に普及したとはいえない段階であり、この時期に革靴をもつ人物がいたことを示す資料であることから掲載した。

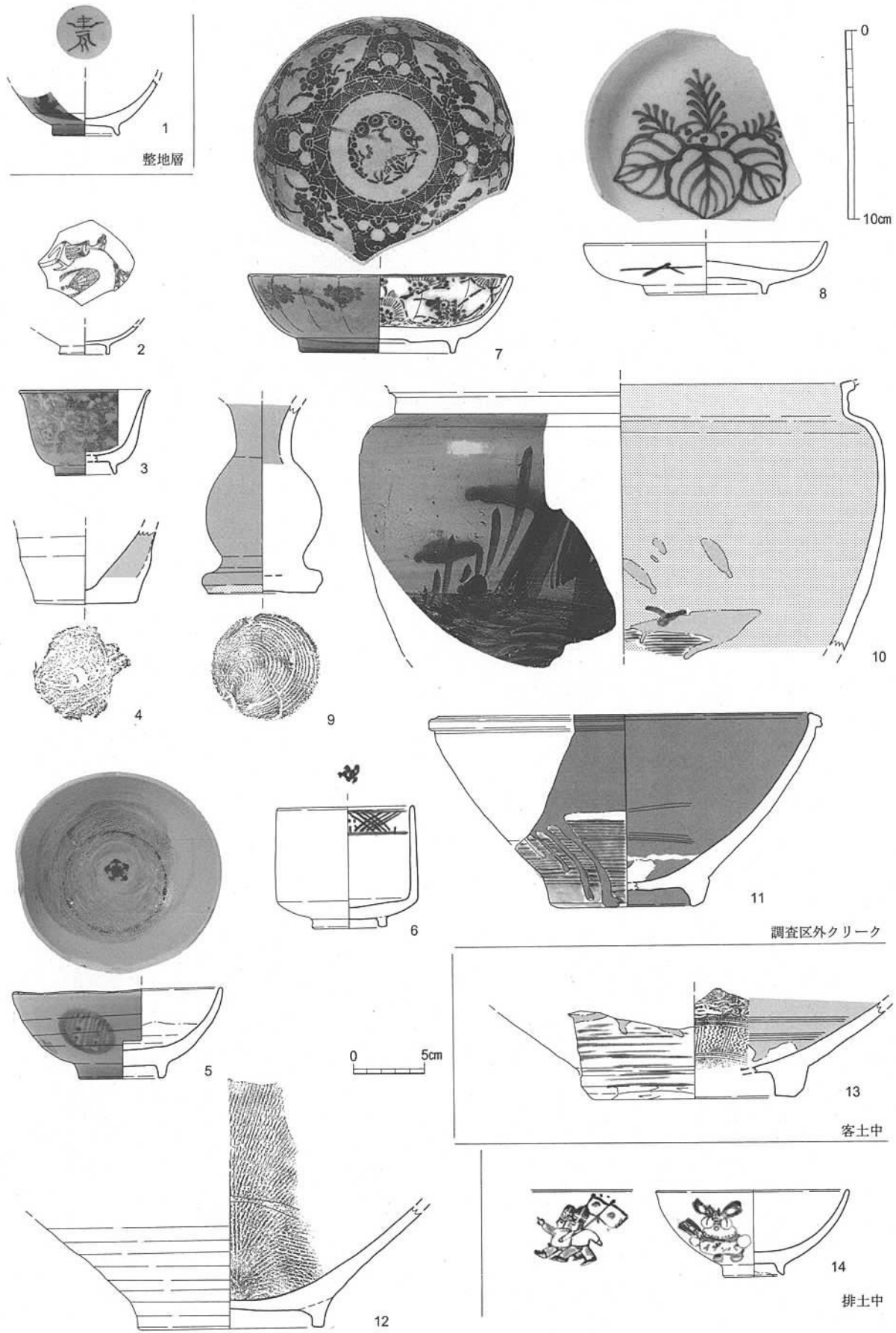
73図5は龍の彫刻だが、扁平で裏面の彫刻はわずかなので、両面は見えるものの裏面は簡略にし
 たものである。したがって、仏間などの欄干の透かし彫りと推定できる。73図6とは接合しないが、龍の手足の
 いずれかであろう。73図7は径5cm程の丸木に抉りを入れ、その対面に方形の切り込みをいれたもので、
 みやま市瀬高町の伝統工芸品である「きじ車」に近い形態である。雉の顔の部分が作られていないが、下面
 の切り込み部分には車軸を保持する部品が取り付けられたのではないだろうか。瀬高地方で作られたもので
 はなく、子供のおもちゃとして手作りで作ったものかもしれない。彩色は失われているのか、本来なかった
 のか不明。

73図11・74図1・5・8・
 75図4は「ぼっくり」と呼ばれる下駄で、赤漆の塗られているものが多い。いずれも小型品であり、女兒の
 ものであろう。

七五三などのハレの日用
 の下駄であろう。歯はあまり
 擦り減っていない。



第65図 3次調査2号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/8)



第66図 3次調査整地層・調査区外クレーク・排土中・客土中出土土器・陶磁器実測図(10~13は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・成形・装飾技法	窯詰技法	所見		
							胎の特徴	特記事項	推定産地
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値							
整地層 66図1	小碗	高台径(3.4)	磁器(染付)白色	透明釉 全面白色	手描き呉須染付による若杉文 見込みに崩れた「壽」文	畳付釉剥ぎ	やや発色悪い呉須	肥前系	1780 1810
排土中 66図2	小杯 盃	高台径(2.6)	磁器(染付)白色	透明釉 全面白色	内面から見込みはコバルト・金彩でスキを挿した花瓶と机、赤彩で扇を上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 中葉 19c 末
区外クレーク上層 66図3	小杯 端反形	口径(6.8) 高台径(3.1) 器高4.5	磁器(染付)灰白色 軟質	発色不良で乳白色の透明釉 全面	銅版刷りコバルト染付による菊・牡丹文と福の字 畳付を両側から斜めにカット	畳付釉剥ぎ		肥前系	19c 第4 四半期
区外クレーク上層 66図4	焼塩壺	底径5.4	土師器 黄褐色 精良 混入物少ない	—	内外ヨコナテ 底部糸切り	不明		在地系	19c 中葉 20c 前半
区外クレーク下層 66図5 図版16	小皿	口径11.0 高台径4.6 器高4.8	磁器(染付)白色	透明釉 全面	手描き呉須染付により外面斜線丸文・丸文 見込みの五弁花文はコンニャク印判	畳付釉剥ぎ 見込み釉拭き取り その上に径5.4cmの別個体の高台痕あり		肥前 波佐見系	1750 1810
客土中 66図6	小碗 半筒形	口径(7.3) 高台径3.9 器高6.4	磁器(染付)灰色	焼成不良で灰白色の透明釉 全面	手描き呉須染付により内面口縁部に崩れた四方標文帯 見込みの五弁花文はコンニャク印判	畳付釉剥ぎ		肥前系	1740 1780
区外クレーク上層 66図7	五寸皿 輪花口縁	口径13.8 高台径8.2 器高4.1	磁器 黄灰白色 焼成 不良で軟質	発色不良でにぶい暗乳白色の透明釉 全面	型打ち成形で輪花口縁成形 蛇の目高台 型紙刷りコバルト染付により外面の唐草花文、内面の花文地に花文・窓内菊文、見込みの多重鋸歯文帯内に環状松竹梅文 胴下位の1条、高台の1条界線は手描き 口唇部は口紅状にコバルト施釉	畳付は釉剥ぎしていない 蛇の目高台の目部は釉剥ぎ		肥前系	19c 第4 四半期
区外クレーク上層 66図8	小皿	口径12.8 高台径6.3 器高2.8	磁器(染付)白色	白色 全面 黒色粒子あり	手描きコバルト染付による外面崩れた鳥文か内面は桐文で花の中は鉄釉の点	畳付釉剥ぎ	桐文のモチーフから年代を推定した	肥前系	19c 第4 四半期
区外クレーク上層 66図9	小瓶 瓶子形	口径(6.4) 高台径(3.8) 器高5.4	陶器 明黄褐色 軟質 白粒子多い	発色不良で黄灰色の褐釉を外面から内面口縁部まで	底部糸切り	底部端釉剥ぎ 胎土目跡見られない	底部が厚い	小石原系	19c 中葉 20c 前半
区外クレーク下層 66図10	中甕 ハンズー ガメ	口径(32.0) 最大径(37.2)	陶器 茶褐色	外面から内面口縁までは白化粧土 外面はその上に鉄絵と緑釉の松文 内面は胴下位に下塗りの鉄釉の刷毛目状施釉が見られ、全面に灰褐色の灰釉を上掛け	不明			肥前系	18c 中葉 19c 末
区外クレーク下層 66図11	中鉢	口径(27.6) 高台径(11.0) 器高11.6	陶器 橙茶褐色	外面は暗茶褐色の鉄釉の刷毛目状拭き取りの上に胴上半まで鉄釉掛け 内面はハケ調整の上に鉄釉掛け 口縁部肥厚 高台貼り付け 畳付は斜めにカット	不明	畳付釉剥ぎ 高台内面に高台を重ね焼き痕の砂目と胎土目跡あり		肥前系	18c 中葉 19c 末
区外クレーク下層 66図12	大鉢	高台径(13.2)	陶器 橙茶褐～黄灰褐色 白色粒子入る	茶褐色の鉄釉 全面	外面に積み上げ痕の凹凸あり 25本単位の摺り目 高台貼り付け 畳付は斜めにカット	底部端釉剥ぎ 砂目付着 見込みにも砂目付着	外底は重ね焼きのため発色不良の鉄釉	小石原系	18c 中葉 19c 末
排土中 66図13	大鉢 三島手	高台径(14.0)	陶器 明黄褐色 軟質 白粒子多い	外面は暗茶褐色の鉄釉の刷毛目状拭き取り後灰釉上掛け 内面は灰釉	高台端を斜めにカット	底部端釉剥ぎ 胎土目跡あり	重ね焼きのため見込みが発色不良で変色している	肥前系	1650 1690
排土中 66図14 図版16	小碗 子供茶碗	口径(10.1) 高台径(3.2) 器高4.6	磁器(染付)白色 黒色粒子あり	透明釉 全面	日の丸の旗を肩に担いだ兵隊と「バンザイ」の横断幕を持つノラクロを黒彩と赤彩で上絵付け	畳付釉剥ぎ	「のらくろ」は1931年から連載されている	肥前系	1931

表17 3次調査整地層・客土中・区外クレーク・排土中出土土器・陶磁器観察表

2号溝状遺構 (図版16・17)

63図7の龍泉窯青磁碗と64図8の弥生土器は混入品であろう。63図8・13のかわらけは胎土から蒲池焼と推定した。

64図9は鉄釉と長石釉の掛け分けで古い様相をもつので、17世紀前葉に遡る可能性もあるが、類例がないため時期を特定できない。

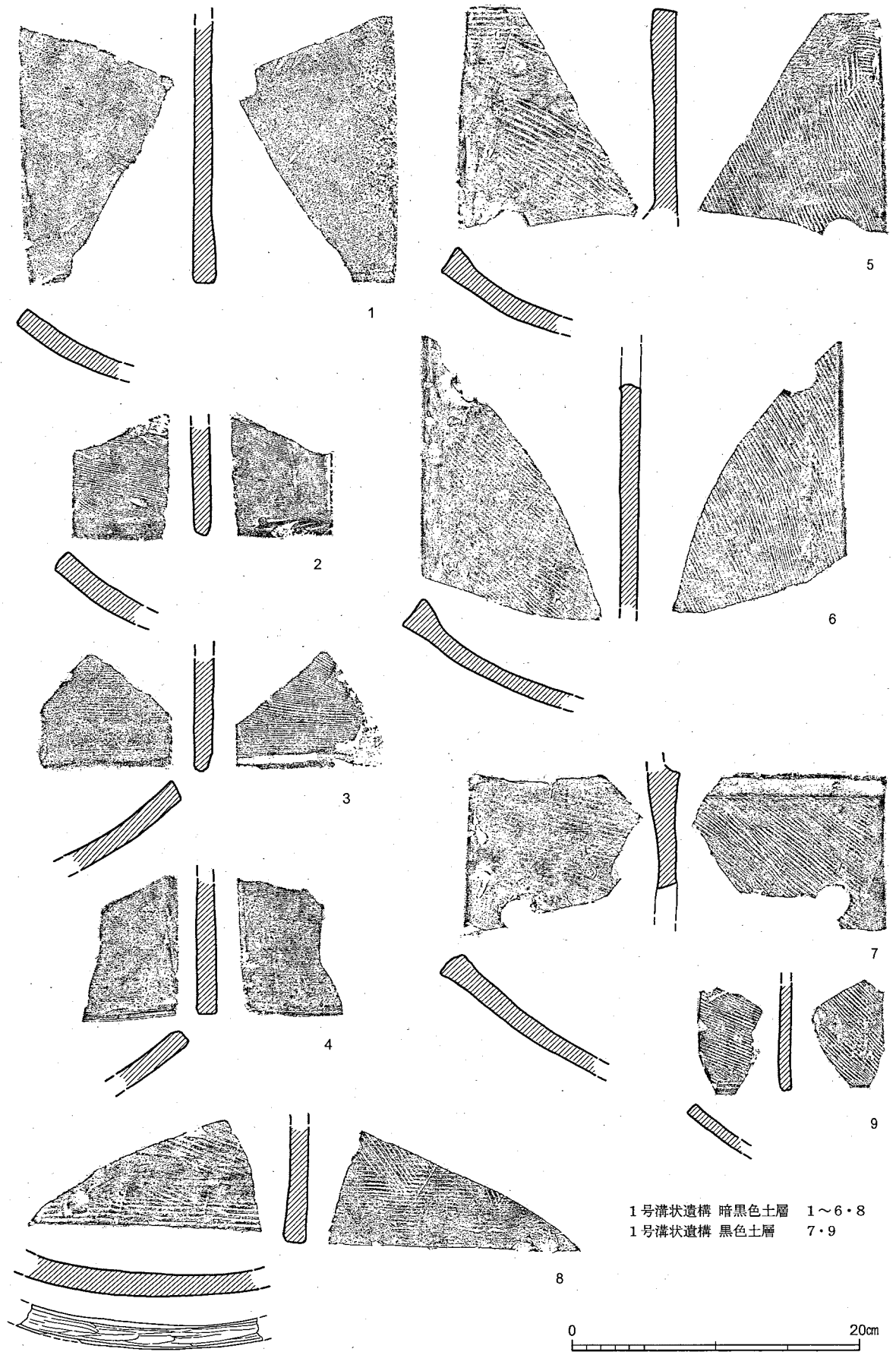
72図7は裏面にいろいろな文様をもつ硯で、小石や刃物の先端のような尖ったもので引っかいたもの。じくざくな線や、太陽のような文様があるが、特に意味を持たないようだ。

排土中 (図版16)

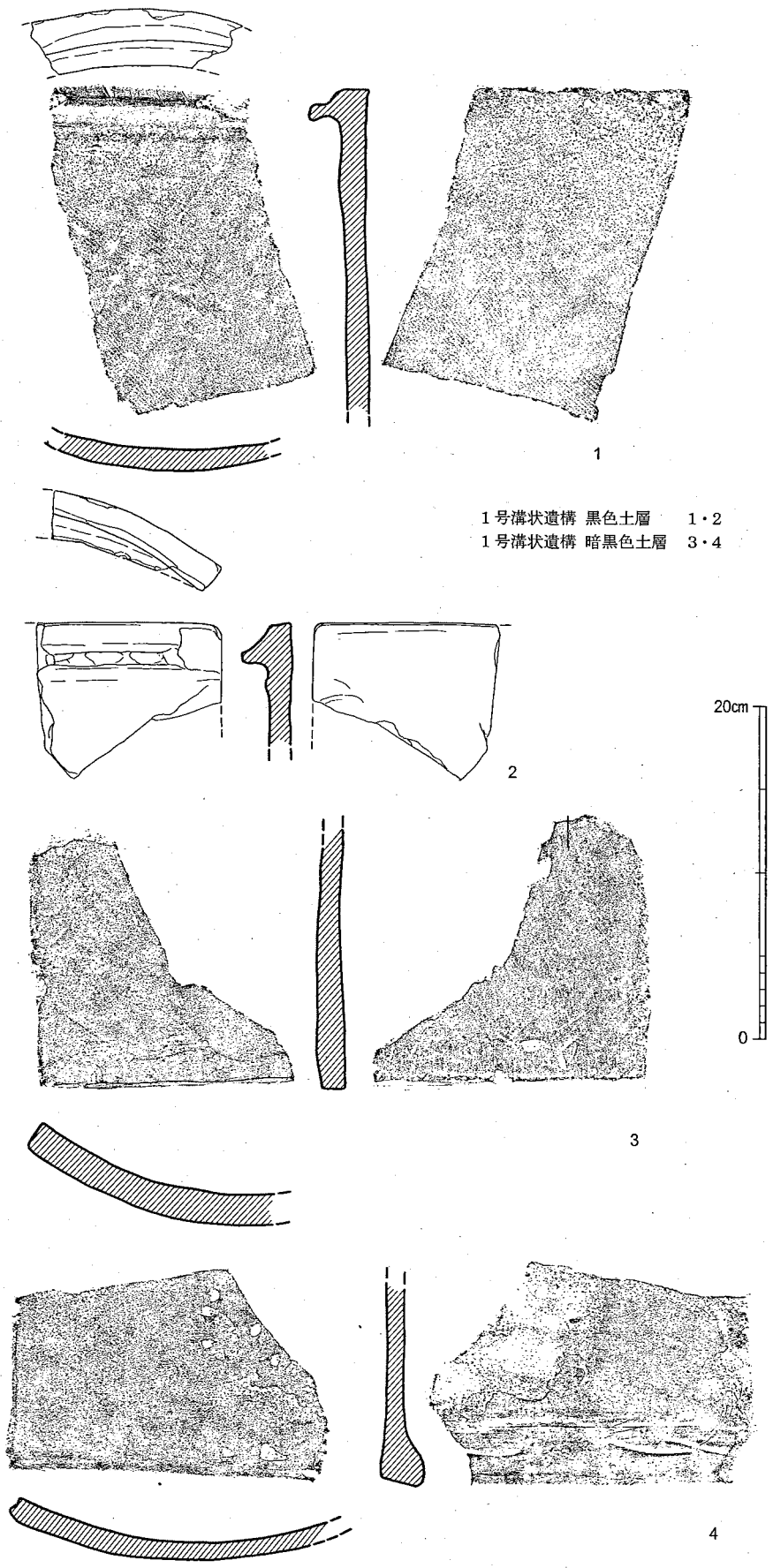
66図14はノラクロと兵隊を描いた子供茶碗で、ノラクロは昭和6 (1931) 年に連載が開始されているので、それ以降のもの。

客土中 (図版17)

71図17は土師質の兵隊人形で、胎土が在地的であることから、筑後地方の土人形で著名な「赤坂人形」に当たるものか。一部に白彩が残っていたので、本来は彩色されていたようだ。



第67図 3次調査出土瓦実測図1(1/4)

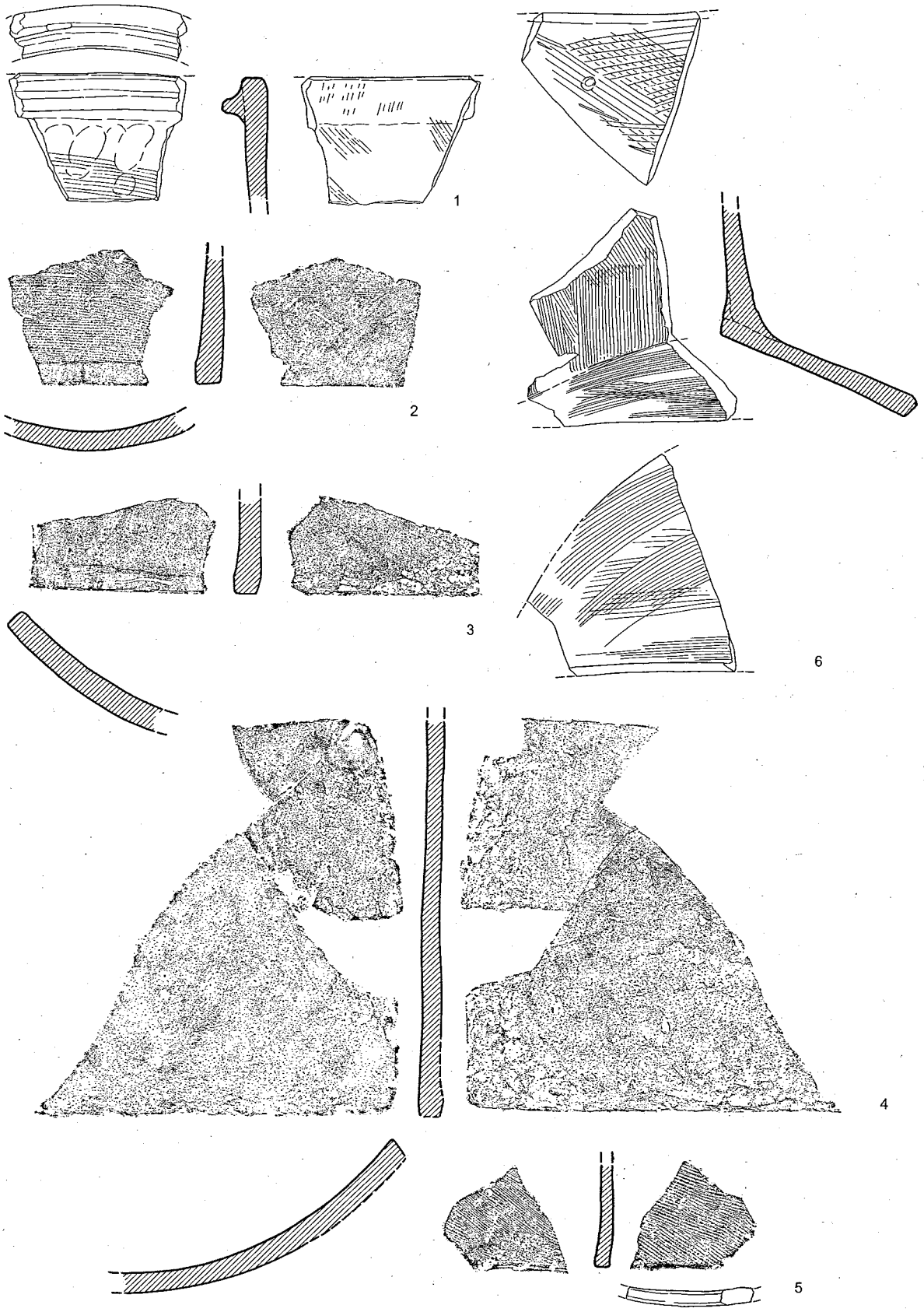


1号溝状遺構 黒色土層 1・2
 1号溝状遺構 暗黒色土層 3・4

第68図 3次調査出土瓦実測図2 (1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	色調	調整・成形・裝飾技法				製作技法	所見			
					凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面		特記事項	推定産地	推定年代	
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値	胎の特徴										
1号溝暗黒色土層 67図1	平瓦	厚さ1.2~1.7	瓦質(土師質)に ぶい橙茶灰色 軟質 白色粒子 金雲母 混入物入る	内外黒灰色	凹凸面細かいハケ調整後側面カット		下端部は凸面ナデ凹面面取り後ナデ	側端面は凸面に面取り	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 67図2	平瓦	厚さ1.3~1.5	瓦質(土師質)に 黄灰~黄橙灰色 混 入物少ない	黄灰白~黄橙灰色	凹凸面ハケ調整後側面を凸面からカット		下端部の端部はハケ状ナデで丸みをもつ	側面を途中までカットし、残りを折り取り後粗くナデ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 67図3	平瓦	厚さ1.3~1.4	瓦質(土師質)に 暗橙灰色 軟質 白色粒子 金雲母 含む	暗橙灰色	凹凸面ハケ調整後、側面をカット 側端面両面面取り 下端部は凹面ナデ凸面ケズリ		下端部の端部はナデで丸みをもつ	側面を途中までカットし、残りは未調整	一枚作り	傾き不明瞭 凹面が摩滅している	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 67図4	平瓦	厚さ1.2~1.4	瓦質(土師質)に 灰~灰白色 軟質 金雲母含む	灰白色	凹凸面ハケ調整 両面の端部は面取り		下端部には平坦面があるが端部はナデで丸みをもつ	側面カット後、ヘラ削り	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 67図5 67図16	平瓦	厚さ1.5~1.7 側端部の厚さ2.0	瓦質(土師質)に 灰白~灰色 軟質 白色粒子 金雲母 多い	黒灰色	凹凸面目の間隔の広いハケを上端部に施した後、斜め方向に調整 ハケ後、側面をカット 下から径2.9cmの釘孔を穿孔		上端面は裁断後ヘラ削り	裁断後ヘラ削り	一枚作り	傾き不明瞭 釘孔から上端部とわかる	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 67図6	平瓦	厚さ1.2~1.3 側端部の厚さ2.4	瓦質(土師質)に 灰白~灰色 軟質 白色粒子 金雲母 多い	黒灰色	凹凸面目の間隔の広いハケを斜め方向に調整後、側面をカット 凹面側面はナデ 下から径2.5cmの釘孔を穿孔		—	裁断後ヨコナデ	一枚作り	傾き不明瞭 釘孔から上端部とわかる	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 67図7 図版16	平瓦	厚さ1.1~1.5 側端部の厚さ2.4	瓦質(土師質)に 灰白~灰色 やや軟質 金雲母多い	黒灰色	凹凸面目の間隔の広いハケを斜め方向に調整後、側面をカットし端部をナデ 上端部は凹線状のナデで沈線あり 下から径2.2cmの釘孔を穿孔		上端面は肥厚してあり、接合部はナデ	切断後端部はナデで丸みをもつ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 67図8	平瓦	厚さ1.3~1.6	瓦質(土師質)に 灰白~灰色 やや軟質 金雲母多い	黒灰色	凹凸面目の間隔の広いハケを下端部に施した後、斜め方向に調整 凹面の下端部はヨコナデ		下端部は裁断後シガキ 上端面は面取り	—	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 67図9	平瓦	厚さ0.7~0.9	瓦質 灰白色 軟質 金雲母・白色粒子 あり	灰白色	凹凸面目の間隔の広いハケを斜め方向に調整 下端部はナデ		下端部は裁断後沈線状のナデ 角部を斜めにカット	側端面は裁断後ヘラケズリ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 68図1 図版16	平瓦	厚さ1.2~1.6 突帯部厚さ3.4	瓦質(土師質)に 黄橙灰色 軟質 砂粒多い	黄橙灰色	両面斜めナデ調整後、ハケを上端部に施す 上端部突帯貼り付け後ナデ 凹面の下端部はナデ 凹面はオサエの痕跡が残り、平滑でない		上端部はナデ	—	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 68図2	平瓦	厚さ1.3~1.5 突帯部厚さ2.9	瓦質(土師質)に ぶい黄灰褐色 軟質 砂粒比較的多い	黄橙褐色	両面器面摩滅しているが、ナデか 上端部突帯貼り付け後ナデ 突帯の端部は斜めに面取り		上端部はナデ	裁断後ナデ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 68図3 図版16	平瓦	厚さ1.3~1.7	瓦質(土師質)に 黒灰色 軟質 金雲母・白色粒子 あり	黒灰色	細かいハケ調整後 下端部をヘラ削りし、端部を面取り	細かいハケ調整を 下端部からタテ方向の後、斜め方向	下端部は裁断後ケズリ	側面を凹面から途中までカットし、残りは折った後粗くナデ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 68図4 図版16	平瓦	厚さ1.0~1.2	瓦質(土師質)に ぶい暗灰黄色 軟質 混入物多い	ぶい黒灰色	細かいハケ調整後 下端部をナデ	細かいハケ調整を 下端部の肥厚接合部をナデ	下端部の端部はナデで丸みをもつ	ケズリ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 69図1	平瓦	厚さ1.4 突帯部厚さ3.2	瓦質(土師質)に ぶい黄灰白色 軟質 金雲母・砂粒多い	ぶい黄灰白色	目の幅広いハケ調整を斜め方向に施した後、ナデ 下端部は縦方向にハケを施した後ナデ	突帯接合部をオサエ、ナデの後、目の幅広いハケ調整を斜め方向に施した	上端部はケズリ 縁部は面取り	—	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 69図2 図版16	平瓦	厚さ1.0~1.8	瓦質(土師質)に ぶい灰白色 軟質 金雲母・砂粒多い やや硬質	黒灰~灰色	目の幅広いハケ調整を横方向に施した後、下端部をケズリ	タテハケの後、ヨコハケ、最後に下端部から斜めのハケ	ナデ	—	一枚作り		在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 69図3 図版16	平瓦	厚さ1.0~1.8	瓦質(土師質)に 灰白色 軟質 砂粒多い やや軟質	灰色	オサエ後ヨコナデ 下端部をケズリ	目の細かいナメハケの後、下端部をケズリ	下端部はナデ 縁部は面取り	裁断後ケズリ	一枚作り		在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 69図4	平瓦	厚さ1.0~1.6	瓦質(土師質)に 暗灰色 軟質 砂粒多い 軟質	暗灰色	器面摩滅で調整不明	目の細かいナメハケの後、下端部をケズリ	下端部はナデ 縁部は面取り	裁断後ケズリ	一枚作り		在地系	19c 20c前半	
3号土坑 69図5 図版16	平瓦	厚さ1.0	瓦質 黄灰~灰色 軟質 金雲母・白色粒子 あり	暗灰褐色	凹凸面目の間隔の広いハケ	凹凸面目の間隔の広いハケ	下端部は半円形の板を接合して半円形に範囲はハケ調整	側端面は裁断後ヘラケズリ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 69図6 図版16	堤瓦	厚さ0.7~0.9	瓦質 橙茶灰~灰白色 軟質 金雲母・白色粒子 あり	黄灰白色	凹凸ハケをナメに施したのち下端部ナデ消し	凹凸面目の間隔の広いハケ	下端部はの裏には径9ミリの窪みあり	側端面は裁断後ヘラケズリ	一枚作り	傾き不明瞭	在地系	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 70図1 図版16	軒棧瓦	厚さ1.7 瓦当高5.0 面径9.2	瓦質 ぶい灰白色 硬質	黒灰色	丸瓦部はケズリ	ナデ	中心飾りは宝珠か第2唐草文下に点と線で表現された文様があるが左側にのみ見られる	—			不明	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 70図2	軒棧瓦	厚さ1.8 面径8.4	瓦質 灰白色 やや軟質	黒色 一部銀化している	丸瓦部はケズリ	ナデ	瓦当に12個珠文と右に尾を巻く巴文	ナデ			不明	19c 20c前半	
1号溝黒色土層 70図3	軒丸瓦	厚さ2.0 面径9.2	瓦質 灰白色 精良 金雲母	黒色 一部銀化	ケズリ	ナデ	瓦当に右に尾を巻く巴文	ナデ			不明	19c 20c前半	
区外クリーク下層 70図4	軒平瓦	厚さ1.3 瓦当高5.0	瓦質 黒灰色 硬質	黒色 一部銀化	ナデ	ナデ	珠文帯中心巴文	ナデ			不明	19c 20c前半	
1号溝暗黒色土層 70図5	駝斗瓦	厚さ1.8 接合部厚さ3.2	瓦質 黒灰色 硬質 精良 金雲母入る	灰色	ナデ	受け部を接合し、接合部はナデ	ナデ	—			不明	19c中葉 20c前半	

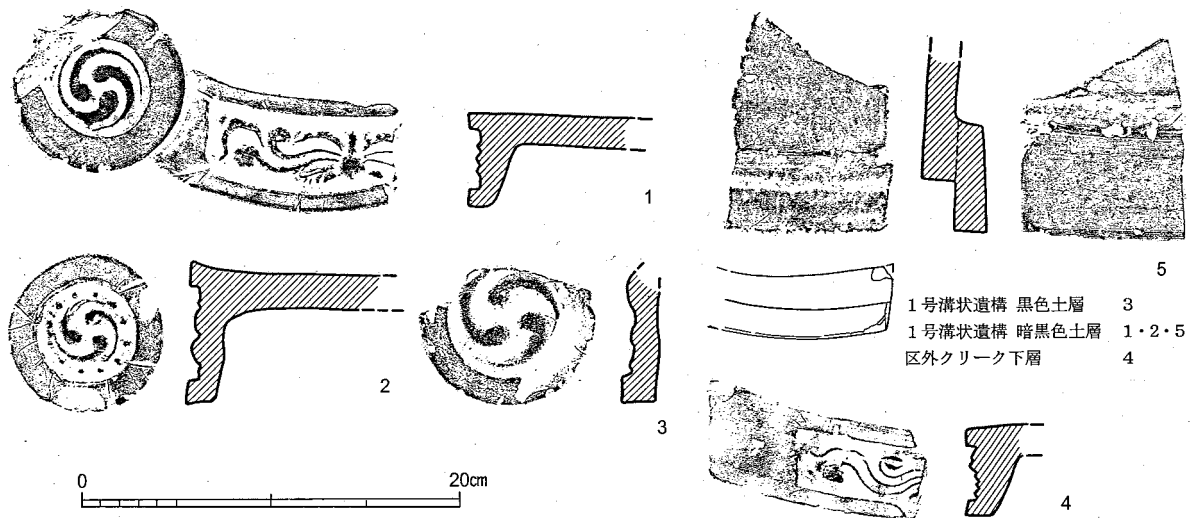
表18 3次調査出土瓦観察表



3号土坑
 1号溝状遺構 黑色土層 2~4・6
 2号溝状遺構 暗黑色土層 1

0 20cm

第69圖 3次調査出土瓦実測図3(1/4)

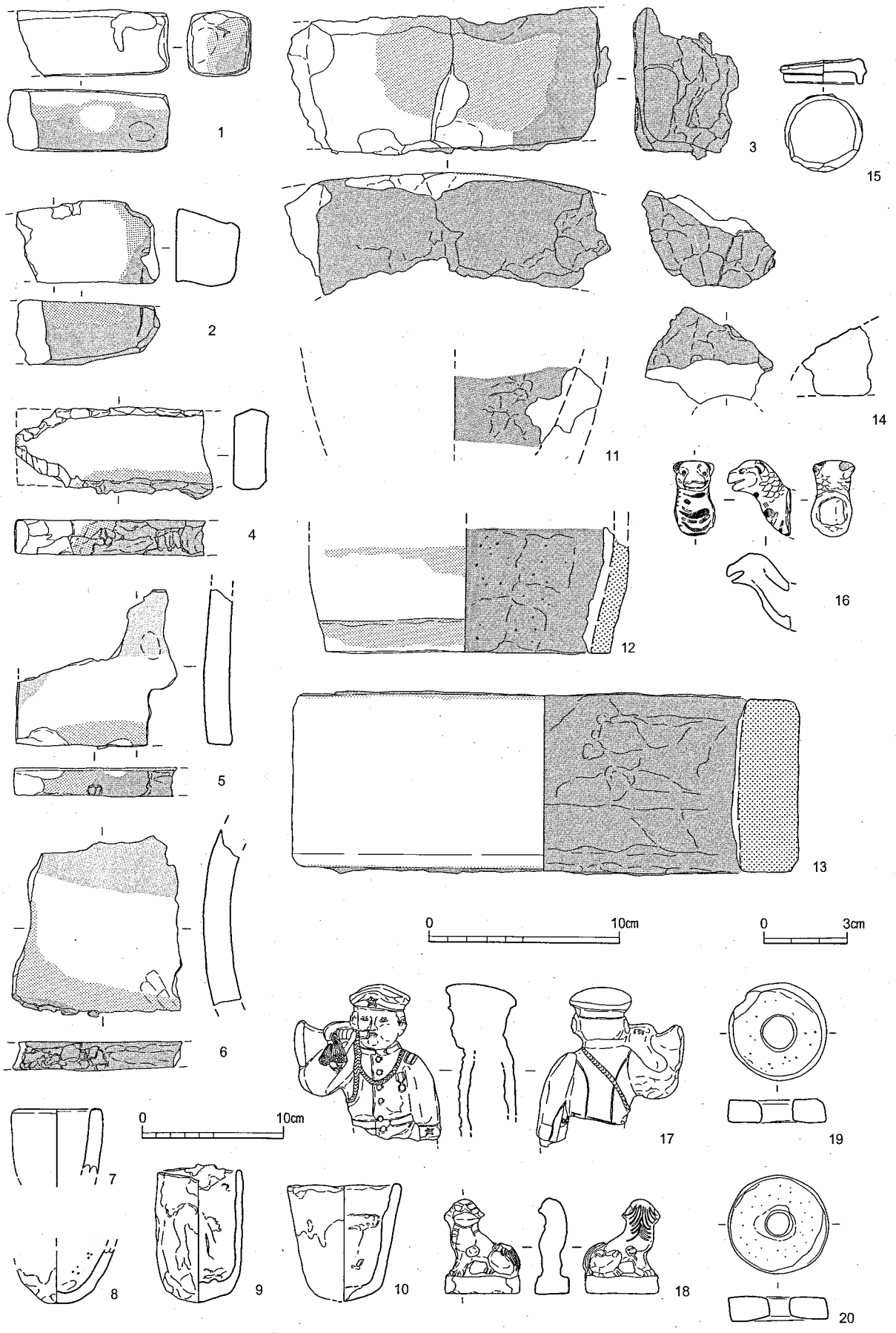


1号溝状遺構 黒色土層 3
 1号溝状遺構 暗黒色土層 1・2・5
 区外クレーク下層 4

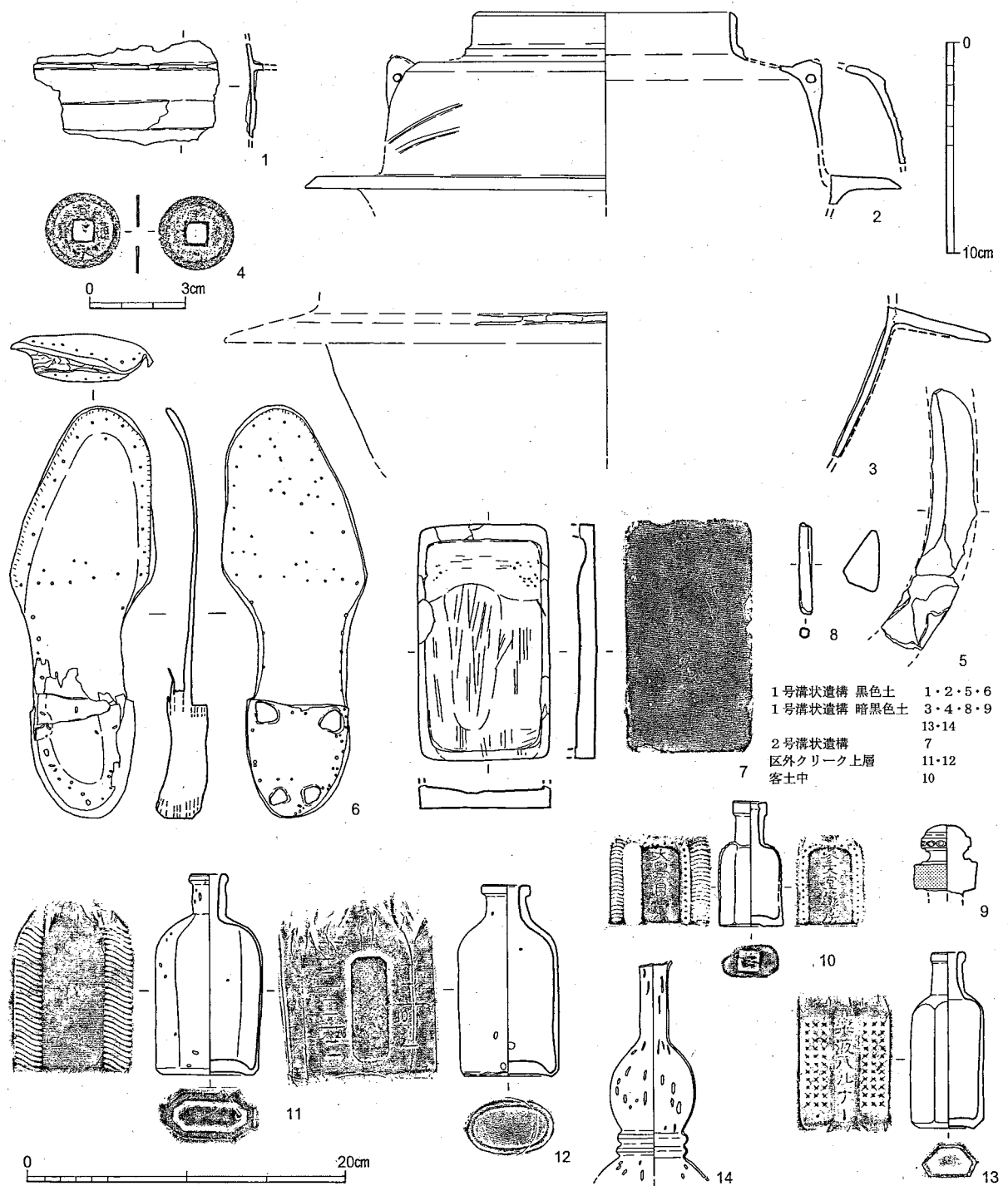
第70図 3次調査出土瓦実測図4(1/4)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	調整・成形・装飾技法	挿図番号	形状	法量(cm)	胎の種類	調整・成形・装飾技法
					図版番号	通称名			
7号土坑 7層 71図1	不明棒状土製品	長さ8.1 高さ3.2 幅3.5 重量95g	土師質 暗灰褐色～ぶい 黄橙色 混入 物少なく精良	小口部が最も焼けているが融着少ない 上面はナデ、他面は粗いナデ 在地系	1号溝黒 色土層 71図11 図版17	るつばか取 瓶	最大径(15.5) 重量114g	土師質 明黄褐～黒灰褐 色 軟質で粗致	外面は一部しか残っていない 内面 には付着物あり 傾き不明瞭 在地系
1号溝暗 黒色土層 71図2 図版17	不明棒状土製品	長さ7.6 高さ3.5 幅4.1 重量89g	土師質 黄橙灰色～暗灰 褐色 軟質 白 色粒子あり	上面は平坦面で、他面は粗いケズリ状 のナデで凹凸あり 上面を下にして成 形したもの、小口部は斜めに傾斜して いる 上面はほとんど焼けていない下 面が最も焼けているが融着少ない	1号溝暗 黒色土層 71図12 図版17	不明土製品	最大径(17.8) 口径(15.2) 重量85g	土師質 明黒灰～黄灰色 金雲母・白粒子 あり	外面はあまり焼けておらず、内面 には付着物が全面にあり暗灰色 下端 外面は何か挿入していたらしく器 面が荒れている 在地系
1号溝暗 黒色土層 71図3	不明棒状土製品	長さ10.2 高さ1.8 幅4.5 重量545g	瓦質 灰白色 焼し瓦 が2次焼成を受 けたもの	土師質大塚の口縁部が接合部で剥離した ものを利用して、やや湾曲し、上下面は 平滑にナデられており、上端面がよ く焼けており融着あり 在地系	1号溝暗 黒色土層 71図13 図版17	不明土製品	口径(27.0) 器高9.5 重量937g	土師質 黄灰褐色 白色 粒子など混入物 多い	上・下端部の外面は面取り 外面は 焼けていない 内面は付着物が全面 にあり暗灰色 上端面は融着がある が、下端にはないので、下は何か に接していたようだ 在地系
1号溝暗 黒色土層 71図4 図版17	不明棒状土製品	長さ10.2 高さ1.8 幅4.5 重量96g	瓦質 灰白色 焼し瓦 が2次焼成を受 けたもの	焼し瓦の平瓦片を打ち欠いて板状にし たものなので、やや湾曲し、上下面は 平滑にナデられている 打ち欠き後は 未調整 1側面のみが焼けているが、 融着は少ないその他は焼けが弱い	1号溝黒 色土層 71図14	ふいごの羽 口	復元不能 重量91g	土師質 黄白色 白色粒 子など混入物多 い	外面は付着物とガラス化のため調整 不明 内面には穿孔あり 在地系
1号溝暗 黒色土層 71図5 図版17	不明棒状土製品	長さ11.2 高さ2.0 幅11.1 重量183g	瓦質 灰白～黄橙色 焼し瓦が2次焼 成を受けたもの 精良	焼し瓦の平瓦片を利用したもので、や や湾曲し、上下面は平滑にナデられて いる 1側面のみが焼けているが、融 着は少ないその他は焼けが弱い 焼 けの強い面の対面に煤付着 在地系	1号溝暗 黒色土層 71図15	円板形磁器 製品	径4.4 重量22g	磁器(染付) 白色	外面に1条界線手描き呉須染付をも つ高台を打ち欠いたもの 肥前系
1号溝暗 黒色土層 71図6 図版17	不明棒状土製品	長さ12.0 高さ3.2 幅13.0 重量341g	瓦質 灰白～黄橙色 焼し瓦が2次焼 成を受けたもの 精良	焼し瓦の平瓦片を利用したもので、や や湾曲し、上下面は平滑にナデら れている 1側面のみが焼けており、 隅に融着が多い その他は焼けが弱 い 焼けの強い面の対面に煤付着	1号溝暗 黒色土層 71図16 図版17	磁器製人形 根付か	長さ3.4 高さ3.9 幅2.1 重量90g	磁器(白磁) 白色 ガラス質	型合わせではない型作りの獸形で欠 損部で接合 中空で口まで貫通 外 面に透明釉の上に黒・青・赤彩で上 絵付け 肥前系
1号溝黒 色土層 71図7	るつば	口径(4.8) 重量20g	土師質 黒灰～灰色 白色粒子多い 軟質	付着物のため調整不明 内面には付 着物なく、未使用品 外面は焼けて 一部ガラス化しており灰被りが見ら れるが、焼成時のものか 在地系	客土中 71図17 図版17	土人形 兵隊人形	長さ7.5 高さ8.2 幅4.8 重量90g	土師質 黄橙色 軟質 精良	表裏の型合わせ成形で、中空 合わ せ目は丁寧にナデ消されている 彩 色があったらしいが剥落している 軍服から昭和初期のものか 在地系
1号溝暗 黒色土層 71図8	るつば	底径1.2 重量30g	土師質 灰白色 白色粒子多い	丸底 付着物のため調整不明 外面 は焼けてガラス化内面は付着物あり 在地系	2号溝 71図18	土人形 狗犬	長さ4.1 高さ5.1 幅1.8 重量26g	土師質 黄橙色 軟質 精良 金雲母多 い	表裏の型合わせ成形 合わせ目残る 土台の長辺に窪みがあるが、表面は 摩滅して確認できない 在地系
1号溝黒 色土層 71図9 図版17	るつば	底径2.8 重量106g	土師質 完形のため胎不 明	丸底 付着物のため調整不明 内外 の口縁部に赤色の鉄塊が付着してい る 外面底部はガラス化している	1号溝暗 黒色土層 71図19	戸車	径52 孔径1.6 器高1.2	磁器(白磁) 白色 黒色粒子 あり	軸孔内面と側面に透明釉 両面にアルミナ付着 肥前系
1号溝暗 黒色土層 71図10	るつば	口径(6.0) 器高6.2 底径3.2 重量22g	土師質 灰白色 白色粒子多い	丸底 付着物のため調整不明 内面 口唇部から外面胴上半部に赤色の鉄 塊が付着している 外面底部はガラ ス化している 在地系	1号溝暗 黒色土層 71図20	戸車	径5.4 孔径1.1 器高1.3	磁器(白磁) 灰白色 黒色粒 子多い	軸孔内面と側面に透明釉 上面にアルミナ付着 肥前系

表19 3次調査出土土製品観察表



第71図 3次調査出土土製品実測図 (5・6は1/4、他は1/3)



第72図 3次調査出土金属・皮・ガラス製品実測図（4は1/2、6は1/4、他は1/3）

区外クレーク出土遺物

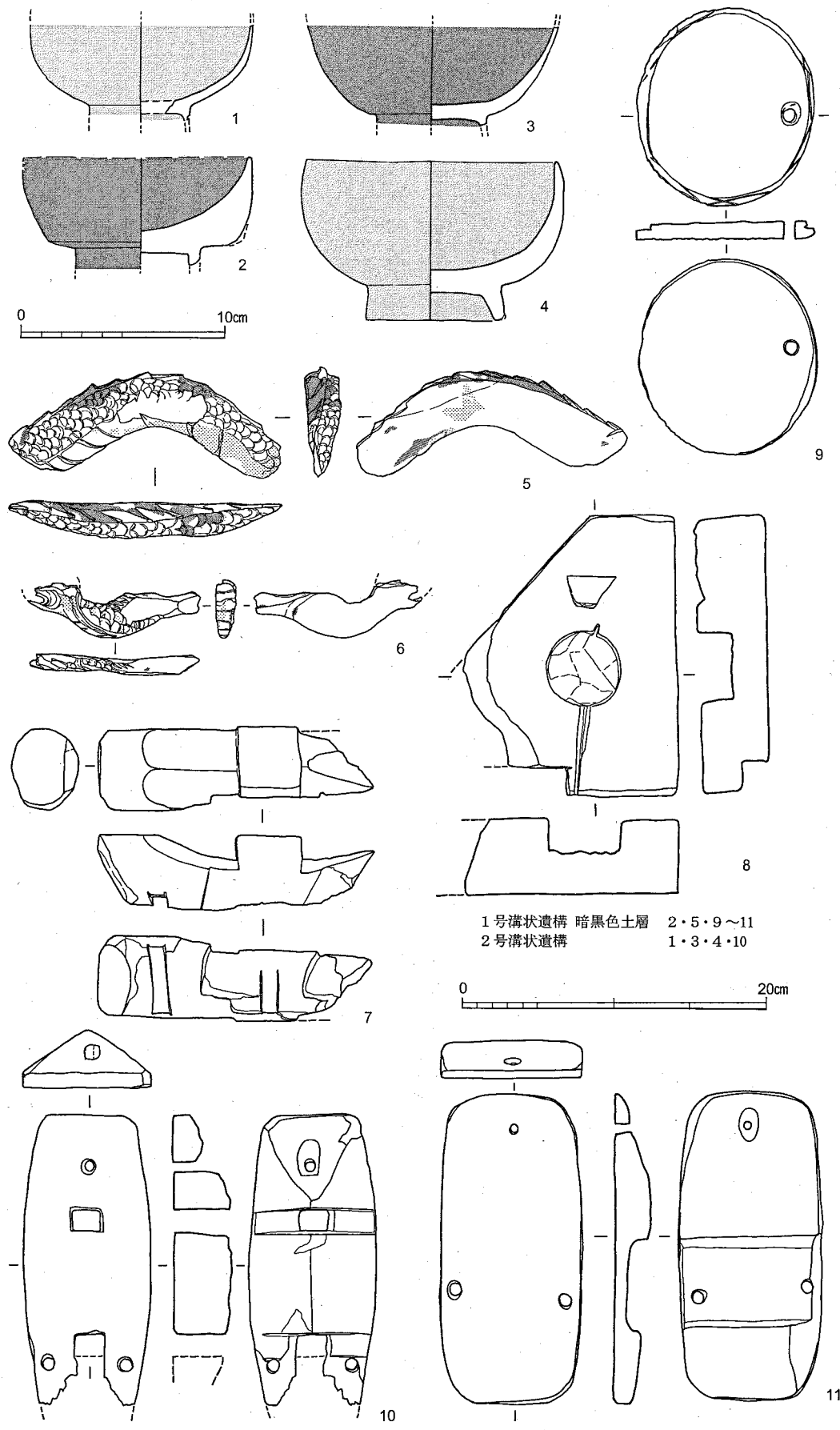
3次調査では、1号溝状遺構は時間的制約と現行クレーク腰壁崩落の危険性から、調査区内を完全に掘り下げることはできなかった。そのため、この現行クレークの掘削工事の際に、可能な限り遺物を回収したものが区外クレーク出土遺物である。土層を正確に把握していないが、おおむね上層は1号溝状遺構暗黒色土層に、下層は黒色土層の下位に対応するようだ。

遺構名	器種	法量(cm)	調整・成形・装飾技法	遺構名	器種	法量(cm)	調整・成形・装飾技法
挿図番号	形状	()は復元値		挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名			図版番号	通称名		
1号溝黒色土層 72図1 図版17	不明鉄製品 羽釜か	復元不能 重量53g	胴下位に帯状突起があり、鐔下がほぼ垂直であることから羽釜と考えられる 铸造品か	1号溝暗黒色土層 73図8 図版17	建築材	長さ18.5 高さ4.5 幅さ12.2 円坑径4.8	側面に枘穴があり、挿し込む材で、一角を斜めにカットしているので建物の角部に設置したものの 板目
1号溝 72図2 図版17	湯釜	口径(12.8) 鐔径(28.2) 最大胴径(20.6) 重量197g	図上接合で復元しており、各部位は接合しない 胴部には二本突線による陽刻があり、なんらかの文様を構成していたであろう 铸造品	1号溝 73図9 図版17	曲げ物 底板	径13.0 厚さ1.2	楕円形を呈しているが乾燥で縮んだため为本業円形 側板を装着する段は直線のカットを巡らせている 板目
1号溝暗黒色土層 72図3	不明鉄製品 羽釜か	鐔径(36.2) 最大胴径(27.6) 重量409g	鐔が長く胴下位が深いことから羽釜と考えられる 铸造品か	2号溝下層 73図10 図版17	差歯下駄 露卯下駄	長さ19.2 幅8.6 厚さ3.8	底面は襷をもつ 板目
1号溝 72図4 図版17	銅銭	径7.2 孔径2.1 器高1.4 重量2.9g	新寛永 しんじょうの点位置が低いことから俗称「不旧手」と呼ばれるものに比定される 1726年(享保11)年か1736(元文元)年初铸造 摩滅して薄くなっている	1号溝暗黒色土層 73図11 図版17	連歯下駄 ぼっくり	口径20.5 幅9.4 厚さ2.6	削り込み部の角は丸みをもつ 踵部は擦り減っている 板目
1号溝 72図5 図版17	不明鉄製品	長さ6.5 幅2.3 厚さ1.7 重量143g	弧状で断面直角三角形を呈する 剥離した痕跡はないが何らかの部位か 弧状なので五徳の脚がつかない部分か	1号溝暗黒色土層 74図1 図版17	連歯下駄 ぼっくり	長さ16.7 幅9.2 厚さ2.5	削り込み部の角は丸みをもつ 踵部はやや擦り減っている 子供用 下地は柿洪で、赤漆塗り 褐色の斜め2本線の文様あり 板目
1号溝 72図6 図版17	皮靴	長さ26.2 幅8.7 厚さ3.2 重量134.8g	皮製 細線は径2ミリの釘で底から打ちつけたのち縫合している 踵部は上下それぞれ5枚皮を重ねてU字形の釘で留め、径1.5cmほどの紙で留めている	1号溝暗黒色土層 74図2 図版17	差歯下駄 陰卯下駄	長さ13.2 幅7.7 厚さ3.6	歯はやや擦り減っている 子供用 下地は柿洪で、赤漆塗り 暗赤色の花卉文様あり 板目
2号溝 72図7 図版17	硯	長さ11.1 幅6.1 厚さ1.1 重量142.3g	黒灰色の頁岩製 縁部を欠損後研磨して平滑にして使用している 表面に折れ線などの沈線による文様がある	1号溝黒色土層 74図3	連歯下駄	長さ20.0 幅9.6 厚さ2.2	歯は後歯が擦り減っている 板目
1号溝 72図8 図版17	石筆	径0.5 長さ4.4 重量4.7g	灰白色の凝灰岩製 側面は研磨されて平滑先端が使用により斜めの面をもつ	1号溝黒色土層 74図4	連歯下駄	長さ17.0 幅8.7 厚さ2.2	歯は後歯が擦り減っている 板目
1号溝暗黒色土層 72図9	小瓶蓋 差し込み栓 香水瓶	最大径3.0 重量35.8g	透明ガラス 気泡なし 铸造らしくつまみ部に楕円文が印刻されている スリガラスがある	1号溝暗黒色土層 74図5 図版17	連歯下駄 ぼっくり	長さ19.6 幅9.7 厚さ2.0	下地の柿洪と赤漆が 目孔に一部残る 板目
区外クリーク上層 72図10 図版17	小瓶 差し込み栓 目薬瓶	口径2.7 底径4.6 器高5.0 重量25.1g	紺色ガラス 気泡あり 1面に「大目薬」、裏面に「参天堂薬房」と陽刻で铸造されている 上げ底で中央に不明文様の刻印あり 口唇部はカット	1号溝暗黒色土層 74図6	連歯下駄	長さ21.4 幅9.0 厚さ2.5	歯は後歯が擦り減っている 板目
区外クリーク上層 72図11 図版17	小瓶 差し込み栓	口径1.8 長軸4.8短軸2.7 器高4.2 重量63.9g	透明ガラス 気泡あり 型合わせ铸造成形 断面長六角形で両面に連続波状文が陽刻で铸造されている 上げ底	1号溝暗黒色土層 74図7 図版17	連歯下駄 ぼっくり	長さ18.5 幅9.4 厚さ1.8	歯は後歯が擦り減っている 四角内に焼き印があるが摩滅のため不明 板目
区外クリーク上層 72図12 図版17	小瓶 差し込み栓 薬瓶	口径2.3 長軸4.8短軸2.7 器高3.5 重量78.7g	緑青色ガラス 気泡あり 型合わせ铸造成形 断面長楕円形で1面に「20・30・40」とメモリが陽刻で铸造されており、中央に紙ラベルを貼る場所がある	1号溝暗黒色土層 74図8 図版17	連歯下駄 ぼっくり	長さ20.4 幅9.4 厚さ2.3	歯は前後とも擦り減っている 板目
1号溝暗黒色土層 72図13 図版17	小瓶 差し込み栓 薬瓶	口径1.6 長さ3.5 幅1.7 器高3.4 重量31.3g	緑ガラス 気泡なし 「薬液ハルナー」と陽刻で铸造されており、文字部分の幅が狭くした断面変形六角形 斜めの型合わせで合わせ目の残る	1号溝黒色土層 75図1	連歯下駄	長さ14.8 幅9.2 厚さ2.3	歯は前歯が擦り減っている 子供用 板目
1号溝暗黒色土層 72図14	小瓶 差し込み栓 ニッキ水瓶	口径1.6 最大径5.1 重量25.2g	青緑ガラス 気泡あり 口縁部の切り離し時の細かい打ち欠きが残る	1号溝暗黒色土層 75図2	連歯下駄	長さ16.7 幅9.5 厚さ3.2	歯は前歯の片側が擦り減っており、右足用か 板目
2号溝 73図1 図版17	中飯碗 丸形	最大径(11.0) 高台径(5.0)	下地 柿洪 全面 漆 無文 柁目	1号溝黒色土層 75図3	差歯下駄 陰卯下駄	長さ17.4 幅6.8 厚さ1.9	歯はない 孔部に欠損している 板目
1号溝暗黒色土層 73図2 図版17	中飯碗 腰張形	最大径(11.0) 高台径(5.8)	下地 柿洪 全面黒漆 無文 柁目	1号溝黒色土層 75図4 図版17	連歯下駄 ぼっくり	長さ15.9 幅8.4 厚さ1.8	裏に横線の削り込み 黒・赤漆あり 下地は柿洪か 子供用 板目
2号溝下層 73図3	中飯碗 丸形	最大径(12.6) 高台径(5.6)	下地 柿洪 全面黒漆 無文 柁目	1号溝黒色土層 75図5	連歯下駄	長さ20.4 幅9.2 厚さ2.0	歯は後歯が擦り減って段差がなくなっている 板目
2号溝下層 73図4 図版17	中飯碗 丸腰形	口径12.4 高台径6.8 器高8.0	下地 柿洪 全面赤漆 無文 柁目	1号溝暗黒色土層 75図6 図版17	連歯下駄	長さ19.2 幅9.0 厚さ2.3	歯が失われているが使用したらしく、歯の下面と下駄本体の裏に砂がめり込んでいる 板目
1号溝暗黒色土層 73図5 図版17	不明木製品 龍の彫刻	長さ13.3 幅2.8 厚さ1.7	黒漆を下地に塗って金泥を塗るか被せている 本来全面あつたが剥落している 柁目	1号溝暗黒色土層 75図7 図版17	連歯下駄	長さ17.7 幅9.1 厚さ1.5	歯は後歯が擦り減って段差がなくなっている 板目
1号溝暗黒色土層 73図6 図版17	不明木製品 龍の彫刻	長さ8.7 幅1.9 厚さ0.7	黒漆を下地に塗って金泥を塗るか被せている 本来全面あつたが剥落している 柁目	1号溝暗黒色土層 75図8	連歯下駄	長さ18.9 幅9.3 厚さ2.3	鼻緒孔は擦れて細長くなっている 板目
1号溝暗黒色土層 73図7 図版17	不明木製品 きじ車か	長さ18.1 高さ5.0 厚さ5.5	漆・彩色なし 下面に方形のホソ状の切り込みがある 柁目				

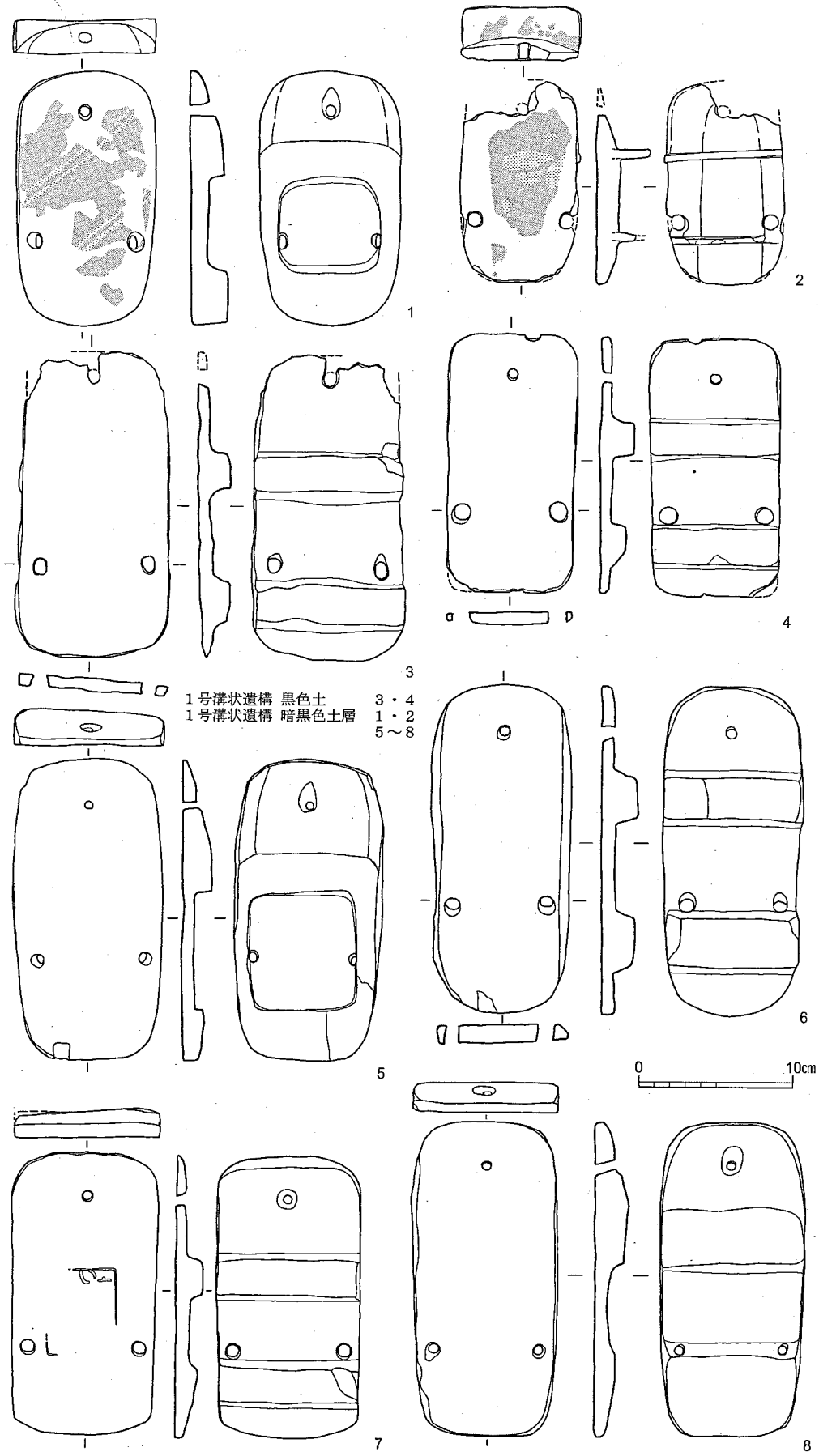
表20 3次調査出土金属・皮・石・ガラス・木製品観察表

IV. 小 結

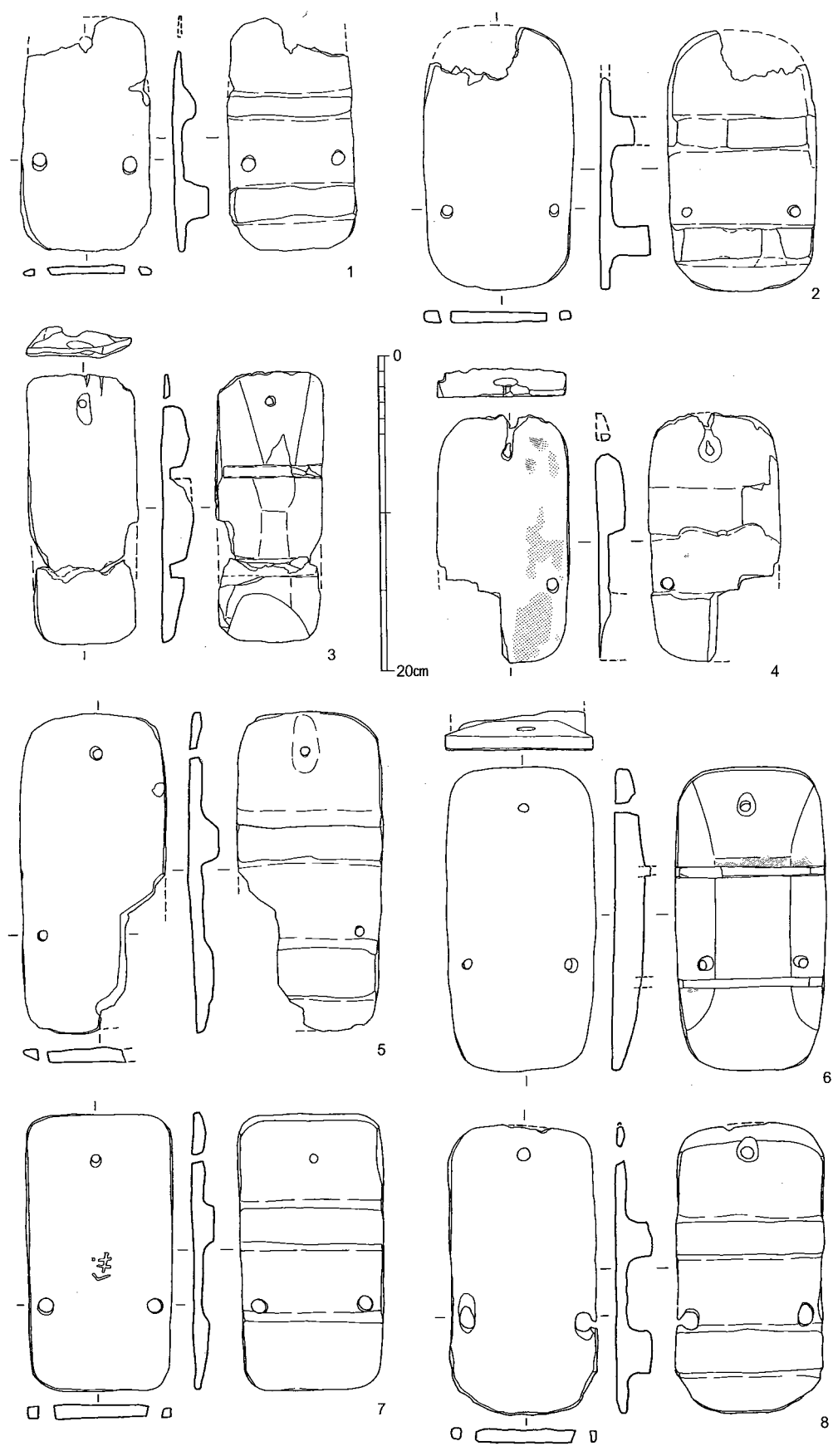
2・3次調査区においては、矢加部町屋敷遺跡の西端の様相を知ることができた。現行の調査区西側のクリークより西は試掘調査の結果、遺構は検出されておらず、このクリークが集落の西境であった。未報告であるが、2・3次調査区は東側の調査区に比べて遺構が希薄であるかわりに、クリークから引き込まれる大きな溝が入っていたため、遺構数に比べて遺物量が多くなった。



第73図 3次調査出土木製品実測図1(1~6は1/3、他は1/4)



第74図 3次調査出土木製品実測図2(1/4)



第75図 3次調査出土木製品実測図3 (1/4)

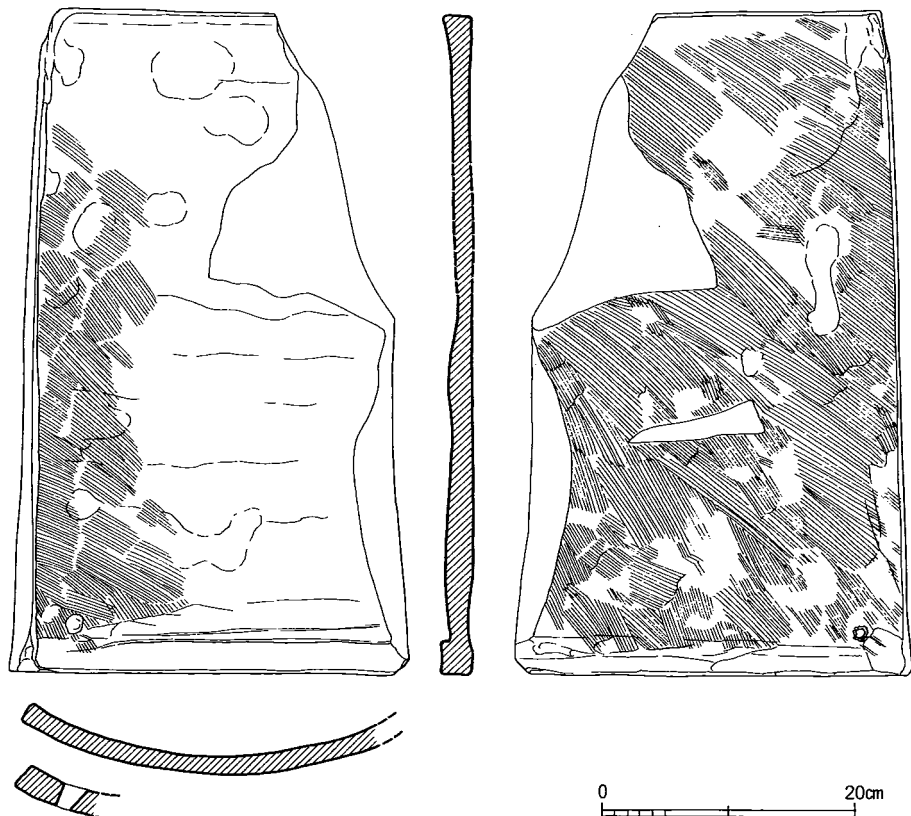
また、建物跡が検出されなかったことも、現在の集落の景観からみられるように、このクリーク沿いには建物裏手の空閑地が広がっていたのだろう。2次調査の2号溝からはクリークの水を引き込んで生活に利用していた様子がうかがわれる。

出土遺物のほとんどは陶磁器であるが、意識的に福岡県内産、特に筑後産の土器・陶磁器を掲載しているため、掲載資料だけでは数量的な分析には適さない。陶磁器の約9割は肥前産で、土師質や瓦質土器は在地産がほとんどを占めるようだ。これは、柳川地域は有明海の水運を利用することができたため、陸路で輸送しなければならない高取・小石原焼はシェアを伸ばせなかったためであろう。筑後地域で土師質の土器窯が多いのは良質な粘土が得られるためで、土師質や瓦質土器は在地産がほとんどを占めるのもそのためだろう。

土師質瓦について

本遺跡からは、筑後地域に特有の土師質瓦が多数出土している。土師質瓦の形態は形態・調整方法・色調・胎土の質などから、大きく4種類に分けられる。1つは、2・3次調査区内から出土しなかったが、「水田の赤瓦」と呼ばれるもの。2つめは水田の赤瓦に近い黒いハケメ調整の瓦、3つめは下端部が玉縁状に肥厚するものだが、2・3についてはまだ全体のわかる資料を得ていない。4つめの基部に水返しをもつものは、4次調査で全体の形がわかる資料(76図1)を得ることができたので、ここではこれについてまとめたい。

下に掲載した4次調査出土資料と同じ特徴をもつものは、本書の32図2・3・5・6・7・9、69図1である。色調は茶灰褐色を呈し、ハケ調整を残す1.5cmほど厚さのもので、下部はやや厚い程度で、基部に肥厚した水返しがつく。1枚つくりで、側面は凸面から途中まで裁断し、折り取ったあと、簡単にナデるか、削るものが多い。凹面基部の水返しの上に漆喰状の白色粘土塊が付着しており、ここに別の個体の下端部が乗ることがわかる。



第76図 土師質瓦実測図(1/6)

江戸時代の庶民の家では瓦葺きは禁止されていたはずであり、実際、全面葺くには出土量が少なすぎる。また、燻し瓦とは厚さや大きさが異なるので谷瓦として混用できない。ただし、本遺跡が町屋であることから、火災時の延焼防止のため、軒先だけ質の落ちる安価な瓦を葺いた可能性も考えられる。しかし、平瓦しか見られず、平瓦を交互に葺くには安定性を高めるため漆喰を多用したであろうから、付着していないのは不自然である。

以上のことから現段階で考え得るのは、写真1・2のような雨樋として使用される瓦である。いわゆる谷瓦とは異なるので「樋瓦」とでもいうべきであろうか。屋内であれば強度上も外見上も軟質な土師質でもよく、縦一列に並べるだけであれば、漆喰状の付着物の位置や出土量とも整合する。

しかもこのような雨樋を必要とする「漏斗造り」という屋根は筑後地域沿岸部に多く、分布上も一致する。また、写真に残る時期までこうした家屋が残っていたとすれば、近代の燻し瓦に混じる点も理解することができる。

土師質瓦にも多くの種類があり、水返しをもつのはこのタイプのみなので、すべてが雨樋といえないが、検討材料にはなるものと思われる。今後の資料の増加に期待したい。



写真1 柳川市旧十二丁松藤キヨ氏宅 漏斗谷の樋吐出口



写真2 同上 漏斗谷の樋を下から見る

写真1・2『福岡県の民家』より

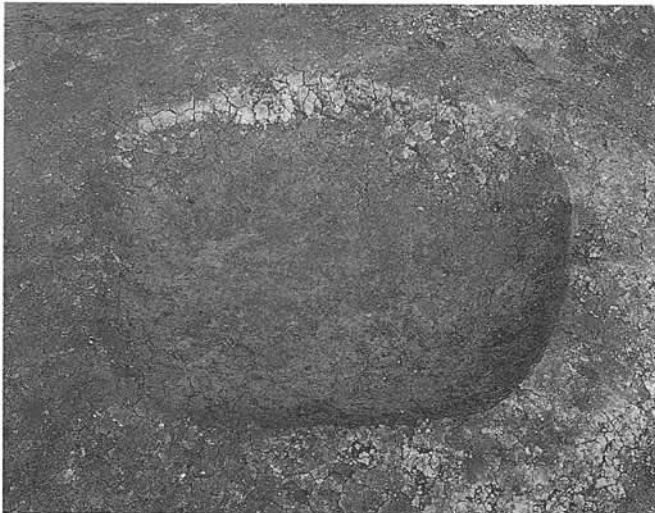
主要な参考文献

- 江戸遺跡研究会1993『遺跡に見る幕末から明治』江戸遺跡研究会第6回大会発表要旨
 江戸遺跡研究会2001『図説江戸考古学研究事典』
 大分県教育委員会・竹田市教育委員会2001『大分県竹田市稲葉川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 四山社製糸工場跡・旧古町橋跡吉田家屋敷跡・武藤家屋敷跡・上家屋敷跡・由学館跡』大分県文化財調査報告書第124集
 大分県教育委員会2000『炭竈遺跡』大分県文化財調査報告書第110集
 大橋康二『考古学ライブラリー-55肥前陶磁』ニューサイエンス社
 朝北九州市教育文化事業団1993『大手町遺跡』北九州市文化財調査報告書第133集
 朝北九州市教育文化事業団1994『京町遺跡3』北九州市文化財調査報告書第147集
 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
 久留米市教育委員会1995『久留米城外郭 佐々木家屋敷跡』久留米市文化財調査報告書第96集
 久留米市教育委員会1999『平成10年度 久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第150集
 久留米市教育委員会1996『久留米城両替町遺跡』久留米市文化財調査報告書第116集
 久留米市教育委員会2006『京隈侍屋敷遺跡』久留米市文化財調査報告書第220集
 佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連合会1999『肥前古陶磁窯跡基礎調査・基本方針策定報告書』
 佐賀県立九州陶磁文化館1992『福岡の陶磁展』
 佐賀県立九州陶磁文化館2006『近現代肥前陶磁銘款集』
 塩田町教育委員会『塩田のやきもの 明治/大正/昭和 第2回特別展』
 新宿区厚生部遺跡調査会1992『細工町遺跡』
 筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡群』筑後市文化財調査報告書第63集
 福岡県教育委員会1972『福岡県の民家 民家緊急調査報告書』
 福岡県教育委員会1992『吉塚本町遺跡』福岡県文化財調査報告書第97集
 福岡県教育委員会2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
 福岡県教育委員会2002『堂畑遺跡Ⅰ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第17集
 福岡県教育委員会2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集
 福岡県教育委員会2005『日詰遺跡Ⅱ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第22集
 柳川市2002『新柳川明証図会』柳川市史特別編

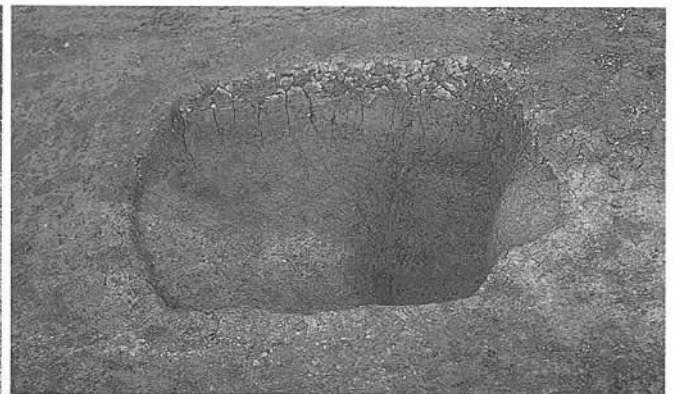
圖 版



1. 2次調査区全景（北東から）



2. 1号土坑（西から）



4. 2号土坑（南から）



3. 1号土坑土層断面（西から）



5. 2号土坑木皮出土状態（北から）



7. 3号土坑（東から）



6. 2号土坑土層断面（南西から）



1. 4号土坑 (東から)



4. 6号土坑 (北西から)



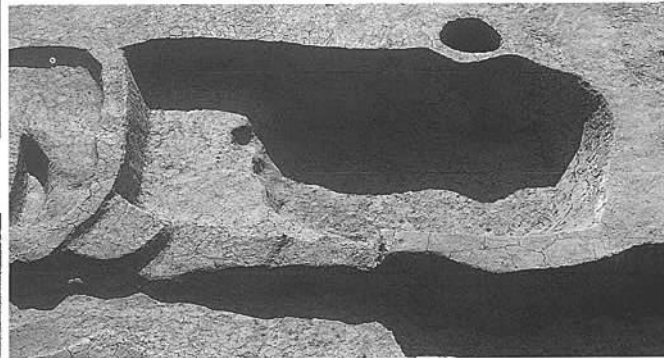
2. 4号土坑土層断面 (南西から)



5. 6号土坑土層断面 (北西から)



3. 5号土坑 (西から)



6. 7号土坑 (北東から)



7. 7号土坑土層断面 (北西から)



8. 9号土坑 (南東から)



9. 1号大土坑 (南西から)

1. 2・3号大土坑（南西から）



2. 3号大土坑（南西から）



3. 3号大土坑漆碗出土状態
（北から）



4. 1号溝状遺構土層断面
（北西から）





1. 2号溝状遺構（西から）



2. 2号溝状遺構テラス状遺構（北から）



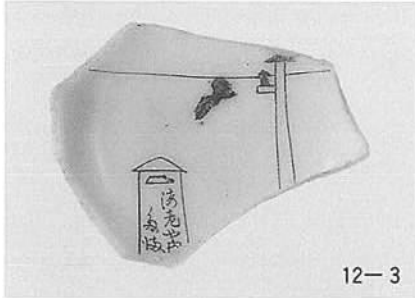
3. 2号溝状遺構土層断面（北西から）



4. 5号溝状遺構土層断面（南西から）



12-1



12-3



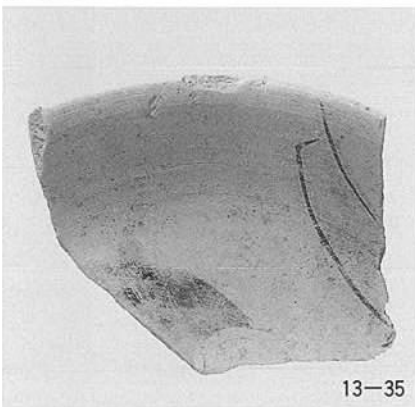
12-16



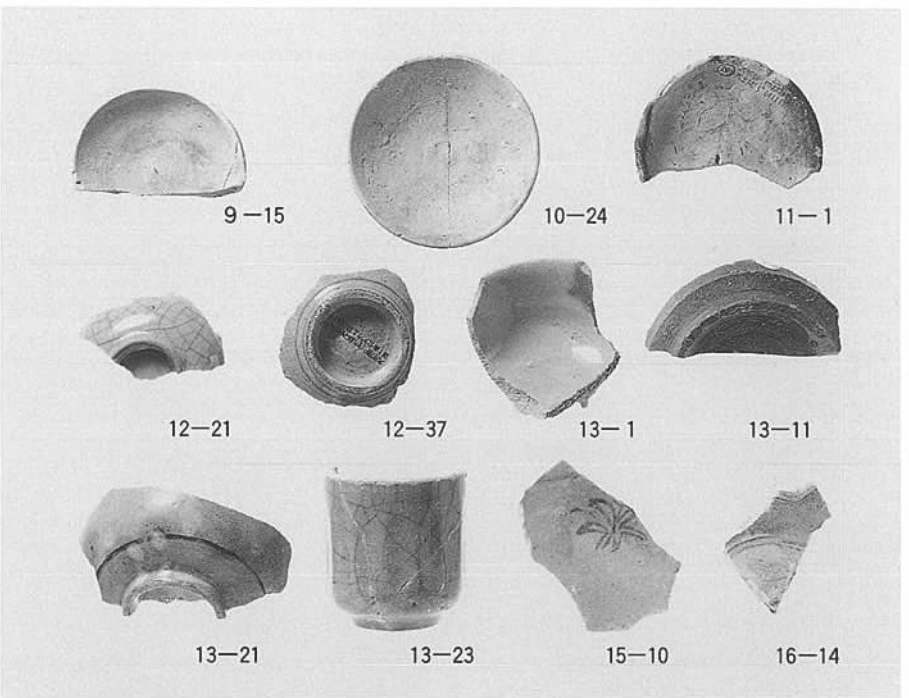
12-33



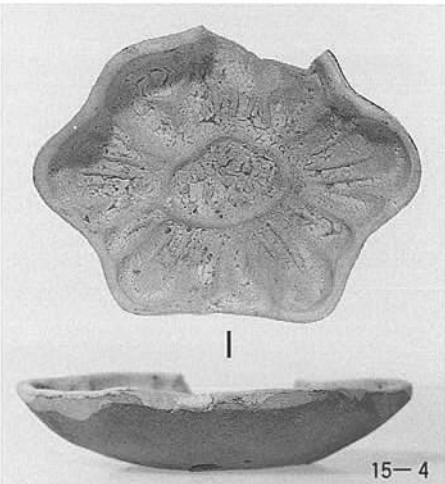
13-18



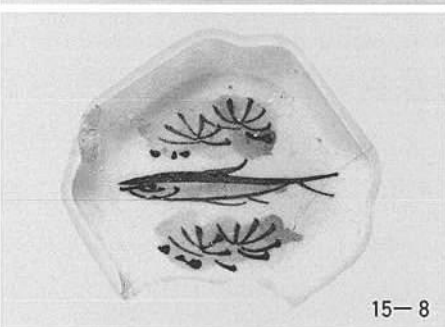
13-35



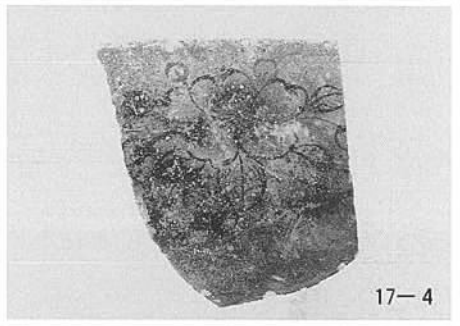
15-2



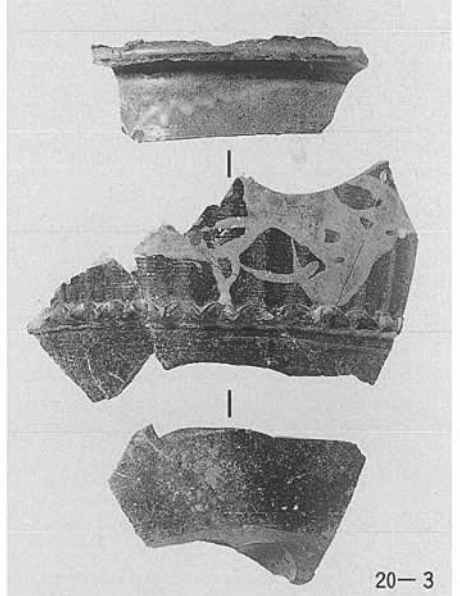
15-4



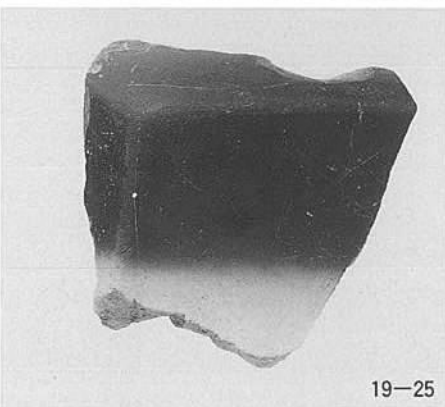
15-8



17-4



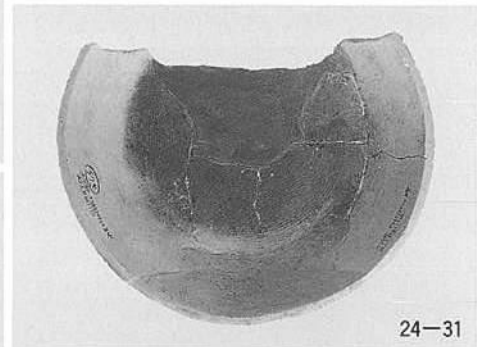
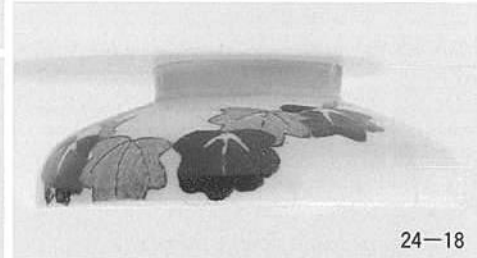
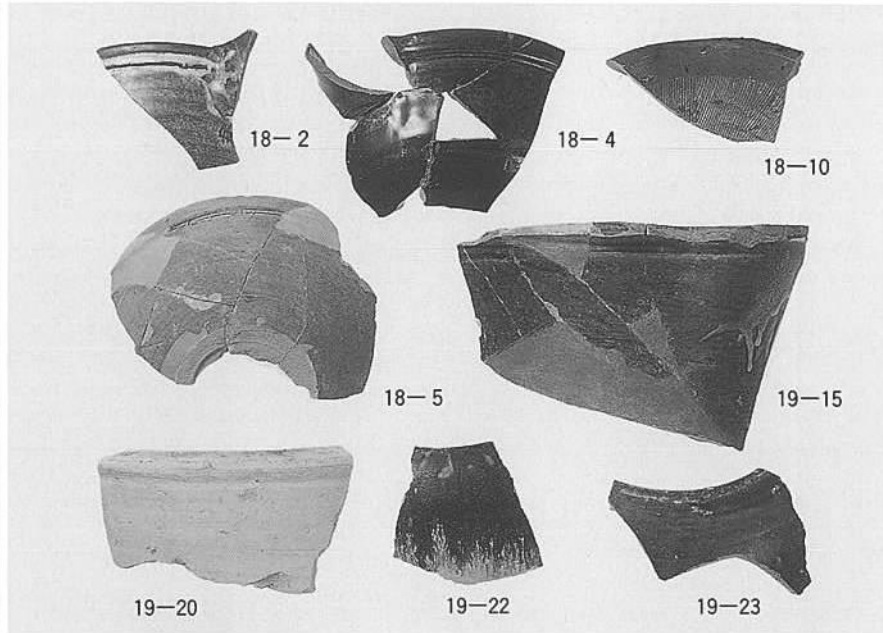
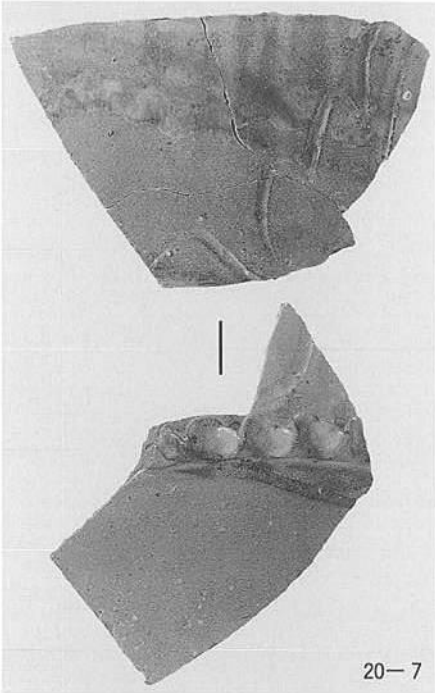
20-3

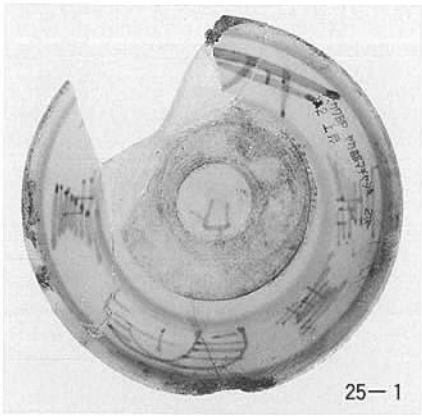


19-25

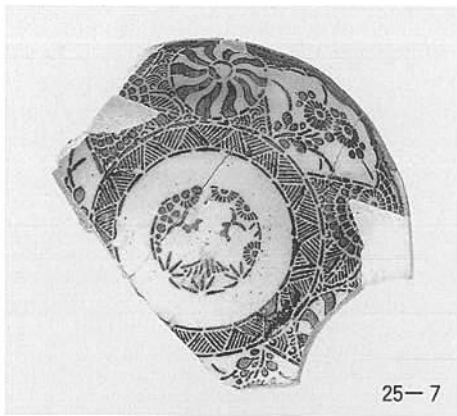


21-5

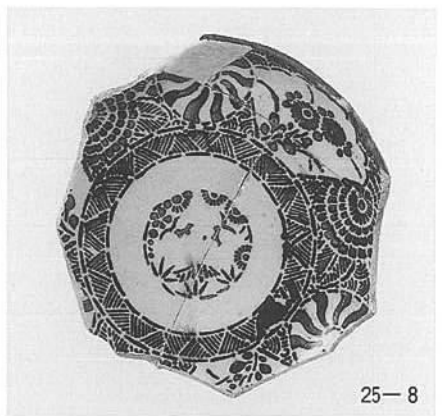




25-1



25-7



25-8



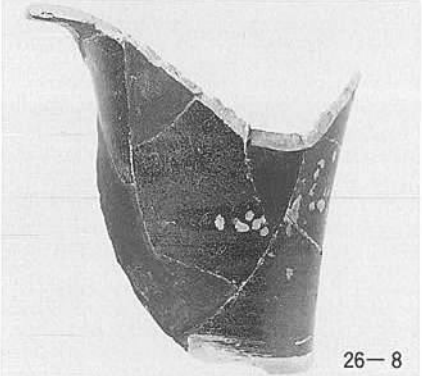
25-3



25-9



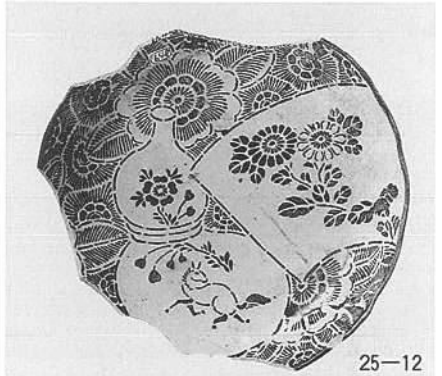
25-10



26-8



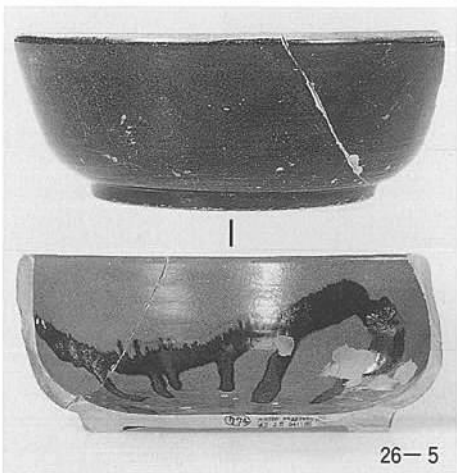
25-11



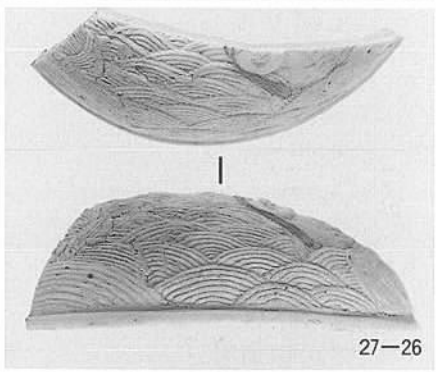
25-12



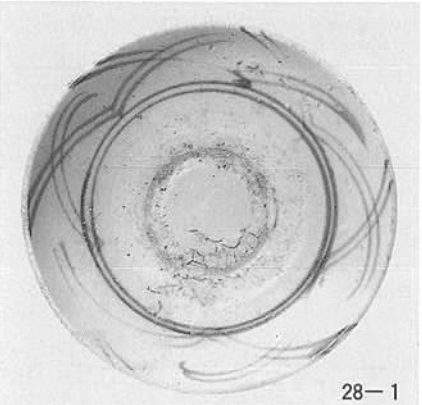
26-9



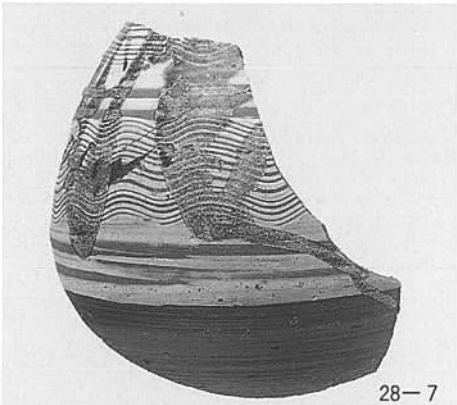
26-5



27-26



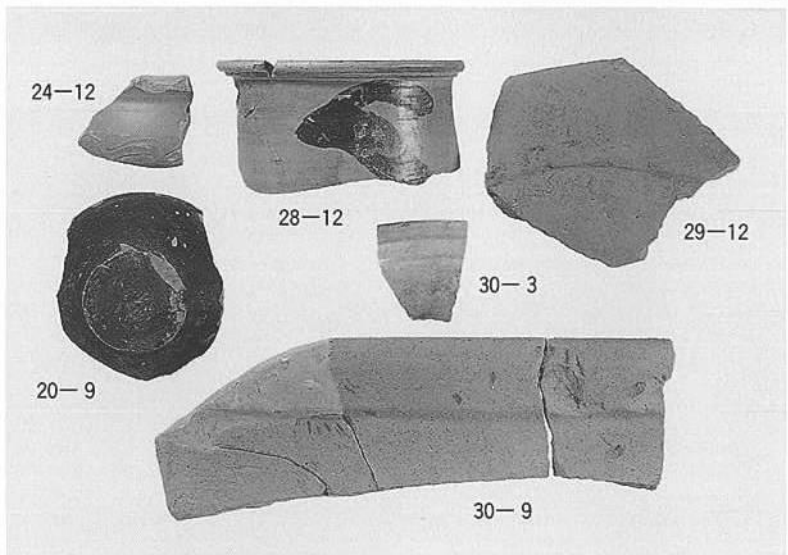
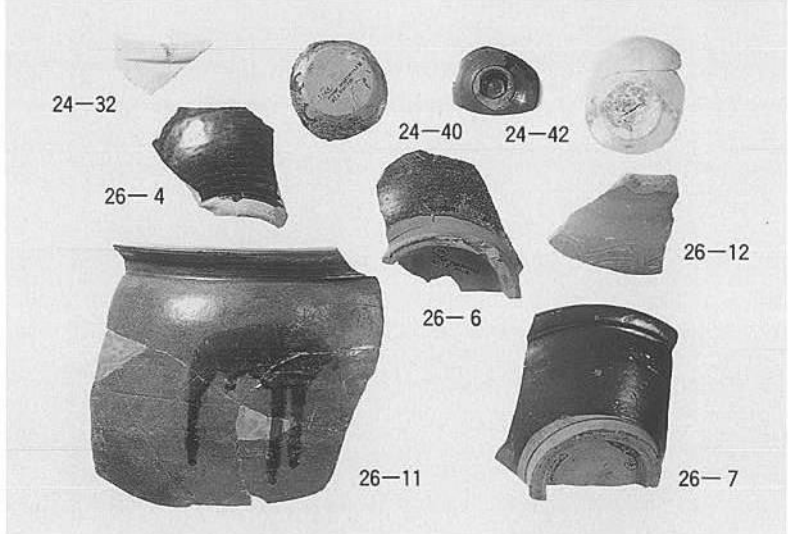
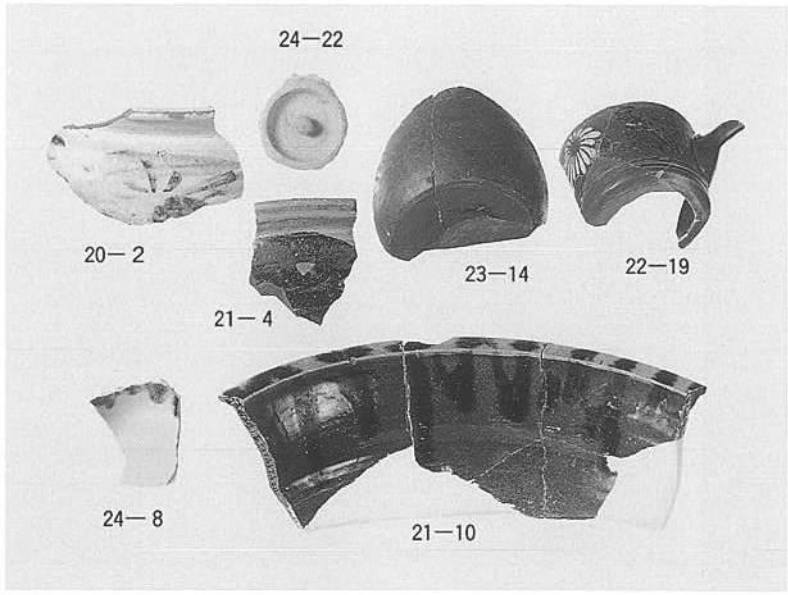
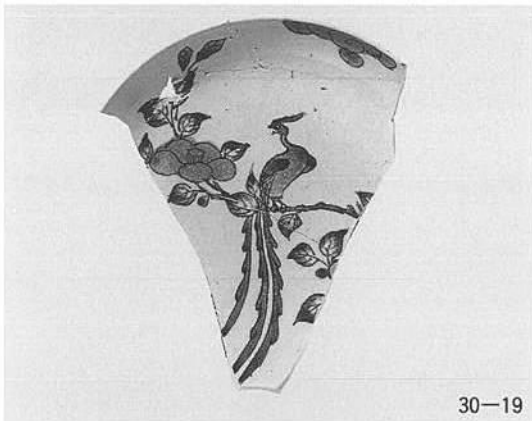
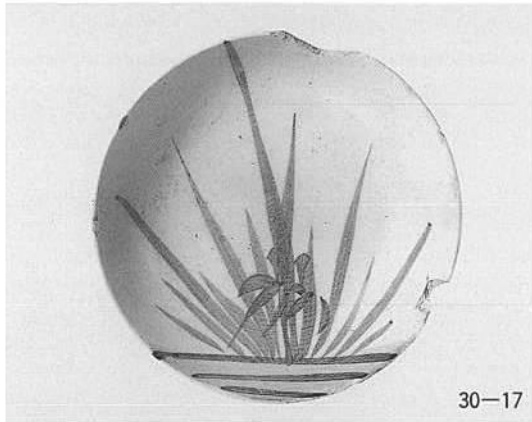
28-1

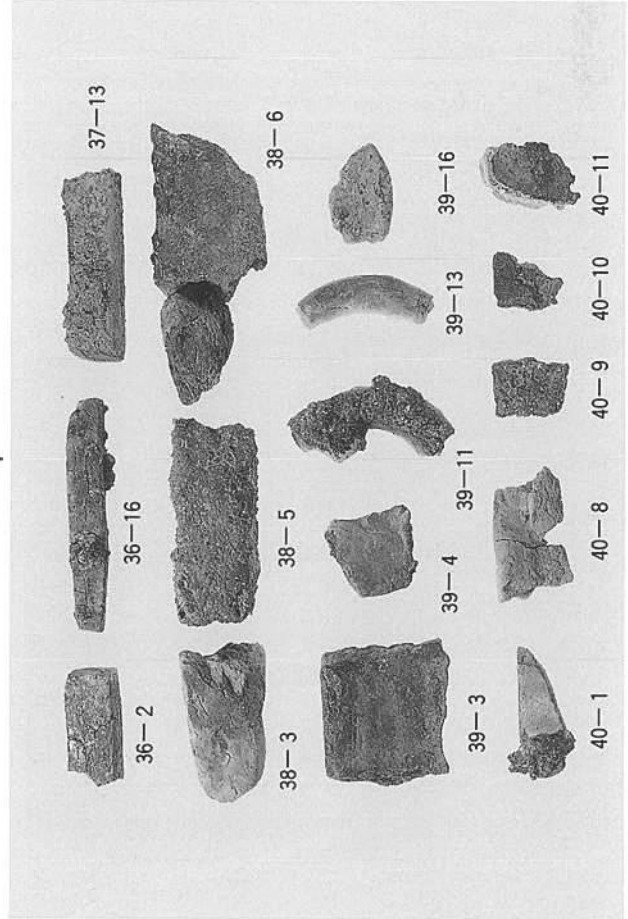
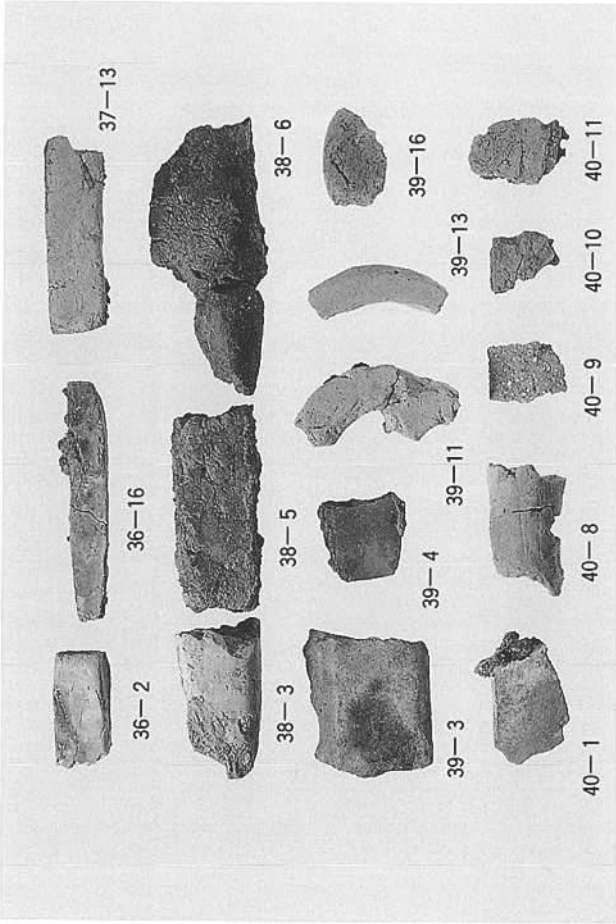


28-7

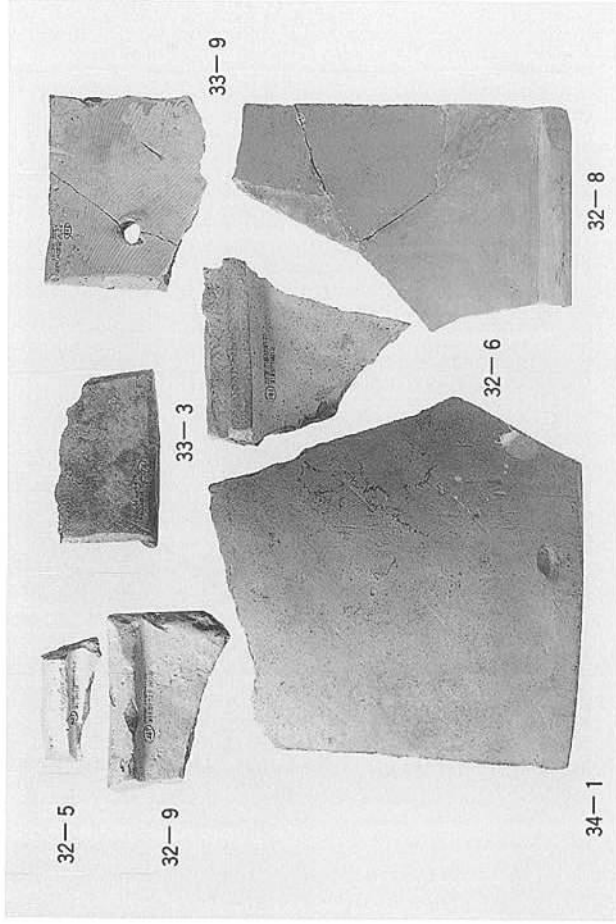


30-12

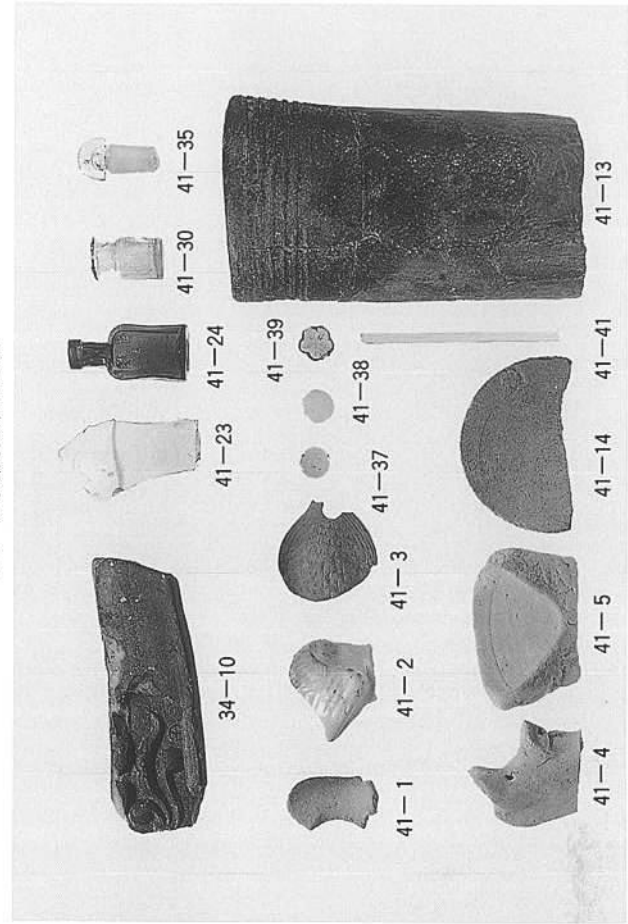




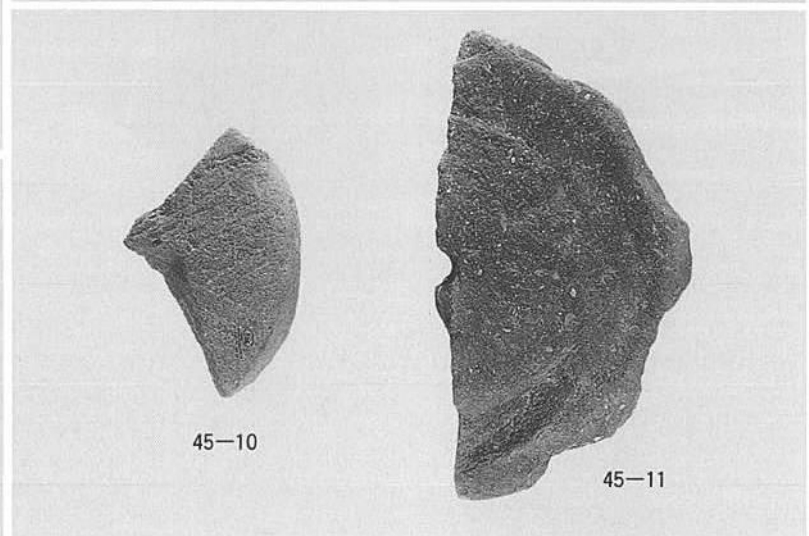
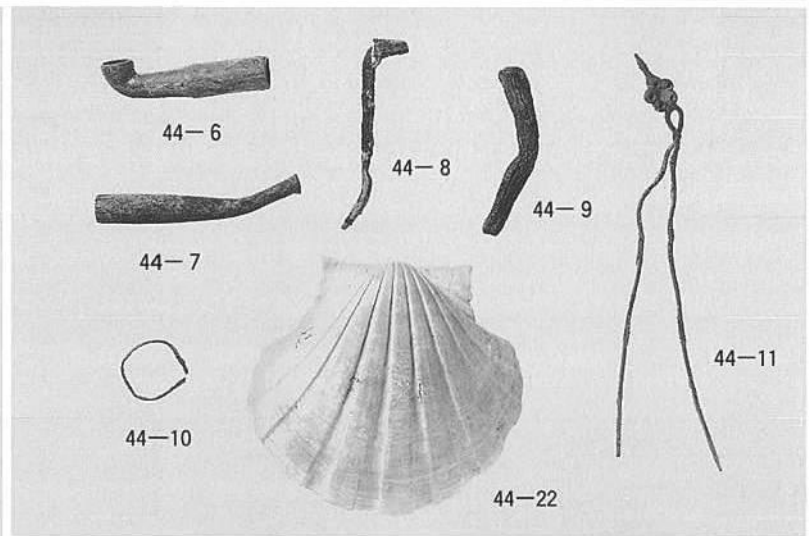
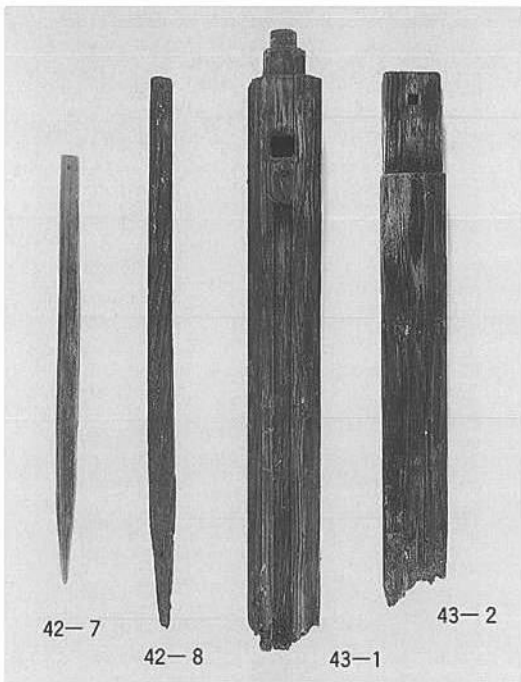
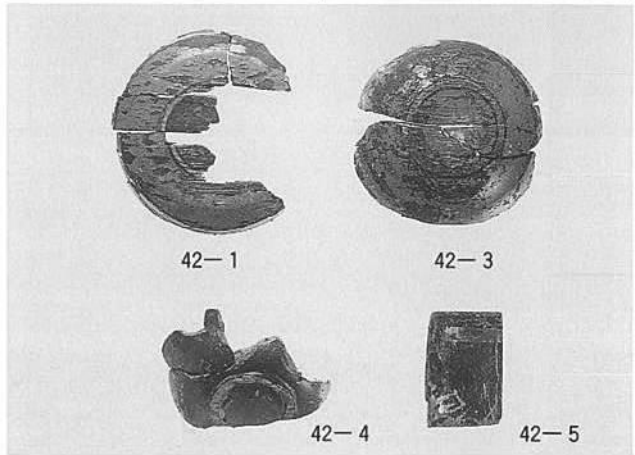
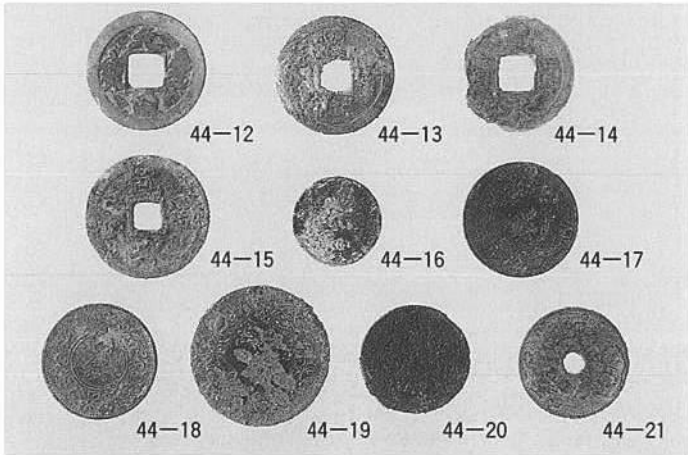
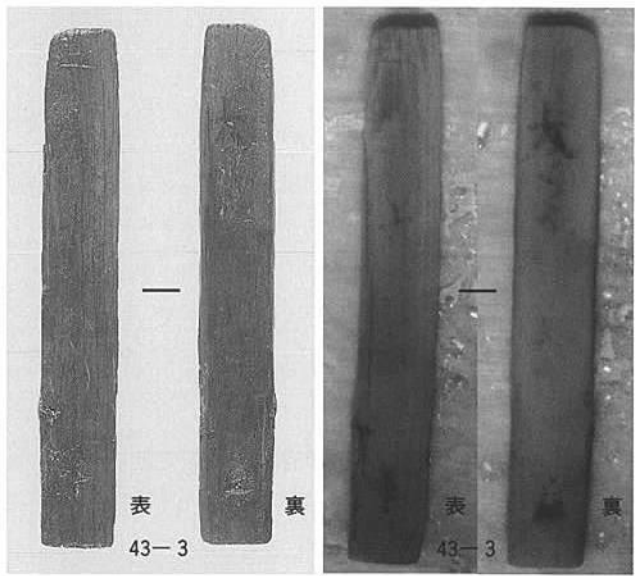
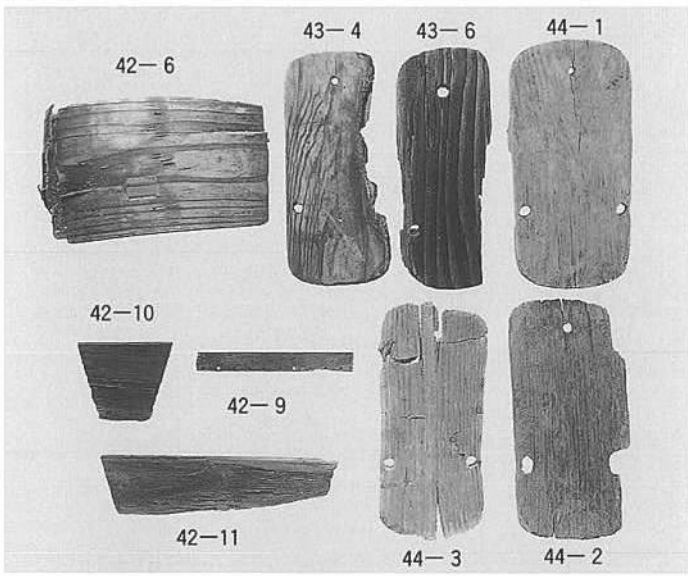
1. 2次調査出土不明土製品



2. 2次調査出土瓦



4. 2次調査出土瓦・土製品・ガラス製品





1. 3次調査区全景 (上空から)



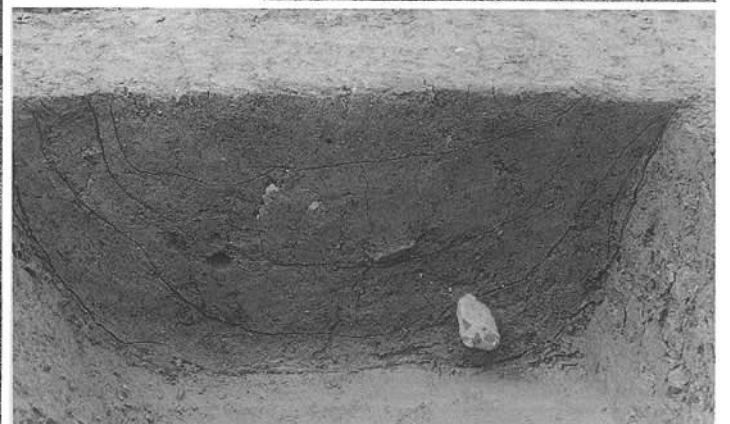
2. 1号土坑 (西から)



3. 2号土坑 (北から)



4. 3号土坑 (北西から)



5. 3号土坑土層断面 (北西から)



1. 4号土坑（南東から）



2. 6号土坑（北から）



3. 4号土坑土層断面
（南東から）



4. 7号土坑（北から）



5. 7号土坑土層断面
（北西から）



1. 2・3号溝状遺構（東から）



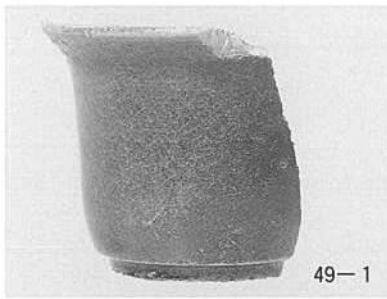
2. 2号溝状遺構大甕出土状態
（北から）



3. 2号溝状遺構土層断面
（西から）



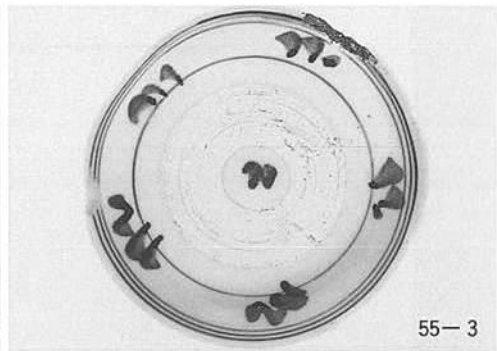
4. 3号溝状遺構土層断面
（西から）



49-1



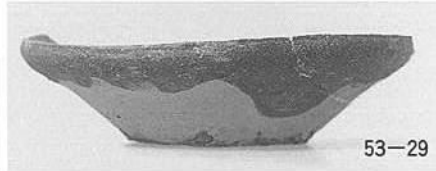
53-16



55-3



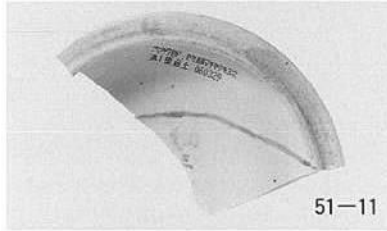
49-12



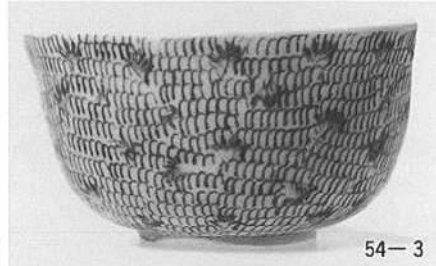
53-29



55-9



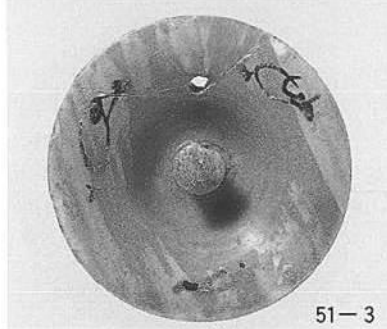
51-11



54-3



55-11



51-3



54-4



56-14



54-14



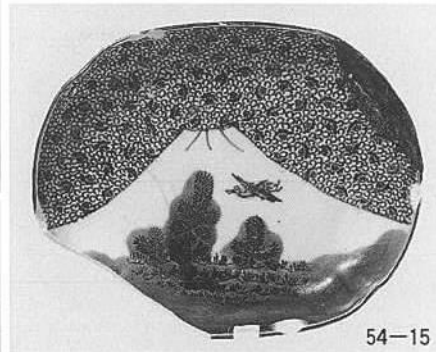
54-6



57-4



53-9



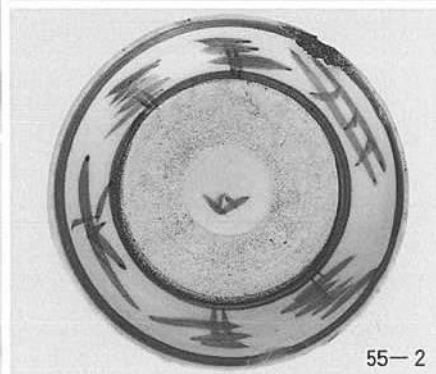
54-15



57-5



53-11



55-2



59-2



53-13



60-12



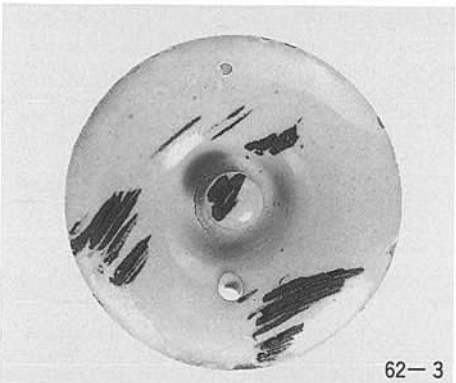
60-13



62-1



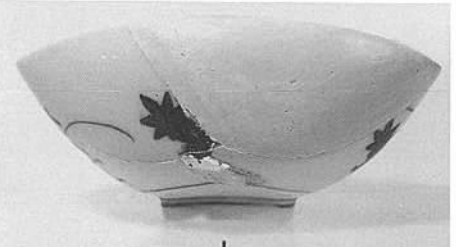
62-2



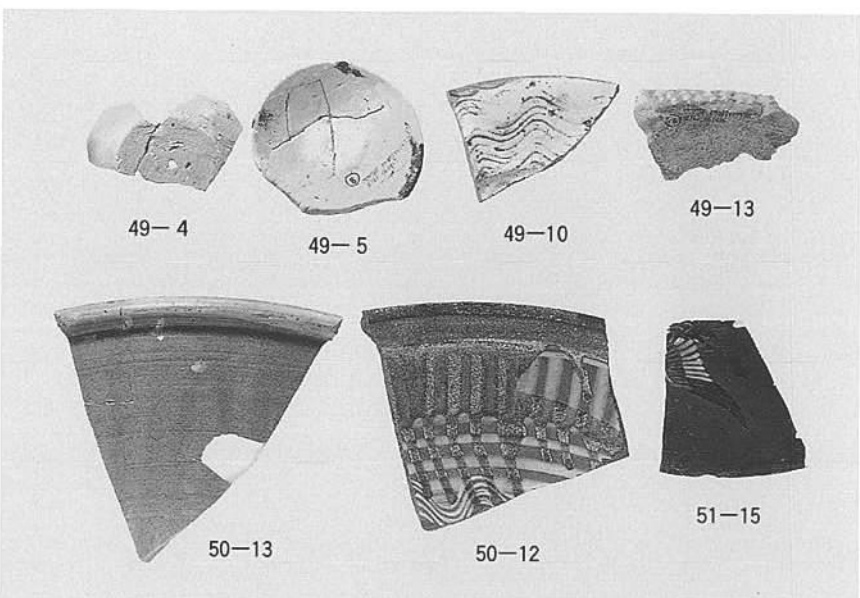
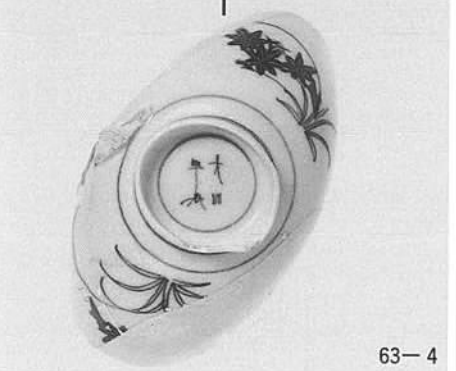
62-3



62-4



63-4



49-4

49-5

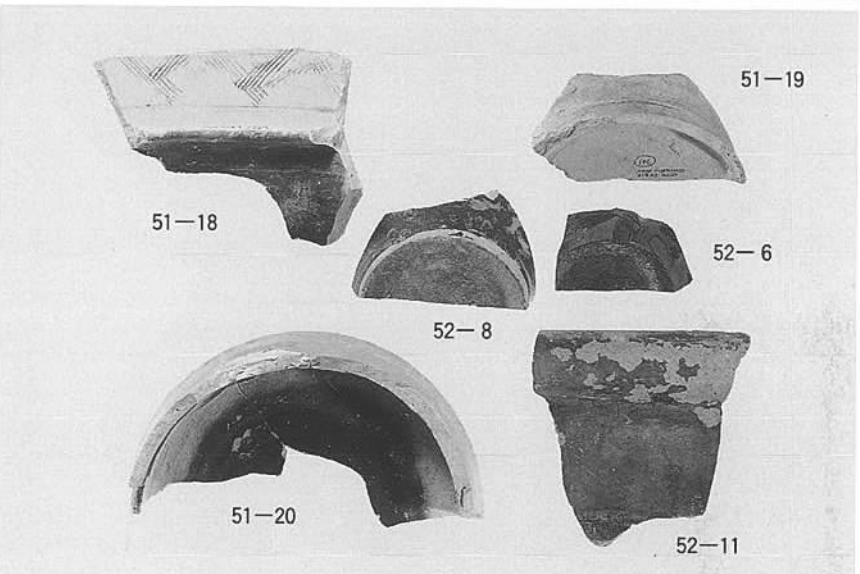
49-10

49-13

50-13

50-12

51-15



51-18

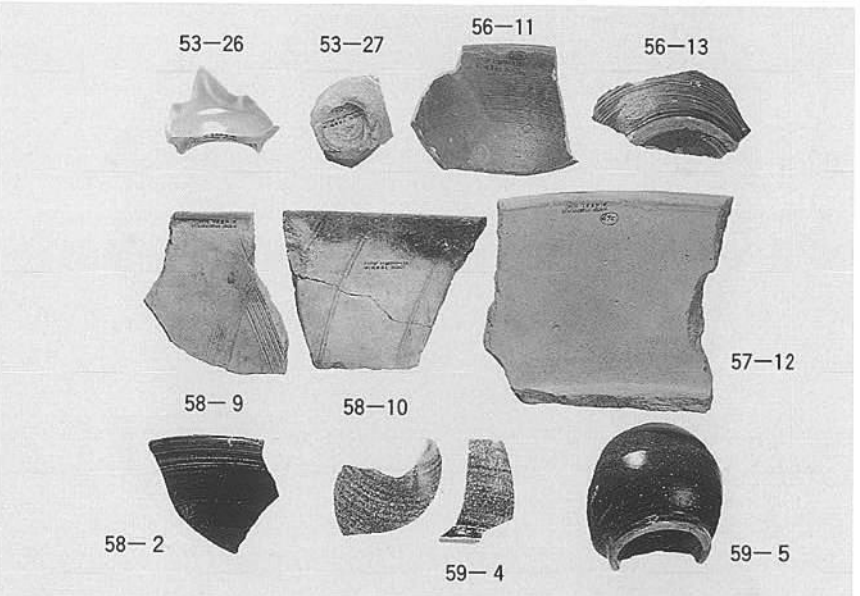
51-19

52-6

52-8

51-20

52-11



53-26

53-27

56-11

56-13

58-9

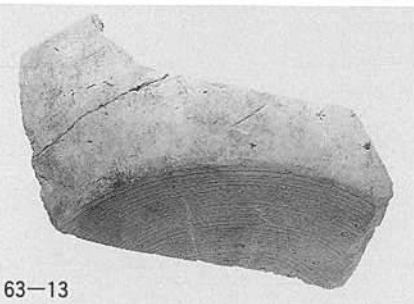
58-10

57-12

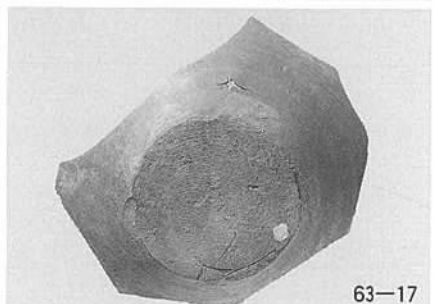
58-2

59-4

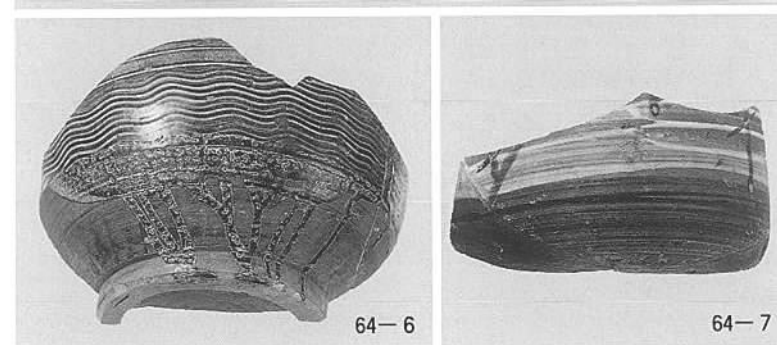
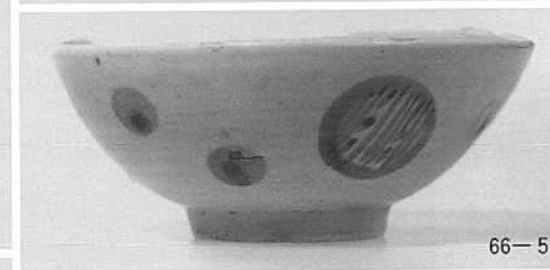
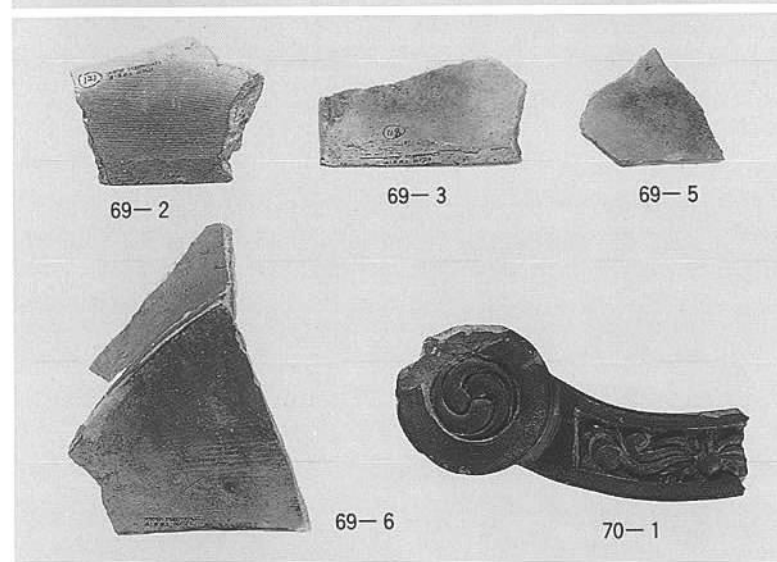
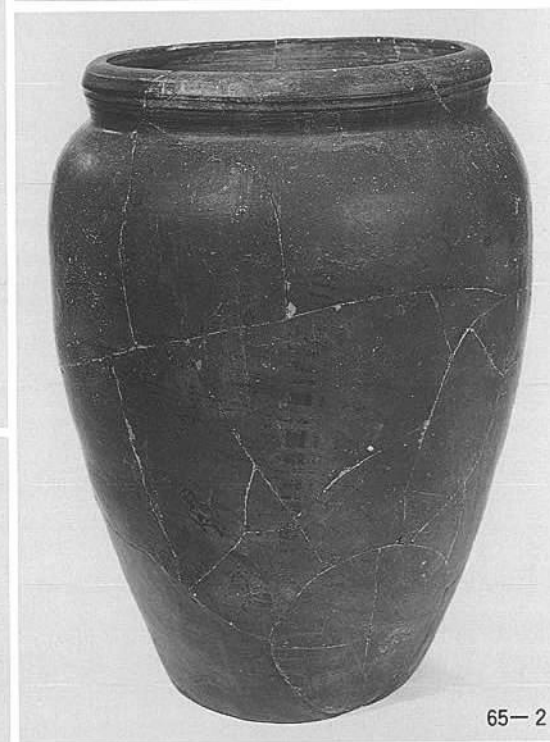
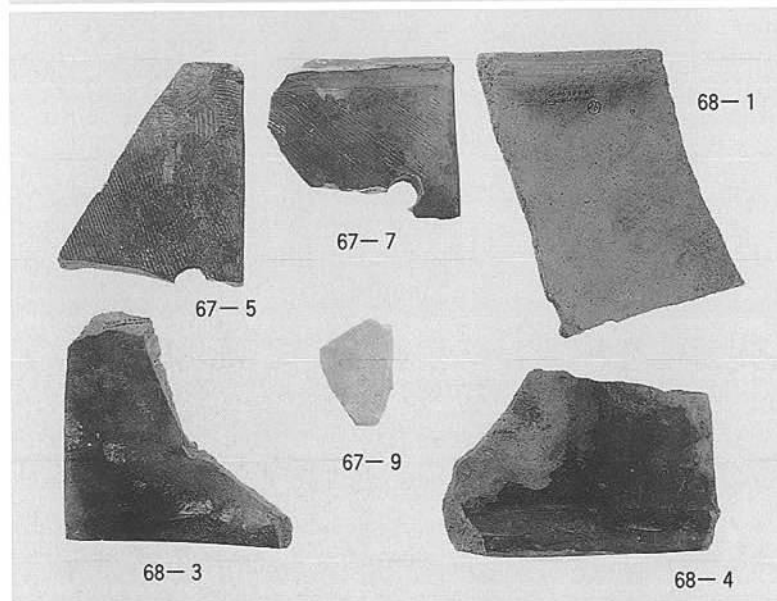
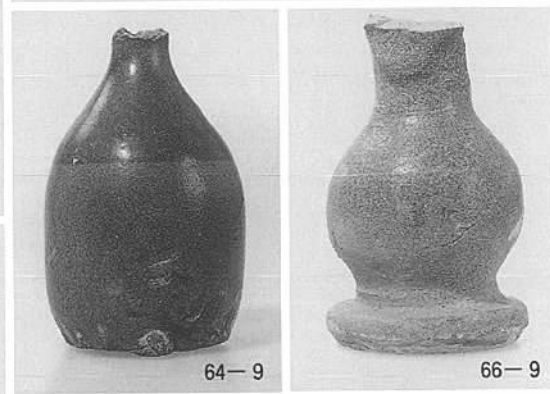
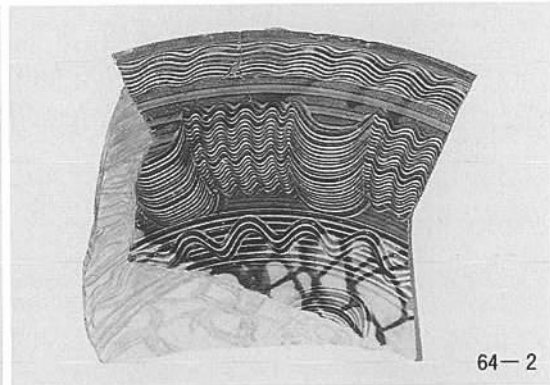
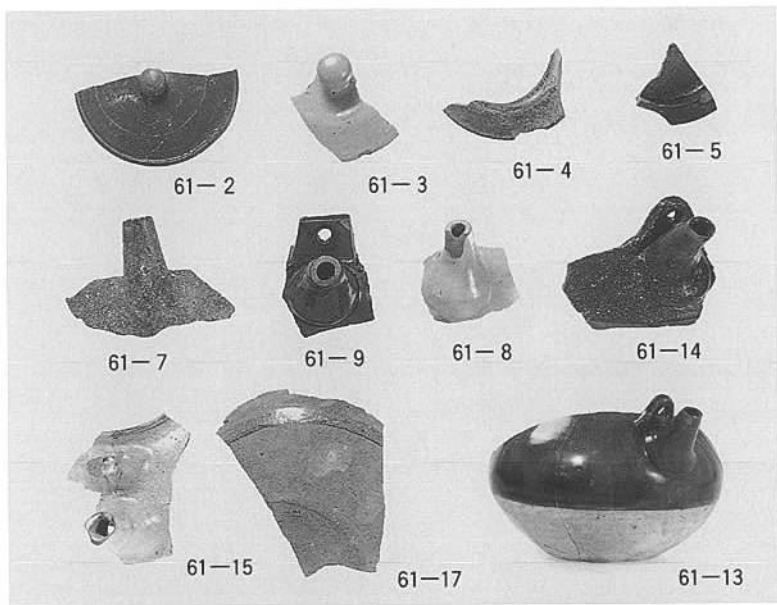
59-5

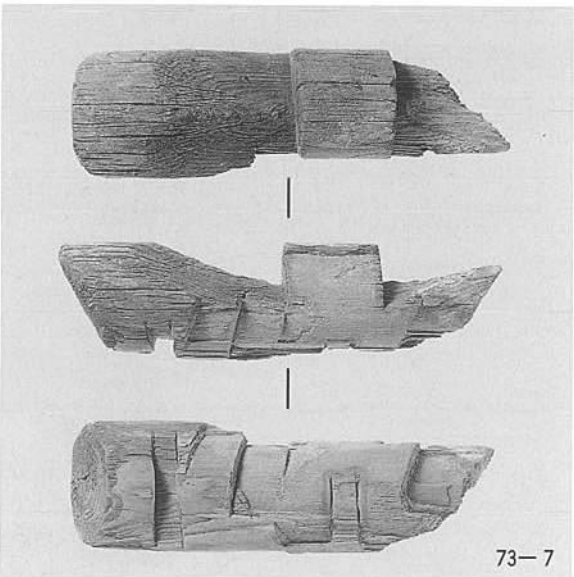
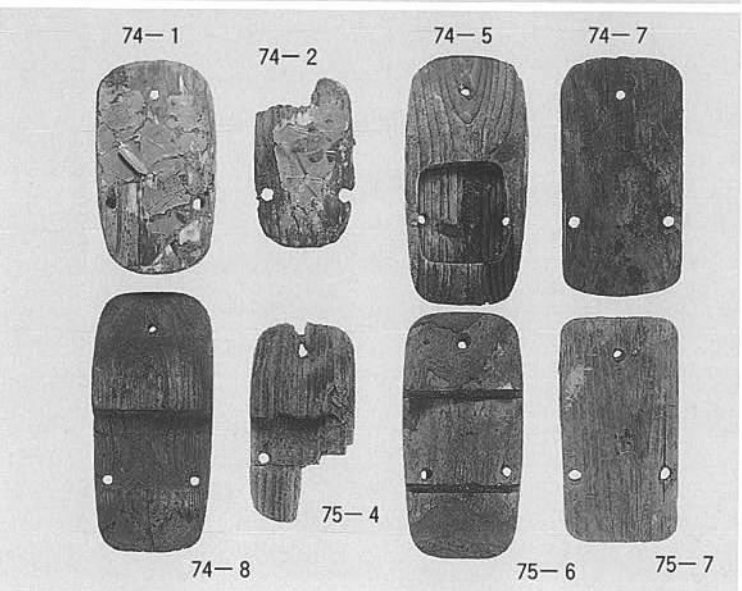
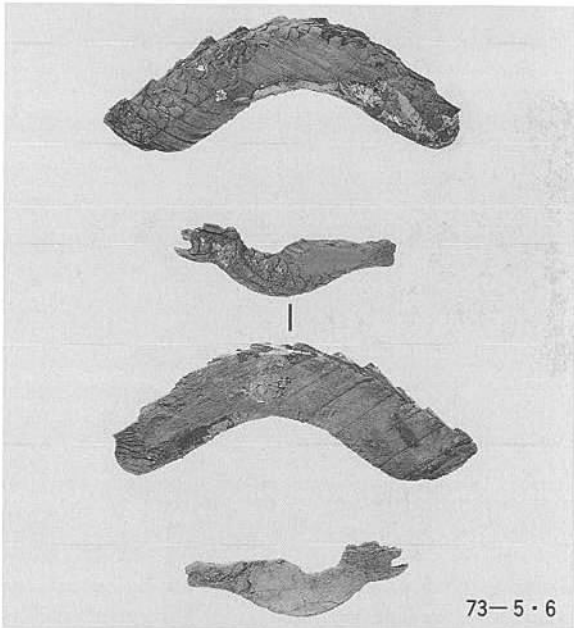
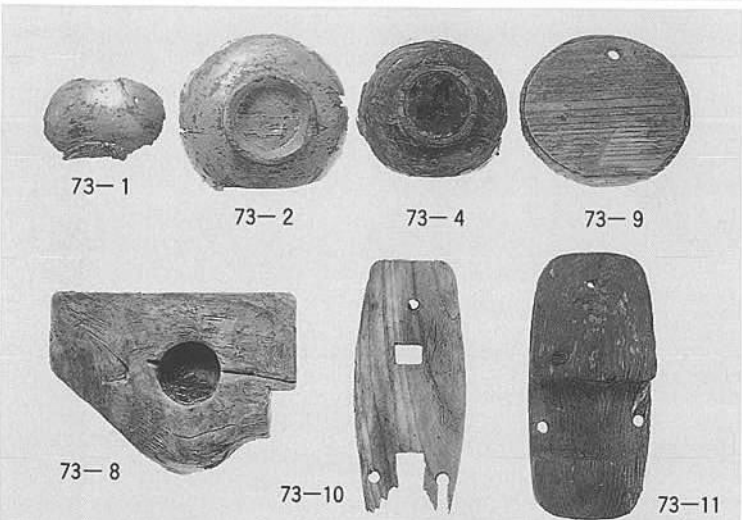
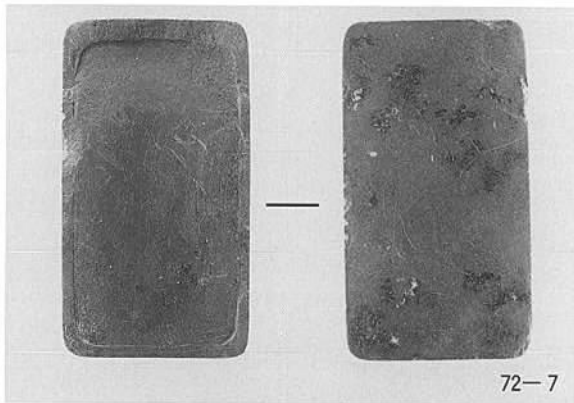
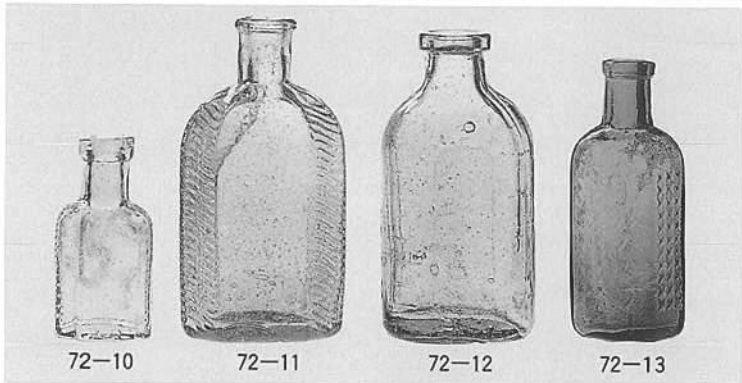
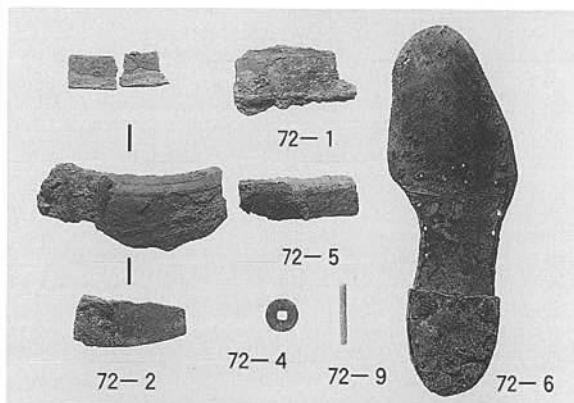
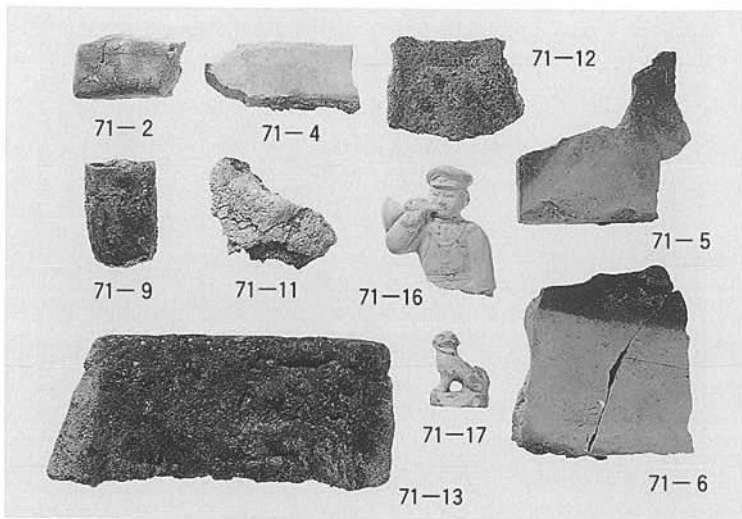


63-13



63-17





3次調査出土金属・皮・ガラス・石・木製品

報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせき							
書名	矢加部町屋敷遺跡 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	秦 憲二							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やかべ 矢加部 まちやしきいせき 町屋敷遺跡	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市 おおあぎやかべあぎ 大字矢加部字 まちやしき 町屋敷	402079	140392	33° 10' 45"	130° 24' 43"	2005.10.26~ 2005.12.7 2006.3.17~ 2006.4.24	840m ²	国道 バイパス
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
矢加部 町屋敷遺跡	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑 18 溝状遺構 12	土師器、ガラス製品、キセル、瓦質土器、銅銭、るつば、陶磁器、容器形木製品、土人形、瓦、下駄、白、不明土製品、建築材、硯		筑後地方特有の土師質瓦 近世の鑄造関係遺物		
遺跡の概要								
<p>本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17c中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連綿と集落が営まれていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。</p> <p>18c中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鑄造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や高熱を受けた不明土製品も多量に出土している。</p>								

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 18	登録番号 4

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集	
矢加部町屋敷遺跡 I	
平成19年(2007年)3月31日	
発行	福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7番7号
印刷	信光社印刷有限公司 〒838-0065 福岡県朝倉市一木32-1 TEL 0946-22-2831